

紀元前3千年紀の西アジア

——ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る

大沼克彦 西秋良宏 編



紀元前3千年紀の西アジア

——ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る

大沼克彦 西秋良宏 編

はじめに

大沼 克彦

皆さん、こんにちは。本日は寒い中、このシンポジウムにお越し下さり有り難うございます。

わたしは国士舘大学イラク古代文化研究所の大沼と申します。このシンポジウムの開催母胎である特定領域研究「セム系部族社会の形成」の領域代表者です。

今回のシンポジウムは第5回目にあたりますが、シンポジウムの開始に先立ち、本領域研究の研究グループがこれまで国内およびシリアで実施してきた研究の概要をお話したいと思います。

平成17年度に発足したこの特定領域研究はシリアにおける現地調査と国内・外の関連研究を2本の柱としています。

シリア現地調査に関しましては、平成19年の3月によく調査の許可が出まして、それ以来これまで7回の調査を実施しました。研究が徐々に進展しているとはいうものの、まだ十分な成果が出たというわけではありません。

いずれにしましても、本特定領域研究は、ユーフラテス河中流域のセム系部族社会がどのような経緯で形成され、発展したかを現地調査と国内・外関連研究を通して解明しようとするものです。

西アジア地方は世界で最古に農耕と家畜飼育が出現し、都市文明が出現した地方です。そして、イスラム時代と今日に至るまで豊かな歴史が連綿と続いています。ですから、本研究は自然科学を含む多彩な研究グループの融合的な連携を通して歴史を通時的にさかのぼり、セム系部族社会の形成と進展の内容を解明しようとしています。

このシンポジウムでは、本日と明日の2日間、研究グループのそれぞれが過去4年間に蓄積した研究成果を発表します。

発表のすべてが来る4月以後の最終年度の研究総括に向けた重要な情報を提供してくれるものと確信しています。

目次

はじめに	大沼克彦	i
例言		
I部 ユーフラテス河中流域の紀元前3千年紀		
西アジア考古学遺跡のデータベース化の研究	松本 健	3
ユーフラテス河中流域の古代集落	西秋良宏	11
ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘	大沼克彦	21
ガーネム・アル＝アリ遺跡の ¹⁴ C年代測定	中村俊夫	31
ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査	久米正吾・沼本宏俊	45
ユーフラテス河中流域ルメイラ周辺の前期青銅器時代墓地	石田恵子	57
ユーフラテス河中流域の古代遺跡にみる建築組積	岡田保良	67
紀元前3千年紀の出土植物	丹野研一	75
【討論】		
ガーネム・アル＝アリ遺跡研究の可能性		87
II部 部族社会研究の視点		
南レヴァント地方前期青銅器時代の都市化	山藤正敏	97
初期遊牧民族の墓群と部族	高濱 秀	109
III部 部族社会の歴史		
イスラーム期以降のアラブ系部族の特徴	赤堀雅幸	121
前2千年紀におけるアムル人、アラム人とアッシリア	山田重郎	129
紀元前3千年紀粘土板文書にみえる家族と血縁集団	前川和也	139
ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関	藤井純夫・足立拓朗	147
IV部 総合討論		
紀元前3千年紀のユーフラテス河中流域と部族社会		161
あとがき	西秋良宏	183
編者略歴、執筆著・討論発言者一覧		

例 言

1. 本書は、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究（平成 17～21 年度）『セム系部族社会の形成—ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合的研究』（領域代表者：大沼克彦）の成果の一部である。
2. 本書には、平成 21 年 1 月 31 日（土）、2 月 1 日（日）両日に国士舘大学鶴川キャンパス 13 号館 2 階 13205 教室を会場として開催された総括班主催の第 5 回公開シンポジウム「紀元前 3 千年紀の西アジア ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る」の記録を収録している。
3. 両日の講演、発言に字句の修正をほどこして収録した。ただし、大幅な書き換えをおこなった講演者も含まれている。また、収録されていない講演もある。
4. 岡田保良の講演は都合により二日目におこなわれたが、本書では内容にしたがい第 I 部に含めた。
5. 当日はパワーポイントによる大量の映像が示されたが、本書には講演者が選択したもののみを掲載した。
6. 「あとがき」は本書にあわせて書き下ろした。

I 部

ユーフラテス河中流域の紀元前 3 千年紀

西アジア考古学遺跡のデータベース化の研究

松本 健

はじめに

ご紹介いただきました国士舘大学イラク古代文化研究所の松本健でございます。われわれの研究協力者は、国士舘大学の長谷川均教授と大学院生の後藤智哉です。

この中で、特に西アジアの考古遺跡のデータベース化ということテーマとしているのですが、ビシュリ調査グループとの提携をどのように進めていくかは、もちろんありますけれども、その前にイラクに行けない現状からして、キシュやバビロンを始めとするイラクにおける遺跡のデータベース、西アジアにおける遺跡のデータベースを作る、これが今のわれわれの課題です。それがやがて研究に、そしてそれが遺跡の保存、保護といったものに役立つのではないかということです。またイラクに行けなくても、衛星画像等々からの資料を基にこうしたことができるのではないかということで、この調査分析を試みております。

研究目的、それから遺跡データベースの作成、ユーフラテス河中流域のテル型遺跡分布調査、キシュ周辺の遺跡位置推定、今後の研究計画について話をさせていただきます。

研究目的といたしましては、先ほども申し上げましたように、総合資料による遺跡データベースの作成、そしてそれらを基にした衛星データ使用による遺跡のデータベース作成ということで、実際にデータベースを作っていくということを心がけています。

1 イラクの文化遺産の現状

イラクの文化遺産の現状について、少し紹介させていただきますと、イラク戦争後につきましては、博物館の略奪問題が起きましたけれども、現在では博物館は完ぺきに密封状態、閉鎖状態になっていまして、中にだれも入れないような状況になっております。しかしながら、遺跡の盗掘等が非常に頻繁に行われていまして、この衛星画像、あるいは航空写真でお分かりかと思いますが、有名なイシンの遺跡、あるいはウンマ、こういった著名な遺跡が次々に破壊、略奪、すなわち盗掘に遭って崩壊寸前になっております。これを衛星画像で見ますと、このイシンの遺跡も、あちらこちらで盗掘が行われているという状況がよく分かります。さらにひどいのは、ウンマの遺跡です(図1)。ウンマの遺跡は、もうほとんど全滅状態に近いというのが、この衛星画像からもよく分かります。このような状況をイラクのほうにも伝えまして、

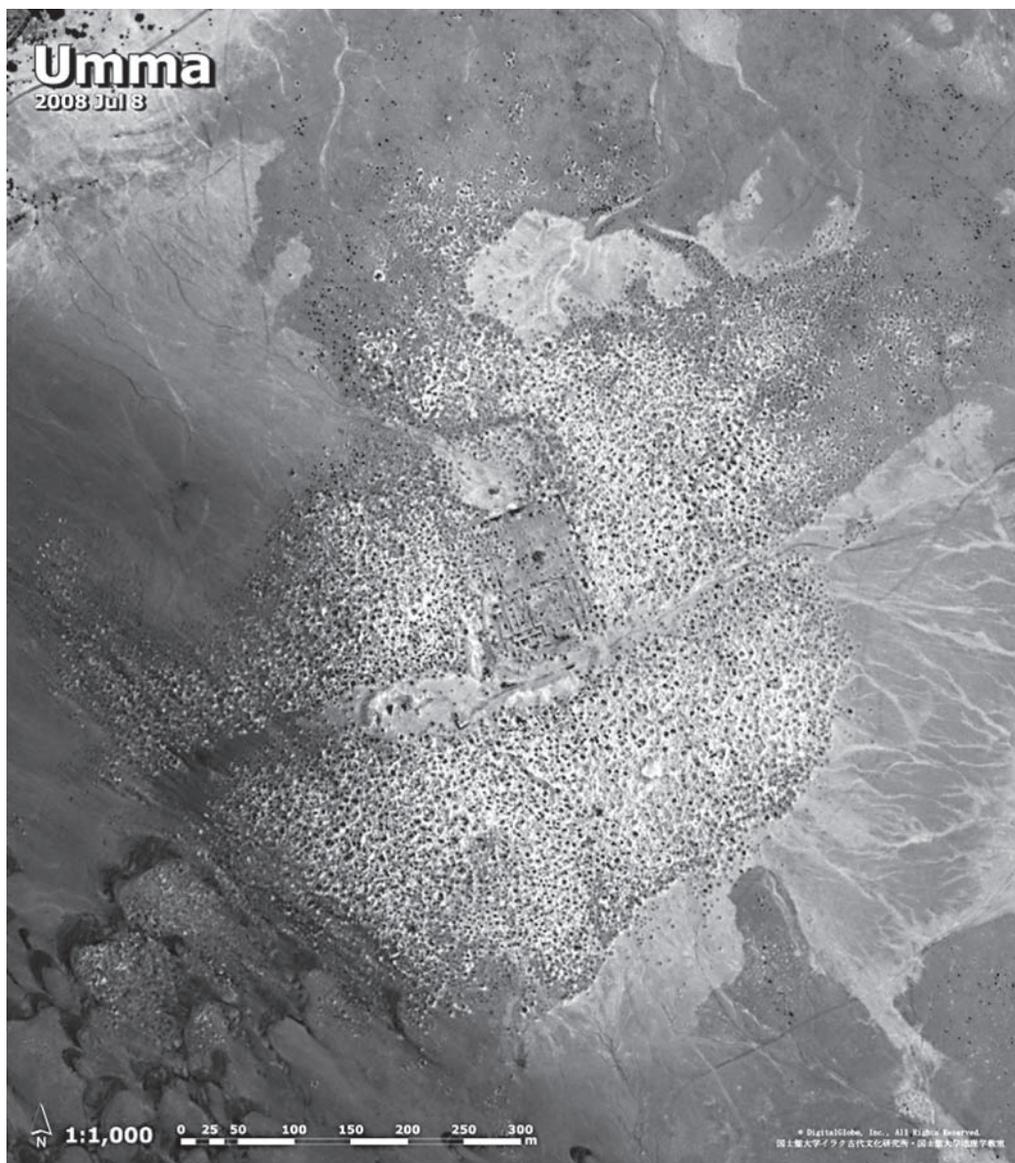


図1 盗掘され、破壊された古代都市ウンマ

この保護に当たるということも大きな目的の一つです。

2 遺跡のデータベース化

次に、既存資料による遺跡データベースの作成ということについてお話しします。既存資料として、イラクには1975年から76年にかけて出版されたアトラスがあります。こうした資料を基にして、デジタル化して地図上に遺跡の位置を落としていくという作業を続けたり、あるいは今

まで発掘報告書等々のデータを集めて、その正確な位置を地図上に落としてまいります。こうした作業には問題もあります。例えば、先ほどのアトラスの地図を、何度何分何秒の位置で正確にデジタル化された地図に落とします。すると、実際には非常にずれがあるのです。したがって、名前は書いてあるのですけれども、そこを見ても載っていない。既存の資料との、データの差が非常に大きい。1キロ以上もある。そのような場合もあります。しかしながら、われわれが作っているこの遺跡データベースの精度というものは、10メートル以内。そのようなものであるがゆえに、いろいろまだ問題も大きいということがあります。

したがって、それを解決していくためには、衛星画像で押さえて、なおかつイラクの考古遺産庁の職員の人と連絡を取って、本当にそれがその場所なのかということを確認していくという方法を取っております。

JICAを通じて今われわれはイラク人の研修を行っていますが、GPSの使い方とか、そうしたものを全部教えて、実際にGPSを持たせて遺跡に行き、その地点を押さえる。そしてその情報を送ってもらって、われわれのほうとしてはそれを地図上に落としてという方法で、データベースを少しずつ確認しながら作成しているという状況です。

イラク南部湿地帯におきましても、このように一度乾いてしまった湿地帯も、再び今、冠水しまして、遺跡もまた水の底に沈もうとしています。こうしたこともあり早く遺跡のデータベースを作成する必要があるのです。現在、現地の人と連絡を取って、早く現地調査をするようにというところで、急いでいます。

1999年から2002年のころの衛星画像では、南のほうの湿地帯がまさに湿地帯ではなくなってしまっている状況がわかります。

遺跡のデータベースをどのようにして作るかということ、もう一度説明してみますと、既存の資料、発掘報告書等々の資料があります。それらには位置の説明が載っています。その説明、そしてまた現地情報、先ほどのイラクの考古遺産庁の職員への連絡によって、GPS等々で遺跡の位置を押さえ、そしてさらに衛星画像で確かめる。そして、衛星画像で確かめたものを、また現地で確認したり、発掘報告書を含めた既存の資料をあわせて、それらをGISに統合して、そこにすべての情報を打ち込むといった形で、この西アジアの遺跡のデータベースを確立するという方法をとっております。

衛星画像を使うものには、いろいろな方法があります。ALOSでやったりDEMでやったりという方法をとって行っています。解像度が悪いというような問題はもちろんありますけれども、過去の解像度の悪い画像も、過去の地形の変化だとか、そうしたものも非常に重要な資料として、現在のものとをあわせて、さらにデータを重ねていく、情報を集めて合わせていくという方法をとります。

例えば、図2はキシユ周辺の画像です。1970年の情報です。図3は2007年の情報です。例えば、現在は高速道路が走っています。1970年のころには高速道路は走っていません。ここはウハイミールという遺跡で、ジグラットのあるところです。左の上のところを追っていただくと、

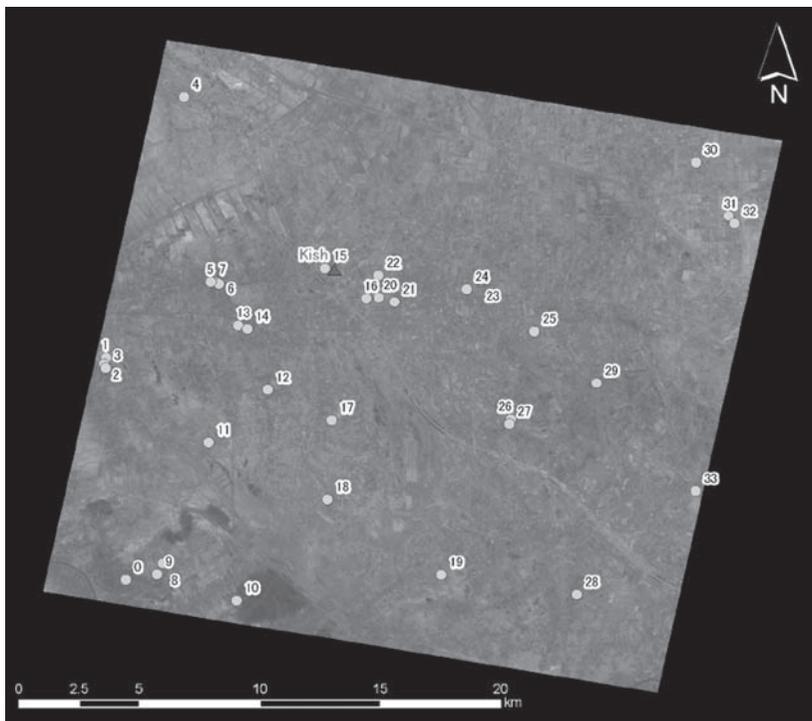


図2 キシュとその周辺の遺跡の分布状況（裸地の大きさ，形から遺跡と推定）

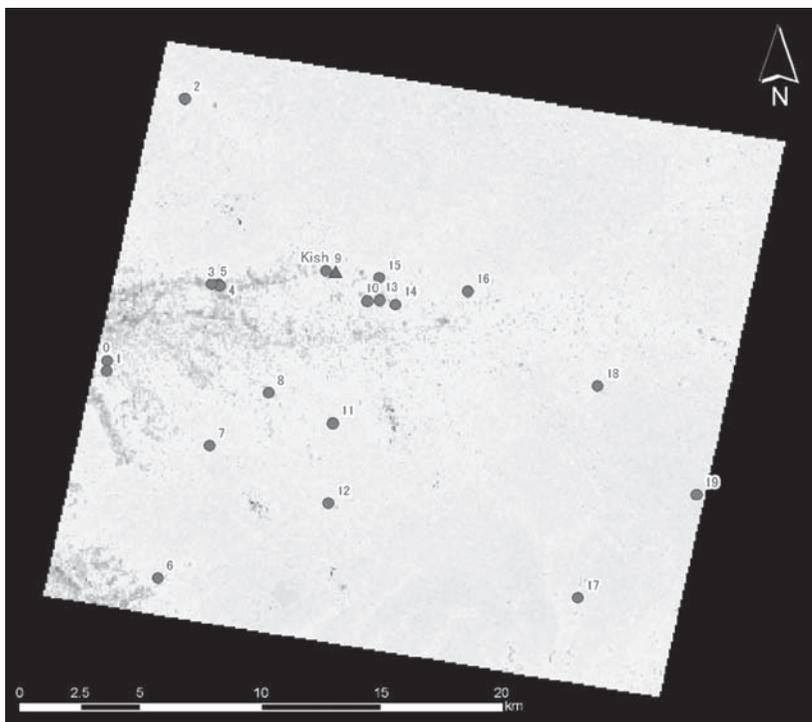


図3 キシュとその周辺の遺跡の分布状況（高さ5m以上から遺跡と推定）

四角になったジグザットの跡が少しぼんやり見えます。むしろ、図3のほうが見えません。モノクロはモノクロの情報なりに、また得られる情報がありますし、分析によっては、目で見て分からないことも出てくるということもあります。したがって、古い情報と新しい情報というものもあわせて解析していくということが必要になります。

テル型遺跡の調査につきまして、これは前回、長谷川さんと後藤君がシリアに行って、ユーフラテスの河の氾濫原のところを実際に見て、実地調査をして、これが遺跡であろうというところを確認しながら、そのリストを作り、その点を落としました。

どうやって点を落としたかという、地理的な調査を行って、その地形を判断し確実に落としていく。あるいは、最も参考にしたのはソ連の地図であります、その地図で確実にここだということからまず押さえて、そしてこの UTL の $x \cdot y$ 座標の情報を位置づけています。

逆の方法もあります。まず衛星画像で押さえて、 $x \cdot y$ を全部落として、そしてデータ化していくというものです。この場合は現地に出向いて行かなくてもできる方法です。そうやって、このリストを作っています。

テル型遺跡の抽出をどうしたらいいかという方法には、これが非常に難しい問題ですが、今のところ二つの分析法が考えられます。

ピクセルベース、画像分類、ここに例として河川、森林、裸地……「裸の地」ですね。そういったものを挙げています。画像を基に分類する場合、例えばメソポタミアでは、遺跡に草が生えないという特徴を生かして、まず衛星画像で見たときに、楕円形であったり、丸かったり、四角であったりという形で、そこに草が生えていない状況を探し出すという方法を、今回の場合とっております。

2番めに、デジタル地表モデルをとって、高さを調べます。この高さはなかなか確認するのが難しい。しかしながら、その高さをもって遺跡であるかどうか、あるいは人工物であるかどうかといったことを判断していきます。

この場合には、解像度が非常に大きな問題になります。テル型遺跡には90メートルの場合もあれば30メートル、10メートルの場合もあります。これを、先ほどのシリアのユーフラテス沿いで行うと、直径が10メートル以内のものは区別することができませんでした。高さが5メートル以内のものも確認できません。あるいは、人の手が入っていて、もう、何と言うのですか、形をなさないほどに壊されている場合もそうです。あるいは、段丘面にある場合は非常に確認が難しいといったような問題もあります。

実際にその地に行っても、「テル何々」という遺跡の名前がついていても、そのようなことで衛星画像からは確認しにくいということが、その問題点としてあります。

これらの分析結果から、遺跡をどうやって選んだかと申しますと、先ほどのように草が生えていない土地で直径が100メートル以上の場合であったり、あるいは高さが5メートル以上であれば、それを遺跡ではないかというように、現在のところ確認しています。これは確率の問題ですけども、そのようなことを条件として挙げてまいりました。

この条件にしたがって、それをキシュ周辺の遺跡に当てはめてみました(図2)。そうすると、例えばこの場合には、先ほどの裸地、つまり草が生えていなくて、ある程度の形をしたもの、ある程度の大きさを持っているもので確認すると、34個の遺跡が、遺跡らしきものが確認された。これは東西25キロ・25キロぐらいの範囲なのですね、そうしたものがあ程度確認できました(図3)。

次に、高さ。その中から、さらに高さを5メートル以上、今回は10メートル以上のものを確認して、それにマークをしていくのです。そうすると25の遺跡が確認できました。

これは若干、色が違っていますが、これは高低差を表しています。少し赤っぽいのが左のほうから右のほうへ、西のほうから東のほうに行っていると思います。これは、西のほうがバビロンになります。それが、バビロンのほうからユーフラテスの水が東のほうに canal として引かれているわけですね。したがって西のほうから流れていますので、西のほうが若干高い。それで、少し赤っぽく写っています。濃い赤の部分が高いところ、青い部分が低いところ、それが左のほうから、西のほうから東のほうに流れていっていることを示しています。

5メートル以上の高さのものがこのようにあるということで、この canal に伴って遺跡が作られているということも言えるかもしれませんし、こうして総合的に高低差とかそのようなものをあわせて、遺跡の立地条件といったものも追究できるのかなというように考えています。

問題点としましては、先ほども申し上げましたけれども、遺跡確認の精度の問題が非常に大きいといえます。解像度の問題もそうですけれども、いろいろな条件があります。そうした中今回とった方法といいますのは、最もいい、最も精度の高い方法、これは QuickBird の解像度 61 センチというもので、16.5キロ×16.5キロの範囲で125万円します。その代わり、解像度が61センチです。

これにはさらに経費の問題がありまして、また目的にもよりますけれども、それを選んでいくわけですが、現在では KOMPSAT と韓国の衛星が出ております。これは解像度は1メートルで、15.4キロ×15.4キロの範囲であります。したがってそれは経費的には25万円ですることができるようになっていきます。

したがって、どの解像度でどの範囲が必要かということを目的によって選ぶということが、非常に重要だと思います。何となく解像度の高いのがいいのだということであれば、それでもいいかもしれませんが、あまりにも狭い範囲のために見失ってしまうということもありえます。したがって解像度が粗いもの、あるいは広い範囲でとらえられるもの、あるいは精度の高い、部分的でとらえられるものというものをしながらやっていく必要があります。

前回、ビシュリのユーフラテス川沿いの氾濫原で調査を行いましたけれども、今度はビシュリの台地の方の分析を考えています。やはりメソポタミア地域の平原におけるテル型遺跡の確認は、このようにしていけば、かなりあちらこちらの調査ができるのではないかと、データベースが作れるのではないかと、徐々に見通しが立ってまいりました。しかしながら、ビシュリのように台地の場合にはどうするか。非常に遺跡が小さい。それで広い範囲にまばらにあるといったよう

な場合、そうした場合にはどのようにしてその確認をするかというのが、一つの大きな課題になります。したがって広い範囲をとらえる場合、部分的にとらえる場合というものを、両方使いながら確認していくことが必要だと思います。

今、有望なのは、韓国の KOMPSAT という解像度も良くて値段的にも安いのですが、どれぐらい調査範囲をカバーできるか。広いビシユリの中で、例えば 15.4 キロ× 15.4 キロの中に入れていいですけども、衛星が通ったところに乗っていないければ、また 2 枚、3 枚と増えていかざるをえないということで、そのへんの兼ね具合が非常に難しいかと思います。ビシユリの場合も、ぜひそういった形で調整してみたいと、そのように考えております。

以上でございます。ご清聴、ありがとうございました。

【質疑応答】

司会（宮下） 少し時間があるようなので、何かご質問があれば伺いますが、いかがでしょうか？

常木 前に後藤さんたちがつくられた遺跡分布図を見せていただいたのですが、あれ以降、ビシユリの、ユーフラテス河の沿岸で、衛星写真の解析というのは進んでいるのでしょうか。例えば衛星画像を解析してテル型遺跡を表現したような、ジェネラルな図というものはあるのでしょうか？

松本 まだできていません。先ほどの紹介にもあったと思いますけれども、これだと確かにテル型遺跡だと言いたいところなのですが、ちょっと技術的にもかなり難しいので、すべての遺跡を決定できるようになるのはまだできそうにはありません。

司会 新規撮影というのは、依頼すればできるのですか。

松本 できます。だけれども、例えば今依頼しているのがビシユリの台地のほうなのですが、天気具合で雲がかかるといことがありますので、雲がかからないでということになると、その日を選ぶことになりますので、時間がかかるのですね。いつまでということになれば、少々雲がかかっても、それを撮ってもらうということになるかと思います。

藤井 直径が最大でも 10 メートル、多くは 3~5 メートル、比高が 1 メートル前後というようなケルン墓の場合は、衛星画像からの確認はもうほとんど無理なのでしょうか。

松本 無理ですね。解像度が 61 センチといえども、60 センチ以上だったら見えるかということ、そうではない。やはり後藤君などの話を聞いていますと、もう 5 倍ぐらいは、やはりいるのですね。だから 60 × 5 ですと標高が 3 メートル。3 メートル以上のものであれば、何とか。

藤井 解像度 60 センチと言っても、あまり期待できないということですね。

松本 そうですね。

松本 だから、今度は地形で、突然、ポコッと、丘は丘でも、ポコッと大きく、そして急に立ち上がっているような遺跡だといいいですけども、ケルン墓ですかね。5 メートル以上でない、形をつかむのは難しいのではないのでしょうか。

藤井 現在、シリアでは GPS が調査で使えないので、ケルン墓も 1 基ずつ歩いて確認し、その

位置を地図に落していくほかない。ところが、その地図自体いいのがない。だから、簡易の地形図作成もしなければならないのです。これが大変なのです。衛星写真をケルン墓の確認に用いるのはやや困難とのことですし、実際そうしようとは思っていませんが、せめて地形図作成の手間だけは省けるとありがたいのですが。

松本 その場所 (X, Y, Z) の値は与えられない。場所を押さえられるのは、上から見たとか、あるいはバスからだけとかだと——、すごく無理ですね、そうしますと。

藤井 ガーネム・アル＝アリ、ユーフラテス沿いは5,000分の1か何かのいい地図があつていいのですけれども、山の方に入ると、まるでないので。

松本 どれぐらいになるのですか？ その縮尺は？

藤井 調査区域だけですと、南北・東西それぞれ30キロ程度です。ビシュリ山系全体では100キロ以上になります。

松本 だから今の解像度1メートルの韓国製のが、あると思うのです。

藤井 ええ。

松本 ただその場合、ものすごく何枚もいりますから、すごい費用ですね。

司会 衛星画像は軍事目的と結びついているところが多いので、今イラクは、それでアメリカがものすごく精度の高いものを作っているというように聞いていますが、やはりシリアは、特に藤井先生がやっているようなところは、通常の写真自体も空白地帯が多いので難しいし、ちょっと今GPSが持っていけないので、そうするとなかなか難しいところは多いと思います。どうもありがとうございました。

ユーフラテス河中流域の古代集落

西秋 良宏

はじめに

こんにちは。東京大学の西秋と申します。私の発表から後、ガーネム・アル＝アリというこのプロジェクトで中心的に取り組んでいる遺跡の調査報告が続きます。私の話は、ガーネム・アル＝アリを含めた青銅器時代の集落が営まれるようになった経緯であるとか、青銅器時代集落の土地利用、といったことを調べるための遺跡踏査についてであります。踏査は2008年の3月から4月にかけておこないました（西秋ほか2008；Nishiaki et al. 2009；門脇ほか2008, 2009）。

先ほど、衛星画像を使って遺跡を探すというお話を松本先生がなさいましたけれども、我々が調査地に行っているのはユーフラテス河の台地の上で、テルのように地形がはっきりした遺跡はほとんどありません。平坦な地面に石器が落ちているだけというところです。したがって、おそらく衛星画像ではとらえきれない遺跡ばかりです。

ですので、調査は全て徒歩で行いました。調査範囲は、ガーネム・アル＝アリという拠点集落から半径10キロ圏です。その中を細かく歩きました。その結果をお話しします。

1 2008年春の遺跡分布調査

これが調査地の地図です（図1）。ユーフラテス河とガーネム・アル＝アリ、そこから半径10キロ圏を示す弧が描いてあります。実際には10キロ圏というと、ユーフラテスの対岸までずっと続くのですね。本当にここを全部歩いたら大変なことになります。川の中まで歩かなければいけないようなことになるのですが、今回はこのテルを中心にユーフラテス河の右岸、台地の上のみを歩いています。川の氾濫原そのものは調べていません。また、遺跡の西側を中心に歩き、東の方は、ほんのちょっと調べただけです。残りの部分は今年の2月に行って調べることにしています。

地図には細かい数字が幾つか書いてあります。全部で32個の新しい遺跡を見つけたということを示しています。

ガーネム・アル＝アリは青銅器時代の集落遺跡です。その集落が営まれるようになるに至った前史、つまり青銅器時代以前の遺跡と、ガーネム・アル＝アリを含めた青銅器時代の集落パターンという、二つの点について、これからお話しいたします。

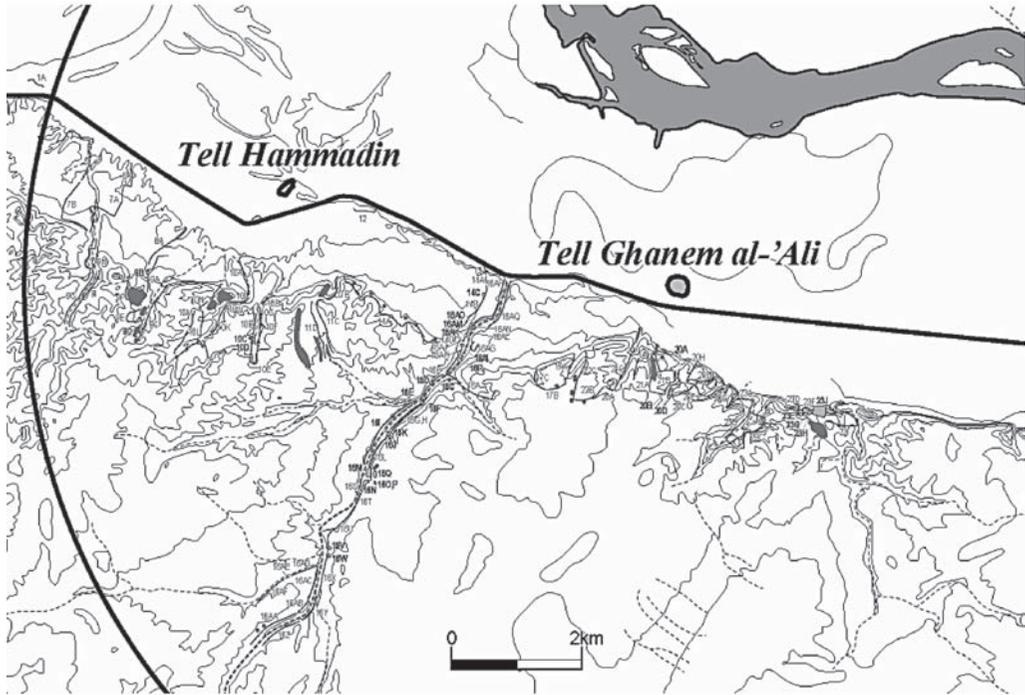


図1 ガーネム・アル＝アリ遺跡と今回の踏査範囲

2 ガーネム・アル＝アリ周辺の遺跡—青銅器時代以前

まず、旧石器時代の遺跡であります。特にワディ・ハラールというワディの段丘でたくさん見つけました(図2)。このワディは今も水が流れており、段丘もよく発達しています。低い段丘では旧石器時代の終わり頃、高い段丘では旧石器時代のもっと古い時期の遺跡が見つかりました。

今回見つけたもので一番古いのは中期旧石器時代、25万年よりはさかのぼらないムステリアン期の遺跡です。遺跡と言っても石器が落ちているというだけです。これより古いものは今回見つかっていません。

もう少し低い段丘に行くと、新しい時代の旧石器器が拾えました。4万7,000年から1万2,000年くらい前の後期、終末期旧石器時代のもので、段丘が削平されて中にたまっていた石器がばらばらと斜面に広がっているものもありましたが、石器の包含層が斜面に露出している遺跡もありました。この遺跡などは、発掘したら多分この赤い線にそって生活面が出てくるはずですが(写真省略)。そういう立派な堆積を残している遺跡もありました。

それから、泉の周辺にキャンプ跡のようなものがずっと並んでいるような遺跡もありました。後期末から終末期旧石器時代を中心にした遺跡です(図3)。おそらく原位置を完全にとどめている遺跡です。

このように、後期旧石器の終わりから終末期旧石器時代のケバランからナトゥーフィアンにか



図2 ワディ・ハラール、ガーネム・アル＝アリとハマディーン遺跡の間を流れる。

けての時期の石器が拾える遺跡が目立っています。一方、その後の新石器時代から銅石器時代になりますと、遺跡をあまりたくさんは見つけることができませんでした。わずかに新石器時代の石器、たとえば黒曜石の石器、C T 石刃と私が呼んでいる石器などが多少、見つかった程度です。銅石器時代、ウバイドとかウルクのは、今回はこの範囲では見つけることができませんでした。

3 ガーネム・アル＝アリ周辺の遺跡—青銅器時代

次が青銅器時代です。この時代の遺跡はたくさんありました。ガーネム・アル＝アリは、その代表的なものです。そうした遺跡は、墓地、長期の居住をした拠点的な集落、それから短期逗留地、つまり短い期間滞在したキャンプ跡のようなもの、という三つに分類することができました。

まず墓地です。これは今日の発表の中で、沼本さん、久米さんのチームからお話があると思いますので、詳しくは申しません。先ほど紹介のあったイラクの遺跡のように、今、盗掘穴がほこほこあいているので、それとすぐ分かるというものであります。ユーフラテスの台地上に累々とつながって見つかりました。

第二は、長期居住地、すなわち拠点集落であります。ガーネム・アル＝アリ、それからハマディーンという大きなテルがすでに二つ見つかっています。それらは、台地の下の氾濫原に位置し



図3 ワディ・ハラル上流の湧水地近郊採集の後期／終末期旧石器（16N地点）

ていますが、それ以外に今回、台地の上でも一つ見つかりましたので、ご紹介します（図4）。これも盗掘の跡がたくさん開いています。墓地のように見えますけれども、これは墓地ではなくて、低いテルです。ワディの段丘の端にあるもので、青銅器時代の土器が拾える。あるいは石器、農耕関連の石器が多数散布しているというものであります。この遺跡はジャズラというイスラムあるいはローマ時代のお城の脇にあったのですけれども、このお城も中に入ってみると、実は青銅器時代の石器とか土器がたくさん散布していることがわかりました。さっきの小さなテルとともに、このお城は青銅器時代から人が住んでいた遺跡であるということがわかったわけです。

それから三つめの遺跡タイプが、短期逗留地です。これは、今ごらんになっている写真のように、ワディの一辺に低い平らな面があって、そこに石器がばらばらと落ちているという、それだけの遺跡であります（図5）。何か所かの地点で見つかりました。こういう遺跡では土器がほとんどなくて石器しかない。しかも、ちゃんと加工して作った二次加工石器がほとんどなくて、ただ



図4 ジャズラ西遺跡 (23H 地点)



図5 シャブート東遺跡 (20A 地点)



図6 シャブート東遺跡で採集した石器群

石核をたたき割ったかけらで構成されている，石片だけのアッセンブリッジであります（図6）。

石片だけなのになぜ青銅器時代の遺跡だと言えるのか。石のかけらだけですが，細かく調べてみると，どうも青銅器時代ガーネム・アル＝アリと同じものだということが分かりました。この点について，次に説明します。

4 青銅器時代の石器散布地とその意味

これは剥片，石片の構成をガーネム・アル＝アリで発掘された青銅器時代石器群と，今回シャブートというところで拾った石器を比較したものです（図省略）。かけらの構成が非常によく似ていることを示しています。

ただ単に石片の形や構成が似ているというだけでは，青銅器時代のものだという証拠にはなりません。そこで，他のいろいろな時代の石片とも比較をしてみました。比較資料にしたのは，この地域で東大が昔，発掘したドゥアラという遺跡と，あとユーフラテス沿いのコサック・シャマリという二つの遺跡の発掘品です。あわせると，ちょうど4万点ぐらいあり，PPNB，つまり先土器新石器時代遺跡の終わりから銅石器時代末のウルクぐらいまでの時期をカバーすることがで

きます。その内容は以前分析したことがあり細かいデータがありますので (Nishiaki 2000, 2003), それを時代別に比べて、どの時代のもっと今回のものが一番似ているかというのを調べました。

これは、コレスポネンス・アナリシスという統計分析の結果です (図7)。細かいことは申しませんが、石のかけらのタイプを分類してみると、遺跡や地層が時代別にきれいに分かれることがわかります。PPNBの遺跡、その次の時代の土器新石器からウバイド、ウルクのグループ、それから青銅器時代のグループという、三つに分かれます。時代順にみると、このようになるのですね。

青銅器時代のガーネム・アル=アリと同じグループに分類されたのがシャブートです。今回見つけたシャブート遺跡が、やはりガーネム・アル=アリの青銅器時代のものであろうということが分かったということでもあります。

さて、ようするにガーネム・アル=アリとハマディーンというような拠点的な集落が河川沿いであって、そこから台地の上へのぼると、今ご紹介したような、石器だけが落ちていた遺跡がばらばらばらとあるわけです。どちらも同じ青銅器時代であるとする、この台地の上で石器を作っていたのはどのような人かということが問題になります。拠点の村からヒツジとかヤギを連れて台地に草を食べさせに出かけていった人が立ち止まった出張地であるのか、それとも台地の奥に住んでいたに違いない遊牧民が残した遺跡であるのか、どちらだろうかということでもあります。

そこで、もう少し、拠点集落であるガーネム・アル=アリの石器について調べてみました。ガ

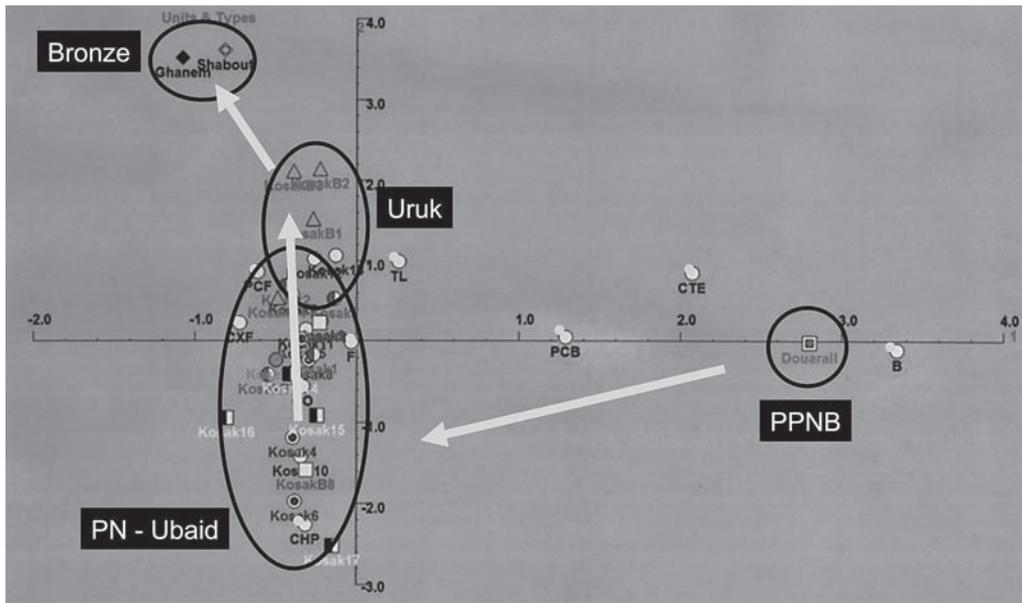


図7 先土器新石器時代～青銅器時代石器群のコレスポネンス・アナリシス結果

一ネム・アル=アリののような拠点集落では、在地の石で作った石器と、明らかに南東トルコ方面から輸入した石で作った石器という、二つの石器群が混じっています。

在地の石で作った石器というのは、かけらを作って、そのまま使うか、ほんの少し加工して、たとえば穴を開ける錐に加工したりして使っています。一方、トルコから輸入してきたものは、完成された石器として持ち込まれていますので、そのまま使われています。ほとんどが農耕具用です。石器群はそのように二つのグループから成る構造を持っているのです。

今回、台地の上の内陸で見つかった石器が表現しているのは、その一部分だけであります。地元の石を割って、そのまま使う。第一のグループだけです。この石の割り方が、またものすごく特徴的です。細かいことは申しませんが、一部に原礫面が残るような剥片、つまり自然背付剥片、それを剥がすことに特化しているのです。シャブートという遺跡で初めて定義したので、この石器群をシャブートと呼ぼうかと、私が提唱しているものです（西秋2009）。

いわゆる石割りの動作連鎖、あるいはシェーン・オペラトワールといいますが、それがガーンム・アル=アリとシャブートは全く同じです。だから、このような台地の縁辺にある、石のかけらだけ分布する幾つかの遺跡というのは、おそらく拠点集落から台地上に出ていった出張の途中の経由地のような遺跡が含まれていると考えています。放牧というのですか、ヒツジを連れて出ていった人が立ち止まるところが何カ所かあった、そのような遺跡です。ただし、遊牧民が同じ石器を作っていたとしたら区別は出来ません。あくまでも、河畔の拠点集落からの出張地が含まれているだろうという推測です。

まとめ

さて、まとめなのですが、今回の、青銅器時代に至る地域史ということについて言いますと、中期旧石器から後期、終末期旧石器、それから新石器の遺跡があった。銅石器の遺跡は今回なかった。それから青銅器時代になると遺跡がダラッと急増する、このような歴史が描けるということでもあります。

銅石器時代の遺跡、青銅器時代直前の遺跡がなかったのは、今回の調査地域が狭い、あるいは調査の期間が短いという理由だけではないのではないかと思います。と言いますのは、以前、コサック・シャマリという、ほんのちょっと北のユーフラテス川の遺跡を発掘したのですけれども、そこでもちょうどウルクが始まるころまではずっと堆積が続いていました。ところがウルクの後は居住がなくなって、次に青銅器時代が来るまでの間が抜けていました。

あるいは、今ラッカの近くでゼイダーンという、アメリカのチームが発掘している遺跡がありますけれども、あそこもコサック・シャマリと全く同じで、ハラフ、ウバイドからずっと続いて、ちょうどLate Chalcolithic といいますが、後期銅石器時代の初めまで住んでいるけれども、そこからあとは空白、途切れてしまうという結果がでています。大体この地域は銅石器時代に南からウルクが広がってきて、それで地元の社会が、むちゃくちゃになったかどうか分かりませんが、



図8 青銅器時代の拠点遺跡と墓地・短期逗留地の分布

いったん大きな変化を、変容するということが分かっています。

したがって、今回の銅石器時代の遺跡が抜けていて、次にいきなり青銅器の遺跡が増えるという結果も、そのような断絶と関係があるのではなからうか。はっきり言っていないのかどうか、もう少しまだ調べなければいけませんけれども、青銅器時代の集団が広がったのは、新参者と言えますか、新たに人が入ってきたせいではなかったらうかと思えます。

それからもう一つ、青銅器時代の土地利用、セトルメントパターンについてです。長期の滞在地、短期の逗留地、墓地群という三つの種類に遺跡を分類しました。それらを地図に落としてみると、ハマディーン、ガーネム・アル＝アリ、それから今回新たに見つかったジャズラという三つの拠点的な集落があって、その周辺に墓地群、短期逗留地があるという関係が明らかです(図8)。この三つの拠点集落を中心にしたグループ、遺跡のセットの間にはワディがあります。深いワディが2本、こう走っています。このように拠点の村を中心にした、テリトリーと言いますか、同じ集団がよく使うエリアが、ワディを境界にして分布しているということが推察されます。

おそらく、よく使うエリアというものは村ごとに決まっていたのではなからうかということでもあります。このエリアが部族と関係するのかなどということは今のところ全然分かりませんが、それを考察するヒントにはなると思えます。

ということで、今回の報告は以上で終わりです。ガーネム・アル＝アリを中心に、西側の段丘沿い台地を調べた結果をお話いたしました。来月、追加の調査に行きますので、次はもっと詳しい話ができるかと思えます。どうもありがとうございました。

引用文献

- Nishiaki, Y. (2000) *Lithic Technology of Neolithic Syria*. Oxford: Archaeopress.
- Nishiaki, Y. (2003) Chronological developments of the Chalcolithic flaked stone industries at Tell Kosak Shamali. " In: *Tell Kosak Shamali - The Archaeological Investigations on the Upper Euphrates, Syria. Volume II: Chalcolithic Technology and Subsistence*, edited by Y. Nishiaki and T. Matsutani, pp. 15-111. UMUT Monograph 2. Oxford: Oxbow Books.
- Nishiaki, Y., S. Kadowaki and S. Kume (2009) Archaeological survey around Tell Gahnem Al'Ali. *Al-Rafidan* 30 : 145-153, 160-163.
- 門脇誠二・久米正吾・西秋良宏 (2008) 「ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』11 : 3-6.
- 門脇誠二・久米正吾・西秋良宏 (2009) 「ユーフラテス河中流域の先史時代 —第一次調査 (2008)」『古代オリエント世界を掘る—第16回西アジア発掘調査報告会』日本西アジア考古学会編 : 57-62.
- 西秋良宏・門脇誠二・久米正吾 (2008) 「ユーフラテス川中流域の先史遺跡 —2008年春季踏査報告」『オリエント』51(2) : 203.
- 西秋良宏 (2009) 「ユーフラテス河中流域の青銅器時代石器群」『日本西アジア考古学会第14回総会・大会要旨集』 : 36-39, 日本西アジア考古学会.

ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘

大沼 克彦

はじめに

大沼です。わたしは「ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘」というタイトルで、これまで4回おこなったガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査の内容をお話します。

ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査は、長谷川敦章さんと昨年亡くなった木内智康さんが中心的に担当してきました。わたしはもともと旧石器時代を専門にしていますが、このプロジェクトでは総括班の代表者として、統括的に発掘調査にかかわってきましたので、これまでの発掘調査の概要をお話します。

1 発掘調査の概要

まず最初に、発掘調査の経過をお話します。ここにガーネム・アル＝アリの位置を示す地図をお見せします。ここがラッカ市で、ラッカ市から東に車で40分ぐらいです。45キロぐらい東の、砂漠台地の崖直上からユーフラテス河氾濫原へ向けて北方1キロほどのところに見おろす遺跡です。

平成19年の2月にシリア共和国の考古・博物館庁がようやく現地調査を許可しました。それ以来、第2次、第3次、第4次、そして第7次と現地調査が進行するにしたがって、発掘の成果が蓄積されてきました。

では、第2次調査における発掘調査から順番にお話します。

(1) 第2次現地調査

第2次現地調査は平成19年の5月に実施されました。この調査の一環として、長谷川、木内両氏が遺跡の全体プランを作成しました(図1)。遺跡の規模は東西方向400メートルほど、南北方向300メートルほどです。幸いにも地元の灌漑局でこの遺跡のベンチマークの海拔を照会して、238.958メートルということを確認しました。

表面採集した土器は、長谷川、木内両氏の知見によって主に前期青銅器時代の年代です。

このスライドはガーネム・アル＝アリ遺跡の調査開始以前の遠景です。北東方向から見たものです(図2)。

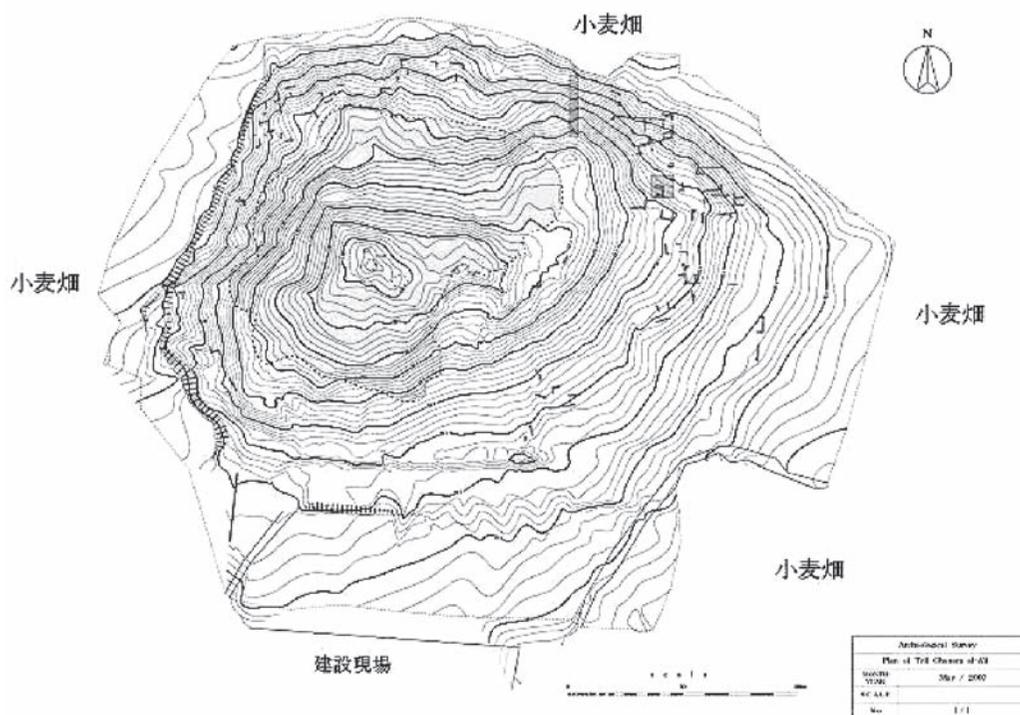


図1 ガーネム・アル=アリ遺跡の全体プラン



図2 ガーネム・アル=アリ遺跡遠景

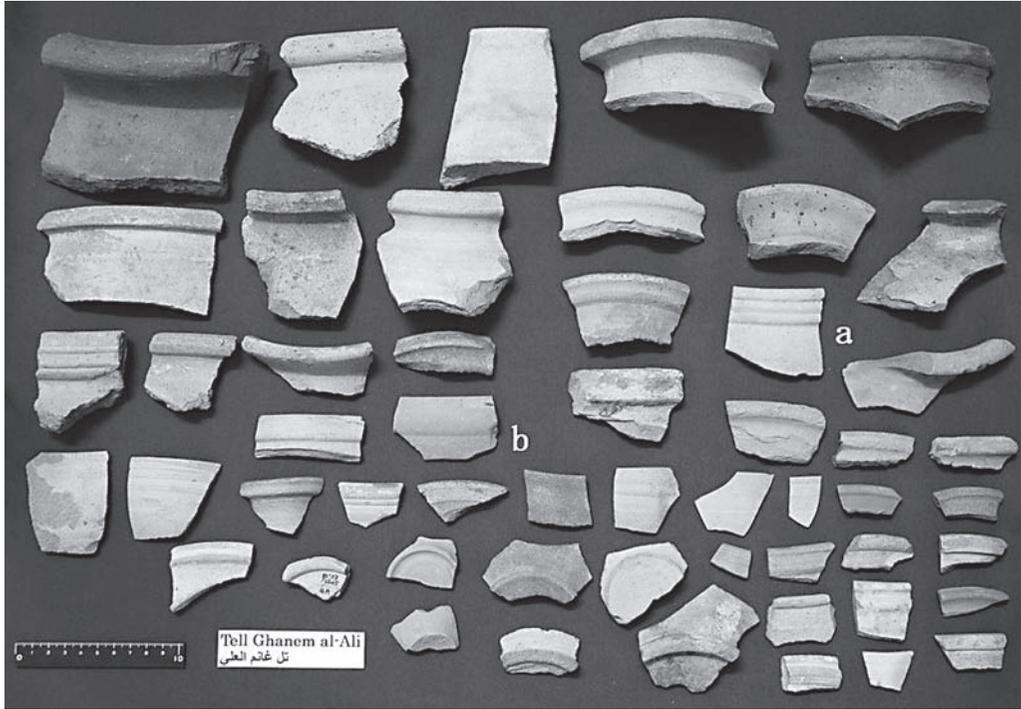


図3 ガーネム・アル=アリ遺跡の表面採集土器

これは表面採集土器の写真です。シリア考古・博物館庁に提出した調査報告書のために木内氏が撮影したものです(図3;木内 2007)。なかには、時代の示準となるユーフラテス・ウェアもあります。土器の型式、年代は私の専門ではありませんので、これからお話する土器に関してはすべて長谷川、木内両氏の知見によるものです。

(2) 第3次現地調査

第3次現地調査は平成19年の8月に実施しました。そのなかで、木内氏とわたしが2つのトレンチ、スクエア1とスクエア2を発掘調査しました。

発掘の結果、石壁と泥煉瓦で作られた部屋遺構が、崩壊したり、再利用されたりしていることが判明しました。ピットとか、ドア・ソケット、炉、かまど、石敷き、土器など、生活の痕跡が検出されました。

これがスクエア1です(図4)。これが遺跡全体の層序を確認するためのスクエア2です(図5)。

(3) 第4次現地調査

第4次現地調査は、平成19年の11月から12月にかけて実施しましたが、その一環として、スクエア1、スクエア2の継続発掘に加え、スクエア3、4、5の3つのトレンチを新たに発掘しました。



図4 スクエア1 (第3次現地調査)



図5 スクエア2 (第3次現地調査)



図6 スクエア1 (第4次現地調査)

スクエア1の継続発掘は長谷川氏が担当しました。スクエア1は3つのエリア、すなわち、エリア1、エリア2、エリア3の3つに分けられます。検出された石壁は再利用されたりしていますが、東西方向と南北方向に沿った基礎壁が作られています(図6)。土器は前期青銅器時代Ⅲ期の年代です。

これはスクエア2の4層です。このトレンチの継続発掘は木内氏が担当しました。このトレンチではそれまで4つの建築層が検出されていました。上層から下へ向かって3番めの建築層である3層からは、完形土器と動物像テラコッタが出土しています。1層から3層までの部屋状遺構の壁は東西方向、南北方向に作られています。ところが4層になりますとやや北西方向、南東方向にずれています。

木内氏によれば、1層から3層にかけて出土した Black Euphrates Ware と Smearred Wash Ware は前期青銅器時代Ⅳa期の前半のものだということです。また、4層で出土した Metallic Ware は前期青銅器時代Ⅲ期のものだとのことです。

(4) 第7次現地調査

第7次現地調査は平成20年の10月と11月の2か月間実施しました。その一環として実施した発掘調査ではそれまで不明だった第4建築層の詳細が分かり、さらに第4層の下に5、6、7層の3つの建築層を検出しました。

第5建築層に関しては東西方向の石列を検出しました。第6建築層に関しては北西方向、南東

方向の分厚い日干しレンガ壁を検出しました。

第7建築層は現時点の最下層ですが、現在の畑よりも低いレベルです。さらに深いところにも文化層があると考えられます。また、遺跡自体が現在のマウンドの範囲よりも北側に伸びていた可能性があります。出土土器は前期青銅器時代Ⅲ期の年代だとのこと。この調査期間内で地山に到達することはできませんでした。

次に、遺跡の表土クリーニングの成果をお話しします。このクリーニングは、長谷川、木内、赤司千恵の3氏が第2次現地調査で精密に作成した遺跡全体プランに記録された壁のプランを参考にして、遺跡全体のプランをより詳細に見ようとしたものです。

このクリーニングは遺跡の北縁部から北西縁部分にかけておこないました。北西縁部分については久米正吾さんが担当してくれました。クリーニングの結果、遺跡の一部に墓状の遺構が偏って分布していること、そして、テラコッタの分布がかなり集中していることが判明しました。

また、それまでの発掘調査ですでに分かっていたことですが、東西方向と南北方向を走る一連の壁と北西方向、南東方向を走る一連の壁という2種類の壁があることを追認しました。したがって、壁の方向からみても、少なくとも2期以上の遺構群があったのではないかということ、土器からみた異なる時期の存在を補足することになりました。

これは、表土クリーニングをおこなった際に参考にした遺跡全体プランです。赤いラインが地表に見えていた壁のラインです。

このスライドの真ん中に見えるのがスクエア2です。そこから左右に向かって坊主刈りのように頭をそったような面が続いていますが、これがクリーニングをおこなった部分です。遺跡全体の背後に見えるのがビシュリ砂漠台地の北縁の崖線です(図7)。

遺跡の表面から10cmぐらいの深さまでクリーニングをすると、壁のつながり、人骨片、ドア・ソケットなどがあらわれました。

これは人の頭蓋骨。これも10cmほどの深さまでのクリーニングによってあらわれました。

土器を伴った埋葬もあらわれました。ここに見える3つの丸い形の土器は明確に副葬土器です。ここに見えている人骨とともに埋葬されたものです。埋葬の原形をほぼ完全に残していると思われる(図8)。

これはテラコッタ製人物像の5~6cmほどの長さの破片です。このようなテラコッタ製人物・動物像やテラコッタ製戦車模型の車輪などが特定の場所に分布しています。ラッカ市近くのスウェハットという遺跡ではテラコッタ製の車輪は必ず墓の副葬品であるようです。

今後の研究方向

ガーネム・アル＝アリ遺跡の今後の調査の方向に関してですが、この遺跡には複数の居住時期があったと考えられますので、複数文化層の時期をより詳細に解明することが重要になってきます。それから同一時期の遺構群の場合は、この遺跡内の、遺跡というよりは村落ですが、同一集



図7 スクエア2（中央部分）とクリーニング部分（スクエア2の左右）（背後にビシュリ砂漠台地の崖線が見える：第7次現地調査）

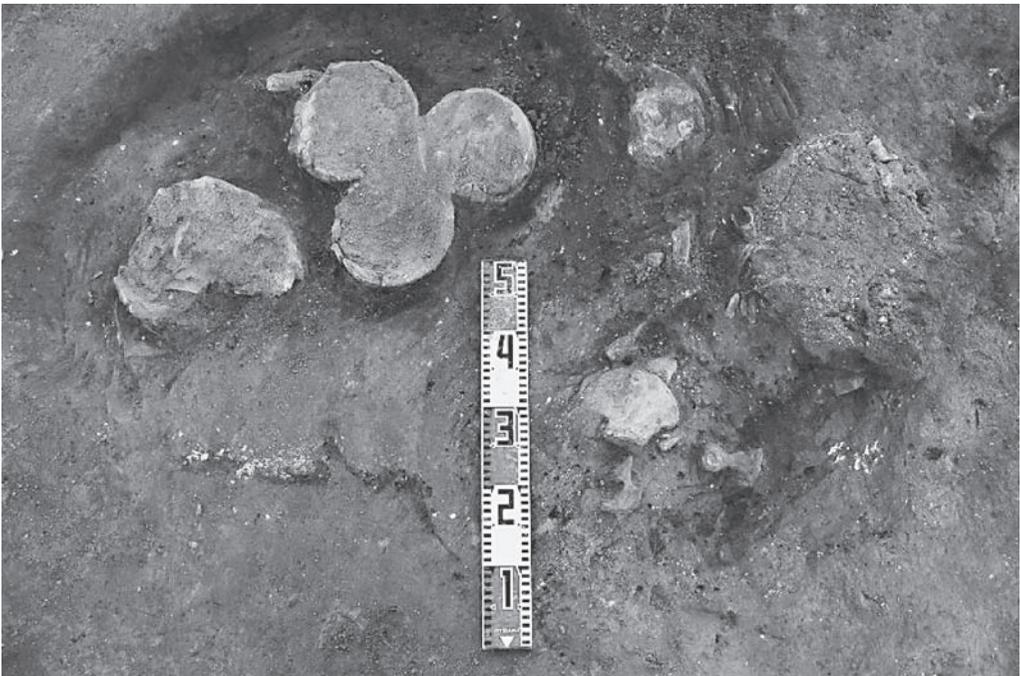


図8 クリーニングであらわれた埋葬遺構（第7次現地調査）

団による村落内の場所的使い分けの内容の解明という課題があります。さらに、同一時期の異なる集団による住み分け、共棲があったならば、その内容を解明することが重要です。

最後に、遺跡（村落）の性格についてお話しします。結論的に言って、この遺跡では半農・半遊牧的な生業がおこなわれていたのではないかと思います。このことについては、動物・植物考古学的研究班のほうで今後研究していただけたらと思います。

この点について非常に興味深い研究成果があるので紹介させていただきますと、第7次現地調査に文化人類学を専門とする同志社大学大学院博士課程の高尾賢一郎さんが参加されて、遺跡近くの村落で聞き取りによる民族調査を実施しました。この聞き取りの中で、村民は、自分たちをベドウィンから区別せず、「われわれは農業もやるベドウィンだ」というように話しています。

このような生業形態のもととなる、農業と羊飼育の両方に適した環境は青銅器時代でも同様であったと思います。

さらに興味深いことは、中央大学大学院博士課程の大西庸之さんが、マリ文書において、はっきりした記述こそないものの、アモリ人が半農・半遊牧的な生活をしてきたことの示唆が存在するというものを発表してくれたことです。

ガーネム・アル＝アリ遺跡自体が半農・半遊牧的な生業をおこなっていたアモリ人の間に残された集落だった可能性を今後証明できるのではないかと考えています。

以上です。

引用文献

木内智康 (2007) 「表採遺物から見た各遺跡の時代」『特定領域研究「セム系部族社会の形成」Newsletter』6: 18-23.

【質疑応答】

司会（宮下） どうもありがとうございました。

このガーネム・アル＝アリの遺跡の調査に関しては、なかなかシリアと交渉などがあって大変でありましたが、その空白を埋めるべく、年に2度3度と行って、ここまで成果が出てきたわけです。

大沼先生は石器のご専門でいらっしゃるのですが、なかなか大変でいらっしゃることもありますし、また木内さんが亡くなられました中、長谷川さんもよくやってくださっています。この遺跡に関しては、これからも継続的な調査が行われるのですけれども、ご質問ですとか、ご自分の遺跡との比較がありましたら伺いたしたいと思います。何かございますでしょうか。

常木 さっき出ていた頭蓋骨は、大人ですか、子供ですか？

大沼 大人だと思います。

常木 では大人が少なくとも集落内に埋葬されていた可能性があるということは言えるでしょうか？

大沼 そうだと思います。それから、今日は話せなかったのですが、生後1か月ぐらい、ポテトチップスのように薄い乳児のものと思われる頭蓋骨片もあります。

常木 子どもが住居の床下など集落内に埋葬されているのは普遍的にありますけれども。

大沼 要するに重要なことは、あのような人骨と墓状の遺構がある場所に偏って見つかっているということです。

藤井 そうするとテルシャップート直近、丘陵の墓との関係はあるんでしょうか。

大沼 そうですね。時代が同じ前期青銅器時代で、同じ集団のものであったとしたら、階層の違いとかも考えられると思います。

常木 テルのような基本的に集落であっても、それで、それ全体が墓だという場合もありますからね。ただ、集落の中に墓や墓地があるのかないのというのは、大きな問題ですね。

大沼 集落といいますか、遺跡の中に墓があのように集中しているので、何かあるはずですよ。

藤井 あのようなタイプの墓というのは、表面に見えていましたから、あそこから掘り込んでいるとすれば、現在掘っている遺構の中では、一番新しい可能性が高い。遺跡の中では新しい墓ということになります。墓の構築面なら、地表のすぐ近くでしょう。われわれもそうとらえて、E BⅢ、Ⅳの遺構群で代表されている集落のものよりも、もうちょっと新しくなる可能性はある。

大沼 そのへんは、土器なりの副葬品でわかってくると思います。

司会 いろいろな問題がまだあるようですが、これからの調査に期待いたします。

ガーネム・アル＝アリ遺跡の¹⁴C年代測定

中村 俊夫

名古屋大学の中村でございます。われわれは、自然研究班といいますか、「環境地質学、環境化学、¹⁴C年代にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」ということで、研究班の一つを作っております。その一部として、今回、わたしが主として担当しております放射性炭素 (¹⁴C) 年代測定に関してご報告させていただきます。

名古屋大学では、他の大学でもそうなのでしょうけれども、耐震工事がありまして、昨年来の耐震工事で、年代測定装置が使えなくて測定が遅れておりました。最近、少し年代データが出てきておりますので、それを中心にご報告させていただきます。

この研究の目的は、¹⁴C法を用いてガーネム・アル＝アリ遺跡から発掘された試料を分析して、この遺跡の編年を構築することと、あわせて、この遺跡が立地している段丘がいつごろ作られて、そこにいつごろから人が住むようになってきたかということ进行を明らかにすることです。後者については、結論としては、遺跡堆積物を地山までとにかく掘っていただいて、年代に関する試料を得ていただければと思います。最新の発掘で、最下層から炭質物が得られたということですので、楽しみにしております。

遺跡の場所としては、この地区にはたくさんの遺跡があるのでしょうけれども、とにかくこのユーフラテス河沿いというのは非常に重要な場所だというように思います。

この地図(図1)では、ユーフラテス河があって、ガーネム・アル＝アリ遺跡が右端ですね。それからもう一つ、左端にハマディーン遺跡があるのですけれども、このようなところで調査しております。

図1に示したものは、I、II、III、IV、Vと番号をふってありますけれども、これは段丘面を確認したもので、I番からV番まで区別され、一番高いところがI番で、V番目が最低位の段丘面で、調査した両遺跡はこの最低位段丘面上に位置しております。

まず、図2に見えておりますガーネム・アル＝アリ遺跡のスクエア1トレンチが発掘されたのですけれども、このスクエア1で、ごらんになったかたはお分かりと思います。我々の班員である齊藤毅さんが掘っていますけれども、そのあたりのところに木炭が見えます。このように木炭が散らばっております。先ほど大沼先生がおっしゃった、生活址のあるところで、このような炭化物がちらほらと層になって見えている。こういった炭化物を集めてきまして¹⁴C年代測定を行いました。

表1がその結果です。その一部を図3に示しました。この図の見方なのですけれども、縦軸

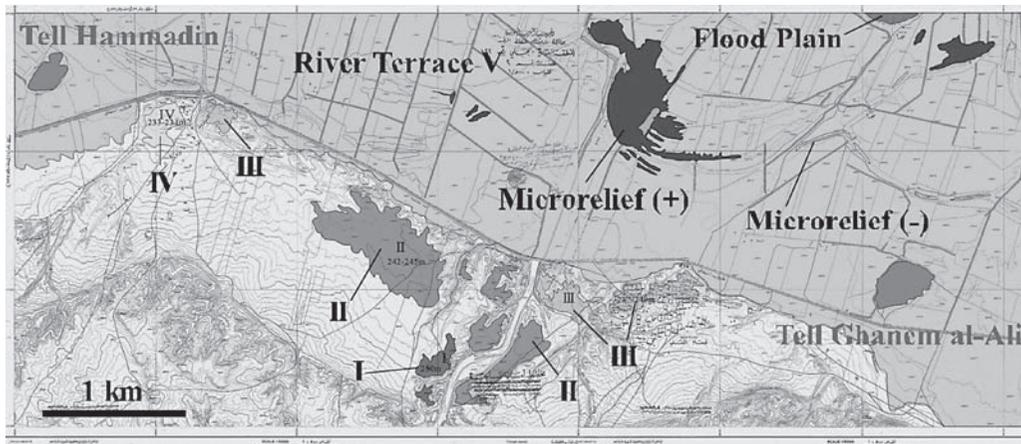


図1 ガーネム・アル＝アリ遺跡およびハマディーン遺跡の位置と確認された段丘面 (I, II, III, IV, V)
図中央の第III段丘の露頭で木炭層が見つかりその ^{14}C 年代は $1818 \pm 25\text{BP}$ と得られた。



図2 ガーネム・アル＝アリ遺跡のスクエア1 トレンチでの木炭試料の採取

が ^{14}C 年代になっております。例えば4000 BPという試料の年代が得られますと、それを図中の横方向に直線で示してあります。横軸が何を示すかという、これは較正年代(暦年代)です。 ^{14}C 年代は、試料に含まれている ^{14}C の濃度、それをただ単に、ある数式に従って換算した

表1 シリア・アラブ共和国のガーネム・アル=アリ遺跡から採取された炭化物・アスファルト状資料の¹⁴C年代および較正年代

番号	資料番号	資料物質	採取日	採取場所	δ ¹³ C* (‰)	¹⁴ Cage** (BP)	較正暦年代*** (1σ, %)	Lab # (NUTA2)
テル・ガーネム・アル=アリ遺跡								
1	GHA07-1	Bitumen (アスファルト)	2007/08/22 採取者：木内	Square1, Basket No.20	-28.7	>44,910	—	13539
2	GHA07-4	炭化物 BS-TGA	2007/08/21 採取者：木内	Square2, Basket No.4	-30.0	29,560±140	—	13100
3	GHA07-2 (MH-070823-06)	炭化物	2007/08/23 採取者：星野	Square1, Level 2, 床面より	-25.9	4019±28	2572 - 2548 cal BC (34.5%) 2539 - 2511 cal BC (42.8%) 2505 - 2489 cal BC (22.7%)	13542
4	GHA07-3 (MH-070827-03)	炭化物	2007/08/27 採取者：星野	Square1, Level 2, 西壁面より	-26.8	4001±30	2567 - 2522 cal BC (70.0%) 2497 - 2477 cal BC (30.0%)	13099
5	GHA07-7	炭化物	2007/11/17 採取者：星野	d=0cm	-30.3	4221±30	2894 - 2866 cal BC (52.3%) 2804 - 2774 cal BC (39.6%) 2770 - 2762 cal BC (8.1%)	13538
6	GHA07-1234	木炭	2007/11/11 採取者：中村	Square1 南&西壁 より採取	-27.4	4055±31	2827 - 2825 cal BC (2.0%) 2624 - 2565 cal BC (63.2%) 2532 - 2495 cal BC (34.8%)	13103
7	TGAA-1	木炭	2008/05/01 採取者：中村	Square1, 西壁, 深度：70cm	-25.5	4095±29	2837 - 2815 cal BC (19.4%) 2673 - 2578 cal BC (80.6%)	13080
8	TGAA-2	木炭	2008/05/01 採取者：中村	Square1, 西壁, 深度：60cm	-23.1	4107±29	2848 - 2813 cal BC (25.7%) 2739 - 2730 cal BC (5.2%) 2693 - 2688 cal BC (2.4%) 2679 - 2617 cal BC (49.1%) 2610 - 2581 cal BC (17.6%)	13083
9	TGAA-3	木炭	2008/05/01 採取者：中村	Square1, 南壁, 深度：60cm	-26.8	4048±32	2620 - 2563 cal BC (56.1%) 2534 - 2493 cal BC (43.9%)	13084
テル・ガーネム・アル=アリ遺跡横の羊飼料加工工場建設敷地内露頭								
10	SF-SH1	木炭片	2008/05/1	露頭西壁面 (最上層)	—	未測定	—	—
11	SF-SH2	木炭片	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (中層)	-27.6	4478±114	3350 - 3077 cal BC (85.4%) 3073 - 3024 cal BC (14.6%)	13110
12	SF-SH3	木炭片	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (最上層)	-23.8	4036±30	2616 - 2614 cal BC (1.5%) 2580 - 2549 cal BC (35.2%) 2538 - 2490 cal BC (63.3%)	13378
13	SF-SH4	木炭	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (中層)	-24.4	4114±35	2856 - 2812 cal BC (28.6%) 2747 - 2725 cal BC (13.0%) 2697 - 2619 cal BC (52.4%) 2606 - 2600 cal BC (3.2%) 2592 - 2587 cal BC (2.7%)	13105
14	SF-SH5	木炭	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (最下層)	-26.8	4081±30	2835 - 2817 cal BC (15.6%) 2665 - 2644 cal BC (14.9%) 2639 - 2573 cal BC (67.8%) 2508 - 2506 cal BC (1.7%)	13106
15	SF-SH6	木炭	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (最下層)	-26.3	4001±30	2567 - 2522 cal BC (70.0%) 2497 - 2477 cal BC (30.0%)	13379
16	SF-SH7	木炭	2008/05/01 採取者：中村	露頭西壁面 (中層)	-25.6	4067±35	2833 - 2818 cal BC (10.5%) 2662 - 2648 cal BC (7.5%) 2635 - 2567 cal BC (64.4%) 2522 - 2497 cal BC (17.6%)	13108

17	SF-SH8	木炭	2008/05/01 採取者：中村	露頭カフエ テリア面, d=300cm	-25.7	4093±36	2848 - 2843 cal BC (1.8%) 2840 - 2813 cal BC (19.2%) 2737 - 2733 cal BC (1.8%) 2692 - 2689 cal BC (1.4%) 2678 - 2557 cal BC (75.8%)	13109
18	SF-SH9	有機質シルト 土壌	2008/05/01 採取者：中村	露頭プール 面	—	試料不足 測定不可	—	—
19	SF-F1	木片	2008/05/03 採取者：中村	露頭プール 面, d=150cm	-18.6	4083±30	2835 - 2816 cal BC (16.3%) 2666 - 2574 cal BC (83.7%)	13104
ユーフラテス河流域に所在する最低位段丘堆積物								
20	RAQ-S-5-1	炭化植物	2007/11/11 採取者：中村 ・齊藤	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス	-29.5	899±26	1047 - 1088 cal AD (48.6%) 1122 - 1139 cal AD (17.0%) 1149 - 1181 cal AD (34.4%)	12881
21	RAQ-S-5-2	炭化植物	2007/11/11 採取者：中村 ・齊藤	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス	-28.5	949±27	1029 - 1050 cal AD (26.0%) 1083 - 1124 cal AD (55.0%) 1136 - 1151 cal AD (19.1%)	12883
22	RAQ-S-5-12	炭化植物	2007/11/11 採取者：中村 ・齊藤	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス	-28.0	927±25	1043 - 1058 cal AD (17.4%) 1064 - 1103 cal AD (42.4%) 1118 - 1155 cal AD (40.2%)	13541
23	RAQ-S-1-1	土壌有機物	2007/11/11 採取者：中村	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス, d=150cm	—	炭素不足で 測定不可	—	—
24	RAQ-S-1-2	土壌有機物	2007/11/11 採取者：中村	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス, d=120cm	-24.9	4494±37	3334 - 3263 cal BC (41.2%) 3244 - 3211 cal BC (19.4%) 3190 - 3153 cal BC (20.7%) 3135 - 3102 cal BC (18.7%)	12858
25	RAQ-S-1-3	土壌有機物	2007/11/11 採取者：中村	ユーフラテ ス川河岸堆 積物層・第 Vテラス, d=50cm	-25.4	3245±29	1602 - 1590 cal BC (8.6%) 1532 - 1491 cal BC (67.9%) 1480 - 1456 cal BC (23.5%)	12884

* $\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{sample}}/({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{PDB}} - 1.0] \times 1000 (\%)$,

ここで、PDBはPee Dee Belemniteの略記で炭酸カルシウムからなる矢石類の化石であり、 ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ 比の標準体として用いられる。この $\delta^{13}\text{C}$ 値は、AMSにより測定した値であり、測定の精度は、 $\pm 1\%$ である (Nakamura et al. 2004)

** AMSにより測定した $\delta^{13}\text{C}$ 値を用いて ${}^{14}\text{C}$ 濃度を補正して算出された同位体分別補正 ${}^{14}\text{C}$ 年代 (conventional ${}^{14}\text{C}$ age) である。西暦1950年から遡った年数としてBP (before present) を付けて表わされる。

*** IntCal04 data set (Reimer et al. 2004) およびCalib5.0 (Stuiver and Reimer, 1993) を用いて較正した。西暦1950年から遡った年数を表わすcal BPのほか、紀元前後の年数を表わすcal BC, cal ADも用いられる。

ものであり、実際の年代 (暦年代) とは直接関係がありません。横軸は、calibrated age といいますが、よく使われている較正年代で、暦年代に相当するものです。

図3中の点々をつないだ曲線は、実は ${}^{14}\text{C}$ 年代の較正に使う較正データ (IntCal04, Reimer et al. 2004) です。これは、まず木の年輪を使って、年輪年代の決まった年輪試料を、縦軸 (すなわち ${}^{14}\text{C}$ 年代) のどこに来るかを測る。そこで、試料の年輪年代と ${}^{14}\text{C}$ 年代が決まって、図3中に1点がプロットされます。それから次の年輪のデータをプロットするというようにして、繋いでいきます。

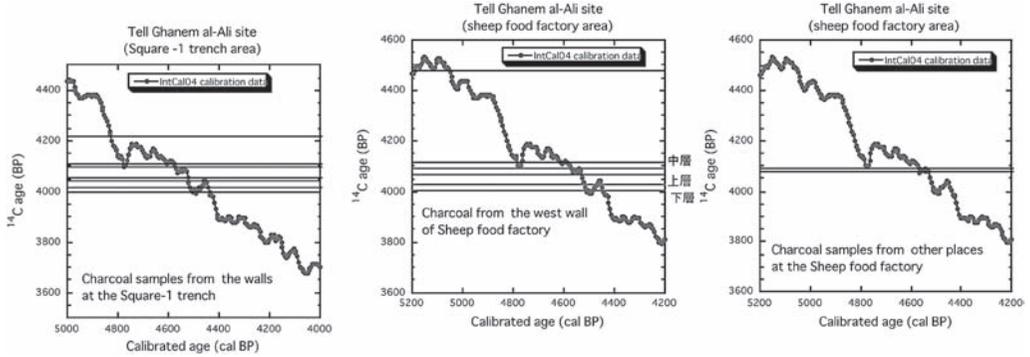


図3 ¹⁴C年代と較正データ IntCal04 との比較

左図：スクエア1トレンチからの試料

中図：羊飼料工場の西壁面露頭からの試料

右図：羊飼料工場内のカフェテリア、水たまり周辺露頭からの試料

この曲線を使って較正をすることになります。例えば、この4000 BPの¹⁴C年代ですと、4000 BPにあたる横線が較正曲線と交わっているあたりで、線を下に降ろしたあたりですね。そのあたりの較正年代が、その試料の暦年代だということです。一つとは限らず複数個のこのような暦年代の候補が出てくることもあります。こうして、¹⁴C年代に対応して可能性のある暦年代がどのあたりかということが分かってきます。

それからもう一つ大切なことは、スクエア1トレンチでは7点の¹⁴C年代を、一応測定しているのですが、¹⁴C年代の広がりは大抵100年ぐらいです。新しい年代から古い年代までほぼ100年間ですね。一つだけちょっと古く出ていますが、他の6点は非常に良く一致して、4000 BPから4100 BPの間にほぼ入っている（図3の左図）。

¹⁴C年代測定の誤差が大抵±30年程度ですので、よくそろっているのですが、これを暦年代に換算しますと、結局4800 cal BP (2850 cal BC) から4450 cal BP (2500 cal BC)までの範囲で重なってくるので、400年ぐらいの幅になってしまう。この年代幅の広がり、較正データの形状から必然的に起きることではどうしようもないことなのですが、偶然にこのようなことが起こることになります。このようにして、基本的には¹⁴C年代を投影して、横軸でその暦年代を解釈しないとイケないということになります。表1に、個々の試料について、詳細な計算から求まる暦年代の範囲が可能性の確率と共に示されています。

同じようにして、実は、ガーネム・アル＝アリ遺跡のとなりにある工場ですが、羊の飼料を作る会社を建設中だということですが、そこでも露頭が見えまして、そこで幾つか試料を採取しました。これらの試料も大抵、結果的には同じ¹⁴C年代を示します（表1、図3）。工場内でカフェテリアが建設されるところに、露頭が出ている。その前の道をずっと歩いていくと、地面が深く掘られて水たまりができています。そこにも工場の建物を建設する予定なのですが、その近くに露頭が出ていて、そこから試料を採取してきました。また、工場敷地の西端に見

える露頭では、上中下層と3層に分けて、表土からの深さはせいぜい2m ぐらいのところなのですけれども、30 cm ぐらいの間隔で3層の炭化物層がありました。50 cm から30 cm 程度の間隔があったので、どのような年代差があるかということに興味を持ち、上中下層の3層に分けて試料を取ってきました。

それらの試料の ^{14}C 年代測定の結果(表1の番号11~16)を図3にお見せします。工場敷地西端の路頭の上中下層から採取した試料の ^{14}C 年代が、色分けして、上層が赤、中層が青、それから下層が緑色に塗ってありますけれども、ほとんど年代値に違いはありません(図3の中図)。一つだけ飛びぬけて古い ^{14}C 年代がありますけれども、これは old wood effect (古木効果)で説明できると思います。大きな木材ですと、その芯のところと一番外側とで、樹齢100年の樹木だと、100年違うこととなります。他の ^{14}C 年代よりも400年程度古いので、かなり大きめの木を使ったこととなりますけれども、一つの可能性として考えられます。他の試料の ^{14}C 年代は大体よくそろっておりまして、4000 BP から4100 BP ぐらいの間にあって、上・中・下層の違いはなくて、ほとんど同時期のものだと思います。

また、図3の右端に、水たまりおよびカフェテリアの近くの露頭から採取された試料の ^{14}C 年代を示します。他の地点の ^{14}C 年代とほぼ一致しています(図3の右図)。

このように、今回、ガーネム・アル=アリ遺跡のスクエア1トレンチから採取した木炭試料、工場予定地から取った木炭試料も、ほとんど同じ ^{14}C 年代を示している。4000 BP から4100 BP ぐらいの間に入ることです。

これらの ^{14}C 年代を較正年代に較正しますと、紀元前の暦年代(cal BC)で表しますと、2850 cal BC から2500 cal BC ということで、前3千年紀には、きちんと入っているということが言えると思います。

歴史年表(藤井2004)を見ますと、前期青銅器時代は、暦年代で3000 BC から2000 BC の範囲で、今回得られた較正年代は、その早いほうの時期ではないか。すなわち、前期青銅器時代でも早いほうの時代を表すような堆積層というような結果が出ているということになります。

さらに、本研究の初期に現地調査に行ったときに、ハマディーン遺跡(図1)で木炭のサンプリングをしまして、これは以前に、測定結果を発表した(特定領域研究「セム系部族社会の形成」、第3回研究発表会、2007年12月23日、於：東京大学総合研究博物館)ものですが、木炭試料2点の ^{14}C 年代が、少し若いのですけれども、 3963 ± 34 BP、 3915 ± 35 BP になっております(表2)。そこでは土器片も同じ地層から出ている。この地点は、ハマディーン遺跡の盗掘跡と言われております。発掘をちゃんとしたわけではなくて、盗掘穴が開いていて、よく見たら、土器片と共に木炭もあったので採取してきました。この ^{14}C 年代を較正データ IntCal 04 と比較して図4に示します。ちょっと若めになって、可能性の高い暦年代範囲は2570-2350 cal BC と得られます。先ほどの歴史年表と比較しますと、前期青銅器時代の範囲内にあり、部分的ですがガーネム・アル=アリ遺跡の年代範囲のうち若めの年代とほぼ重なっています。従って、ハマディーン遺跡でも、ガーネム・アル=アリ遺跡とほとんど同時期に人の居住があったと言えると思います。

表2 シリア・アラブ共和国のテル・ハマディーン遺跡から採取された木炭の¹⁴C年代と較正年代

番号	資料番号	資料物質	採取日	採取場所	δ ¹³ C* (‰)	¹⁴ Cage** (BP)	較正暦年代*** (1σ, %)	Lab # (NUTA2-)
1	Sample#1	木炭	2007/03/13 採取者：中村・星野・田中	盗掘坑の床面に落ちた木片（層位は不明）	-25.1	3915±35	2469 - 2399 cal BC (65.5%) 2383 - 2347 cal BC (34.5%)	12529
2	Sample#5	木炭	2007/03/13 採取者：中村・星野・田中	盗掘坑の壁面 Depth=55cm	-25.6	3963±34	2567 - 2522 cal BC (47.2%) 2497 - 2460 cal BC (52.8%)	12530

* δ¹³C = [(¹³C/¹²C)_{sample} / (¹³C/¹²C)_{PDB} - 1.0] X 1000 (‰),
 ここで、PDBはPee Dee Belemniteの略記で炭酸カルシウムからなる矢石類の化石であり、¹³C/¹²C比の標準体として用いられる。このδ¹³C値は、AMSにより測定した値であり、測定の精度は、±1‰である(Nakamura et al. 2004)
 ** AMSにより測定したδ¹³C値を用いて¹⁴C濃度を補正して算出された同位体分別補正¹⁴C年代 (conventional ¹⁴C age) である。西暦1950年から遡った年数としてBP (before present) を付けて表わされる。
 *** IntCal04 data set (Reimer et al. 2004) およびCalib5.0 (Stuiver and Reimer, 1993) を用いて較正した。西暦1950年から遡った年数を表わすcal BPのほか、紀元前後の年数を表わすcal BC, cal ADも用いられる。

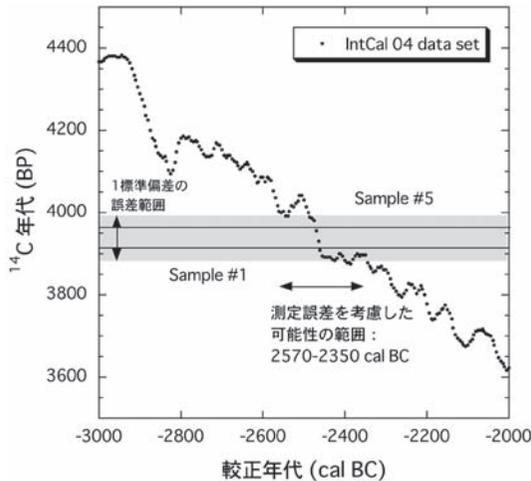


図4 ハマディーン遺跡から採取された2個の試料の¹⁴C年代とIntCal04較正データの比較
 1標準偏差の誤差範囲で、可能性の高い暦年代の範囲は2570-2350 cal BCにあたる。

もう一つは、炭化物試料を、これは木内智康さんから依頼されて測ったら、非常に古い29,560±140 BPという¹⁴C年代値が出て、おお、すごく古いなと思ったのですが、これはどうも天然アスファルト起源らしい。実は、一緒にアスファルトの固まりも渡されて、それを¹⁴C年代測定すると44,910 BPより古いという¹⁴C年代値が出ています(表1)。44,910 BPは、¹⁴C年代測定法で測定可能な古い年代の限界に近いもので、アスファルトのような古い炭素含有物と考えて間違いありません。

天然のアスファルトが、ガーネム・アル＝アリ遺跡から南方ほぼ60 kmの地点で、地表から工業的に採取されています。遺跡から結構近いところにありますから、こういったものを実際に採取して持ってきたのではないかと思います。古代におけるアスファルトの利用や用途などに



図5 段丘面で、高位面から第Ⅲ面、第Ⅳ面、第Ⅴ面を示す。

いては、これから考古学的に、いろいろ解釈されるものと思いますけれども。

次に、段丘面ですけれども、主として2007年の秋に遺跡周辺を歩いて調査しました。図1に示しますように、高いところからⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴと続いて、図の上側、北側がユーフラテス河になっておりまして、ガーネム・アル＝アリ遺跡は、最低位段丘Ⅴに位置していることになります。

実際に歩いてみると段丘面の確認はなかなか難しい。高い方からⅠ、Ⅱ、Ⅲと示してあり、Ⅴまであります(図5)。その中で、ユーフラテス河に近いところで、この第Ⅴ面なのですけれども、その周辺を歩いて、この第Ⅴ面がいつごろできたのか知りたいということで露頭を調べて、木炭とか、炭化物試料を含む地層を探しました。河沿いの露頭で偶然、炭化物の層が見つかって、それを ^{14}C 年代測定したわけですが、約900BPという ^{14}C 年代値が出て、遺跡が乗っている第Ⅴ面の成立年代としてはかなり若すぎる(表1の番号20-22)。班員の齊藤毅さんの説明では、これはひょっとしたら風成の堆積物かもしれないということです。露頭堆積物の形成過程についても、いろいろな可能性を調べる必要があります。

もう一つの露頭は、ユーフラテス河の支流があって、この流れがユーフラテス河につながる近辺ですけれども、フラットな平原を河川が刻んだ露頭があります。堆積層の上部は、耕作によりかなり混合されているところですが、5m程度の高さの露頭の上部、中部、下部の3層準で土壌を採取しました。これは、地層中に木片・木炭などが見つかりませんので仕方なく土壌を採取して、その土壌中の有機物を何とか取り出して ^{14}C 年代測定したわけですが(表1の番号23-25)、3200BPから4500BPというような年代値が出て、これだと、ちょうど遺跡が使われていたころの年代と一致します。しかし、この ^{14}C 年代をどう解釈するかというのは、なかなか難しいところがあります。

それからもう一つの試料は、第Ⅲ面(図1の中央のワディ沿い)、この面はかなり古いはずなのですけれども、第Ⅲ面の上面から約50cmの深さのところ、層状になって見つかった木炭層から採取しました。この木炭を年代測定してみると、 1818 ± 25 BP (NUTA2-13101)ということ、とても第Ⅲ面ができた年代ではないということです。この場所には、民家が上面に建ってお

りますので、人為的な可能性が高い。ガーネム・アル＝アリ遺跡に住人が居た時期よりもずっと後のことですが、かつての住人が残したものかもしれません。あるいは、その上には風成層が、やはり載っているのかもしれない。

以上のことから、河川の氾濫によってできた地層というのはもちろんある程度分かるのですが、その上にかなり風成層が載っている可能性があり、河川活動により出きた、河川の流れてによってできた堆積物の中から木炭を見つけるのはなかなか難しいことです。このようなところを一生懸命歩き回って堆積物の中から木片・木炭を探すのも一つの方法なのですが、やはり、先ほどありましたガーネム・アル＝アリ遺跡をもっと深い層まで発掘し地山まで到達して、第V面がいつごろにできて、その上にいつごろからテルが作られて人が住むようになったかということ を明らかにする、やはり遺跡を発掘するのが一番早道だと考えております。

このあとの話は、これはわたしの興味でやったことで、聞き流していただければよいのですが、実は、ユーフラテス河の河川水を取って、そこの中に溶けている二酸化炭素、ビールの泡のようなものですね、そのようなものを集めて、その¹⁴C年代を測りました。¹⁴C濃度を測って、それを年代に換算したということです。ですから河川水の年代が得られるというわけではなく、河川水に溶存する炭素の¹⁴C濃度が、現在の大気中二酸化炭素の¹⁴C濃度に比べて、相対的に低いということで、それを年代に換算すると1200年前ぐらいになるということです（表3の試料番号S0506-3）。

ラッカ市の北東方向のユーフラテス河の北側に火山があって、そこで玄武岩層の調査をしたときに、途中の車道を横切って立派な用水路があって、大量の水が流れていた。この水は、地下水の汲み上げではなく、ユーフラテス河から引かれたものか。これは、水を取って¹⁴C濃度を測ってみると分かるのです（表3の試料番号S0505-1）。実際、ほぼ先ほどのユーフラテス河の河川水の¹⁴C年代値とよく一致した値が出ておりますから、ユーフラテス河から引かれた用水と考えてよいでしょう。

それから同じように、用水の中に完全に沈水した植物（表3の試料番号RAQ-WP-1）があったので、これを採取して測ってみると、1317±28 BP。つまり、このような沈水の植物というのは、光が届いていますから陸上の植物と同じように光合成をやるのですけれども、その植物体を作る際には、大気中の二酸化炭素を直接使えず替って水に溶けている二酸化炭素を光合成で固定して、自分の体を作っているということがこの結果からよく分かると思います。

同じようにして、一つは、われわれが使っているラザワルドホテル、ホテルの水道水は地下水なのだろうかと思って測ってみたら、ほとんどユーフラテス河の水と同じ¹⁴C濃度を示しますので、多分河川水を引っ張ってきて、フィルターで濾し消毒した後、お客さんの部屋に供給され、それをういてシャワーを浴びさせてもらっているのではないかと思います。ユーフラテス河の水を飲みたくないかたは、ペットボトルの水を飲んだほうがよいのではないかと思います。このようなことが判ってきました。

それからもう一つは、「¹⁴C濃度が低い灌漑用水を使って植物を成長させると、それらの植物

表3 環境試料の¹⁴C濃度（見かけの年代）

番号	試料番号	試料物質	採取場所	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ Cage (BP)	Lab # (NUTA2)
1	S0505-1	用水	灌漑用水	-3.7	1265±27	13381
2	S0506-1	水道水	ラザワルドホテル	-4.9	1327±27	13382
3	S0506-3	河川水	ユーフラテス川	-5.7	1223±27	13384
4	RAQ-WP-1	沈水植物	灌漑用水	-19.8	1317±28	13474
5	RAQ-WH-1	麦の穂	遺跡周囲の小麦畑	-22.1	104.9±0.3 (pMC)*	13522
6	RAQ-PL-1	一年生草本	砂漠	-25.0	105.0±0.5 (pMC)*	13520
7	RAQ-COT-1	綿花	遺跡周囲の小麦畑	-27.0	105.9±0.4 (pMC)*	13385

*pMC (percent modern carbon) は、試料の¹⁴C濃度を表す単位の一つである。¹⁴C年代が0BPの標準試料の¹⁴C濃度を100.0%とするときに、未知試料の¹⁴C濃度をそれに対する比として%で示す。105.9pMCでは、試料の¹⁴C濃度は、¹⁴C年代が0BPの標準試料の¹⁴C濃度よりも、5.9%高いことを意味する。この値は、現在の単年性植物の¹⁴C濃度の値とよく一致している。

では実際よりも古い年代が出るのではありませんか？」というようなことを、考古学の方に聞かれたことがあります。その推定を否定する証拠を示さないといけません。現在ガーネム・アル＝アリ遺跡の近くの畑に麦が栽培され収穫されています。そこで、麦の穂を採取しました。それから別な畑の綿花。これら両方とも畑で作っておりまして、おそらく灌漑用水路を使って河川水を供給していると思うのですけれども、それから、比較植物試料として、実は砂漠に自生する植物を採取しました。自生の植物は自力で周囲の水を吸い上げて生きているのだと思います。これらの試料の¹⁴C濃度（表3）、これは年代ではなくて濃度で示されています。現生の単年生植物の¹⁴C濃度は、ほぼ104~106 pMC (percent modern carbon) を示すことが調べられています。ラッカで採取した植物試料の¹⁴C濃度は、互いにそろっており、このような現代の¹⁴C濃度と一致しています（表3）。決して、ユーフラテス河の灌漑用水の沈水植物のように、1300 BPのような古い見かけの¹⁴C年代を示めすことはない。つまり、このよう地表の植物は、やはり大気中から二酸化炭素を吸って、そして自分の体を作っているわけで、灌漑用水路から供給された水に溶存する炭素を使って体を作っているわけではないということが分かります。従って、わたしが遺跡の年代として報告した木炭の年代というのは、あれは正しい。河川水の炭素リザーバー効果が影響を及ぼして実際よりも古い年代を示していることは決してないと思ってくださって結構だと思います。

以上をまとめますと、ガーネム・アル＝アリ遺跡もハマディーン遺跡も、大体同じような年代を示しており、較正暦年代で2850 cal BC から2350 cal BC ということです。

段丘面の年代推定については、確認はある程度できるのですけれども、かつて形成された段丘面上に風成層が載っていたりする可能性があるということで、なかなか難しい。ですから先ほども述べましたように、やはり遺跡をもっと深く発掘して、地山まで到達するのがベストであると

思います。

それから、水の話と植物の話は、以上のようなことで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

【質疑応答】

司会（宮下） 今回のプロジェクトは、そのような理科系の方々の協力もあって進めているわけですが、何かご質問がありましたらお願いします。ではまず、西秋先生。

西秋 アスファルトの話が出てきましたけれども、これは、遺跡から出たものと産地のものを分析した結果、同じだったということですか。

中村 同じであるとは確認できておりません、二つとも。実は産地から取ってきたものはまだ分析しておりません。分析した試料は木内さんからいただいたので、本当だったら木内さんに、その出所をきちんと説明してもらえばいいのですけれども。

分析した試料の一つはこのように、土器の先にくっついていたもの。皆さんにお配りしているレジュメの一番最初の、表の一番上のところに載っています。表の上のところに二つありまして、一つはアスファルトの固まりが、我々に渡されたようですね。

大沼 これはわたしの研究室にありまして、石壁の隙間から出てきた。おそらく拾われて利用されたのだと思います。

中村 これは、やはり土器ですね？ 土器ではないのでしょうか？

大沼 いやいや、これは……。

中村 え、違うのですか。（中村は、2試料のうちの一つの試料について、土器に付着していたアスファルトが採取された試料であると勘違いしておりました。大沼先生の説明で、2試料ともアスファルトの固まりであったことが判明しました。）

大沼 これはよく分からないですよ。これが4万年近い年代ですか。

中村 いや、僕は土器に付着していたものと認識しておりまして、¹⁴C年代測定を行いました。試料を実際に自分が見たわけではないから、申し訳ありません。今、大沼先生のところにあるようです。先生のところにお持ちのようですので。

それで、一つは、だからそのような二つ見解を書いてあると思いますけれども、一つはだから、ここは僕の解釈として、一つはそのアスファルト、それ自体を持ってきて、それを、その固まりを測ったのが、その4万年より古いという値で。それでこちらの幾分若い年代は何らかの汚染があって、それを……、ここに書きましたけれども。

僕はアスファルト自体と汚染炭素が混ざって、このような見かけ上の若い年代値を示していると思っていたのです。

西秋 いや、私がお尋ねしたかったのは、そのようなことではなくて、そもそも遺跡から出たものが本当にビシュリのアスファルトだったかどうかを分析されたのかどうかということです。

中村 いいえ、まだです。

西秋 青銅器時代より古い銅石器時代には、ユーフラテス河では、ビシュリのアスファルトは使われていないのですよね。みんなイラクとか南東トルコ、もう200キロとか300キロ以上、離れたところから持ってきているんです。ガーネム・アル=アリのアスファルトがビシュリ産だったとすると、青銅器時代になって、初めて地元のアスファルトが使われるようになったのかなという話になるので、分析なさったほうがよいと思います。

中村 わかりました。

大沼 見た感じ、だいぶ違うようですけれども、アスファルトの露頭は、あそこより、ちょっと細かい感じ。

藤井 あ、でもそれは、何といいますか、ガーネム・アル=アリ遺跡の集落外活動ということで、多分、植物や動物のデータから少し言えることと、あと西秋さんがさっき石器の製作技術で、10キロくらい内陸まで集落外活動が追いかける。それより向こう側で追いかけていた材料はないですけれども、これはそうなるかもしれないので、露頭のほうのアスファルトと、遺跡から出たアスファルトを、成分の分析とかしていただいて。

中村 はい。そうですね。

藤井 それが、もうできているということであれば、これは非常に面白い材料かもしれない。

中村 私自身の担当ではありませんが、グループ内で検討いたします。

藤井 イランとかのアスファルト、イラクもそうですけれども、ずいぶん分析して、大体この産地だとかで、かなり違うから、出てくるようなので、それをぜひやっていただくと、さらにビシュリのケルン墓に近づいてくるので、ありがたい材料だと。

大沼 段丘の名前が前聞いた時と、ちょっと逆になっていたのですが。

星野 一番最初に低いほうから1, 2, 3, 4, 5としたのですが、それは齊藤さんが始めに発表した順です。その後、やはり高いほうから番号をつけるべきだろうということで変更しました。

常木 すみません、暦年代に直すときに、今回の年代は、少し古くなりすぎているという可能性はないでしょうか。というのは、多分この層で言うと、今までのわたしたちの伝統的な年代観からすると、おそらくⅢの後半からⅣの頭なので、このスクエアのところですね。だから紀元前の2500から2200とか2300ぐらいで出ると、非常にいいなと思っていたのです。

大沼 え、これでいいだろう。

常木 これでいいのですか。

大沼 アッカド以前だから。アッカドは紀元前2350年でしょう？それ以前だから、ちょうどいいよ。

常木 EBのⅣAまでであるのではないですか。2850から2500年だとEBのⅠからⅡになってしまいます。遺跡で見つかっているのはⅢの頭ぐらいからですよ。

大沼 メソポタミアで言えばEDでしょう。先王期。紀元前2900年くらい。

常木 見つかっている土器はEBの前半、Ⅲの前半くらいまでです。

中村 表1の4番以下のデータです。

藤井 いや、300年ぐらい。ちょっと古すぎるでしょう。

大沼 EBⅢでしたら初期王朝でしょ？

中村 そのへんの暦年代では古すぎる？では、どうなのですか、このへんの若い暦年代を採用したら、ここの古い方の可能性もあるけれども、ここの若い暦年代を採用すればどうですか。ちょっとこれは(cal BCではなく)cal BPになっていて申し訳ないのですけれども。

それでも無理ですか。4000年ぐらいでしょうか。このあたりの暦年代範囲では、ここはこれ、ここの古い方の暦年代も可能性があるのだけれども、こちらの暦年代はちょっと確率の大きさの観点から捨てては。

常木 その4520, 4410ですか。それは非常にいい年代だと思いますけれども。

中村 今、ちょっと申し上げれば、これは、横軸はただBCで書いてあるから、こちらにちょっと持ってきたのですけれども、こちらは、すみません、BPで書いてあるので、ちょっと表現が異なっているのですけれども、ここのところも、だから、例えばこの¹⁴C年代だと、ここの古い方の暦年代も可能性があるけれども、こちらの若い方の暦年代の可能性が高いわけですね。これもあるわけですね。ですからここ、わたしは4800 cal BPというのは、ここからここまでのどこかに来るだろうということで、この400年の間を今は採用しているわけですけれども、校正データのここでちょっと上に上がっているから、こちらを捨ててしまえば、もっと分かれてくる。

常木 そうすると、何年から何年ぐらいになる？

中村 いずれにしても、古い方は同じですけれども、だから2700から2500 cal BC。

常木 2700から2500 cal BC。

大沼 沼本氏もEBのⅠというのは、イラクのEDで言うと。

沼本 終わりが2850年ぐらいです。

大沼 だからメソポタミアの年代でいくと、EBⅢがED期というのが、だいたい当たっている。

松本 EBⅢは頭で2700 BCぐらいでしょう。

藤井 だから、いや、200~300年は古いですね。

中村 ちょっと古いですか。

藤井 でも、ただし、その炭化物を引っ張ってきたコンテクストが問題です。トレンチから取ったわけではないでしょう？

中村 いや、これもそうですけれども、このあたり、トレンチ、スクエア1の試料。

藤井 あ、でもスクエア1のEBはⅢとかⅣですね。

大沼 土器はEBのⅢということでしょうか？それでEBⅢは編年、木内君がまとめたのを見ると、イラクのEDのⅠから入ってきます。初期王朝は、2350ぐらいまで。

常木 スクエア1というのは、EBのⅢの半ばぐらいです。

長谷川 EBのⅢの頭と思わなかったですけれども。

常木 そうですね。Ⅲの後半ですね。

長谷川 後半、IVは全くないので。

常木 いや、IVはないの。

長谷川 ええ。

藤井 EBのⅢ長いですから。今回の年代は、EBのⅢにももちろん入っていますが、前半よりで。でも土器の予想だと後半よりだということですので、そこにギャップが200~300年でてくる。

常木 土器の予想だと3千年紀の後半の前のほうだろうと。3千年紀の第3四半期だろうというイメージなのですが。でも、ちょっと分かりません。

大沼 あとはだから土器の状態なのさ。あと、ハマディーンは木内君の話によると、ガーネム・アル=アリより新しい。

司会 なかなか、このようなデータと、それから実際の土器の問題というのはあると思いますので、これからもまたいろいろご協力をお願いしたいと。また、西秋先生がおっしゃったアスファルトの使用の問題も、藤井先生の調査とぐっとまた近づいてくる面白い内容だと思いますので、またよろしくお願ひしたいと。

これで一応、第1部を終わりにして休憩したいと思います。

参考文献

- 藤井純夫(監修)(2004)『砂漠の王国ヨルダン展—知られざるアラブ世界8000年の文化遺産』世田谷美術館, 2004年9月18日~11月7日。
- Nakamura, T., E. Niu, H. Oda, A. Ikeda, M. Minami, T. Ohta, and T. Oda (2004) High precision ^{14}C measurements with the HVEE Tandemron AMS system at Nagoya University. *Nucl. Instru. and Meth. in Phys. Res.*, B 223-224 : 124-129.
- Reimer, P. J., M.G.L. Baillie, E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, C. Bertrand, P.G. Blackwell, C.E. Buck, G. Burr, K. B. Cutler, P. E. Damon, R. L. Edwards, R. G. Fairbanks, M. Friedrich, T. P. Guilderson, K. A. Hughen, B. Kromer, F. G. McCormac, S. Manning, C. Bronk Ramsey, R. W. Reimer, S. Remmele, J. R. Southon, M. Stuiver, S. Talamo, F. W. Taylor, J. van der Plicht, and C. E. Weyhenmeyer (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46(3) : 1029-1058.
- Stuiver, M. and H. A. Polach (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19(3) : 355-363.
- Stuiver, M. and P. J. Reimer (1993) Extended ^{14}C data base and revised CALIB 3.0 ^{14}C age calibration program. *Radiocarbon* 35(1) : 215-230.

ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査

久米 正吾・沼本 宏俊

はじめに

久米と申します。よろしくお願いたします。本日はガーネム・アル＝アリ遺跡のすぐそばにある前期青銅器時代のお墓を沼本先生とわたしとで調査させていただいておりますので、そちらの報告をいたします。

まず調査の経緯と背景を簡単にご説明します。先ほど大沼先生のお話がありましたように、現在ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘が進んでおります。それで、わたしたちの班としましては、「セム系部族社会」プロジェクトの目的である定住社会と遊牧社会の関係、あるいは当時の民族集団、そしてそれを取り巻く政治的・社会的状況の解明といった、そのような目標にお墓の証拠からアプローチしていくという目的で調査を行っております。

さて、前期青銅器時代の編年につきましても簡単にふれておきたいと思います。年代としてはおおそ紀元前3千年紀に取まります。南メソポタミアでは初期王朝からアッカド期にかけての時代です。シリアの場合ですと、前期青銅器時代をI期からIV期までに分けるというのが一般的な編年のしかたになります。最近はポーターという先生 (Porter 2007) の土器の編年が概説書などでよく使われておまして (たとえば, Cooper 2006), 前期青銅器時代を大きく6つに分けるというシステムを採用しています (図1)。ガーネム・アル＝アリの時代というのは、だいたい紀元前2600年から紀元前2200年ぐらいの、伝統的な編年で申しますと前期青銅器時代III期からIV A期という時代の土器あるいはその他の遺物の証拠が出ておまして、こういった時代のお話だということになります。わたしたちが調査しているお墓をみても、およそこの範囲に収まる年代が得られております。

1 遺跡の現状・課題と調査手法

遺跡の現状と調査を進めるうえでの課題ということなのですが、わたしたちの調査に先立ちまして常木先生が事前調査をされました (Tsuneki 2008)。その調査でガーネム・アル＝アリの周囲には二つ墓域があるということがわかっています。一つは現在のガーネム・アル＝アリ村が位置するところにありますワディ・ダバと呼ばれる墓域です。もう一つはユーフラテス川によって削られてできた崖の上に、数千基を超える大規模なワディ・シャップート墓域があります。こうい

BC	南メソポタミア	シリア編年	ユーフラテス編年
3000-2900	ジェムデト・ナスル	EB I	Phase 1
2900-2700	初期王朝 I	EB II	Phase 2
2700-2600	初期王朝 II	EB III	Phase 3
2600-2500	初期王朝 IIIa		
2500-2350	初期王朝 IIIb		
2350-2170	アッカド	EB IVA	Phase 5
	ポスト・アッカド	EB IVB	
2170-2000	ウル第3王朝		EB-MB 移行期

Pruss 2004; Porter 2007 を基に作成, EB は前期青銅器時代, MB は中期青銅器時代の略.

図1 前期青銅器時代の編年

った大きく二つの墓域が遺跡直近に広がっていることが事前調査でわかっておりました。

今回調査したのはワディ・シャップート墓域の一部です。ただ問題としましては、ほとんど盗掘されているということですね。そのため、通常得られる副葬品等の資料があまり期待できない、こういった事情がありました。このような遺跡の現状を鑑みまして、2008年は分布調査を中心に行いました。盗掘されておりますので、発掘しなくても墓の形を調べられるという利点があります。それで徹底的な分布調査を行って、どのような形の墓が広がっているか調べたということです。また、盗掘された墓の一部ではクリーニング作業を行っています。さらに、未盗掘墓の存否を探るために試掘調査も行っています(久米・沼本 2009; Numoto and Kume 2009 a, b)。

2 ユーフラテス河流域の墓室型式

前期青銅器時代のユーフラテス河流域の墓室型式は、一般的に大きく六つに分けられています(Cooper 2006)。まずピット墓です。墓室の壁に構造物を持たず、穴を掘って造ったお墓ということですね。次にピトス墓になります。いわゆる甕棺や土器棺ですね。三番目がシャフト墓です。いったん縦坑を掘ってから横穴を掘るタイプのものです。四番目にシスト墓があります。これは墓室の壁に平石を縦に置いて部屋を造るタイプのものです。それからストーン・チェンバー墓です。シスト墓とよく似ておりますが、石を横に積んで壁を作る点が異なります。最後はいわゆる古墳です。墳丘を盛って墓を造るものになります。こういった大きく六つのタイプがユーフラテス河流域の前期青銅器時代では知られています。

3 ワディ・シャップート墓域の墓群の特性

2008年の春と秋に2回調査を行いました。この2回の調査では、ワディ・シャップート墓域の一部を1区から4区の地区に分けて、計33の墓群と151基の墓を記録しています(図2)。この分布調査の成果というのは、見つかった墓群が四つの構成パターンに分かれることがわかった、ということです。一つは、基本的に墳丘墓で構成される墓群(構成1:墳丘墓群)。それから、シスト墓とかストーン・チェンバー墓という石で造ったお墓だけで構成される墓群(構成2:石造墓室墓群)。そして、基本的に墓群の中心にあたる部分にシスト墓ないしストーン・チェンバー墓が配置されて、その周囲にシャフト墓が掘り込まれるもの(構成3:石造墓+シャフト墓群)。最後に、シャフト墓のみで構成される墓群(構成4:シャフト墓群)。こういった大きく四つの構成パターンがあります。以下、それぞれの概要について示します(図3)。

構成1は墳丘墓のみで構成される墓群です(図4)。ワディ・シャップート墓域の北端、ちょうど崖際のところに地元ではテル・シャップートと呼ばれる墳丘墓があります。一基はガーネム・アル=アリからもよく見えるのですけれども、崖の上ってみますと、そのうしろにもう1基、合計2基あるのがわかります。このように墳丘墓だけで構成されるタイプの墓群が一つ定義できます。このような墳丘墓群はこれまでのところこの一地点でしか見られません¹⁾。

構成2はシスト墓やストーン・チェンバー墓といった石造りのお墓だけで構成される墓群です。この構成パターンは第2区でいくつか確認されておりますが、最も状態の良い一地点でクリーニング作業を行っています。ここでは計7つの盗掘坑が確認されておりました。作業しましたところ、一つの盗掘坑は失敗坑だったのですが、その他はすべてお墓の痕跡が確認されました。墓室型式としましては、シスト墓2基、ストーン・チェンバー墓3基(図5)、シストとストーン・チェンバーが折衷された墓1基を確認しております。いずれにしましても、すべて石で造ったお墓だけで構成されるというのがこれらの墓群の特徴となります。

構成3は石造りのお墓とシャフト墓、二つのタイプのお墓で構成されるパターンです。このような墓群は3区と4区で計三つ確認されております。この構成は石造墓とシャフト墓の配置に特徴があります。図6に示しましたように、石造りのお墓は自然丘の丘頂部分やワディの段丘面など比較的高い場所に設けられています。一方、シャフト墓はそこよりもやや低い丘陵やワディの斜面に、石造りのお墓を囲むようにして掘り込まれています。また、石造りのお墓が少数なのに対しまして、シャフト墓は数が多い。このような特徴は確認された三つの墓群すべてで共通しています。

構成4はシャフト墓だけで構成されるパターンです。代表的な例は3区で確認されたものです(図7)。ワディの斜面にシャフト墓が10基設けられています。この点は構成3と類似していますが、それに対応する石造りの墓が高位面に存在しません。この構成パターンは事前調査で確認されたワディ・ダバ墓域と共通するものです。

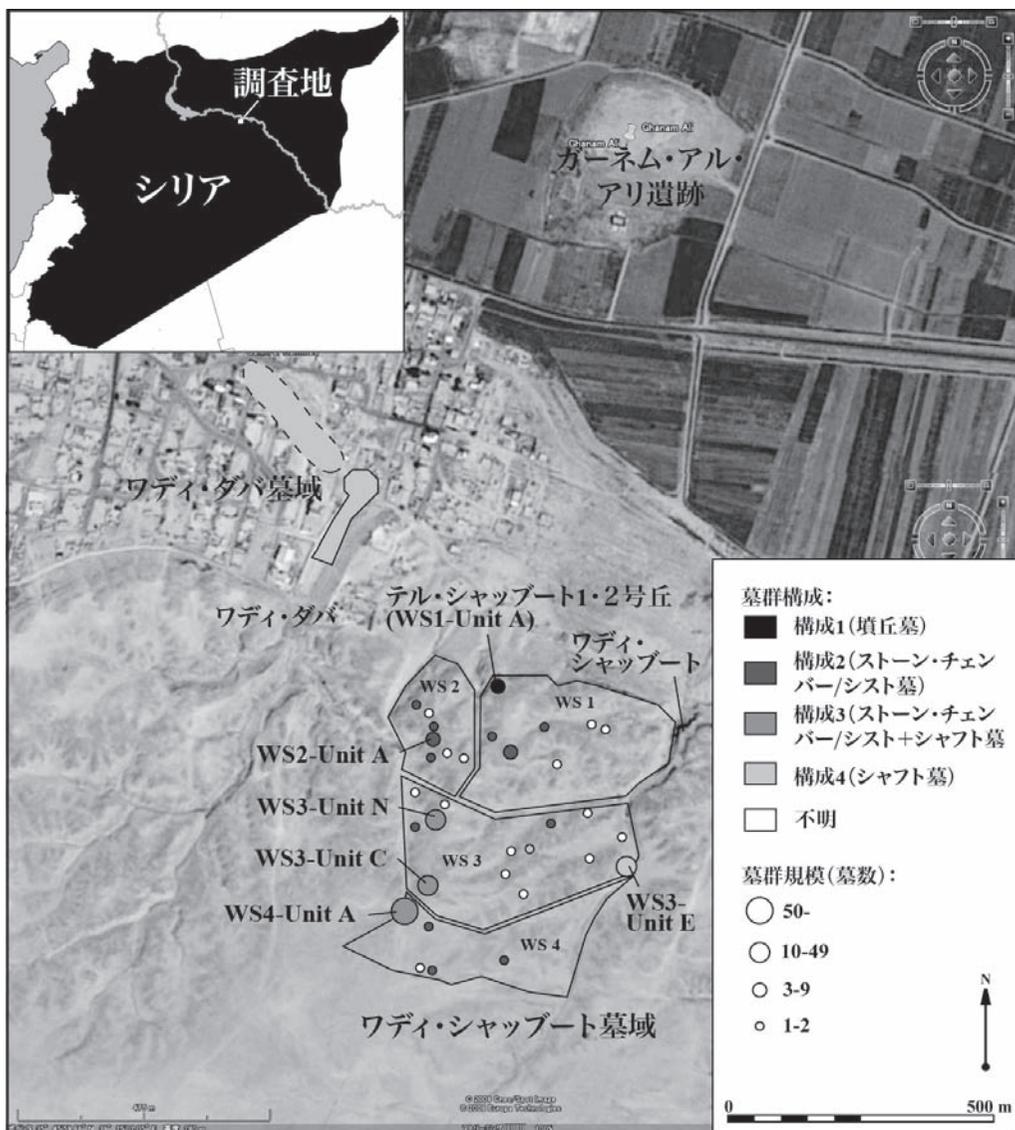


図2 調査地の位置と墓群の分布 (衛星画像は Google Earth より引用)

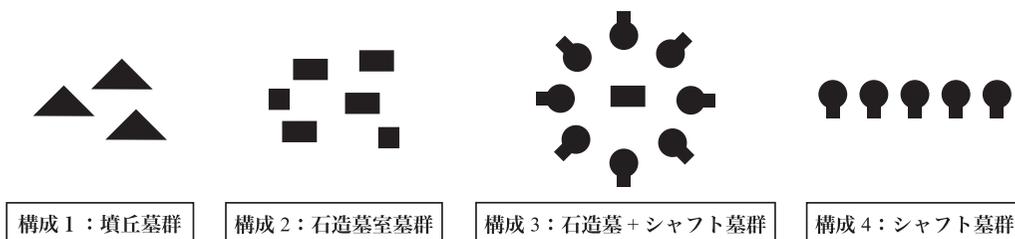


図3 墓群構成パターンの概念図



図4 構成1のテル・シャップート墳丘墓群 (WS1-Unit A). ビシュリ台地突端の崖上に立地する.
写真右奥に見えるテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡を見下ろす絶好の位置にある.



図5 ストーン・チェンバー墓の一例 (WS2-Unit A-6号墓).
構成2の石造墓室墓群はこのような石造りの墓室を有する墓だけで構成されている.



図6 構成3の石造墓室+シャフト墓群 (WS3-Unit N).
写真中人物の足下にストーン・チェンバー墓がある。写真手前の盗掘坑はシャフト墓。



図7 構成4のシャフト墓群 (WS3-Unit E). ワディ底の斜面に計10基のシャフト墓が掘り込まれている。

4 四類型の墓群の意義

このように墓の構成パターンに着目することによって、墓群を四つに分類することができました。それではこの四類型に分かれる意義とは何なのか、ということが問題となります。考察するためには、この四つに分類された墓群の関係、またはそれぞれの墓群の中でのお墓とお墓の関係というのを調べれば良いはずですが、最初に申し上げましたとおり、盗掘墓の分布調査という手法を採用していますので、副葬品ないし人骨のデータがないのです。そのため、これ以上先へは進みづらいというのが今の状況です。ただし、この墓群内・墓群間関係をもし明らかにすることができれば、プロジェクトの目標に少し近づけるのではないかと考えておりました。本日は予備的ですが簡単に考察を加えてみたいと思います。

通常、このような類型が分かれたりしますと、時代がまず違うのではないかと考えます。採集資料にはいくつか年代が確実な土器群が含まれています。たとえば、ユーフラテス赤色帯文土器がその代表的な例です。ただし、この土器群は前期青銅器時代Ⅲ期からⅣA期という約300年間を区切る物差しにすぎません。もう一つはユーフラテス黒色帯文土器で、先ほどの赤色帯文土器より遅れて出現しますが、それでも200年から100年といった区分ができるかどうかというところです。しかも、盗掘で荒らされた場所からの採集資料ですから、個別の墓群やお墓の年代幅を細かく判断するところまではなかなか行きづらい、という現状にあります。そのほか装飾品も出土していますが、紀元前3千年紀後半といった年代を与えることはできても、それ以上の細分化を許す資料ではありません。このように、時期差は手元にある証拠ではアプローチできないというのが実情です。

ただ一つだけ興味深い点は四類型の墓群がそれぞれ固有の立地特性を持っていることです。図

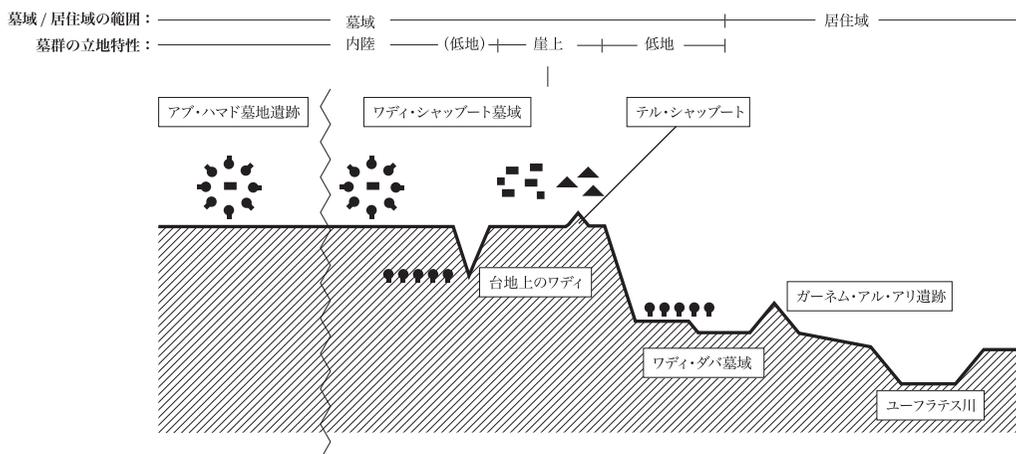


図8 各墓群構成の立地特性（概念図）。崖上（構成1及び2）、低地（構成4）、内陸（構成3）の三種に分けられる。

8にユーフラテス河からビシュリ台地までの概念的な断面図を示しています。ガーネム・アル=アリ遺跡は氾濫原ないし低位面に位置しております。この低位面には同じくワディ・ダバ墓域が存在しています。先ほど示しましたように、この墓群はシャフト墓だけで構成される墓群です(構成4)。続いて、ビシュリ台地北端にあたる崖上に登ると、シャップートと呼ばれる墳丘墓群(構成1)がまずあります。あるいは石造りのお墓だけで造る墓群(構成2)も同じくこの突端部分に位置しています。いずれもユーフラテスの氾濫原やガーネム・アル=アリ遺跡をよく望むことができる地点です。一方、崖上にはワディが網の目のように流れていますが、そのワディ底にはシャフト墓だけで構成される墓群(構成4)が再び存在しています。さらに内陸に入ると、石造墓とシャフト墓で構成される墓群(構成3)が認められるようになります。このパターンの墓群は約1.5キロ程南にあるドイツ隊が調査したアブ・ハマド墓地遺跡(Falb et al. 2005)においても確認されておりますから、ワディ・シャップート遺跡とアブ・ハマド遺跡の間にある未調査地区にも、同様にこの石造墓とシャフト墓で構成される墓群が広がっている可能性があります。

このようにそれぞれの墓群は固有の立地特性を有しています。それは崖上型(構成1及び2)、低地型(構成4)、内陸型(構成3)と称することのできるものです。定義された四類型の墓群がそれぞれ個別の景観を占有している、このことが墓群間の関係を考察するうえで一つのきっかけとなるかも知れません。

おわりに

最後に今日の話をもとめます。まず一つ申し上げられますのは、墓の構成パターンに着目すると、調査地の墓群は四つの類型に分類できるということです。それでは、その四類型の墓群にどのような意義があるのかということにつきましては、年代差そのほか現時点では申し上げることができません。ただ少なくとも、この四類型の墓群は立地という面でそれぞれ特性を持っていて周囲の景観と密接にかかわっている、このことだけは言えると思います。

今後の課題として考えておりますのは、まず、より多様な証拠を集めることかと思えます。分布調査範囲を広げる、あるいは墳丘墓等の発掘調査を行うということが挙げられます。次に、より状態の良い墓の証拠を探るということで、未盗掘墓を何とかして探しあてたいということです。ただ、これはやはり偶発的な条件に左右されます。そこで、同じ前期青銅器時代ですでに報告されているほかの墓地遺跡の成果から何かモデルを作れないかと考えておまして、今後は文献研究をもう少し進めていく必要があります。それから最後に、このプロジェクトのほかの先生がたの研究班の成果との比較をやっていくということがあるかと思えます。たとえば先ほど大沼先生からお話がありましたけれども、ガーネム・アル=アリ遺跡には集落内に墓域があるということがわかってきました(本書所収の大沼報告)。それから、藤井先生が調査されているビシュリ山北麓のケルン墓群ですね(本書所収の藤井報告)。若干、時代は新しく中期青銅器時代になる可能性があるということでしたけれども、たとえばわたしたちが調査しているユーフラテス河沿い

の墓を造った前期青銅器時代の人々が、はたしてその後、ビシュリ山地に移動してケルン墓を造るようになったのか。このようなプロジェクト内のほかの調査成果との比較をやっていくことが重要になるかと思えます。こういった三つのことが、わたしたちが今後できることなのではと思っています。以上で発表を終わります。どうもありがとうございました。

註

- 1) テル・シャップート墳丘墓群の発掘調査は、本発表後の2009年春に実施された。詳細については Numoto and Kume (in press)を参照。

引用文献

- Cooper, L.(2006)*Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York and London: Routledge.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila (2005) *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücken : Saarbrücker Druckerei & Verlag.
- Tsuneki, A.(2008) A short history of Ganam al-Ali village. *Al-Rafidan* 29 : 184-190.
- Numoto, H, and S. Kume (2009a) Cleaning and survey of the Early Bronze Age hilltop tombs near Tell Ghanem al'Ali. *Al-Rafidan* 30 : 172-180.
- Numoto, H, and S. Kume (2009b) Archaeological survey of the Early Bronze Age off-site tombs near Tell Ghanem al'Ali. *Al-Rafidan* 30 : 193-198.
- Numoto, H, and S. Kume (in press) Soundings of hilltop burial mounds near Tell Ghanem Al-'Ali. *Al-Rafidan* 31.
- Porter, A.(2007) The ceramic assemblages of the third millennium in the Euphrates region. In : *Céramique de l'âge du bronze en Syrie, II : L'Euphrate et la région de Jézireh*, edited by M. al-Maqdissi, V. Matoïan and C. Nicolle, pp. 3-22. Beirut: Institut français de Proche-Orient.
- Pruss, A.(2004) Remarks on the chronological periods. In S. Anastasio, M. Lebeau and M. Sauvage (eds.) *Atlas of Preclassical Upper Mesopotamia*. pp. 7-27. Subartu 13. Turnhout: Brepols.
- 久米正吾・沼本宏俊 (2009) 「ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』14 : 11-19.

【質疑応答】

司会 (常木) どうもありがとうございました。非常に面白い分析をされていて、とても面白い発表をしてくださったのですが、結論はすごく禁欲的に、言われなところ、久米さんらしいのでしょうか。何ですか、考古学者だとすぐこのようなを見ると、普通は階層差だと感じてしまうのですけれども、もちろんそれは分かりませんが、そのようなことも考えておられるのですか。

久米 もちろん可能性としては階層差もあると思うのですが、現状の証拠では何も言えないと思いました。

前川 ちょっとでも思ってもらえることは、何か一つ、リップサービスをしていただきたいの

ですが。

久米 墓群の構成パターンが四つに分かれるというのは言えますけれども・・・すみません、それ以上は、ちょっと申し上げられません。

藤井 聞いたことは、忘れてあげるから。

前川 見事なタイポロジーが出てきたわけですから、やはりもうちょっと。

藤井 当然いろいろなことを考えていると思うのですね。それをぜひ、われわれの刺激にもなるので。

久米 ものすごく単純に申し上げますと、この崖上タイプと言っているお墓のあるところというのは、ものすごく眺めがいいのですね。ガーネム・アル＝ア리가、ものすごくよく見える。このような場所にお墓を造るのには、それなりの意義があるのでは……。すみません。そのような単純なことしか考えていないかもしれないです。

大沼 ユーフラテス流域におけるこの墓群の特徴とかをお話しただけならと思いますが。

久米 少しだけ調べたのですけれども、ユーフラテスのタブカ・ダムのところにはターウィーという遺跡があります。前期青銅器時代の遺跡です。ここでもやはり集落の周辺に墓域が複数認められています。このようなユーフラテス河沿いの前期青銅器時代の集落と墓域の関係について報告書から丹念に追っていくと、集落と墓地の高低差も含めましてもう少し何かわかるかも知れませんが、ただ、今は深くお話しできるほど調べていません。

大沼 それでは系統で何とかということですね。

久米 まだ何とも。

石田 結局、全部前期青銅器時代だというのは、確実になっているのでしょうか。

久米 基本的にそうだと思います。少なくともわたしたちが調査したところで拾えている資料というのは、紀元前3千年紀の中ごろから終わりまでに収まります。

石田 その山型のマウンドがある墓も掘ってあるんですか？

久米 マウンドはまだ掘ってなくて、採集資料もありませんので、前期青銅器時代かどうか確実ではないですけれども、ただ、おそらく前期青銅器時代と考えています。

西秋 全部盗掘されていたということですが、お墓のサイズはどのようなのですか。階層差だとすると、高いところにあるお墓は大きいとか、谷底は小さいとか、そのような違いはあるのですか。

久米 墳丘墓を除いて多分ないと思いますね。シャフト墓は入り口しか見ていないので、中がどのぐらいの広さになっているのかというのはちょっと分からないのですけれども、石造墓の場合でしたらおよそ2×1メートルというのが相場になっていまして、ほとんどサイズの違いはないですね。

藤井 構成3（石造墓+シャフト墓群）というのは、模式的に書いてあるわけで、実際には真ん中にあったり、はしっこに1件あったりすると言われてはいますが、いずれにせよ、直線的に並ぶわけではないのですか。

久米 そのような並び方の規則性は、あまりないと思います。

藤井 それはずいぶんビシュリのケルン墓と違うところで、ビシュリでは一列にずっと並ぶんだよね。

司会 どうもありがとうございました。すみません、残りはあとでディスカッションのときにお願いいたします。とても面白い問題が、たくさん出てきました。ありがとうございました。

ユーフラテス河中流域ルメイラ周辺の前期青銅器時代墓地

石田 恵子

はじめに

古代オリエント博物館は開館以来シリアの発掘調査を継続してきた。最初の調査対象であったルメイラ、ミシオルフェ村の遺跡は、ユーフラテス河にタブカ・ダムを建設することにより水没のおそれが生じた遺跡の発掘調査をユネスコが世界に呼びかけて始まった地域にある。我々の参加は遅れたため、水没予定地区で最も上流の遺跡を選び、シリア政府の遺跡地図のユーフラテス河東岸19号遺跡（ミシオルフェ村）、20号遺跡（ルメイラ村）を選択した。（図1）

この地域の調査を1974年から1980年まで続けたが、青銅器時代から鉄器時代のテルやローマ時代の砦、そしてA、B、C、D地区からいくつもの墓が発見された。狭い範囲に前期青銅器時代からビザンツ時代までの驚くほど多様な墓のあることが調査の結果、判明した。

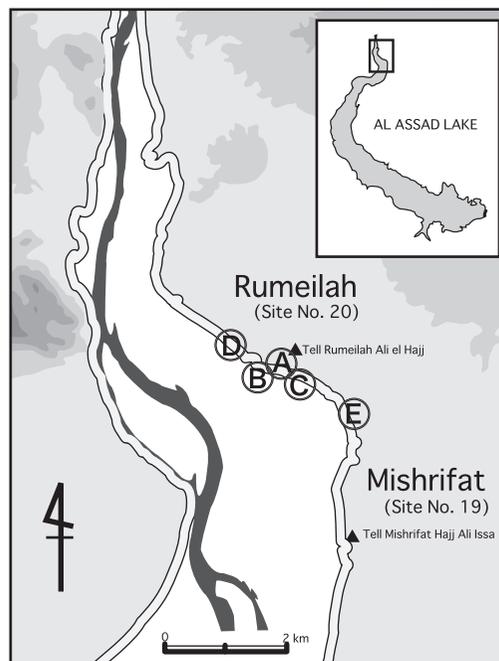


図 1

1 前期青銅器時代の墓

今回のテーマである前期青銅器時代の土壙墓とドルメン墓は、ユーフラテス河の東岸のルメイラ村D地区(図2)にあり、おもに1976年に調査された。発掘以来長い年月を経ているものの、正式に報告されたのは、1979年に調査されたD地区21号墓の1基のみである(Wakita et al. 2005: 1-13)。ここでは1976年の未報告の調査墓について、概略を紹介する。

ルメイラ村のユーフラテス河東岸の斜面に大きな石の散布が見受けられた(図2)。そこにはすでにいくつも盗掘坑があり土器なども見つかったため、このような大石を伴う墓があると推測された。調査を行った墓は、D-4号墓(図3)、D-6号墓(図4)、D-7号墓(図5)、D-8号墓、D-9号墓、D-10号墓、D-11号墓、D-12号墓、D-13号墓、D-14号墓、D-15号墓の11基の土壙墓とドルメンである。

(1) 土壙墓

これらの墓の大半は大きめの石を目印に下への穴があり、斜面の奥に向けて墓壙がふくらむという断面が長靴状の構造をしている。大きな石は墓壙の封をする蓋石というほど大きくなく、墓石のような目印であったと思われる。斜面を少し掘り下げてから水平に掘るだけで長靴のような



図2 D地区



図3 D-4号墓



図4 D-6号墓



図5 D-7号墓

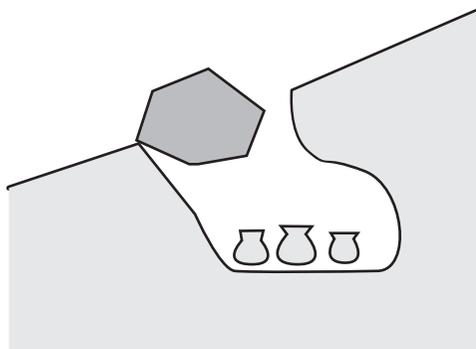


図6 土壙墓模式図

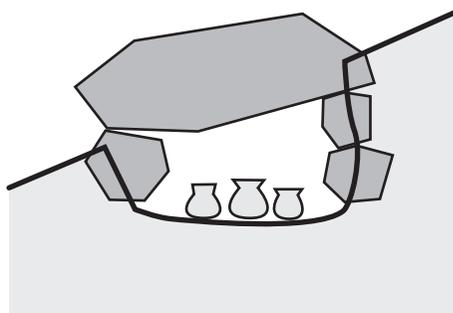


図7 ドルメン模式図

形に掘れるので楽であったことだろう。それゆえに長靴形の墓壙の爪先にあたる部分は河と反対側の河岸側へと向いている(図6模式図)。テルの発掘の合間を縫って、当時筑波大学の増田精一教授が調査の指揮を行った。墓が密集していたため、次々に掘っては図面を取るという慌ただしい調査であった(増田1986)。

1979年の調査で報告済みのD-21号墓はこの長靴形の土壙墓の例外的な大型墓であった(図8)。地上に標識となる大石は地表になく、墓壙の封をする細長い巨大板石が垂直に埋置されていた。他の長径1.5m程度の土壙墓と比べると長径6mで空間的にはふつうの土壙墓の空間を約60倍



図8 D-21号墓 平断面図

有する墓であった。墓壙の大きさと、もう一人の被葬者が想定されていたらしい板石配置などから、追葬を意識した家族墓であったと思われる。遺物は土器では他の土壌墓群と大きな違いはなかったが副葬された土器は13点もあり、かつ女性被葬者の装身具の多さが顕著であった。被葬者は多少富裕であったことが推測される。

(2) ドルメン

1976年の調査の2基(D-6号墓とD-9号墓)はドルメン(支石墓)であった。本例は下部の支える石の上に大石が置かれているが、明確な墓室構造はなく墓壙は浅いピットにすぎない(図7模式図)。これらの例がいわゆるドルメンの定義に該当するかどうかには異論があるかもしれない

が、D地区で最大の石が置かれ、碁盤状のドルメンと解釈されている（増田1986）。他の土壙墓と同様に内部に土器が納められていた。このドルメンは巨大な石を置く以上、大石は立派な墓標であり、かつ盗掘を防ぐ墓の封印でもある。他の土壙墓のように長靴状の土壙よりは大石がおおう範囲内に埋葬する方が安全と考えられたことだろう。それゆえに浅い土壙でよかったのかもしれない。

ドルメンはヨーロッパや朝鮮半島にもあり、世界各地にドルメンは見受けられる。1976年D地区の場合は土壙墓と共存しており、人骨の出土例はなかったが、墓の規模としては長径3mほどで両者とも個人墓であったろう。大きめの石が目印だけの長靴状の土壙墓と巨大な蓋石のドルメン墓とは構造的な違いがあるが、置かれた石がすでに持ち去られていることも想定すべきであろう。ドルメンからの出土遺物はそれほど多くなく、前期青銅器時代の特定な時期を比定することはできなかったが、土壙墓出土土器とあまり違いはなく、ほぼ同時期に両者が隣接して存在する事実がある。

2 土壙墓・ドルメンの立地と造営

土壙墓もドルメン墓も造営するには大石が必要である。あのような大石をどこからどのように持ってきたのだろうか。埋葬の都度どこからか河川を使って大石を運び、斜面を持ち上げたと推測される。河岸斜面は河川から最も手近な場所であった。ちなみに大石をならべたビザンツ時代のストーンサークル墓も河岸頂部に築かれている。時期差があるため、河岸斜面の（前期青銅器時代の墓の）石でストーンサークルを築いた可能性も否定はできない。見晴らしの良さも墓地の立地を選択する基準であったろうか。ユーフラテス川西岸にも墓はあるが、ルメイラ村は東の川岸斜面にあるため、川越しに日没が見え、仏教的発想で言えば西方浄土を望むといえようか。

長靴状の土壙墓は斜面の土の流失を意識して、墓壙を斜面からもっとも奥まった場所に設け、かつ斜面の下側近くに石が置かれているのも「土留め」の意図を汲み取ることができる。墓の構造や被葬者がわかっていた当時の人々にとっては盗掘者は想定外であったろう。一方、ドルメン墓はより大きな石で蓋をするため、石の持ち上げにはより大勢の人々の力が必要となったはずである。規模は変わらないが目立つという点からも、ドルメンは単なる土壙墓よりは有力者の墓であったと思われる。

D地区の河岸斜面（図2）に散在している大きな石のほとんどが土壙墓あるいはドルメン墓であると思われる。おそらく村人は石を取りにいき、石をどかせるとすぐ穴があき、その中から土器が出てくることを経験的に知ったのであろう。現代の盗掘穴がすでに何ヶ所も見受けられた。

3 前期青銅器時代の墓研究

青銅器時代の北シリアの墓についてはかなり研究が進められている。エリザベス・カーター及

びアンドレア・パーカー両氏の1995年の研究書(Carter and Parker 1995)によると、前3000年紀後半の北シリアと南アナトリアの葬制に焦点を絞り、土器分布と墓のタイプを比較検討する試みであった。土器形式が文化グループと対応しているとするなら、土器分布と葬制が重なるかどうかを検証したのである。しかし、様々な土器グループの混在は、なかなかうまくそれを説明しない。そして、葬制や土器、金属や他の副葬品の多様性は、前3000年紀後半の社会の多民族性を表しているのではなからうかとまとめている。

彼女らの墓の分類は

- 1 土壙墓 (Pit burials)
- 2 納骨土壙墓 (Ossuary)
- 3 竪穴墓 (Cists)
- 4 甕棺墓 (Burials in ceramic containers)
- 5 横穴墓 (Gallery graves : ditch graves or dolmens)
- 6 多室複合土壙墓 (Nodal shaft graves)
- 7 羨道付槨室墓 (Shaft tombs)

と墓形式を7種に分類し、墓の遺跡分布図が掲載されている(Carter and Parker, 1995 : Fig. 14.2)。ルメイラの土壙墓はこれらの7に相当し、ドルメンは5に相当するのであろう。

またリサ・クーパーは、前期青銅器時代のユーフラテス河谷北部の墓制について分類し、論及している(Cooper 2006 : 202-256)。彼女は以下のように分類した。

- 1 土壙墓 (Pit burials)
- 2 竪穴板石墓 (Cist graves)
- 3 甕棺墓 (Pithos burials)
- 4 石室墓 (Stone chamber graves)
- 5 竪穴羨道付横穴墓 (Earth or Rock-cut shaft graves)
- 6 大型石造羨道付槨室墓 (Monumental stone-built shaft and chamber tombs)
- 7 大型高塚墳 (Monumental tumuli)

ルメイラの土壙墓は5 竪穴羨道付横穴墓 (Earth-cut shaft grave) に相当すると思われるが、ドルメンについての言及はない。

リサ・クーパーは遺跡内と遺跡外の墓の分布についても考察している。遺跡外の墓の立地について平地に作られる墓もあるが、大半は斜面に掘り込んで作られていると述べている。そのため、墓の長軸は斜面の等高線と直角になるとあり、本遺跡例とも一致する。掘る労力が節約されるという点は演者と意見の一致をみる。彼女は斜面の立地は宗教的、社会的な意味があるとも述べている。また、竪穴羨道付横穴墓 (Earth or Rock-cut shaft graves) の分布は北シリアのユーフラテス河谷南部に限定されるとの指摘があり、その範囲にルメイラ村は含まれている(Cooper 2006 : 242-243)。

4 出土遺物

墓に人骨があったのはD-21号墓のみであった。副葬品としては口縁直下がくびれるのみの広口の丸い厚手土器と注口のつく広口の厚手土器、これに薄手の土器が共存しているという特徴がある。薄手の土器は薄く削られ、磨研されて金属器のように仕上げられ、これに赤色水平帯状文様の加えられたりする紀元前3000年紀半ばのユーフラテス・ファイン・ウエアと呼ばれる土器が混ざる。

青銅製品には目釘用の3つ穴のある短剣の刃、丸い頭部をもつピンが出土し、D-21号墓からは青銅の牛形や壺形のペンダントもあった。他に、赤、白、黒の石製白玉が出土し、これらを組み合わせた首飾りが基本アイテムであったことがわかる。他には貝のビーズ、アンチモン製ビーズ、骨製の筒がD-21号墓から出ている。

前期青銅器時代の墓は20号遺跡（ルメイラ村）のD地区に非常に集中していたが、1980年にミシオルフェ村（19号遺跡）の付近に、前期青銅器時代の墓と思われる土器の集積だけが発見され、円筒印章も出土し、ミシオルフェ付近にも前期青銅器時代の墓があったと判明した。20号遺跡D地区の遺構や遺物の詳細については古代オリエント博物館紀要XXVIII巻に掲載予定である。

5 調査地区の遺跡（墓）とその時期

このユーフラテス河上流の20号・19号遺跡の調査を1974年から1980年まで続けたが、青銅器時代から鉄器時代のテルやローマ時代の砦、そしてA、B、C、D地区からいくつもの墓が発見された。狭い範囲に驚くほど多様な墓のあることが判明した。時期と墓のタイプを書き出してみると、必ずしも墓と居住遺跡の時期が整合しないことも判明している。近い時期でも異なるタイプの墓があることも判明した。地形図で墓の立地を見ると、墓のタイプにより集中する地区があることや、ストーンサークル墓が比較的広く分布することも、判明している。（図1）

（墓）

ドルメン墓・土壙墓 甕埋葬（幼児骨）	前期青銅器時代後半 テル・ルメイラ住居内 VI・VII層（中期青銅器時代）に出土	D地区	多数
◎地下墓	ローマ時代	ミシオルフェ村	1基
◎横穴墓	ローマ・ビザンツ時代	E地区	2基
◎ストーンサークル墓	ビザンツ時代	B・C・D地区	3基
ストーンサークル墓	ルメイラ・ミシオルフェ村		20基

(居住遺跡)

テル・ルメイラ	(前期) 中期青銅器時代～初期鉄器時代集落
◎テル・ミシオルフェ	ローマ時代の城砦
石造列柱建築	ローマ時代建造物 ミシオルフェ村

注：◎は既報告（江上波夫他 1979）

このように多様な墓が営まれていたことがわかったが、テル・ルメイラの時期に合致する墓は見つかっていない。テル・ルメイラの住人の墓は一体どこなのかという問題が積み残されている。テル・ルメイラの遺物の再検討により、前期青銅器時代がわずかにあったかもしれないという可能性が出てきている。またこれだけ多岐にわたる墓のバラエティがこの地域に混在するということは、この地域が墓地にふさわしい場所だったのかも一考すべき点であるだろう。

おわりに

北シリアのユーフラテス河谷の調査は進んでおり、データが集積されている。我々の調査成果もその一翼を担うべきものである。前期青銅器時代の墓は多数報告されており、墓のタイプや出土品から何が読み取れるかに、人々の関心が集まっている。ルメイラ村の前期青銅器時代の墓の被葬者達の居住地はどこなのかという問題、土壙墓の型式や出土品は細分類されうるのかなどの課題はさらなる検討の余地を残している。

引用文献

- 江上波夫他 (1979) 『ルメイラ、ミシオルフェ付近のヘレニズム期の遺跡調査概報 (1974-1978)』 古代オリエント博物館シリア考古学調査団報告書 I.
- 増田精一 (1986) 「オリエントの支石墓」 『オリエント古代文明の源流』 六興出版.
- Carter, E. and A. Parker (1995) Pots, people and the archaeology of death in northern Syria and southern Anatolia in the latter half of the third millennium BC. In: *The Archaeology of Death in the Ancient Near East* edited by S. Campbell and A. Green, pp. 96-116. Oxford: Oxbow Books.
- Wakita, Sh., K. Ishida and H. Wada (2005) "A Burial in the Middle Euphrates in Syria". *Bulletin of the Ancient Orient Museum* XXV: 1-13.
- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York and London: Routledge.
- Ishida, K., T. Iwasaki, and Sh. Wakita, (2008) "Early Bronze Age Graves around Tell Rumeilah in North Syria". *Bulletin of Ancient Orient Museum* XXVIII: 65-90.

【質疑応答】

司会 (常木) どうもありがとうございました。先ほどの久米さんのご発表とも関連する、興味深い報告でした。ご質問のある方、時間が押していますので、お一人だけお願いします。

藤井 このルメイラの資料は、今、整理して報告書作成に入っておられるということですが、来年が特定領域研究の最終年度ですので、それまでに報告書が出て、ガーネム・アル＝アリなどの資料と比較できればありがたいですね。

石田 見直し始めたら、これは早くやらないとだめだなと思いました。お墓だけまとめて古代オリエント博物館紀要に発表します。

藤井 特に沼本さんと久米君のところが、ああいっただ墓を掘っているのです、ルメイラ出土資料との比較対照ができるようになれば、非常に有益ではないかと思えます。

石田 そうですね。短期間に隊長自らが次から次へと掘ってしまったところなので、本当に分からないことが多いです。

藤井 久米君のところはほとんど盗掘で、遺物があまり出ないじゃない。ここはわりと出てるじゃないですか。

石田 そうですね。

常木 ユーフラテスバンデッドウエアやユーフラテス・ブラック・ウエアなどは集落遺跡であまり出土しない代わりにこのようなお墓がたくさん出てくるので、なかなか貴重な資料ですね。

石田 見たい方は博物館にありますので、いらして下さい。

常木 ありがとうございます。

ユーフラテス川中流域の古代遺跡にみる建築組積

岡田 保良

はじめに

おはようございます。岡田でございます。今日ご紹介するスライドは、全部で24点、お手元にあるのと同じものなので、お見せしながらお話をしたいと思います。テーマは、「ユーフラテス河中流域の古代遺跡にみる建築組積」ということで、主に2008年度に現地に参加して、若干観察した成果を中心に話します。

まず、研究課題の簡単な目的のほうを紹介しておきます。もちろんメインのテーマはユーフラテス中流域、ビシュリ周辺の建築遺構を、より広域の遺跡の建築技法と比較して、その地域性ないしは技術的伝統を明らかにしようということになります。対象地域としては、ちょっと大ぶろしきを広げまして、地中海域からイランまでということ。2008年度はシリアだけでなく、イランの主にサーサーン朝の組積法を勉強する機会を得ることができました。対象とする年代は、古いところからイスラムの文化が浸透するぐらいまでの間、それぐらいを視野に入れて遺跡を見ております。調査の要点は、石ないしはレンガを使った建築が、どのような技術・技法で、主に壁ないしは上部構造を造っているかという、そのような視点から、ユーフラテス地域ないしはその周辺地域の建築を比較するというような方法をとっております。

2008年度の研究組織としましては、わたしのほかに、イスラム建築の深見奈緒子さん、ギリシャ・ヘレニズムの建築を専門としている吉武隆一さん、イスラムの都市を専門としている新井勇治さん、ローマの古代遺跡を研究しておられる辻村純代さん、イラン・中央アジアの考古学を専門としていらっしゃる山内和也さんというような組織でございますが、2008年度は、シリアには吉武さんと、そしてイランには深見さんと共同で調査に赴いております。

本日の報告内容ですけれども、建築を中心にと申し上げました。準備の関係もありますし、また新しい情報ということもありますので、若干、断片的ではあるのですが、一つは皆さんご存じの、現在発掘が行われておりますガーネム・アル＝アリの近くにあるテル・ハマディーーンの測量を行ったことの報告です。そしてその折にガーネム・アル＝アリのすでに発掘された遺構を私なりに見させてもらいまして、そこから得られる知見というものをご紹介したい。それから同時に、沼本さんが発掘を担当されたと聞いておりますが、ガーネム・アル＝アリの段丘上に展開するお墓の遺構の石積み、あるいは墓の構造の特徴について、わたしはちょっと思い出したことがありまして、もう20年も前のイラクでの調査を少し比較の意味で紹介したい。そして最後

に少し時代を飛びますが、その折に近傍で観察しました少し時代の下る遺構についてコメントをしたいというように思っています。

1 テル・ハマディーン遺跡（前期青銅器時代）の測量

まず最初にテル・ハマディーンですが、実はこの測量の作業自体は半日ほどで終わっています。といいますのも、共同研究員の吉武さんは、現在ギリシャのテッサロニキ大学の測量学の研究室に留学中で、その研究室の同僚を助っ人として招へい致しまして、トータルステーションは、ダマスカスのライカのショップでレンタルして測量を行ったのですが、さすがプロですね、現場作業をできるだけ短く、半日ほどで終わっております。

図1が成果物のコンタマップです。テルの南北は200メートルちょうどぐらいの長さになります。西側は少し急な傾斜で、おそらくユーフラテス河からの攻撃にはなるのですが、比高が7メートルぐらいになります。

ガーネム・アル＝アリなどは、テルの表面にかなりおびただしい壁の跡などが観察されるわけですが、ハマディーンのほうではほとんど見られないですね。そして丘頂部の周辺に直径も深さも2メートルぐらいの盗掘坑がたくさん開いているのですけれども、それでも遺物がほとんど出てこないというのが現況なのですね。遺構の露出が少ない、遺物が少ない、はたしてここに本当に集落があったのだろうかという疑問を残したまま測量は終わっています。ガーネム・アル＝アリと同じように、丘頂部にはイスラムの墓が集中して存在していますが、これに特筆するべきことはありません。

2 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡（前期青銅器時代）の建築

ガーネム・アル＝アリの発掘後の遺構の状況を観察してまいりましたが、特にスクエア1と名づけられているトレンチでの観察を、少しご紹介したいと思います（図2）。

ここでは、スクエアの東側のほうに、日乾煉瓦の壁が少し立ちあがっています。そして西側のほうは主として石積みの壁が見えています。その石積みのほうを中心に見ると、東西方向に通っている石のラインが一番しっかり残っているように見受けられました。この遺構で問題になるのは日乾煉瓦の壁とこの石積みの壁がどのような関係にあるか、これがまだよく分からないのですけれども、遺構を解釈するうえでは大事な点かと思えます。それから、同じ石の壁といっても大振りの石を使うところ、ややそれより小さいところ、それからかなり小さいものをたくさん積み上げているところというように、石の壁の表情も違ったものがあります。それから何か所か、おそらく出入口だったろうというような部分が見られます。そこでは扉の出入り口の敷居かと思うような石が見られます。

このように小さな、ほんの10メートル四方の、まだ1メートルも掘れていないぐらいのトレ

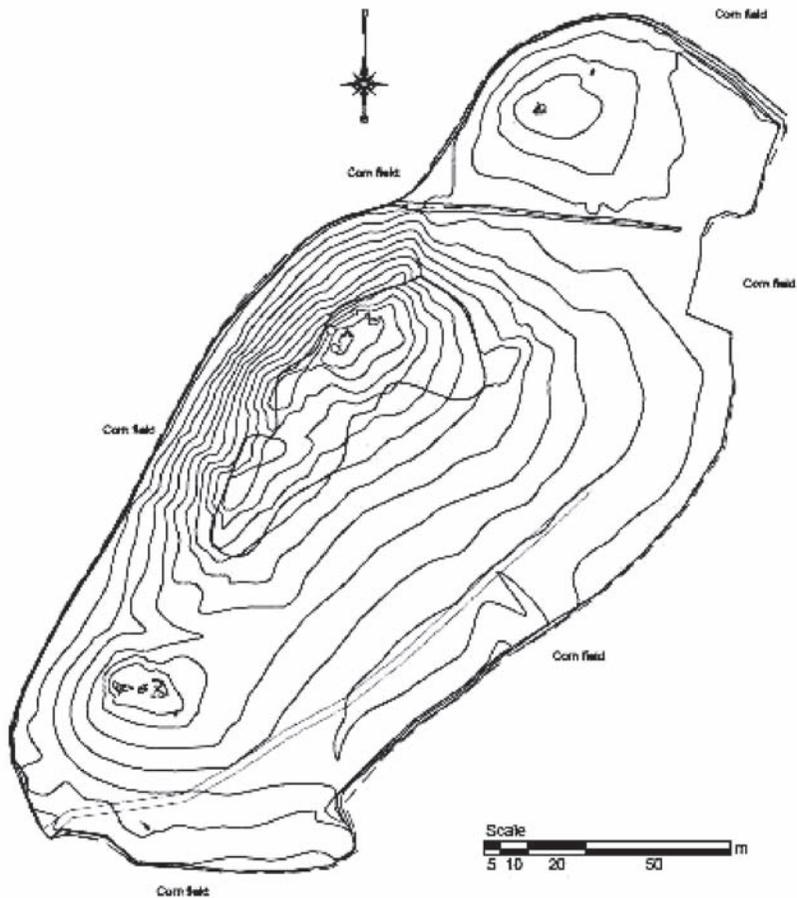


図1 テル・ハマディーン遺跡の測量図

ンチですけれども、考えさせられる点はいくつかあります。まず、建材として、礫と石と日乾煉瓦が併用されている。併用という言葉が当たっているかどうか、年代差があれば併用という言葉は当たらないこととなりますが…。年代差があるからその材料、建材を違えているのか、あるいは同じ場所に住宅を営んだ集団の違いといえますか、異なる建築伝統をもつグループが存在していたのか、そのようなことを考えさせられます。それから煉瓦のサイズは、なかなか正確には測りづらいものですが、大きさは大体45センチから50センチ、小口が30センチ、厚さ8、9センチというところで、長方形の煉瓦ですね。平面のサイズに比べるとやや薄いかなというものです。テルの南西のほうに最近壊れたばかりの住居があって、その日乾煉瓦を見ると、52センチ×23センチ、厚さ7.5センチという、ずいぶん細長くて薄いレンガが使われています。近代の同じ日乾煉瓦、おそらく素材としてはあまり変わらないと思いますが、そのサイズ・規格というの



図2 テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡スクエア1の建築物

は、ずいぶん違うのかなということがあります。色合いについては、オレンジ色ないしは灰褐色という二通りに見えます。熱を加えているわけではないので、どのような理由でこのような色の違いがあるのかというのは、まだそこまでは分かりませんが、とにかくそのような違いが見られます。

それから、石壁のほうの礫の種類ですけれども、おそらく、分析したわけではありませんけれども、ルサファやハラヴィーエで見られる石膏岩が主体で、近傍から採掘されるものということになります。それから、壁を造るにあたっての積み方ですが、レンガは長手に1列に積んでいく。大型の礫については小口積みなのです。つまり、石の長い方向を壁のラインに対して直交させる、つまりレンガと全く逆の積み方を、石のほうではする。これは単に石とレンガによって違いがあるだけではなくて、その長手、小口の使い方に差があるということは、やはりそこにその壁を積んだ集団の違いも認められているのではないかと。そのほか、開口部や造作について観察すれば、ある程度の平面プランの解釈が可能なヒントが隠されているなということがありました。それから、昨年度のレポートの中で、礫をレンガ壁の基礎にしているというような技術があるのですが、わたしが見た限りでは、それははっきりと観察できることはありませんでした。どうもレンガの壁はレンガだけで作っているように見えたのです。石の列の上にレンガが載っていたかどうかというような証拠も見られませんでした。その辺はもう掘り上げて1年ぐらい経ったところを見たので、もっとフレッシュな状態で見れば違っていたのかも知れません。

3 シャップート墓地遺跡（前期青銅器時代）の墓の構造

それから、お墓のほうなのですけれども、これは沼本さんが担当してシャップートというように名前を聞いておりますが、石室墓とシスト墓といわれているものでは石の積み方が違います。石室墓のほうは石を水平に重ねていくわけですが、このシスト墓のほうは、石を立てて箱型に積んでいく。このシスト墓のほうは、ちょっとほかに比べる例を知らないのですけれども、実は以前、20年以上も前にイラクのハディーサの地域で、これも実は沼本さんが発掘したお墓なのですけれども、オウシーアという遺跡のエリアBというところで石室墓を発掘しています。ここのすぐ近くにはイラク隊が掘った初期王朝のお墓があります。特に注目したいのは、石室墓のまわりにおそらく円形に墓域を隔する壁がめぐってあったであろうということです。墓域を円形で隔するというのは、ハディーサのこの地域ではごく普通に2000年期の前半から後半にかけてたくさん事例がある。ただ、この石室墓はまさに先ほどのシャップートの石室墓と造りが非常によく似ているというように思うので、今日紹介させていただくものです。このハディーサの地域というのはシリア-イラク国境から100キロぐらいイラクに入ったところにありますが、そのあたりとこの墓の作りに共通するところがあるというのは、一つ記憶しておいていただきたい。ただ、この地域では日乾煉瓦を使った、特に上部構造ではレンガを立てて、三角屋根を作っていくというようなものがありますから、この点はビシュリ地域とは異なるところだと思われま

4 イスラム期の建築

あとは、サーサーン朝の影響がみられるヘラクラです（図3）。ラッカの西郊外にあるアッパース朝のハールーン・アル＝ラシードが作ったと言われるモニュメントの遺跡です。100メートル四方のほぼ正方形、隅に方形のやぐらを伴う基壇状の遺構を中心とし、直径500メートルほどの円を描く周壁があります。機能がはっきりしないためモニュメントというように言われています。中心施設には、4面にイワーンと呼んでいいような部屋がついています。その部屋は実にサーサーン朝的な、扁平にしか復元できないような石積みの半ドームの痕跡があります。どう見てもサーサーン朝から伝わった技術だと思われま

すけれども、かなり無理があるようで、長持ちしなかったようです。また、ハラヴィーエの城の中には、逆にですね、ドーム組積の根元にあたるビザンツ風ペンデントィヴを煉瓦で積んだ形跡があって、これは実はビザンツ後のペンデントィヴの、もしかしたら一番東に近い例になるのではないかと思います（図4）。

要は、ラッカあるいはデルゾールあたりをはさんで、サーサーン朝の技術とビザンツの組積術が交錯しているという、まだわずかではありますがそのような証拠となる遺構であります。

以上、断片的な話で恐縮ですが、以上でわたしの話を終わります。ありがとうございました。



図3 ヘラクラ遺跡、サーサーン朝風石積みイワーン



図4 ハラヴィーエ城内、ペンデンティヴの痕跡

【質疑応答】

司会（藤井） では、時間も押していますので、一つか二つだけご質問、コメントがあれば承ります。いかがでしょうか。ございませんか。

では、わたしのほうから。先ほど、レンガは長手積みだが、石のほうは小口積みとのお話がありました。ただし石といっても、切り石で四角に切ってはいないので、それを数段立ち上げようとすると、小口にせざるをえないということで、小口積みは、むしろあのような石の場合は仕方ないかなというように思いますが。

岡田 ただ、同じ集団なら、煉瓦も小口に積むのではないかと思います。

司会（藤井） どうもありがとうございました。また、質問等ありましたら最後に総合討論のところで承りたいと思います。

紀元前 3 千年紀の出土植物

丹野 研一

今日は、「紀元前 3 千年紀の出土植物」というタイトルでお話をします。といっても紀元前 3 千年紀だけに限って話をするというのはちょっと無理なので、青銅器時代とその前後の時代を含めた植物報告のレビューをした、というような話をいたしたいと思います。地域としては、ユーフラテス中流域とハブールの流域が中心となります。

まずこのテーマをお話しするに至ったいきさつについて少しお話します。これまで植物について、とくに農業についての話は、青銅器時代、鉄器時代、つまり都市文明の時代の発掘報告書では、「遺跡を掘った、遺構がこのようなのが出ている、出土の遺物はこのようなものがある」という報告がたいへん充実しているわりに、植物については「オオムギが出た」とか「コムギが出た」、とかいう記載がついでにちょろっとなされて終わるということが、かなり多かったと思います。特に南メソポタミアのほうの遺跡では、そうです。

この数十年、とくに 20 年、30 年前ぐらいから、植物をしっかりと見て、雑草まで含めて調べることがなされ出しました。そうしているうちに、南メソポタミアでは（政情不安のため）調査ができなくなり、北メソポタミア、あるいはユーフラテスの中流域での調査が増えてくるようになりました。出土植物についてもこの地域での報告例が増えているという、そういった状況にあります。

ただ、増えているとはいっても、その出土植物について具体的に話を進めている例というのは、それほどないように思われます。出土植物について、このようなものが出た、あのようなものが出たと書いてありつつも、それが何か、あまりきちんとまとめられていないのではないかと思うのですね。わたしの勉強不足かもしれませんが、何かまとまったデータがないような気がします。それでいろいろ文献を読みまして、どのような傾向があるのかを洗い出しましたので、その結果についてここで報告したいと思います。

要点としては、これまで粘土板など文字資料によって言われていたことが、出土植物自体を見て、同じことが言えるのだろうか、という疑問がまずあります。それからあと、文献に書かれないような気候であったり、生業のなかでもとくに農業のやり方などについても、実際に出てくるもの、つまり種子とかそのようなものを見たら何か言えるはずなので、植物の論文に書かれているそういった情報を読み出していきたいと思っています。

今日はとりあえず、そういったことを発表します。

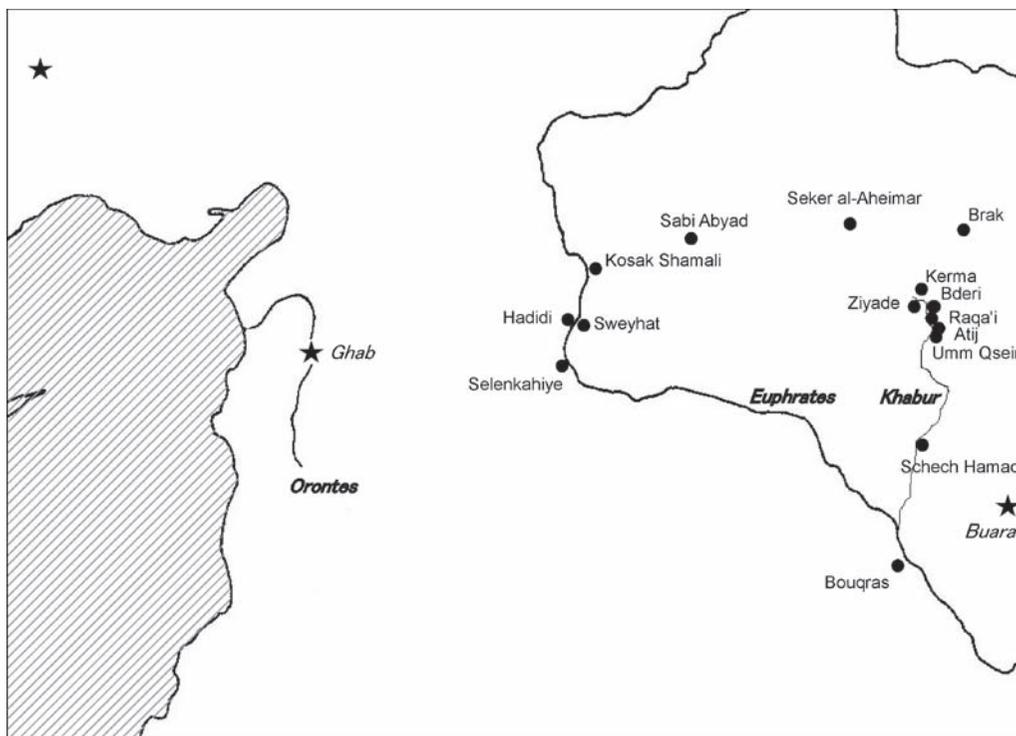


図1 本稿であつかう遺跡の地図と花粉データ採取地点.

花粉データは Zeist and Bottema (2001) および Gremmen and Bottema (1991) による (★印).

あつた文献の遺跡が、この表（表は後出するので遺跡地図：図1）に書かれているものです。ハブールの遺跡を前8千年紀ぐらいから始めて、つまり西秋先生のセクル・アル・アヘイマル遺跡からですね、以後示したこのような遺跡で植物報告がなされています。あとユーフラテス中流域のシリアの中央部分と、シリアと国境付近遺跡についてもこのような遺跡で報告があります。

基礎的な知識といいますか情報としまして、これは年降水量なのですけれども、天水農耕ができる限界がだいたい年間降水量250ミリぐらいです。この250ミリというのは、乾燥に強いオオムギが安定的に栽培できる限界のラインです。より安定的な天水農耕をするためには300ミリ必要といわれています。ハブールでは、ハッサケの付近を250ミリラインが通ります。それ以下の、例えばこちらの200ミリラインになると、栽培はできるのですけれども、年によっては壊滅的な被害を受けやすくなります。

それから、もうちょっと北に上がると、300ミリラインというのがあります。そこからはコムギ類がなんとか栽培でき、より安定的に栽培するにはコムギ類は400ミリ必要といわれています。

あともう一つの基本情報としまして、気候、花粉分析の例があります。これはポッテマらがやった仕事です。花粉データは、これらの周辺地域すなわち地中海東岸からアナトリア高原にかけ

での地域で取られているのですけれども、いま話題にしているハブールからユーフラテス中流域については、基本的に花粉のデータがありません。ただ1個所、ハッサケの東南にブアラという塩湖がありまして、そこで唯一取られています (Gremmen and Bottema 1991)。古い年代はなかったらしいのですけれども、少なくとも6,000年前からのデータは押さえられそうで、ヴァン・ツイスト (2001) の引用によりますと、そこから現代まで気候変動はほとんどないというデータが示されています。

ここからレビューをした結果にうつります。まずハブールで話をします (表1)。前8千年から7千年紀、つまり新石器時代は、エンマーコムギ、オオムギ、レンズマメなど、それからヒヨコマメとかカラスマメとか、そのようないろいろな作物が出土しております。特にエンマーコムギが多いというような状況です。

紀元前6千年紀の遺跡、ウンム・クセイルとかでも同じようなエンマーコムギを中心として、その他の多様な作物が作られております。

これらは、いわゆるファウンダー・クロップといいまして、新石器時代になって農業が起こると同時に、たくさん作られるようになった作物のセットです。これらの作物が新石器時代から、銅石器時代ぐらいの時代になっても作られていました。紀元前4千年紀まで、そのような作物が作られております。

それが、紀元前3千年紀になりますと、出土植物はがらっと変わってオオムギになります。これは量とその比率がまたものすごく変わりました、それまではエンマーコムギやレンズマメなどが多くて、ほかの植物もバランス良く出ていたのですけれども、紀元前3千年紀以降に出てくる

表1 ハブールの遺跡における多出植物

時期	植物名と出土した遺跡名	
前8～7千年紀	エンマー, オオムギ, レンズ	Seker al-Aheimar
前6千年紀	エンマー, オオムギ, レンズ エンドウ, ヒヨコマメ	Umm Qseir
前5～4千年紀	エンマー, オオムギ, レンズ 草原の野生植物	Ziyade Brak
前3千年紀	オオムギ 草原 (又は休閒) の植物 畑雑草	Brak Atij Raqa'i Bderi Kerma (Thalathat)
前2千年紀	オオムギ 草原 (又は休閒) の植物 畑雑草	Brak Schech Hamad Bderi

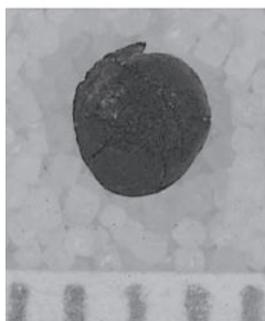
丹野 2007, MacCorriston 1998, Colledge 2001, Zeist 2001, Cooper 2006, Akkermans and Schwartz 2003 をもとに作成。



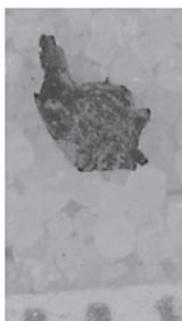
Emmer wheat
(C12-235)



Einkorn wheat
(C12-235)



Lentil
(C12-235)



Wheat spikelet base
(C12-235)



Barley
(E11-178)

図2 セクル・アル・アハイマル L-PPNB 期の出土植物。エンマーコムギが多く、かつ多様である。

作物はほとんど、しかもすごい大量で、オオムギになります。サイロや穀物倉庫がよく発掘されるようになりまして、そこにオオムギが充満しているということが、よく見られるようになります。随伴する植物として、草原の植物、ステップ、あるいは休閒地に見られるような植物が出てくる時代になります。

この変化がものすごく大きいのですけれども、実はその直前期、つまり紀元前6千年から4千年紀にかけて、その変化の徴候がちよっと見られております。草原性の植物が多く混入するようになるという変化が見られ、それから3千年紀にドカーンと変わる、そのような結果があります。紀元前2千年紀は、3千年紀と同じような傾向が続くというような状態になります。

ちょっと実際の例を見てみましょう。これがエンマーコムギの写真です(図2)。私が同定させていただいている紀元前8千年紀末から7千年紀のセクル・アハイマルでも、このようにエンマ

ーコムギが出ており、それからレンズマメとオオムギなどなど、その他の植物も出ます(図2)。いろいろな植物が出ます(丹野2007)。

これが紀元前3千年紀になると、オオムギに劇的に変わります。これはハブールではないですけれども、イラクの北メソポタミアの遺跡、テル・サラサートの例です。2600 BC ぐらいだろうとみられている焼けた穀物倉が発掘されました。その土器などの中に入っていた大量のオオムギおよび砂が、東大に保存されていたので私が見させていただきました(未発表)。

調べた土の量は3リットルぐらいですが、そこに炭化物が、もうかなり入っておりまして、そのほとんどすべてがオオムギ。オオムギがたくさんじゃらんじゃらん出てきて、何千粒入っています。そのオオムギは相当きれいにクリーニングされていまして、ほかに混じていた雑草、植物は、何万粒のオオムギの中に、アインコルンコムギの種子破片が3片、それからその穂軸が1点、エギロプス属の種子が2点などなど、その程度しか混じていない。ものすごくきれいな状態のクリーニングがなされておりまして、これはおそらく交易に供されるために、きれいにゴミを取り除くクリーニングがされたのだと思われます。前3千年紀の農業というのは、そのような農業、つまり交易を意識した農業に変化してくるようです。

同じような傾向は、ユーフラテスでも見られておりまして(表2)、ボクラスは南のほうの紀元前8千から7千年紀の遺跡です。ここでもやはりエンマーコムギ、アインコルンコムギ、それから脱穀しやすいコムギ、つまりどちらかは決定できていないのですがデュラム(マカロニコムギ)とかパンコムギかもしれない、そのようなものとレンズマメが出てきます(van Zeist and Waterbolk-van Rooijen 1985)。場所はだいぶ違いますけれども、北のほうの前6千年紀のコサク・シャマリでも、やはり同じように、エンマーコムギやアインコルンコムギなどがでできます。この地域でも前3千年紀になると、オオムギへと変化します(Willcox 2003)。

表2 ユーフラテス中流域の遺跡における多出植物

時期	ユーフラテス中流域 シリア中央		シリア・トルコ境	
	前8～7千年紀	エンマー, アイン コルン, オオムギ	Bouqras	
前6千年紀	エンマー, アイン コルン, オオムギ	Kosak Shamali		
前5～4千年紀				
前3千年紀	オオムギ 草原(又は休閒) の植物	Selenkahiye Sweyhat	オオムギ コムギ	Jerablus-Tahtani Kurban Hoyuk(トルコ) Hacinebi(トルコ)
前2千年紀	オオムギ, レンズ	Hadidi	オオムギ, レンズ	Hadidi

Zeist and Rooijen 1985, Willcox 2003, Miller 1997, Zeist and Heeres 1985, Colledge 2001, Cooper 2006, Akkermans and Schwartz 2003, Peltenburg et al. 1995, MacCoriston 1998 をもとに作成。

ユーフラテス河でもシリア国境・トルコ国境まで行きますと、とくにトルコのほうに入りますと、この時代つまり前3千年紀でもコムギがよく出ています。これは多分、単純に降水量が十分にあるのでコムギを作っているのか、あるいは降水量だけの理由ではなくて、南メソポタミアとの交流の関係がハブールよりは希薄で、そういった因果関係で、オオムギを作らなくても良かったのかもしれないと思っています。

ここまでまとめますと、4千年紀より前はファウンダー・クロップと呼ばれる多様な植物、作物が利用されていました。特にエンマーコムギが中心のようです。ただ、エンマーコムギばかりたくさん出てくるというわけではなく、種類としてはそれほど多くないのですけどその割に万遍なく出てくる。そのような状況ですね。

前3千年紀以降をもうすこし詳しく見てみましょう。前3千年紀になると、がらっと変わってオオムギばかり出てくる。それでそのオオムギに混じって、草原性の雑草、これは草原植物なのか休閑地に生えていた植物なのかは分からないのですが、そのような植物が出てくるようになります。出方としても、穀物の倉庫があって、その部屋からきれいにクリーニングされたオオムギが大量に出ます。そしてその一方で別の部屋からは、クリーニングされていないオオムギの種子と脱穀モミガラなどのチャフ、木片やいろいろな雑草、たとえば *Malva*, *Lolium*, *Aegilops* とか、麦畑によく生えてくるような雑草が混じっているとといったような、区別がなされる傾向があるようです。たとえばそういう出土はケルマでみられています。また前13世紀のシェイフ・ハマド遺跡では、オオムギと雑草の種子が両方ともしわしわになっていて、充実していなかった。これは生育後期の水が不十分だったので、途中で雑草もろともオオムギの茎を刈って、そのまま倉庫に入れていたのではないかという考察もなされています。

それからあと、この辺の遺跡ですね。スウェイハットとかセレンカヒーエ (van Zeist and Bakker-Heeres 1985, Miller 1997)。この辺の遺跡は、ステップ (草原) の雑草ばかりがたくさん出てくるような例があります。それはおそらく家畜を、ユーフラテスの溪谷から河岸段丘上のほう、要するにステップの台地に連れて行って、そこで家畜が排泄したフンを遺跡のほうに持ち帰って燃料にしていたのだろうと、そのような考察がされています。

ステップの植物というのは何なのかということ、すこし説明しましょう。ユーフラテスの河岸段丘上のステップ植生というのは、典型的なものはシリアではもう今はほとんどヒツジなどの動物に食べ尽くされて、残っていないというのが現状です。こちらの写真 (図3-1) は実はトルコの写真なのですけれども、トルコは割とまだ植生が残っています。ただトルコは少し降水量が多いので、このような感じの植生よりも、シリアではもうちょっと乾いています。これがビシュリの山のほうの写真 (図3-2) なのですけれども、ここまでは乾いていない。この2枚の写真の中間くらいの感じのステップです。

このようなところに生えている植物ですが、ビシュリの山からすこし離れていますが、この写真 (図4) はエルコウム付近の道ばたに生えているような雑草群落です。あまり細かいことは言わないのですけれども、先ほどの3千年紀ぐらいによく出ているような雑草というのは、この

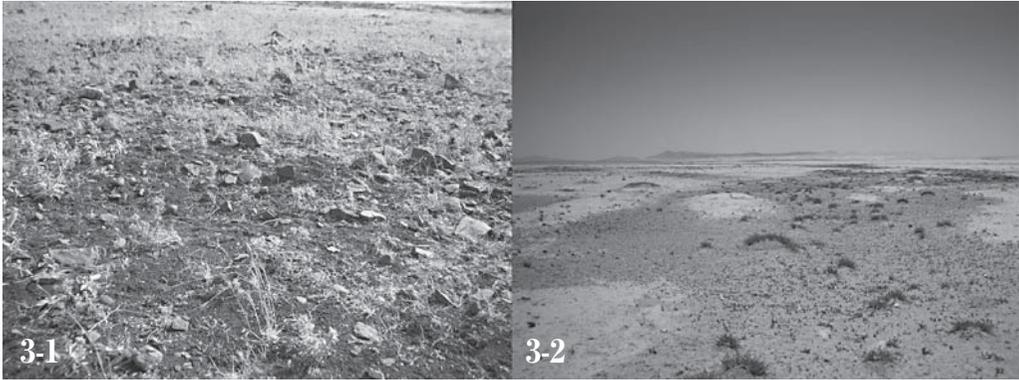


図3 ステップ植生の例. 3-1) 南東トルコ・ウルファ西部, 3-2) シリア・ビシュリ山系

Malva で、すみません、どれか分からないですね。これか。ちょっと分からないですね。ともかく、この写真の中のどこかに生えているのです。

あと *Melilotus* とか *Medicago* とか、あとアストラガルスというレンゲ(ゲンゲ)属、そのようなマメ科の種子が、よく3千年紀のステップ性の雑草としては出てきております。

では、灌漑農業は行われていたのでしょうか。南メソポタミアではそろそろこれが始まる頃ではありますが、ハブールとユーフラテス中流域ではどうなのだという話なのです。結果から話しますと、植物学者たちの間では、現時点では灌漑農業はなかったと考えられております。

なぜかという、出土した植物からは、灌漑であるとはっきり言えるような出土状況が得ら



図4 ユーフラテス段丘上の雑草の例。みられた植物は *Peganum harmala*, *Hordeum murinum*, *Anabasis* sp., *Malva* sp., *Erodium cicutarium*, *Atriplex* sp., *Astragalus* sp., *Heliotropium hirsutissimum*, *Polygonum maritimum*, Polygonaceae, Cruciferae, Compositae, *Stipa* sp. など。

れていないからです。乾燥地に生えるような、または乾燥した農地に生えるような植物は出土します。たとえば *Trigonella astroites* など、いろいろな植物があります。これらが出てこなくなるような例があったら、ひょっとすると灌漑をやっていたかもしれない。そのような乾燥農地に生える植物がたくさんサンプルに出ているのに、あるサンプルにだけは出てこない、かつ灌漑地が好きな *Lolium* とかそのような植物がそこに出てきたら、灌漑かもしれないといえると思います。

そのような出土植物と栽培土壌水分の関係については、ハプールのラカーイとブディリという遺跡で若干考察されています (van Zeist 2001)。そこではやはりオオムギが大量に出ます。基本的にオオムギを作っていたのは河川からすこし離れた氾濫の起こらない土地であるというような出土植物の構成が見られましたが、一部のサンプルにだけ水分をより好む種が含まれていました。ただこれもサンプルが数点しかないですし、灌漑に結びつくような出土状況ではありません。川の近くで栽培されていたのではないかと考察がなされています。報告はせいぜいそのようなもので、灌漑の証拠になりうるものは、ほとんどないというのが現状です。

現在ユーフラテス溪谷内では、この写真(図5)のような感じで栽培がなされています。しかしこれは、上流にダムがあって大水が来ないからこうして川の近くに作物を作れるのです。ユーフラテスというのは、タイミングの悪いことにムギとかマメができる春に大氾濫をしていた川なので、そのようなところで大それた栽培はできない。それに氾濫のこない所まで水を汲み上げて引くのは、動力的に困難であっただろうと考えられています。

新石器時代のボクラスとか、あのようなすごい乾いたところに最初はコムギとかいろいろな作物が出てきているのですが、そのような出土に対する説明は、このような河川の氾濫するところからちょっと離れたテラスの、土が肥沃で、水がそこそこまぐたまるところで、そんなに大規模ではないけれども、栽培がなされていたのではないかとというような認識で一致しているようです。

まとめますと、紀元前4千年紀ころまでは、エンマーコムギを主としたといいますか、エンマーコムギその他の植物が出てくる生業でした。それが3千年紀以降はオオムギ一辺倒になります。そこにステップの雑草、それは畑由来かもしれないし、ステップで放牧かしていた家畜のフン由来かもしれないのですが、そのような植物がオオムギに随伴します。また灌漑農業といえるような大規模な灌漑は、ユーフラテス中流域やハプールでは行われていなかった。むしろ河川テラスの一部や台地上の条件のよいところで栽培がされていたと考えられています。そういったことになろうかと思います。

粘土板資料からは、南メソポタミアでコムギからオオムギへと栽培が転換されたということはいろいろな例で知られています。ですが、これまでお示ししてきましたように、このようなコムギからオオムギの転換というのは、ハプールやユーフラテス中流域でも、すなわちジャジーラ全



図5 ユーフラテス河川近くの耕作地.

体で起きているのです。

この転換に関してよく言われる理由のひとつとして気候変動説があったと思いますが、これは先ほど紹介しましたように、花粉分析の類からはあまり考えにくいわけです。塩類がたまって栽培ができなくなって、それで塩に強いオオムギが残ったという説もあるのですが、それも、積極的に支持している論文・証拠というのは、ほとんどありませんし、1960年頃の『サイエンス』に論じられたぐらいだと思います (Jacobsen and Adams 1958)。

その塩類集積というのは、河川が氾濫すれば、ナイル河のような感じで、塩というのは流されますから、氾濫するところではそんなにたまりすぎてだめになるということは、ないといわなけれど、なかなか起こりにくいのではないのでしょうか。実際、先ほど紹介しましたこのハブールとかユーフラテス中流域では、別に塩類集積が原因ではなく、この期間オオムギへ転換されているということが指摘できます。

紀元前3千年紀にオオムギが大量生産されるようになった背景というのは、政治的、文化的な背景がいろいろあると思うのです。そういったところを、文献など多方面からいろいろな人とディスカッションしながら解明できたら、先ほどの大沼先生のガーネムアリ遺跡の半農半牧生業というようにところとの接点もできて、生業・文化の解明につながっていくかなと考えております。以上です。

【質疑応答】

司会（常木） どうもありがとうございました。 ガーネム・アル＝アリ遺跡から出た資料の分析はどうなっていますか。

丹野 早稲田大学の赤司さんが今調べているところです。 一部データも出ているのですが、せっかく彼女がやっているのに、僕が言わないほうがいいかなと思って。 出土植物資料の量がまだないので、ものを言うにはちょっと早い段階です。 いずれ、彼女が関連して発表することになっておりますので、そのときに結果を示すことができると考えております。

司会 はい。 ありがとうございます。 すみません。 時間がなくなってしまいましたので、丹野さんのお話に関しては、多分、前川先生のほうがいろいろ質問されたいと思うのですけれども、あとの討論の時間がありますので、討論の時間で、ぜひご質問なりいただきたいと思います。

参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz (2003) *The Archaeology of Syria. From complex hunter-gatherers to early urban societies (ca. 16,000–300 BC)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Colledge, S. (2001) Plants and people. In: *Excavations at Tell Brak 4: Exploring an Upper Mesopotamian Regional Centre, 1994–1996*, edited by R. Matthews, pp. 389–416. Cambridge: McDonald Institute of Archeology.
- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York: Routledge.
- Gremmen, W. H. E. and S. Bottema (1991) Palynological investigations in the Syrian Gazira. In: *Die rezente Umwelt von Tall She Hamad und Daten zur Umwelt-rekonstruktion der Assyrischen Stadt Dur-katlimmu*, edited by H. Kuhne, pp. 105–116. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Jacobsen, T. and R. M. Adams (1958) Salt and silt in ancient Mesopotamian agriculture progressive changes in soil salinity and sedimentation contributed to the breakup of past civilizations. *Science* 128 (3334): 1251–1258
- McCorrison, J. (1998) Landscape and human–environment interaction in the middle Habur drainage from the Neolithic period to the Bronze Age. In: *Espace naturel, espace habite en Syrie du nord (10e-2e millenaires av. J.-C.)*, edited by M. Fortin and O. Aurenche, pp. 43–53. Bulletin of the Canadian Society for Mesopotamian Studies 33. Lyon: Maison de l’Orient.
- Miller, N. (1997) Sweyhat and Hajji Ibrahim: Some archaeobotanical samples from the 1991 and 1993 seasons. In: *Subsistence and Settlement in a Marginal Environment: Tell es-Sweyhat, 1989–1995 Preliminary Report*, edited by R. L. Zettler, pp. 95–122. MASCA Research Papers in Science and Archaeology Vol. 14. Philadelphia: Museum Applied Science Center for Archaeology, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Peltenburg, E., S. Campbell, P. Croft, D. Lunt, M. A. Murray and M. E. Watt (1995) Jerablus-Tahtani, Syria, 1992–4: Preliminary report. *Levant* 27 : 1–28
- Willcox, G. (2003) Chalcolithic carbonized cereals from Ubaid burnt strage structures at Kosak Shamali. In: *Tell Kosak Shamali, Volume 2: The Archaeological Investigations on the Upper Euphrates, Syria. Chalcolithic Technology and Subsistence*, edited by Y. Nishiaki and T. Matsutani (eds.), pp. 267–270.

- UMUT Monograph 2. Oxford: Oxbow Books.
- van Zeist, W. (2001) Third to first millennium BC plant cultivation on the Khabur, north-eastern Syria. *Palaeohistoria* 41/42 : 111-125
- van Zeist, W. and J. A. H. Bakker-Heeres (1985) Archaeobotanical studies in the Levant. 4. Bronze Age sites on the north Syrian Euphrates. *Palaeohistoria* 27 : 247-316
- van Zeist, W. and S. Bottema (2001) Late quaternary vegetation of the Near East. Wiesbaden: Reichert.
- van Zeist, W. and W. Waterbolk-van Rooijen (1985) The palaeobotany of Tell Bouqras, eastern Syria. *Paléorient* 11 : 131-147
- 丹野研一 (2007) 「西アジア先史時代の植物利用—テデリエ遺跡, セクル・アル・アヘイマル遺跡, コサク・シャマリ遺跡を例に」『遺丘と女神』西秋良宏編 : 64-73, 東京大学総合研究博物館.

【討論】 ガーネム・アル＝アリ研究の可能性

大沼 本日は松本さん、西秋さん、私、中村さん、久米さん、石田さん、丹野さんが発表しました¹⁾が、ここで本日の発表に関する総合討論を行いたいと思います。私と西秋さんが進行を担当します。

今回のシンポジウムの大きな問題としてまず、ガーネム・アル＝アリ遺跡の調査の今後のありかたがあります。それから、ガーネム・アル＝アリ、テル・シャップート、ワデイ・ダバに加えて藤井さんがおこなっているビシュリ山北西山麓のケルン墓群の調査におけるケルン墓それぞれの関係の解明という問題があります。さらに、ユーフラテス河中流域のセム系部族社会がどのように変遷したかという大きな課題の解明があります。

本日と明日の討論を通して、これらのことを討論していきたいと思います。

西秋 今日はガーネム・アル＝アリを中心にしたフィールドワークの成果を主とした発表がいくつかありました。このフィールドワークは、今年度の来月から1シーズン、それから来年度の5月と9月ですかね。後少なくとも、3回は集中的におこなって、この研究プロジェクトを終結させるということになります。あと一年しかありませんので、残りのシーズンをいかに有効に過ごすか、今日は、今後この遺跡の研究をどのように進めていったらいいかといった点について、コメントといえますか、ご意見をいただけたらいいと思います。

部族社会の形成というテーマについては、明日いろいろな証拠が発表された段階で、改めて議論できると思います。今日は遺跡と考古学に絞って討論することとします。

まず、ガーネム・アル＝アリの調査なのですけれども、この遺跡を研究して何が分かりそうかということ、大きく分けると二つあります。一つは、われわれはセム系と言っていますが、おそらくアモリ人だろうということなのですが、彼らがどのような人だったか、どのような生き方をしていた人だったかということ、正確に記載するということ。

もう一つは、今、彼らの集落を発掘しているわけですから、それを調べて、集落の中の構成などの証拠にもとづいて集団や部族の構造が同定できるかどうか。二つ、大きく問題があるかと思っています。

どのような人だったかということについては、今日、生業のお話が丹野さんからございました。その点についてまず議論したいと思います。

大沼さんのご発表の中で、半農半牧というのですか、そんな人たちだったというお話がありましたけれども、もう少し詳しく伺えますか。

大沼 高尾さんがガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の村落で聞き取りによる社会人類学的調査をお

こなったのですが、そのなかで「自分たちは遊牧と農業の両方をする」という話を記録されました。青銅器時代においても自然環境は現在と大きく変わらなかったと思われるので、ガーンム・アル＝アリ遺跡(村落)の住民も同様な自己規定をしていたかとも思います。したがって、この遺跡の発掘調査のなかで農業と牧畜という2つの生業を示すような痕跡が出土すれば興味深いと思っています。

この点に関しまして、昨年の研究会で中央大学大学院博士課程の大西庸之さんが、「マリ文書を読んでいくと、アモリ人は半農半牧、半農半遊牧とかの集団であったと見られていたのではないか」ということを聞きまして非常に興味を持ったわけです。植物考古学の分野で丹野さんにこのあたりの興味深い情報があればということになります。

西秋 高尾さん、現代の人たちがどのような生活をしているかというのを聞き取り調査なさったそうなので、所見をお話いただけますか。

高尾 文化人類学班に研究協力者として加えさせていただいております、高尾賢一郎です。

1点のみ思ったこと、これは前回のニューズレターの記事に加えさせていただきましたけれども、半農半遊牧という点についてです。現在住んでいる人、これはもう早ければ7、8世紀ぐらい、遅いところでも2、300年、100年前くらいには今のところに定住した人なのですけれども、大体アラビア半島の南から北上してきた人たちである。

そしておそらく、話を聞いている限りでは、元々半農半遊牧であったというよりは、だんだん農業の割合が増えてきた。それこそアラビア半島の南から北進を始めたときなどは、かなり遊牧のほう割合が多かった。そしてだんだん農業への依存度が高まってきて、そして現在に至っては、幾つかの村は、もう完全に農業で生計を立てているというような話です。聞き取りでは、そのような結果が得られましたので。おそらく、その半農半遊牧というのが、だんだんバランスが変わってきた過程が、今の彼らにもあるのだろうと。そのようなことを、前回の調査の際には思っておりました。またこの点は詳しく詰めることができればと思います。

西秋 半農半遊牧というのは、普通に言う農耕牧畜とどう違うのですか。

大沼 ヨーロッパとの違いはどうでしょうか？

高尾 あまり変わらないとは思うのですけれども。

西秋 今の農民というのも、必ずヒツジや何か飼っていて、毎日どこかへ行って帰ったりしています。そのようなものではないということですね。半農半遊牧というのは。

大沼 高尾さんは半農半遊牧とは言っていないのですが、彼らがベドウィンとまるで同じだと言ったことを記録されているのですね。彼らにとってベドウィンは異様なものではなくて、彼らと同じことをしているけれども、遊牧に専念していて、物の売り買いには都市に行くけれども、彼らは必要ないから、彼らのところには来ない。元々ベドウィンと彼らはそれほど違うものではないという感じで、高尾さんの書かれたことによると、都会近くのいわゆる農民、羊も飼っていますけれども、都会直近の農民はベドウィンに対して非常に違うものだという意識があるけれども、このへんの人間はそのような意識がないというお話でしたね。

高尾 そうですね。特に都市部に近い人たちなどは、ベドウィンに対してかなり嫌悪感を持っている人もいます。差別意識、自分たちは都市民であるというような差別意識を持っているケースも多いのですが、ガーネム・アル＝アリの周辺の人たちは、今完全に、もう家畜を飼っていない人たちに対して「あなたたちは、ではベドウィンではないですね？」というような形で話を進めようとする、[いや、そういうわけじゃないんだけどね]というような形で、ベドウィンと呼ばれること、そのような意識に対する、そのような意識というのを否定するというようなケースはありませんでしたね。

西秋 半農半遊牧と言う場合、集団の中の一部の人はずっと村に住んでいるけれども、一部の人にはヒツジやヤギを連れて何日も帰ってこない、季節によっては帰ってこないとか、そのような生活のしかたですか。

高尾 少しケースがまちまちでして、大概のケースですと農耕牧畜と、常に両方やっているというような感じなのですが、今回、前回の第7次の調査の対象にしましたいくつかの村では、夏に、よりユーフラテスに近いところの家に住んで、家を借りて、そこで農業、ちょっと割合は詳しく分かりませんが、ほぼ農業を中心とした生活を立てている。

そして冬になったら、農地のない、ビシュリのふもとの家に戻って、そこで農業には全く従事しない生活をして過ごす。そしてまた夏に農地のユーフラテス河の近くに帰ってくるという、そのようなケースもあります。

大沼 この問題に直接関係するとは思いませんが、非常に興味ある問題として、ガーネム・アル＝アリ遺跡の住居遺構の中で石器が出たのです。青銅器時代の石器です。青銅器時代の石器といたら、カナン・ブレードとか交易に使われているようなものが有名なのですが、これは何だろうと思っていたのですが、西秋さんが、昨年3月でしたか、砂漠に入ったワジで採集されたものが石材、技術において全く同じで、どう考えても同じ人間が回遊していたとしか思えないのです。

このことが直ちにガーネム・アル＝アリの住民が遊牧と農耕の両方おこなっていたということにはならないでしょうが、この遺跡自体が砂漠民と氾濫原住民両方の活動の痕跡をもっていて、ベドウィンとなんらかのかかわりがあったのではないかと考えられるのが非常に興味あるところだと思います。

それから、以前丹野さんが現地調査に参加されたときに、ガーネム・アル＝アリの遺跡の中の植物の痕跡がいろいろな形で遊牧民とのかかわりを示しているという話をされたのですが、このことを少し補足していただくと有り難いのですが。

丹野 前にわたしが参加して、現場で土を採取していただいて、それをフローテーションして出てきた植物、炭化植物の中に、プロソピスというマメがあったのです。このマメは今、現地を歩きますと、もう皆さん足に刺さって嫌がる灌木なのですが、この木がものすごく生えているのは、ヒツジなどの家畜を飼っているところで、ものすごい群落を作ることが多いです。

というのも、ほかの柔らかい草といいますか、いい草をどんどん動物が食べてしまうわけです。

その結果、その堅くてトゲがあって嫌なやつばかりが残るのです。そのような種類の植物の種が現場から出てきている。

その植物は、ついでに言いますと、一応有毒草なので、人間にとっては良くない。ただ、薪^{まき}には使える。根っこが深くて、上より根っこのほうがマスがあるという。それで、西秋先生が掘っているテル・セクル・アル・アハイマルの遺跡の現場で、よく遺跡から出てくる太い根っこがそのプロソピスというやつなのですけれども、それを切って、現地の作業員たちはそれを薪にするのだと言って、それで持っていく。薪には使える。でもそのためにわざわざ植えて掘るなどという人はいないと、そのような植物です。

有毒なので、マメはできるのですけれどもサヤは人は当然利用しない。ただ、動物が食べても無毒らしいから、それを食べる。それがフンの中に混じるということは割とあるらしいです。

その植物は、動物にそのような意味では関連するのですけれども、もうちょっと、確かちょっとうろ覚えなのですけれど新石器時代のボクラス遺跡とかでも出ていた。なので、そこがちょっと、突っかかるには突っかかるのですが、青銅器時代になって、うわっと出るという、確かにうわっと出るようになるのですけれども、新石器時代には、ほとんど出土例はすごく少ないのですけれども、でも、ないことはない。

ちょっと、そこは引っかかるのですけれども、そういった動物がいて、植生を表しているところにはよく入る植物が出ています。

西秋 高尾さん、さっきだんだん農業の比重を集団が高めていったようだというをおっしゃいました。ユーフラテスの流域で、ユーフラテスの考古学者が氾濫原と言っているあの広いところ、丹野さんの発表では、あそこは畑にはできないというような話をなさいました。洪水で氾濫するようなところは畑にはできない。そうすると、もう台地のエッジの段丘とか、ちょっと水がたまるところぐらしか畑にならないということなのですね。

だとすると、耕地になりそうなところは、ものすごく狭いのだと思うのですね。実際、あのガーネム・アル＝アリは都市だと言われていますけれども、私の掘っているハッサケ（シリア東北部）のテルと比べると、都市にしてはものすごく小さなところだという印象があります。

大沼 都市的農耕村落と言っていますけど。

西秋 都市的農耕村落。

大沼 あるいは農耕村落と言うべきかと思います。

西秋 いずれにしても、おそらく農業をしていた集団ではメソポタミアのような巨大な集落を維持できないような地形だと思うのです。地理班の方から、農地になりそうなところというのは、どれぐらいの面積だったのかについて、何かコメントはございますか。星野先生。

星野 いや、農地になりそうな面積のことは、ちょっとわたしは不明です。はい。先ほど丹野さんがお話しされた、氾濫原と呼ばれていたところは、おそらく河の水面にほとんど近いレベルの氾濫原だと思うのですね。

齋藤 今、西秋先生が言われた氾濫原と言っているところは、そこより多分1、2メートル高い。

われわれが最低位段丘と呼んでいる、5段めの段丘面だと。

西秋 なるほど。

齋藤 そこは、氾濫が起こっても、数百年に1回とか、すごく大きな氾濫のときにはかぶると思うのですが、毎年かぶるレベルではないのかなと想像しています。

西秋 そうですか。

齋藤 はい。想像だけです。

西秋 では、そこそこ畑の面積はあった？

齋藤 あったのではないかなと思うのですが、丹野さんいかがでしょうか。

丹野 そのとおりだと思います。氾濫原の中が、全部水浸しになることは、多分ないと思います。作れるところでは作っていたのだろう。それで何年かにいっぺん氾濫するような場所でも、余剰の種があったら、まいたりはしていたかと思います。

あと、特に降水量 200 mm とか、本当に乾燥しているところだったら、上から降ってくる水が使えない。でもゼロではない。だから、そういったものが流れてきて、じわじわとたまっている地下水が高いような場所を選んで、細々とといいますか、全然分からないのですけれども、作っていたと考えられています。

ボクラス遺跡の論文では、かなりでかい都市といいますか遺跡なので、これだけの人口をまかなうような農業が、そのようなテラスのどこかでできていたとは思えず、何が行われていたのか、実際分からないと言っております。

ガーネム・アル＝アリの場合は、あれだけ広い土地がありますし、地下水もそこそこ高そうなので、作れるところでは、ある程度の面積で作れたのではないかなと思います。

そのようなことから、出土植物のもと調査が進めば、面白いかなと思っています。

大沼 あした藤井さんが発表されることになっていますケルン墓の発掘、そしてガーネム・アル＝アリとテル・シャップートやワディ・ダバの墓を巡る研究の方向性とかは明日の討論材料にしたいと思うのですが、また、今後どのように領域全体の研究を総括するかという問題も明日の課題にして、残されたあと5分ぐらいの時間を討論したいと思います。

西秋 はい。ではお墓の話は明日まとめて、ケルン墓の報告があった後でおこなうことにしましょう。

生業以外に、今回のガーネム・アル＝アリ研究で、もう一つテーマがあります。それは大沼さんのレジュメの中で、「今後の研究方向」というところを書いておられた点です。一つの集落の中での、同じ集団による場所の使い分け、および同じ時代に異なる集団がその集落を使っていた証拠があるかどうかということ調べたいということ指摘されました。

長谷川さん。今年、大沼さんと一緒に、あのテルを大規模にクリーニングして、集落の構造を調べるという調査をなさったと思いますけれども、その成果について、特に集落の構造に関するコメントはありますか。

長谷川 そうですね。表面クリーニングなので、はっきりした構造というのは分からないのです

が、そのクリーニングで分かった範囲で言うと、測量のときからも指摘していましたが、やはり北西側の、テル北西側の遺構群は、建築材になっている石材というのが、スクエア1と比較すると非常に大規模なものを使っており、遺構自体もしっかりしているという印象を、非常に受けています。

それで、また今回の調査で大沼先生が、今日のご発表にもちょっとお話が出ましたが、墓と思われるような遺構というものも、やはりその北西側からも出土しているということもあります。スクエア1のある東側とは、遺構の性質が何か違うのではないだろうかということは、今思っています。

そうしたところの詳細な調査が行われると、もうちょっとはっきりした構造が遺構から見受けられるのかもしれないと感じております。

大沼 それで、長谷川さんにちょっとお聞きしたいのだけれども、これまでの成果に基づいて、推測でもいいのですが、例えば土器の型式から時代差というのはある程度ありましたよね。もう一点お聞きしたいのだけれど、遺跡の中で区域といいますか、場所による違う土器型式の分布を今まで感じられたかどうか。

長谷川 そうですね。まだ土器を全部細かく見ていないので、はっきりしたことは出ていないのですけれども、スクエア1とスクエア2に関しては、同時期のものに関してはそれほど型式が違うような、ただセット関係なども含めて、大きな変化は、今のところないのではないかと。

ただ、スクエア2のほうが土器に関しては新しいものも少し出ているので、時期の差はあるとは思いますが。

あと、今回大沼先生が作業されたものに関しては、まだ詳細に見ていないのですけれども、ざっと見た感じでは、先ほどわたしが話した、北西のほうから出ている土器群というのが、非常に違う性格を見せるかということ、そこまではっきりしたものというのは、まだ分らないです。ただ、それは詳細にまだ今後分析していく必要があるとは思いますが。

あとテル北西部に、車輪や土偶などが非常に集中して出ているというのは、非常に面白い傾向かなというように感じております。

大沼 どうも有り難うございました。

西秋 大沼先生がおっしゃっているのは、ガーネム・アル＝アリの遺跡の中で、生業の違うグループが共存していた可能性があるということ指摘されたということですか。

大沼 いいえ、そういうわけではないのですが。

西秋 そうではない？

大沼 ええ。遺跡の中で、まだ時期の詳細は分かっているのですが、遺構のラインがいくつかあって、また、これまで土器の研究でも最低二つの時期があるということですね。そこで、これは将来的な解明になりますが、この遺跡（当時の町ないし村）の中に同一時期の同一集団が存在していたとして、場所の使い分けをおこなっていたかどうかということです。住居地域とか墓域とかが明かされるならば非常に興味あることだと思います。あるいは時期が異なる場合には、どの

ような異なる人々が居住していたのかということ、それも土器型式の研究の中から解き明かせれば興味深いと思っています。

それからもう一つは、これは昨年、前川先生の文献史学研究のほうの中田先生と、中央大学大学院の大西さんのお話を聞いたときに、マリ文書では、このへんの地域だと思うのですが、アメリ人が半分農業、半分遊牧とか放牧、そのようにとらえられていたのではないかと理解せざるをえない記述があるという話をお聞きしたので、もしかしてガーネム・アル＝アリ自体がそのようなものであったならば興味深いと思った次第です。ですから、動物・植物学考古学的な研究から何か言うことができれば興味深いので、このような話をした次第です。

西秋 私が思い出したのは、青銅器時代より少し前のウルク期のことです。イラクから、ウルク文化の人たちがシリアのユーフラテス河畔までやってきて、一つの都市の中の一画を占めて、全く違う建物を建てて住むのですね。全く別の文化を持った集団の居住区のようなものがあつた。

そのようなものの青銅器時代版というか、違う集団が同じところに住んでいたというようなものがこの青銅器時代にもあるのかなというのを調べたいということだったと思ったのですけれども。

大沼 そこまではいっていないですね。まだ。

西秋 そこまで言えるほど調査が進んでいない、ということですか。

大沼 まだ表面を掃除しただけだし、長谷川さんが作成してくれた遺跡プランの壁を追っただけの話ですから。

西秋 表面を掃除しただけでも、遺物は結構、採集できたのではないですか。同じ伝統の集団が同じ建物を建てていたら全然分からないですが、遺物の点では土器とか何かの作り方の違いとか、そのようなものを調べていけば集団構成について何か手がかりが得られるのではないかと。

大沼 長谷川さんはおそらく見ているので、アイデアはあると思うのだけれども、慎重だから言わない。だけれども、わたしは土器が全然分からないのです。石器の専門で。

西秋 わたしも同じですが。

大沼 少なくともクリーニングをした北西端の一部では、非常に分厚な大型の土器が多いですね、墓に伴うのかはよく分からないのですけれど。

常木 石器の違いはないですか。

大沼 石器は今回、クリーニングで1点も採集できなかったです。

常木 1点も採集できなかった？

大沼 西秋さんが砂漠のワディで採集したのと全く同じ石器、かなりの量ののだけれども、それはガーネム・アル＝アリのスクエア1の一画に集中していました。

西秋 さて、まだテルにみられる集団構成の問題と、ビシュリ台地の墓群とテルのデータをどのようにまとめるかという問題を議論したかったのですけれども、時間がなくなりました。それらは明日の総合討論に回すこととして、今日は、これで終了としましょう。

註

- 1) 岡田保良の報告も元来、このセッションでなされるべきのものであったが、日程の都合上、翌日の発表となった。

II 部

部族社会研究の視点

南レヴァント地方前期青銅器時代の都市化

山藤 正敏

ただいまご紹介にあずかりました早稲田大学大学院の博士後期課程の山藤と申します。本発表は、南レヴァントにおける都市化について、比較的新しい研究成果に言及しつつ、概略的にご紹介することを目的としております。このため、そのテーマをピンポイントに絞った研究発表としないことを御容赦ください。また、テル・レヘシュ (Tel Rehesh) に関しては、あとで編年を申し上げますが、今のところ EB Ⅲ期の土器がまとまって出土しているだけで、遺構に関してはっきりしたものが確認されておりませんので、本発表では取り上げないことといたしました。

まず、「南レヴァントにおける都市化」というものがどのようにとらえられてきたのかということについて、簡略にひも解いていこうと思います。前期青銅器時代の研究というのは、第2次世界大戦後に本格化し、さまざまな仮説が唱えられてきました。まず、その初期に提示されたものは進化主義的、伝播主義的なアプローチです (Lapp 1970 ; de Vaux 1971)。人類学において唱えられた文化進化論の観点を南レヴァントの都市化に適用したのがこれらの仮説であり、前期青銅器文化の形成自体を、北方からの新しい人間集団の到来に帰する立場です。つまり、都市文化の外来性を主張した仮説であると言えます。

この後、在地での発展を重視した新進化主義的な仮説が提示されるようになりました (Ben-Tor 1992 ; Mazar 1990 ; Richard 1987)。ただし、メソポタミアでの都市化など、外部からの間接的な影響の波及も示唆しております。上記の仮説から、周期的な変動の中で都市化をとらえるという立場が、だんだん台頭してきます。ここで周期的な変動というのは、南レヴァントの前期青銅器時代から鉄器時代にかけての文化的変化というのは、定住化と遊牧化の間での居住システムの変動・反復により特徴づけられるという仮説です (Finkelstein 1994 ; Portugali 1994)。つまり南レヴァント地域内での、その居住形態の変化こそが、都市化であったり都市の崩壊であったりするというわけです。これはその原因については述べていないものの、都市化を理解するうえでの大きな枠組みを提供したという点で、研究史上、有益な仮説であると言えます。

都市がどのようにして生じたかという問題について議論が進んでいくにつれて、そもそも都市化という現象が地域性を帯びていたのではないかという観点が生じてきました。特に、A. ヨフィー (Joffe) や I. フィンケルシュタインによる研究は、北部と南部の都市システムの差異というものを具体的に示したという点で、興味ある研究です (Joffe 1991 ; Finkelstein 1995)。

これまでご紹介した諸説というのは、ヨルダン川の西岸地域の調査に主として基づいたものですが、近年では、調査が進んできたヨルダン川東岸の調査成果から、都市に関する議論がなさ

れてきております。これらの研究では、都市の存在そのものへの疑問から研究が出発しております。一つめとして、S.E. ファルコナー (Falconer) がセトルメント・パターンの研究から、都市化に際して人口と遺跡が増加したのは、小居住地の増加によるものであることを当時のデータから示し、従来都市化と呼ばれていた現象の表層性を指摘しました (Falconer 1994)。また、G. フィリップ (Philip) などは、南レヴァントにおける都市を周壁集落と呼び直し、メソポタミアの概念にとらわれない南レヴァント独自の都市化についての理解を、すなわち、その特異性の理解というものを主張しています (Philip 2008; Chesson and Philip 2003)。以上、現在までの研究を概観しました。

次に編年との関係について見ていきます。南レヴァント地域の前期青銅器時代は、ごらんいただきますように大きく四つに細分されております。まず EB I 期というのは、およそ紀元前 3700 年ころから紀元前 3000 年ころまでに当たります。この時期に村落の定住社会が形成され、周辺地域との交流が活発化しました。続く EB II 期は、おおよそ紀元前 3000 年ころから紀元前 2650 年ころまで継続しました。EB I 期の最末期から EB II 期の初期にかけて都市社会が形成され、周辺地域との交流が活発化しました。そして、社会が形成されて以後、EB III 期にかけて発展していきます。具体的にはあとでも述べますように、城壁を有した遺跡が増加していきます。EB III 期というのは、ごらんいただいているように、紀元前 2300 年ころに終焉しますが、これと同時に都市社会も崩壊しました。EB IV 期は、紀元前 2200 年ころから 2000 年ころまでに当たりますが、この時期には多くの都市が放棄され、小居住地が非常に増加していきました。

なお、近隣地域との編年関係については、エジプトとの編年の整合性が非常に高いということが言えます。例えば第 1 王朝の初期と EB II 期の都市化、及び第 1 中間期と EB IV 期の都市崩壊期がほぼ対応しています。また、「シリア東部」における編年との関係では、EB I 期、II 期は若干ずれますが、III 期、IV 期とおおよそ時期的に一致していることがお分かりいただけると思います。

自然環境に関して説明いたします。ご存じだと思いますが、当該地域は、非常に狭隘の地域でありながら多様であるということが言えます。ごらんいただいておりますとおり、南レヴァントの地形というのは、縦に区分線を引くことができ、おおまかには、海岸部の平野、東に山地、さらに東にヨルダン溪谷、そしてその東に高地という具合に縞状を呈しています。中央の山地は北部で途切れており、その途切れ目には東西にイズレエル平野が広がっており、この平野は今も昔も耕作地として非常に重要であるということが言えます。

次に気候ですが、前期青銅器時代の気候は大きく二つに区別できると考えられます。まず、一つに、EB I 期から EB III 期にかけては、小規模の変動を繰り返しますが、基本的に湿潤な環境が継続します。このためにイスラエルでは通年的な河川の流れが存在し、定期的な氾濫により農耕に適した沖積地が形成されていたという説があります (Rosen 2007)。続いて、EB IV 期になると、状況は一変します。この時期には急激な乾燥化が生じて、気候が悪化したようです。これはシリアにおいても認められると聞いております。

最後は、古植生ですけれども、参考までに現在の 200 ミリと 300 ミリの等雨線を示しました。緑で示した部分は紀元前 3000 年ごろ、EB II 期の初めのころの、森林が卓越していたとされる地域です。この地域には、主にカシ類が生育していたと言われていいます。

セトルメント・パターンについても簡単に説明させていただきます。EB I 期と II 期、III 期に分けて見ていきますが、EB I 期では、総計 738 遺跡が確認されておりまして、西はイズレエル平野から、東はヨルダン渓谷方面にかけて、遺跡の分布密度が非常に濃くなっております。この一帯には、およそ 200 遺跡が集中しております。また、海岸平野には遺跡が南北に連続的に、比較的集中して存在していることが分かります。さらに死海南東方面のワディ・エル＝ハサ (Wadi el-Hasa) にもう一つ遺跡集中が認められることも、この地区の遺跡分布の特徴と言えるわけです。

次に EB II、III 期ですが、総計 562 遺跡というように、前時期に比べ大きく減少します。初めに、EB I 期において遺跡が集中していたイズレエル平野とヨルダン渓谷北部の状況を見てみますと、いずれの地域においても遺跡数が大きく減少しているということが分かります。また、遺跡の減少というのは、とりわけヨルダン河東岸地域に顕著に認められ、さらに死海の東岸地域においては多くの遺跡が利用されなくなった様子がうかがわれます。一方、EB I 期において、それほど遺跡の分布が認められなかった北部の上ガリラヤや、南西部のシェフェラーにおきましては、遺跡数の増加が非常に顕著です。以上から、EB I 期から II 期にかけて、遺跡分布に大きな変動があるということを取取できました。

都市というものを南レヴァントで議論する際に、メソポタミアでも同様だと思いますが、城壁、公共建造物、あるいは專業化等に特徴づけられるものとして捉えられてきたわけです。本発表においても、これらを都市の諸特徴として、以下個別に検討していきたいと思っております。

まず、城壁に関してです。城壁は、都市を区別する上で重要な項目として言及され続けてきました。従来、城壁を伴う都市の出現というのは EB II 期と考えられてきましたが、現在では、城壁ないし周壁というのは EB I 期の最末期から確認されております。示しておりますのは、城壁あるいは周壁を有する遺跡の分布図です (図 1)。左図が EB I 期末の分布図ですが、最近の論考によれば、どうもヨルダン渓谷においてその出現が最も早かったようでして、ここから城壁を有する都市が拡散していったと考えられる場合があります (Paz 2001)。EB II 期に入ると、城壁を有する遺跡が全域的に増加していきます (図 1 右)。しかしながら、グラフに示しておりますとおり、9 ヘクタール以上の規模 (ここでは大型ということにしましたが) と 4 ヘクタール以上の規模の中型の遺跡というものに比べて、4 ヘクタール未満である小型の遺跡の増加率がかなり大きいということが特徴です (図 2)。

城壁を有する遺跡の分布を見ましたが、どのような形態の城壁が認められるのか、今までの調査成果を提示しながら具体的に見ていきます。

ごらんいただいておりますのは、イスラエルに所在する比較的大型の遺跡に認められる城壁、あるいは城門です (図 3)。城壁にはいくつかの形態があります。1 つめは、アイ (Ai) や、あるいはテル・エル・ファラ北 (Tell el-Far'ah North) に見られるような直線型の城壁、2 つめは、ベ

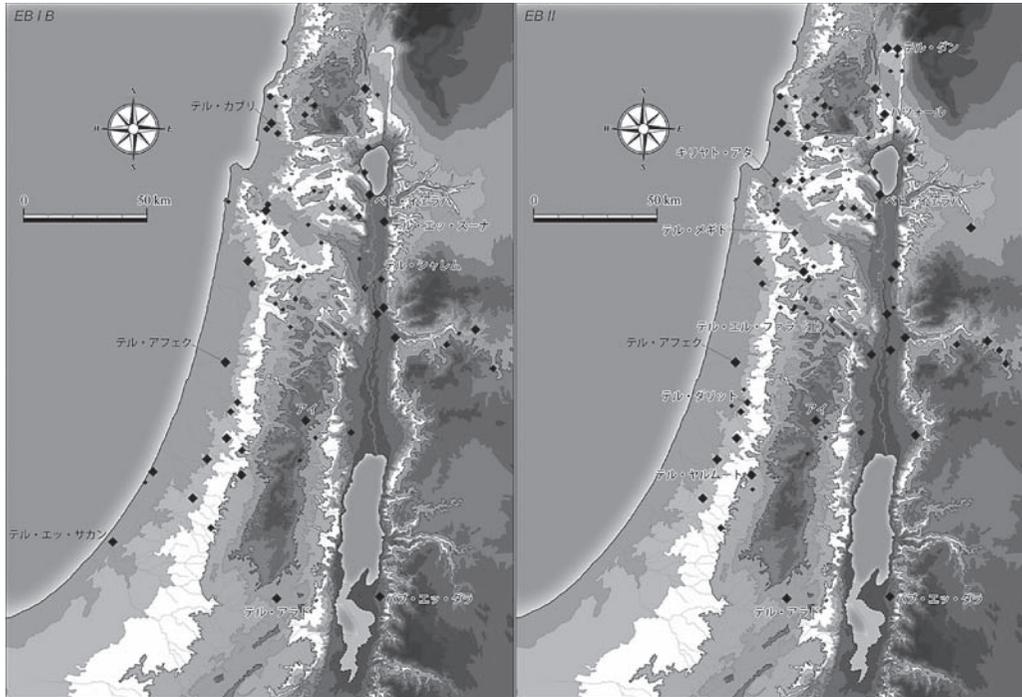


図1 周壁を有する遺跡分布図

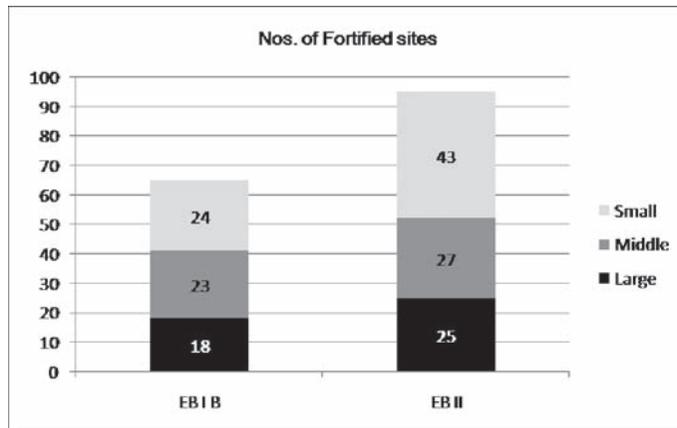
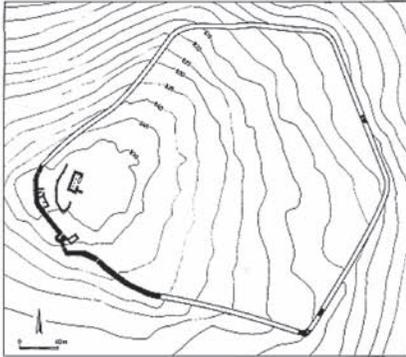


図2 周壁を有する遺跡数

ト・イェラハ (Beth Yerah) において認められるようなジグザグの城壁, そして3つめは, 南のアラド (Arad) に認められるような等間隔に円形の突出部を有する直線型の城壁です。これらの城壁は居住地を防御するためにあるとする説が近日まで一般的ですが, EB II期における周壁を有する小型遺跡の増加が非常に著しいことから, Z. ガル (Gal) が主張していますように, その一部は放牧に関する囲壁でもあったと考えられます (Gal 1992)。

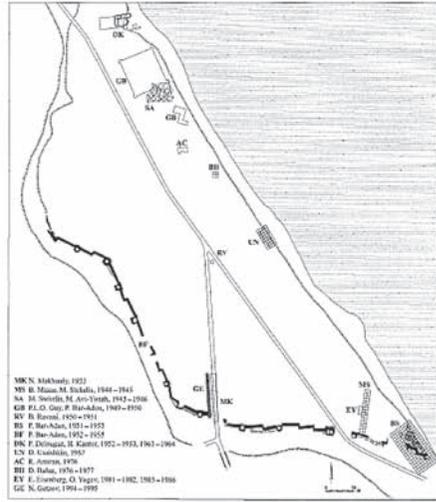
Fortification walls

Ai (Et-Tell)



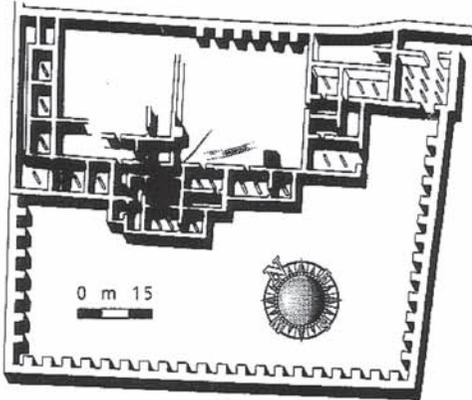
(Herzog 1997)

Beth Yerah



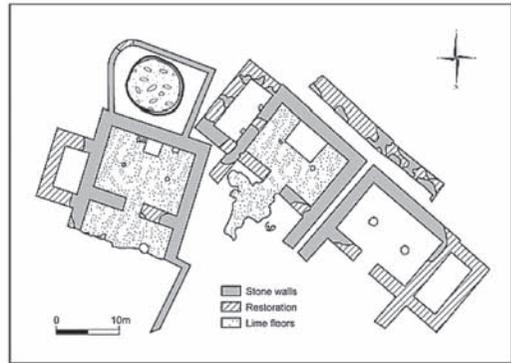
Public Buildings

Palace (Tel Yarmouth)



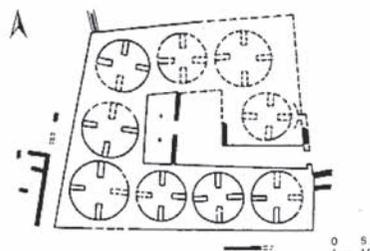
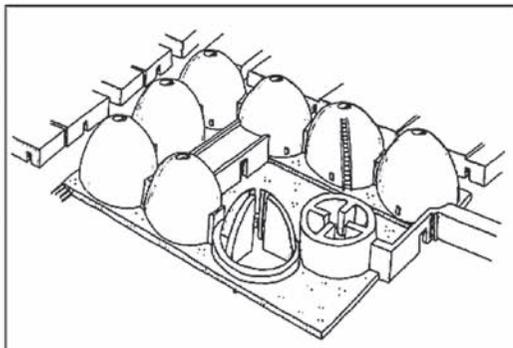
(de Miroschedji 1999)

Shrine (Tel Megiddo)



Megiddo, EB-MB shrine

Granary (Beth Yerah): Suggested restoration and plan



(Ben-Tor 1992)

図3 周壁と公共建築物

今度は、遺跡内に目を転じてみます。都市化に際して居住遺構の変化というのは、その形態に求められます。すなわち、EB I B 期には、比較的細長い楕円形の遺構が認められます。ここでは、テル・カシシュ (Tel Qashish) とキリヤト・アタ (Qiryat Ata) から検出されている遺構について検証します。テル・カシシュのほうはEB II 期になって都市が形成される遺跡ですが、こちらのほうは非常に断片的で、平面形がよく分かりません。しかし、キリヤト・アタではプランが明瞭で、楕円形を呈しております。ところがEB II 期になると、大型の遺跡においては矩形遺構が壁に接して連続的に認められるようになってきます。これは、テル・カシシュの平面プランを見れば明らかです。

また、矩形遺構の間には、南北に走る路地状の空間も認識できます。これはアラドやほかの遺跡においても同様です。ここで説明しましたのは、従来から主張されている変化です。しかしこの認識には大きな問題があります。というのは、EB I B 時期の遺跡の発掘というのは、短時期の遺跡かあるいは比較的目立つテル型の遺跡の一部に限られています。一部に限られているわけは、EB I B 期の居住層が通常最下部に非常に近いため、全面的な調査がこの層にまで達することは稀だからです。これは先ほど示したテル・カシシュのプランからも分かります。一方、EB II 期については、大型のテル型遺跡の発掘からその情報のほとんどが取得されておりまして、周辺の小集落の発掘がほとんど行われてこなかったという問題があります。すなわち、EB I B 期とEB II 期の居住構造というのは、互いに同水準で比較することが、実際のところ困難であるということです。

続いて、公共建造物について、EB II 期になると、このような建造物が各遺跡内に通常複数存在するようになってきます。種類がいくつかありまして、主なものとして、3つ上げることができます。1つが神殿です。ごらんいただいているのは、メギド (Megiddo) の神殿の跡ですが、この真ん中に見える円形の台座が、神殿の一部を構成する祭壇であると言われております (図3)。これとは全くプランの違うものが、ほかの都市遺跡でも認められています。また、貯蔵遺構ですが、これはベト・イエラハでしかいまだに認められておりませんが、復元すると図3のようになります。さらに、比較的最近見つかったのが、宮殿と称されるテル・ヤルムート (Tel Yarmouth) の遺構です。非常に大きな遺構です。1辺が75メートル超の正方形を呈し、パトレスを伴っており、他の遺構とは規模と構造が異なります。

今度は遺物について、見ていきたいと思います。都市化、すなわちEB II 期を特徴づける土器としてしばしば言及されるのは、硬質土器、いわゆる Metallic Ware と呼ばれる土器です (図4)。この土器の名というのは、たたくと金属のような音がすることに由来しており、胎土分析によって850度から950度の温度で焼成されたと考えられています。また、視覚的には、概して赤色で肌理の細かい精製土器と認識されています。この種の土器の胎土というのは、レバノンの南部に露頭が認められる、下部白亜紀に形成されたハティラ累層に起源をもつとされています。その分布はイスラエル北部において密に認められ、さらに、どうやらレバノンの沿岸部やベカー高原の諸遺跡においても出土しているようです。胎土分析とこれらの事実を踏まえて、その生産地はへ

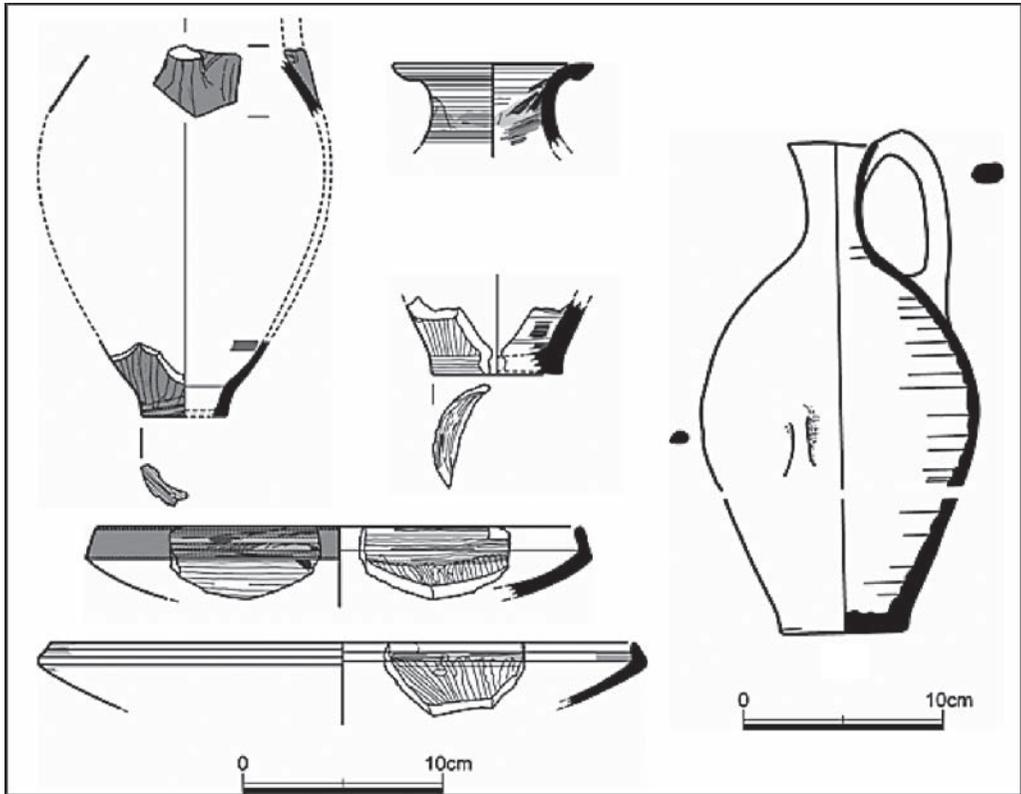


図4 硬質土器 (Tel Rehesh, Qiryat Ata 出土)

ルモン山麓の南に求められていますが、焼成遺構が見つかっていないため定かではありません。なお、硬質土器は、同時期に確認できるほぼすべての器種において認められております。

硬質土器について、もう少し詳しく検討していきたいと思います。まずその分布、すなわち流通域について、出土遺跡をプロットすると、現在のイスラエル北部全域に分布しているということがお分かりいただけると思います。さらに、北部ほどではありませんが、南部においても同様に土器が出土しており、かなり広範囲に流通していたということがうかがわれます。

図5は、出土土器に占める硬質土器の割合を遺跡別に示したものです。左から右にいくにつれて遺跡の所在地が推定生産地から南のほうに下って離れていきます。これを見るとおおよそ離心減少的な傾向を示しております。例外はキリヤト・アタですけれども、これについては今後詳細な検討が必要です。

このような分布を示す土器は前時期のEB I B期においては認められず、北部において出土する灰色磨研土器のように比較的広域に分布した土器でさえも、北部全域はおろか、南部にまで拡散することはありませんでした。

硬質土器の分布域は明らかになりましたが、今度は、質的な差異、すなわち地域による器形の差異が認められるのかどうかということについてです。図6は遺跡別、器種別に出土土器の数量

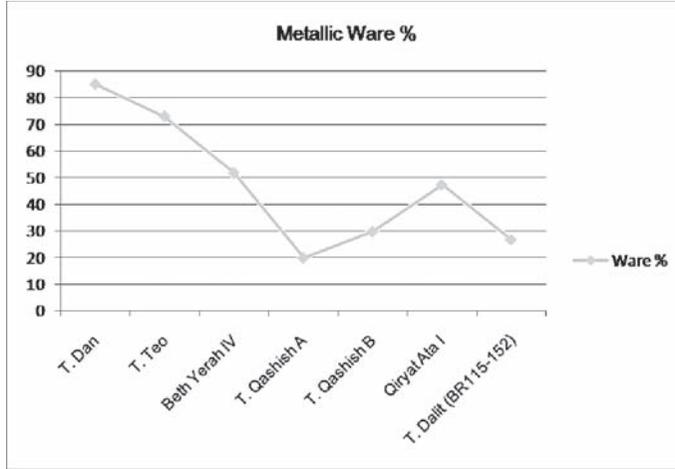


図5 硬質土器の遺跡別出土割合

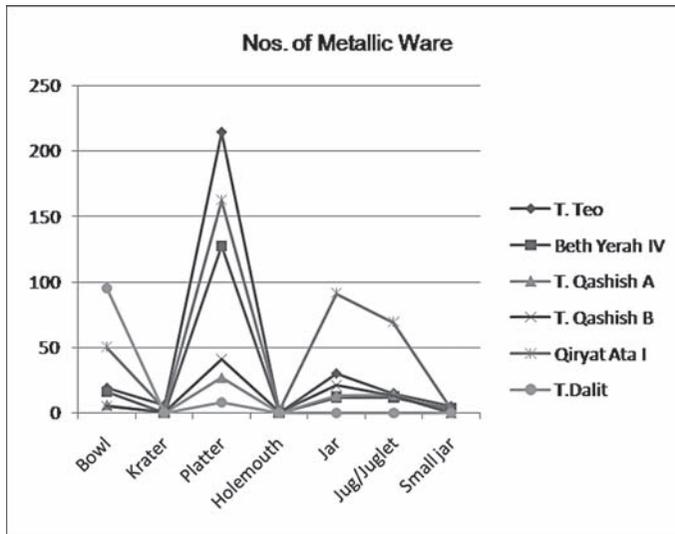


図6 硬質土器の器種別出土数量（遺跡別）

を示しています。図中、テル・ダリット（Tel Dalit）が唯一南部の遺跡です。この遺跡が他と違う点は、鉢形土器が非常に卓越しており、他器種があまり出土していないということです。

今度は、硬質土器を含めた製作方法の変化というものに着目して見ていきます。実は都市化の前後では、器面調整、とりわけ磨研の肌理の違いが認められるということが分かってきました。

図7では、北部の3遺跡における鉢形土器に施された磨研の肌理を示しています。X軸は磨研の幅を0.5ミリ単位で示し、Y軸は個体数を示しています。また黒色がEB I B期、灰色がEB II期の土器を表しています。観察した土器の数量に大きな差がありますので、改めて100分率で示してみますと、磨研の幅のピークが両時期ではっきりと分かれています。すなわち、EB I B

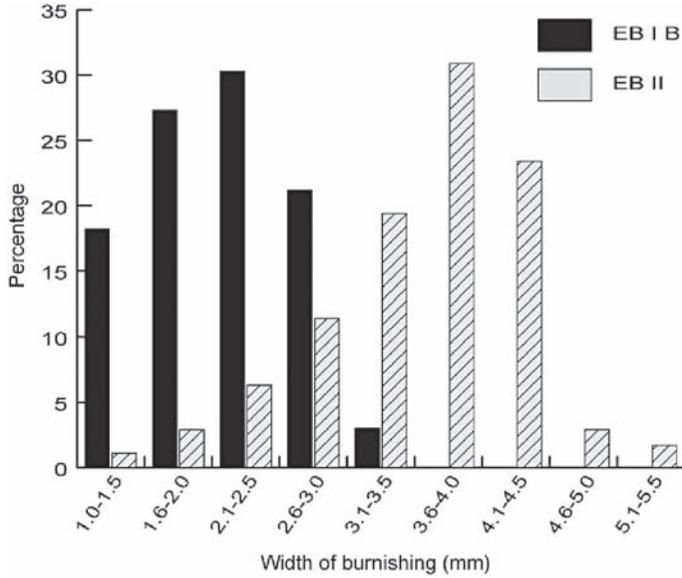


図7 磨研の幅 (%) (皿・鉢形土器)

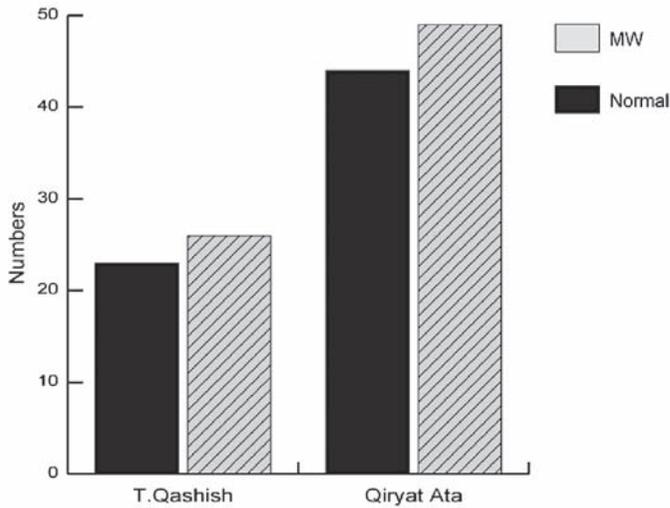


図8 磨研土器における硬質土器と非硬質土器の数

期におきましては肌理の細かい磨研が施されるのに対して、EB II期では比較的粗めの磨研が施されるようになるということが分かります。ところで、磨研土器の数というのはEB II期になると増加しますが(図8)、一方でEB I B期における磨研土器は、灰色磨研土器にほぼ限られます。

都市化以後については、EB III期に継続して発展していきます。そして、EB IV期、大体前2200年頃に衰退していきます。

結論に入ります。EB I B期から、II期、III期にかけての変化というものを追ってきましたが、

まとめますと、まず1つには、周壁が出現してくるということ。これは、今まで言われていることと同じになってしまうのですが、先ほどお見せした分布図のグラフを見ますと、どうも周壁が出現している遺跡で最も多いのは小型遺跡であったということが分かりました。また、EBⅡ期で取り上げなければいけない特徴として、公共建造物の出現が挙げられます。これも従来どおりの説ですが、EBⅢ期にかけて、用途が多様化していくということです。

また最後に、土器生産について見てきましたが、質と量の決定的な変化が生じるということです。硬質土器の存在がそれを示しておりますが、磨研の種類にも変化が生じたわけで、硬質土器に施される磨研は特徴的な粗いものに変化しました。なお、この磨研は、非硬質土器にも技術的に拡散しているという現象を看取することができます。

以上のことから考えるに、従来考えられていたような都市化観というものに比べ、議論が複雑化していくということが言えます。最終的に、原点に戻ってくるわけですが、都市化というものをどう捉えるのかという問題が残ります。これは、私自身が研究の途上にありますので何とも言えないのですけれども、どうもざっと見てきた限りで言えることは、二項対立の累積として都市化という事象を捉えていくのがよいのではないかと考えています。例えば、最初にご紹介しました定住化と遊牧化の周期的変動ですとか、あるいは、A. M. ローゼン (Rosen) が言っている低地と高地の生業の違いあるいは生産背景の違い、さらに、都市あるいは町と村落との二項対立、以上のような二項対立の累積から都市化というのを考えていけば、今まで見えていなかったネガの部分が見えてきて、都市というものをより適確に理解できるのではないかと考えています。

以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

引用・参考文献一覧

- Amiran, R., U. Paran, Y. Shiloh, R. Brown, Y. Tssafir and A. Ben-Tor (1978) *Early Arad I: The Chalcolithic Settlement and Early Bronze City, First-Fifth Seasons of Excavations, 1962-1966*. Jerusalem.
- Ben-Tor, A. (1992) The Early Bronze Age. In: *The Archaeology of Ancient Israel*, edited by A. Ben-Tor, pp. 81-125. New Haven: Yale University Press.
- Ben-Tor, A., R. Bonfil, and S. Zuckerman (2003) *Tel Qashish: A Village in the Jezreel Valley. Final Report of the Archaeological Excavations (1978-1987)*. Qedem Reports 5. Jerusalem: The Institute of Archaeology, the Hebrew University of Jerusalem.
- Chesson, M.S. and G. Philip (2003) Tale of the City? 'Urbanism' in the Early Bronze Age Levant from Mediterranean and Levantine Perspectives. *Journal of Mediterranean Archaeology* 16(1): 3-16.
- Falconer, S.E. (1994) Village Economy and Society in the Jordan Valley: A Study of Bronze Age Rural Complexity. In: *Archaeological Views from the Countryside: Village Communities in Early Complex Society*, edited by G.M. Schwartz and S.E. Falconer, pp. 121-142. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Finkelstein, I. (1994) The emergence of Israel: A phase in the cyclic history of Canaan in the third and second millennia BCE. In: *From Nomadism to Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early*

- Israel*, edited by I. Finkelstein and N. Na'aman, pp. 150-178. Jerusalem: Yad Izhak Ben-Zvi, Israel Exploration Society.
- Finkelstein, I. (1995) Two notes on Early Bronze Age urbanization and urbanism. *Tel Aviv* 22 : 47-69.
- Gal, Z. (1992) *Lower Galilee during the Iron Age*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Gophna, R. (1996) *Excavations in Tel Dalit*. Ramot. Tel Aviv: Tel Aviv University.
- Golani, A. (2003) *Salvage Excavations at the Early Bronze Age Site of Qiryat Ata*. IAA Report No. 18. Jerusalem: The Israel Antiquities Authority.
- Greenberg, R., E. Eisenberg, S. Paz, and Y. Paz (2007) *Bet Yerah: The Early Bronze Age Mound. Vol. I. Excavation Reports, 1933-1986*. IAA Report No.30. Jerusalem: The Israel Antiquities Authority.
- Herzog, Z. (1997) *Archaeology of the City: Urban Planning in Ancient Israel and its Social Implications*. Tel Aviv: Yass Archaeology Press.
- Joffe, A. H. (1991) Early Bronze I and the Evolution of Social Complexity in the Southern Levant. *Journal of Mediterranean Archaeology* 4(1): 3-58.
- Lapp, P. W. (1970) Palestine in the Early Bronze Age. In: *Near Eastern Archaeology in the Twentieth Century: Essays in Honor of Nelson Glueck*, edited by J.A.Sanders, pp. 101-131. Garden City, New York: Doubleday.
- Mazar, A. (1990) *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E*. New York: Doubleday.
- de Miroschedji, P. (1989) Le processus d'urbanisation en Palestine au Bronze ancien: chronologie et rythmes. In: *L'urbanisation de la Palestine à l'âge de Bronze ancien*, edited by P.de Miroschedji, pp. 63-79. British Archaeological Reports, International Series 527 (i). Oxford: British Archaeological Reports.
- de Miroschedji, P. (1999) Yarmouth: The dawn of city-states in southern Canaan. *Near Eastern Archaeology* 62: 2-19.
- Paz, I. (2002) Fortified settlements of the EB I B and the emergence of the first urban system. *Tel Aviv* 29 (2): 238-261.
- Philip, G. (2008) The Early Bronze I-III. In: *Jordan: An Archaeological Reader*, edited by R. B. Adams, pp. 161-226. London and Oakville: Equinox.
- Portugali, Y. (1994) Theoretical speculations on the transition from nomadism to monarchy. In: *From Nomadism to Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel*, edited by I. Finkelstein and N. Na'aman, pp. 203-217. Jerusalem: Yad Izhak Ben-Zvi, Israel Exploration Society.
- Richard, S. (1987) The Early Bronze Age: The Rise and Collapse of Urbanism. *Biblical Archaeologist* 50: 22-44.
- Rosen, A.M. (2007) *Civilizing Climate: Social Responses to Climate Change in the Near East*. Lanham, New York, Toronto, Plymouth: Altamira Press.
- de Vaux, R. (1971) Palestine in the Early Bronze Age. In: *The Cambridge Ancient History Vol.1, Part. 2* (3rd edition), edited by E. S. Edwards, C.J. Gadd and N. G. L. Hammond, pp. 208-237. Cambridge: Cambridge University.
- van Zeist, W. and S. Bottema (1991) *Late Quaternary Vegetation of the Near East*. Beihefte zum Tübinger Atlas des Vorderen Orients, Reihe A (Naturwissenschaften) Nr. 18. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

山藤正敏 (2008) 「前期青銅器時代Ⅰ-Ⅲ期パレスティナ地域におけるセトルメント・パターンの変遷と地域性」『西アジア考古学』9: 61-79.

山藤正敏 (2009) 「南レヴァントにおける広域分布土器の生産体制—硬質土器 (Metallic Ware) の分析から—」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生: 西アジア考古学最前線』169-190 頁.

初期遊牧民族の墓群と部族

高濱 秀

はじめに

私は、この「セム系部族社会の形成」の参考研究として、初期騎馬遊牧民族について研究しております。

前回、初期騎馬遊牧民族の墓が列をなしているという話をしました。もちろん初期騎馬遊牧民族の墓はすべて列をなしているというわけではなく、列をなすものがしばしば見られるということです。それはセム系部族の墓群と直接の関係はないかもしれませんが、何らかの参考になるかもしれません。

1 列をなす初期騎馬遊牧民文化の古墳群

この図は、ケレルメス古墳群の配置図です（図1）（Galanina 1997: Ris 2）。この古墳群は北カフカスにあり、黒海沿岸の初期スキタイの遺跡の中でも、最も古いものと考えられる一つです。この古墳群はこのように、西北から東南へ列をなしています。

中国で私の実見した例では、新疆ウイグル自治区の比較的西のほうで、伊犁に近い新源县附近の古墳群があります。発掘されていないので時期ははっきりしませんが、30基ほど、ほぼ列をなして並んでいました。

山地アルタイのトゥエクタ古墳群は、興味ある例として以前にも挙げたものです（図2）。南北方向の古墳列がたくさん集まって一つの墓地をなしています。その中には、大型の古墳からなる列が—列あって、その多くが発掘されています。もしこの古墳群が一つの部族の墓地だと仮定すると、この大型墳の列は、部族の中の有力な家系のようなものを想像させます。

そのほかにもアルタイなどでは、このような例がいくつもあります。これは有名なバジリク古墳群の分布で、地形の断面はこのようになっております（図3）（Marsadolov 1984: Ris 1）。古墳群はほぼ南北に並んでおり、築造の順序にはいくつかの説がありますが、L. S.マルサドローフ（Marsadolov）によると、南から北へ2号墳、1号墳、4号墳、3号墳とまず築造され、それから最も南の離れたところで、少し低いところにある5号墳が築かれたということです。これは、地形だけを根拠にしているわけではなく、副葬品だとか、墓の型式だとか、いろいろなことを勘案しての編年であり、多くの支持を得ているようです。

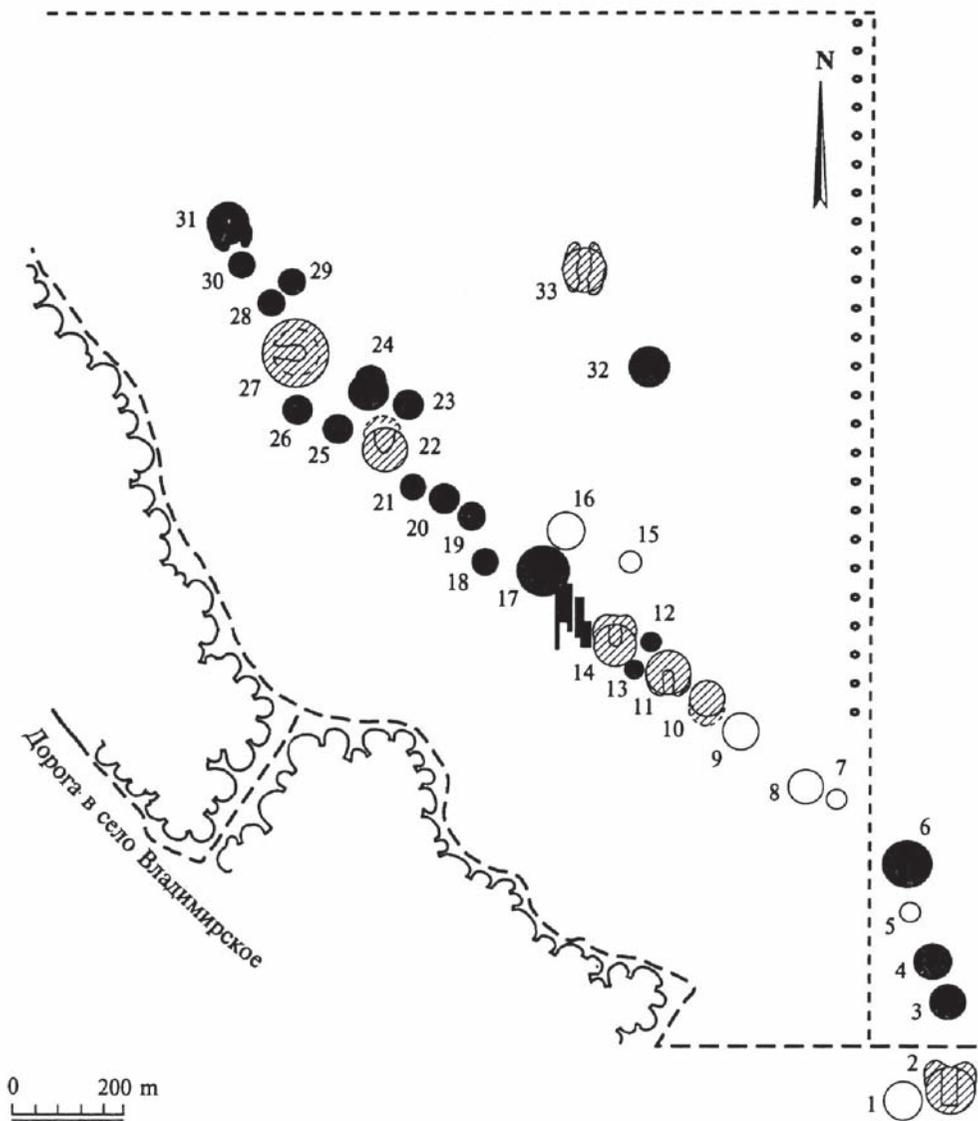


図1 ケレルメス古墳群

これはユステイド XII 古墳群です (図4) (Kubarev 1991: Pl. XVI). ユステイドにはいくつか古墳群がありますが、このユステイド XII が、その中でも一番数の多い古墳群です。発掘されていない1号墳は少し離れたところにありますが、2号墳からは非常にきれいに列をなしております。黒く塗られた古墳は調査されたもので、被葬者の性別、墓の構造、副葬品なども分かっております。バジリクやトゥエクタは、かなり大型の古墳からなる古墳群ですが、このユステイドや、次のバルブルガズなどの古墳群はもっと小さな古墳群で、葬られた人のランクも、もっと普通の人に近いだろうと言われています。

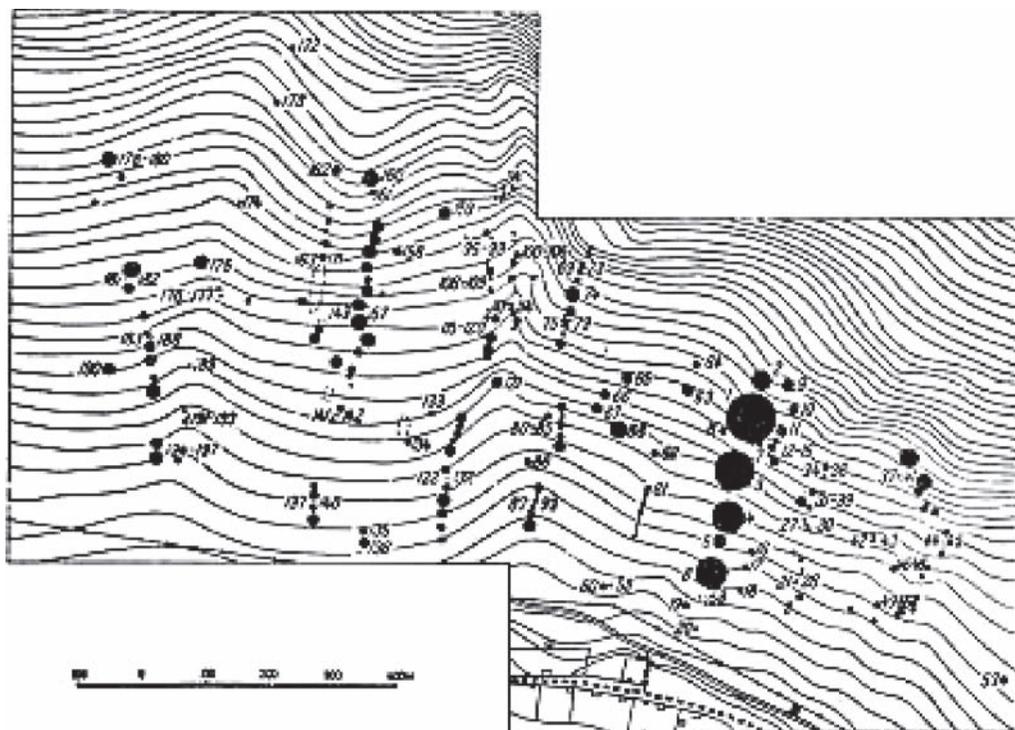


図2 トウエクタ古墳群

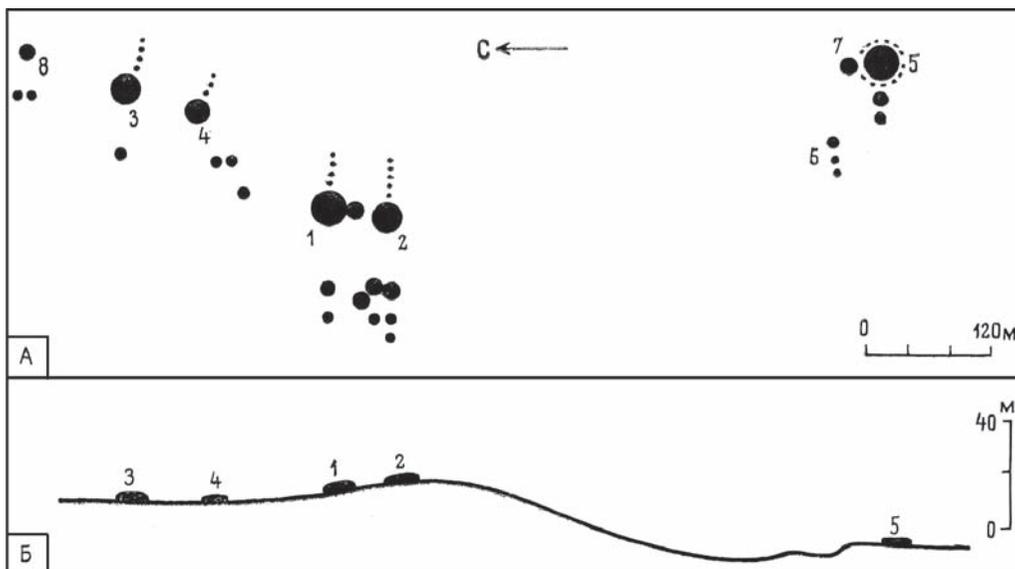


図3 バジリク古墳群

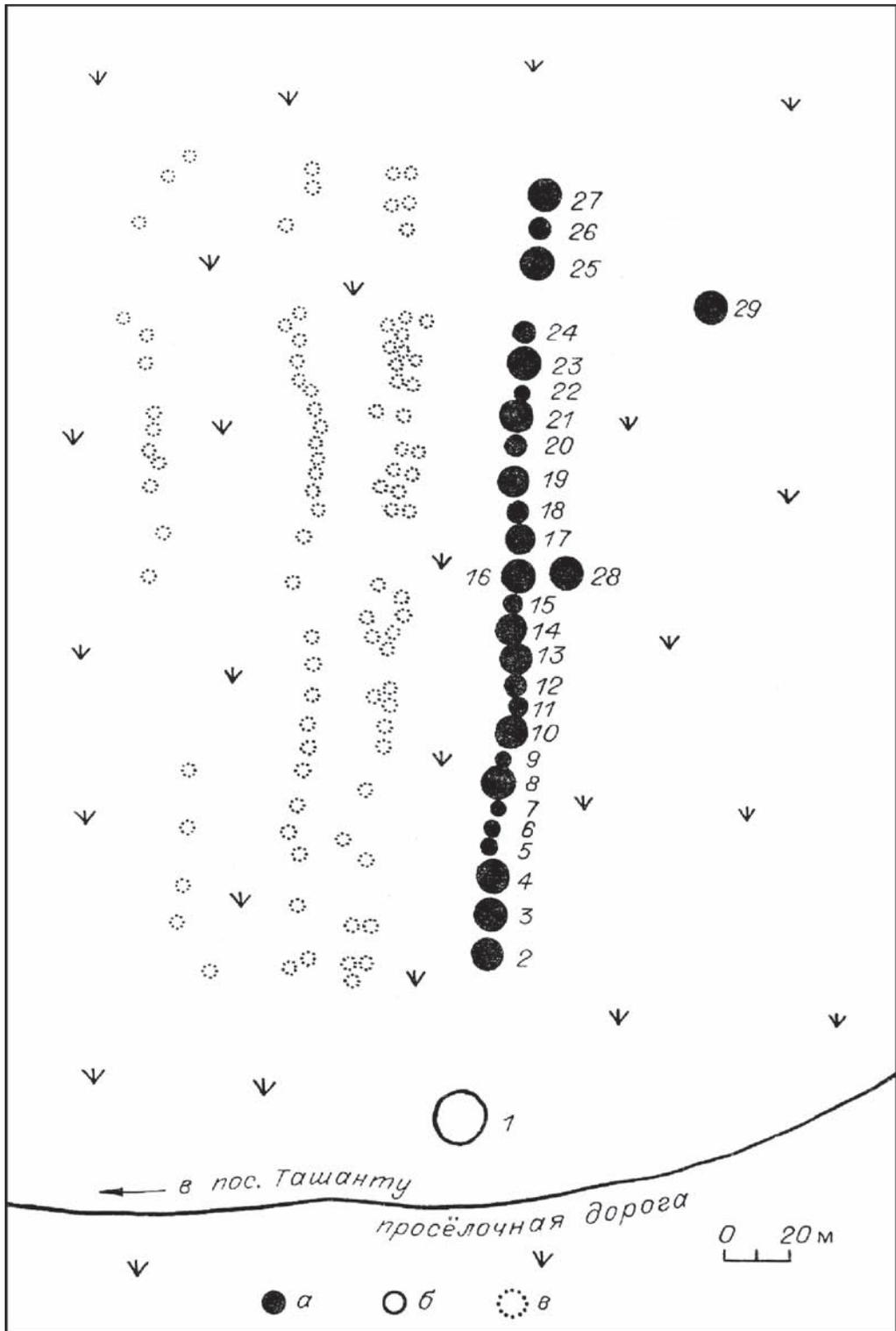


図4 ユステイドXII古墳群

このユスティド XII 古墳群は、大体紀元前 4 世紀頃と考えられていますが、そのなかで、17 号墳だけは、非常に特異な墓であることが指摘されております (Kubarev 1991: 34, 133-134)。年代も紀元前 3 世紀から 2 世紀にかけてであり、古墳群の他の古墳よりも、100 年あるいは 200 年近く遅いかも知れません。また山地アルタイの古墳群で、パジリク文化に属するとされるものは、普通主体部が木槨です。ところが、この 17 号墳は石槨であって、副葬品もない。それから、二人が合葬されているのですが、その外にまた殉葬されている人がおり、「奴隸」と言われています。パジリク文化では殉葬者は普通ありません。そのように極めて特異な、年代もほかのものよりもかなり遅い墓が、ここではなぜか、すでに築造された古墳列のなかに紛れ込んだような形で造られているのです。

これは、バルブルガズ I という、やはり山地アルタイの古墳群です (図 5) (Kubarev 1992: Pl. I)。ここでもまた面白い状況が知られています。これは、現在運河によって二つに分かれておりますが、元来も、北と南とに分かれていたことが推測されており、またそのそれぞれが 3 つぐらいのグループに分かれると考えられています。つまり、男女を合葬した墓、あるいは男性の単独埋葬の墓を中心として、その北か南に女性と子どもの単独の墓があることにより、一つのグループが形成されているのです。

例えば南側では、男性の単独の墓である 2 号墳と 3 号墳を中心として 1 号墳、4 号墳、5 号墳という女性と子供の墓があります。それから、7 号墳は男女合葬の墓ですが、その南にある 6 号墳は子供の墓、そしてその北に 8 号墳という女性の墓があります。そしてその北では、男性の墓である 11 号墳と 13 号墳が中心になっており、その南北に 9 号墳、10 号墳、12 号墳、14 号墳という女性と子供の墓があります。南側では、そのような構造になっていると推測されております。

また北側ではちょっと様子が違いまして、子供の墓はなく、女性と男性の単独の墓が、男女を合葬した墓の南北にあることが指摘されています。

一つのグループでは、男女の合葬墓である 22 号墳と 23 号墳が中心になり、その南北に 17 号墳、18 号墳、21 号墳、25 号墳という石棺墓があります。次には同じく男女合葬である 26 号墳が一つの中心となり、女性の墓である 27 号墳、28 号墳、29 号墳および男性の単独墓である 30 号墓と共にグループをなしています。発掘した V. D. クーバレフ (Kubarev) の見解では、そのようになります (Kubarev 1992: 112)。

このように考えますと、古墳の列は、単純に南あるいは北のほうから順番に造っていったというものではないこととなります。クーバレフによりますと、全体として、このバルブルガズ I の古墳群は、前 4 世紀から前 3 世紀のものが多いけれども、その各グループの中心になっている 2 号墳、13 号墳、それから 26 号墳は紀元前 5 世紀まで上がる可能性があるということです。そうしますと、それらの古墳が初めにぼつぼつと築造されて、その後その南北に、それぞれの縁者の墓が造られていき、最終的には直線に近い形になってしまったということになるのでしょうか。簡単には理解しがたいのですが、このような、きわめて単純な列をなしているように見えるものでも、その成り立ちは複雑であった可能性があります。

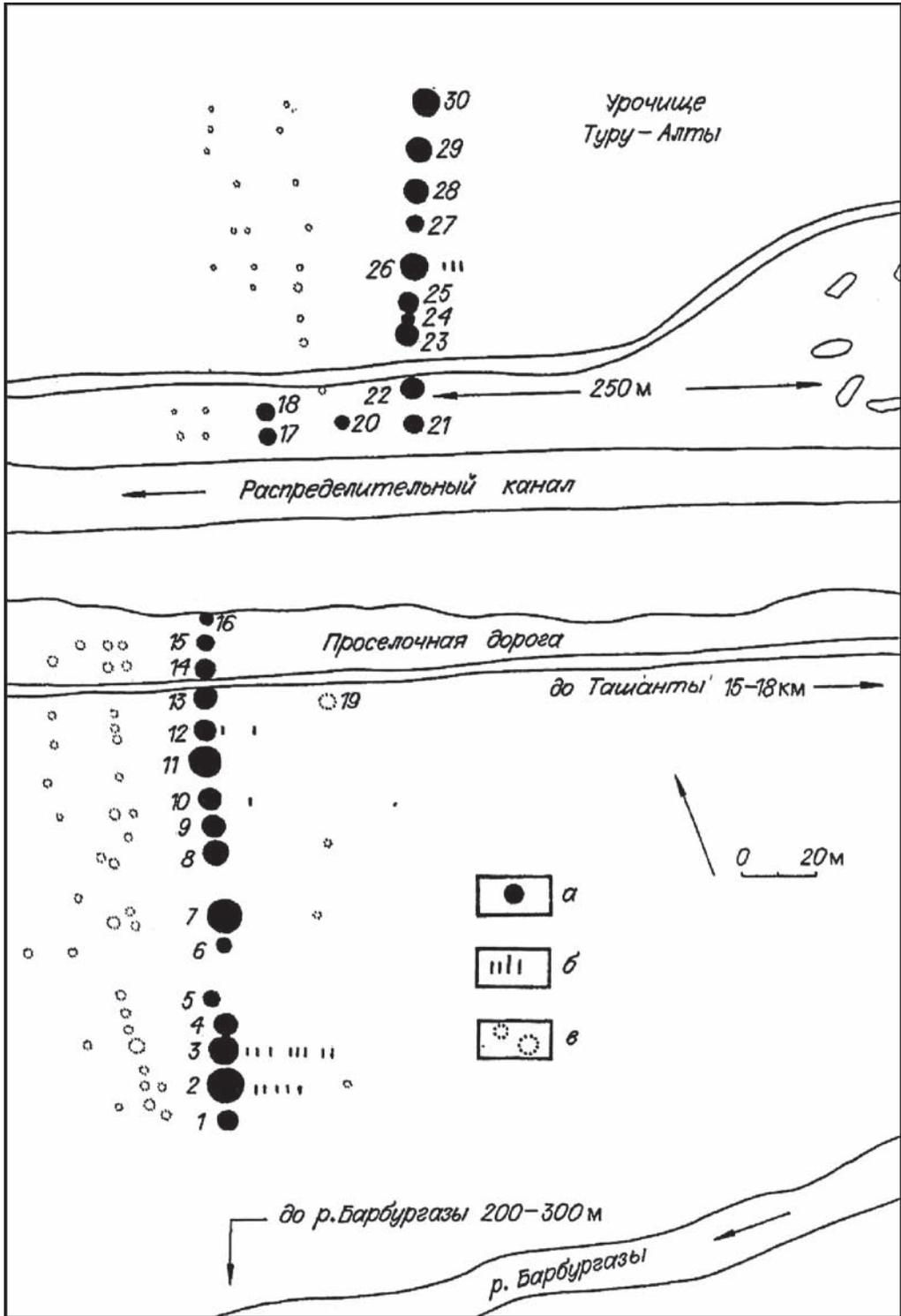


図5 バルブルガズⅠ古墳群

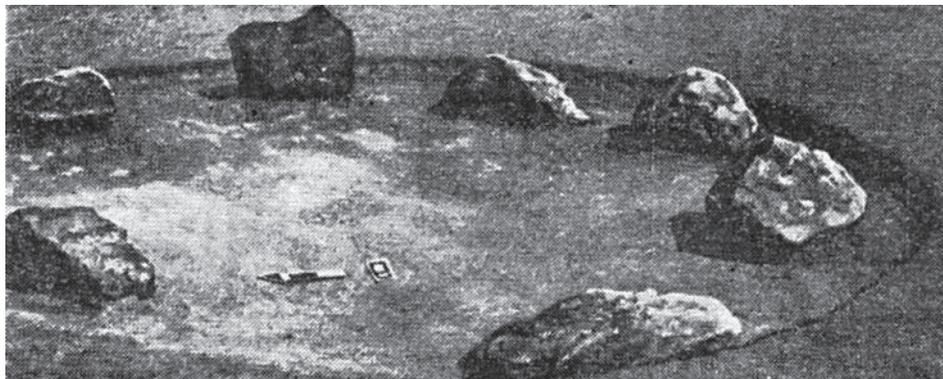


図6 ウランドリック古墳群の祭祀遺構

P. I.シュリガ (Shul'ga) が指摘しておりますが、アルタイには、このような列をなす墓が多いが、その被葬者の頭位は、列の方向に90度をなすということです (Shul'ga 2003: 31-36)。ウランドリック古墳群でも同様なことが指摘されています。

アルタイの古墳群には祭祀遺構とされるものが、しばしば付属しています (図6) (Kubarev 1987: Ris 4)。7つか8つほどの石で小型のストーンサークルを作ったもので、古墳の西側に多く配置されています。ここを発掘しますと、獣の骨を焼いたようなものが発見されます。類似した遺構は、初期騎馬遊牧民文化で最も古いと考えられているトゥバのアルジャン1号古墳の周囲にも知られており、また我々が調査しておりますモンゴルでも、似たものがヘレクスルの周囲に見出されます。

2 モンゴルのヘレクスル群

我々が調査しておりますモンゴルのオラーン・オーシグ I では、1号墳と12号墳という2つのヘレクスルを発掘して、なかに石棺を発見しております。1号墳の石棺からは何も発見されませんでした。その形はほぼ東西方向に長いと言えます。また12号墳からは子どもの骨が出ました。ただ、おそらく小動物によって攪乱されたため、人骨の本来の位置はわかりません。しかしこれも、石棺の長手のほうが東西方向に当たります。ヘレクスルは多くの場合東側に石堆が配置されています。また石堆から出土する馬の頭なども、鼻面を東に向けております。ヘレクスルという遺構全体として、東方向についてのこだわりがあるようです。

オラーン・オーシグでは、デルゲルムルン川の北側に、オラーン・オーシグ、つまり「赤い肺」という名前の山があり、その周囲、東、南、西側に10群ほどのヘレクスル群が分布しています。谷の中や、少しその奥まで入っているようなヘレクスル、ヘレクスル群もあります (図7)。ほとんど山麓に接しているようなヘレクスル群もあります。しかしオラーン・オーシグ I だけは、山に接してはおりません。少し離れた、開けたところにあります。



図7 オラーン・オーシグ周辺のヘレクスル



図8 オルト・ボラギンの大ヘレクスル

一般にモンゴルのヘレクスル群は、オラーン・オーシグに典型的に見られるように、大体は山の麓、それも南側を中心として分布しているようです。初期遊牧民文化について先にお話したような、一列になっている状況はあまり見ません。配置はむしろ山の地形に関連するようです。

また山から少し離れた位置に、かなり大型のものがあるようです。谷の中に大型の墳丘を造ることは出来ませんから、これは当然ともいえます。オラーン・オーシグ周辺でもかなり大型のヘレクスルがありますが、山から少し離れております。またオルト・ボラギンという遺跡には、モ

ンゴルでも屈指の、非常に大きなヘレクスルがありますが、それも山からは離れて位置していません(図8)。

簡単ですが、以上で今回の話を終わらせていただきます。

参考文献

- Galanina, L. K. (Л. К. Галанина) (1997) *Келермесские курганы. Степные народы Евразии*. Том I. Москва, Центр сравнительного изучения древних цивилизаций Института всеобщей истории РАН, Eurasien-Abteilung des Deutschen Archäologischen Instituts.
- Kubarev, V. D. (В. Д. Кубарев) (1987) *Курганы Уландрыка*. Новосибирск, Наука.
- Kubarev, V. D. (В. Д. Кубарев) (1991) *Курганы Юстьда*. Новосибирск, Наука.
- Kubarev, V. D. (В. Д. Кубарев) (1992) *Курганы Сайлюгема*. Новосибирск, Наука.
- Marsadolov, L. S. (Л. С. Марсадолов) (1984) О последовательности сооружения пяти больших курганов в Пазырыке на Алтае. *Археологический сборник* 25: 90-98.
- Shul'ga, P. I. (П. И. Шул'га) (2003) *Могильник скифского времени Локоть-4а*. Барнаул, Издательство Алтайского университета.

III 部

部族社会の歴史

イスラーム期以降のアラブ系部族の特徴

赤堀 雅幸

ただいまご紹介にあずかりました赤堀です。

すでに研究協力者が10月にビシュリ山系で若干の予備調査を実施しておりますが、来年3月に私自身が本格的に調査に入ることになりますので、その地域の諸部族に関しての具体的な報告は改めて機会をちょうだいすることにし、ここでは、人類学がアラブ系の部族というものをどのようにとらえているか、前提となっている部分について、お話ししていきたいと思います。

最初に部族概念の原義についてお話ししましょう。広辞苑では「人種・言語・文化などの特徴を共有し、一定の地域内に住んで同族意識を持つ集団で、文明に属するとされる集団には使わず、未開とされる地域の集団に適用されてきたという点で偏見を含む用語」という定義になっております。さすがになかなかバランスの取れた定義ですが、ポイントは、文化の共有と同じ土地に住んでいること、同族意識が部族に関わるというところです。他方では、「文明に属するとされる集団には使わず、未開とされる地域の集団に適用」とありますように、差別用語として使われてきた点の指摘も忘れられていません。実際、そうした差別用語としての使い方が過去にあったために、現在の人類学者は、中東以外では部族という用語をほとんど使用しません。特にアフリカ関係の人類学の学会で「部族」などと言うと、聴衆から物が投げつけられるのではないかとというような状況になっています。

ご存じのかたも多いかと思いますが、そもそも部族という語は「トライブ (tribe)」の訳語として作られました。「トライブ」はラテン語の「トリプス (tribus)」からきています。トリプスは、まだローマが共和制をとっていた最初のころの用語で、ローマ市民は三つの集団に分かれており、その3集団をまとめて呼ぶときにトリプスと言っていました。「トリ (tri-)」というのは「三つ」を意味しています。時代が進むにしたがってトリプスは細分化されていき、なおかつ集団としての性格も変わっていきまして、後には30、それから35というように増えていったそれぞれをトリプスと呼ぶようになって、最終的にはこれが「部族」の名前の由来になっています。

ただ、英語で「トライブ」と言った場合にむしろ思い浮かべられるのは、イスラエルの12支族の方かもしれません。この場合は「部族」ではなく「支族」と訳すことが多いのですが、「イスラエルの12支族」や「失われたユダヤの10支族」など、ユダヤの人々に関する通俗的な本の題名でよく見かけますね。それからもう一つ、北米では最近「トライブ」という用語が別の意味合いで使われていて、これも考慮すべきでしょうか。北米の先住民が先住民としての権利を与えられて認定先住民になりますと、それぞれトライバル・ガバメントというのを作って自治権を得

るという制度が確立しており、北米では先住民の自治集団をトライブと読んでいます。

人類学では「部族」という概念をどのように使っているかという点、これもいろいろです。かつてのアフリカ研究などで典型的であったのは、部族・氏族・系族という3段階の枠組みのなかで「部族」という用語を使うものでした。それは、部族がいちばん大きい集団で、部族はいくつかの氏族＝クラン (clan) からなっていて、さらにその氏族を作っているいちばん小さい集団を系族＝「リニイジ (lineage)」と呼ぶと定義するものです。クランというのはスコットランド語で、部族と氏族をこのように区別するやり方は今ではあまり見られません。系族の方は血統 (blood line) から出てきた語で、こちらは今でもしばしば使います。たとえば、実際に日常的にたがいに接触して、メンバー全員の顔が分かっているサイズの集団というのは、そんなに大きくないので、だいたい系族と呼んでおき、部族というのはそれより相当大きい集団を指して使います。アフリカ研究の場合には、部族というのは同じ言語を話している人たち全部を指す概念としてよく使われました。最近あまり見なくなってきましたけれども、「アフリカの何とか族」というように書いたり話したりするときの「何とか族」は、たいていの場合は何万人、何十万人、もしかしたら百万人以上もあるような一つの言語集団を指していました。現在ではこのような集団は他の地域と同様に「民族」と呼ばれます。

北米の先住民に関して使われてきた「連合」と「部族」と「バンド (band)」という言い方も、このアフリカ研究での使い方と似ています。バンドというのは、もともとは「一団の人間」くらいの意味の単語ですが、北米先住民研究ではこれを「系族」と同じように日常的に一緒に過ごす人々を指して用い、バンドがいくつか集まって部族というものになっていると考えました。部族というのは、西部劇に出てくる「モヒカン」「アパッチ」「チェロキー」などで、それら部族が集まって部族連合 (tribal confederation) というものを作るといような形で用いてきました。

ほかにも、オーストラリアを見ると少し違う用語法がみられたり、東南アジアではまた独自の用語法を採用していたりするのでありますが、おおざっぱにまとめれば、伝統的な社会の組織について、比較的大きめの集団のことを、人類学者は「部族」と呼んできたといつてよいでしょう。

こうした用語法に対して、たとえば「部族」と「民族 (nation)」というのはどう違うのだといった疑問が投げかけられてきました。それこそが「部族」という用語の使用が避けられるようになった原因でもあります。突き詰めて考えると部族と民族の間には——少なくともアフリカや北米、あるいは南米において使われてきた意味においては——本質的な差はなく、多くの場合、どちらの用語も言語集団を指して使われているのであって、結局のところ国家を作っているような大規模な集団は「民族」と呼んでおいて、国家を作らないような集団、あるいは人々から未開と見なされるような集団は「部族」と呼んできたにすぎないといふところに行き着いてしまうのです。

差別的な意図がなくても、これに類する見方に立った人類学の理論としては、社会進化論が思い浮かびます。この理論は、1950年代ぐらいに盛んで、60年代からだんだん聞かなくなって、だれもはっきりと否定しないまま、ただ忘れ去ったかのように宙に浮いているのですが、その論

客の一人であったサーリンズという人類学者は、政治組織の進化論として、バンド、部族、首長制 (chiefdom)、国家 (state) というように繰り返り上がっていくというアイデアを示しています。バンドという猿で言えば群れのようなものが、やがてより大きな部族になり、やがて集団を代表する人間が出てくると首長制の段階に進み、首長がより明確な統治行為を行い、そのための機構を整備するようになると、国家と呼べるようになるというわけです。

ところが、こうした部族をめぐる人類学の議論一般の展開の中で、アラブ研究は例外的な位置を占めているのです。アラブ研究は、実は人類学の中ではなかなかの鬼っ子で、最近まであまりやる人もいなかった分野です。というのも、これまでの人類学理論から見るととんでもないこと——とんでもないというのがよろしくなければ——うまく説明のつかないようなことを、アラブの人たちは慣習としている場合がしばしばあるのです。たとえば、父方平行イトコ (男性から見て父方のオジの娘) と結婚したがるというのは、世界的に見るととてもめずらしいことです。イトコと結婚したほうがいいという社会はたくさんあるのですけれども、普通は母方の交差イトコ (男性から見て母方のオジの娘) と結婚しようというのが一般的で、父方平行イトコというのはきわめてめずらしいのですね。レヴィ=ストロースというフランスを代表する人類学者は、昔、「これは人類史におけるスキャンダルである」と言ったほどです。なぜスキャンダルかというのは話が長くなるからやめておきますけれども、部族に関してもご同様に、今まで部族研究が盛んであったアフリカあるいは北米の先住民の研究の常識から見ると、アラブ系部族というのはなかなか変なところが多い。ごく簡単に言ってしまうと、アラブ系部族、少なくともイスラーム期以降のアラブ系部族というのは、社会集団としてはきわめて例外的であるというのが本日の発表の結論であると言ってもよいほどです。

アラブの部族について、いくつかの特徴を挙げていきましょう。

まず、旧来の人類学的な意味においては、アラブの全体が一つの部族だと言うことができるという点を押さえます。アラブは一つの言語集団ですし、しかもアブラハムの子イシュマイル (アラビア語ではイスマーイルですね) を始祖としているところから、自分たちが一つの血統集団であるというとらえ方もしております。7世紀のアラブの大征服までは、アラビア半島で一つの地域にまとまって暮らしていた集団であったということからも、アフリカ研究で用いられてきた用語法ではアラブ全体を「部族」としてとらえることが可能です。

しかし、アラブ全体を一つの「部族」ととらえると言っていたのでは、あまり研究として意味を持ちません。アラブ研究で通常に言われている部族は、もっと小さな集団です。「部族」は、アラビア語で一般的に使われるカビーラ (*qabila*) やアシーラ (*'ashīra*) やアーイラ (*'ā'ila*) やバイト (*bayt*) といった概念に相当する用語として使われます。そのなかでも、もっとも一般的で、通常「部族」と訳すのは「カビーラ」です。ただし、なぜかはよくわからないのですけれども、ビシュリ山系を含めてシリアでは、アシーラの方がカビーラよりも一般的に使われます。エジプトなどでは、『ターリーフ・アルカバーイル・アルミスリーヤ (*Ta'rikh al-qabā'il al-Miṣriyya*)』、つまり『エジプトにおける諸カビーラの歴史』というような題名の本を見かけますが、なぜかシリ

アに行くと同じような本が『ターリーフ・アルアシャーイル・アルスーリーヤ (*Ta'riḥh al-'ashā'ir al-Sūriya*)』, つまり『シリアにおける諸アシーラの歴史』というように名乗ることが圧倒的に多くなります。

アーイラというのは「家族」の意味でも使うのですけれども、家族よりかなり大きな集団の意味で使う場合もひんばんにあります。バイトは、定住民の家屋や遊牧民のテントを指す概念ですけれども、やはりこれも50世帯、60世帯の集団を指して使う場合があり、まれにはカビーラよりはるかに大きな集団を指して使われることもあります。

アラビア語に「部族」に対応する概念があることに加えて、アラブ系部族のもう一つの特徴は、中東においては部族と国家の共存が常態であるということです。先ほどご説明した社会進化論の常識からすると、部族というのは首長制や国家が現われてくるとだんだんなくなってしまうはずですが、ところが、中東の歴史では部族と国家はある種の共生関係にあって、両者の関係は動的かつ多様に展開していると考えられます。皆さんもよくご存じと思いますが、イブン・ハルドゥーンが『歴史序説』で展開した王朝循環論なども、部族と国家が常に共存していることを前提にしないと作れない論理です。古代からの王朝と帝国の歴史を持つ中東で、なぜ部族は消えてしまわないのかというのは、中東の人類学にとって大きな問いとしてあります。

アラブ系部族の第3の特徴は、父系出自の原則の徹底です。父系出自というのは、お父さんからお父さん、さらにそのお父さんへと自分の血統をたどる原則です。お母さんとも血はつながっているわけですが、お母さんの側はあくまで親戚であって、自分の一族というのはお父さんの側だけと考えるのが父系出自です。当たり前のような気がするのですが、これを徹底させている集団というのはめずらしくて、中東でもイラン系やトルコ系は、出自自体は父系ですが、これを集団の構成概念としてアラブのように使っている例は遊牧民でもまれです。家族から始まって、50世帯とか60世帯くらいからなるキャンプまではイラン系、トルコ系遊牧民の場合にも、おおむね父系の出自集団と見なすことができますが、それより大規模な集団になると、父系の原則は急速に有効性を失ってしまうのが常です。

アラブは、どこまでも、父系出自の原則をかたくなに守ろうとする傾向が顕著です。わたしと同じ年で、調査のときにテントを貸してくれたベドウィンの名前が、アブドゥッナーシル・ハーリド・ハミード・サーリフ・ジハル・アブドゥルガッバーラ・アッサナグリーといました。これは自分の名前がアブドゥッナーシル、お父さんがハーリド、お父さんのお父さんがハミード、さらにそのお父さんがサーリフとたどって行って、途中から少ずつ2、3代ずつ名前が飛び始めて、自分のアーイラ（リニイジ）の始祖の名前、カビーラ（部族）の始祖の名前、カビーラの集合体であるマジュムア・アルカパーイルの始祖の名前というようにたどっていくという名乗り方です。人の名前一つをとってみても、父系出自の原則が徹底されているわけです。

こうした出自原則の徹底が何の役に立つのかというと、まずは遊牧における資源分配の仕組みとしての働きというのがあります。遊牧民は広い地域をどんどん移動していき、その広い地域を全部自分の土地とすることなどできないわけですから、他人様の土地を使わせてもらわないと遊

牧を続けることができません。そこで、他人の土地に行ったときに「この水場を使わせてくれ」「この牧草を使わせてくれ」と頼むためには、「俺とおまえは同じ部族の人間なのだから」という論理が使われます。これが中東の遊牧民では、部族に属していることの大きな利点としてありました。

もう一つ、軍事的凝集の論理としての働きというのがあります。例外もいくつかあるのですが、ベドウィンの間では多くの場合、支配者の家系というのが決まっています。それぞれの世代で傑出した人間がいれば、その人物が集団を率いることになっています。そうすると、ふだんはベドウィンの間には決まったリーダーはいないのに、いったん緊急事態が生じ、これに対応できるリーダーたりえる優れた人間がどこかにいるときに、その優れた人間を中心に急速に団結対処するというのがベドウィンの流儀になります。何らかの軍事組織があるわけではなくて、血統の原理に基づいた集合のしかたが、そのまま軍事集団を形成するのです。

以上を整理すると、アラブ系部族というのはきわめてまれな、かなり純粋な領域的分節的父系出自集団を構成している、とまとめることができます。英語では territorial segmentary patrilineal descent group と呼ばれます。この用語を構成している単語を後ろの方から「出自 (descent)」、「父系 (patrilineal)」、「分節的 (segmentary)」、「領域的 (territorial)」の順に、もう一度説明しましょう。

「出自」というのは、簡単にいえば血筋とか血統のことです。ベドウィンは、祖先との関係を非常によく覚えて、大切にしているわけですが、それが何の役に立つかという、先ほど申しましたとおり、「おれとおまえは同族なんだから、この水場を使わせてくれ」とか、「おれとおまえは同族だから一緒に戦うんだ」というような形でおたがいの間に仲間の関係を作り出す働きをします。出自という概念は、簡単に言えば、祖先との関係が今生きている人間の間の関係を規定するという仕組みなのです。

この仕組みがかなり有効に機能するのは、実は先ほどお話しした父系の場合と、もう一つ父系とは対照的な母系の場合の二通りしかないと考えられています。「父系」というのは、出自を父に父にとたどっていくのに対し、「母系」というのは逆に母に母にとたどっていくやり方で、東南アジアなどに広く見られます。この二つは、それぞれの世代に自分の祖先は1人しかいないというシステムを作るので、今生きている人間をきれいにいくつかの子孫集団に分けることができるという特徴があります。

ところが、お父さんの方も祖先だし、お母さんの方も祖先ですと言われると、事情はだいぶ異なってきます。双系といわれるこのやり方では、1世代前に2人、2世代前には4人、3世代前には8人と、世代をさかのぼるほどにたくさん祖先がいることになってしまいます。この方法では、誰が祖先であるかによって、人間をたがいに重ならないグループに分けていくという、父系や母系の出自で可能なことができません。わたしは何かという集団にも入っているし、かんとかという集団にも入るしという形で、重複する集団が社会の中にたくさんでき上がってしまいます。ハワイやマダガスカルに暮らす人々のように、それをうまく利用している社会もあるわけ

ですけれども、それはアラブたちがやっている方法とは全く異なります。アラブの場合、始祖がムハンマドで、ムハンマドに二人の息子アフマドとハサンがいるとしたら、アフマドの子孫である人物は、絶対にハサンの子孫ではありえず、しかし、アフマドの子孫とハサンの子孫は、ムハンマドの子孫という意味では、父系出自を共有していることが容易にわかります。

その次が「分節」です。分節とは何かというと、「大きさは違うが、構造的には等質な集団が積み重なって全体ができあがっている」ということです。これも少しわかりにくいですが、カビエラが複数のアーイラの集合体であると同時に、カビエラという大きな集団もアーイラという小さな集団も、どちらもある祖先の父系の全子孫を含んでいるという意味においては、構造的には等質だという場合を指して「分節的」と呼んでいます。小さな組織がいくつかまとまって大きな組織になっていくというのは、人間の組織として当たり前ですが、普通はレベルが違うごとに違う組織原理が働いたり違う役割を持たされたりします。ところが、ベドウィンの場合は、小さな集団から大きな集団までだいたい似たような作りになっているわけです。これも先に述べましたが、トルコ系やモンゴル系の遊牧民では、途中から組織原理が出自ではなくなってしまう。

最後に、「領域的」ということす。アラブ系部族というのは、人間を大きな部族からだんだん小さな集団へと分けていくわけですが、それが同時に空間の分類にも対応しているために「領域的」と呼ばれます。世界各地で部族や氏族と呼ばれてきたものを調べてみれば、同じ部族や氏族に属している人たちが一緒に暮らしている例はけっして一般的ではありません。あるカテゴリーに分類される人たちが、空間的にもまとまっているのが「領域的」とあるということであり、領域的な分節出自集団では、自分たちのアーイラの隣には、自分たちにいちばん出自の近いアーイラがいて、それらがまとまってカビエラになり、カビエラとしてのまとまった土地がそこででき、自分たちにいちばん出自の近いカビエラがその隣の土地にいるという関係が成立します。「近くにいるやつほどおれたちと血統が近いはずだ」というのが大原則で、全体としては空間の分類と人間集団の分類が対応する形をとります。

部族と氏族という概念を使い分けるときに、この領域性を問題にすることがしばしばあります。そこでは、血統でつながっている人々だけれども、空間的にはまとまっては暮らしていないような集団を「氏族」と呼んでいます。血統を意識していて、1年間に1回お祭りのときなどに集まるのだけれども、ふだんは全然違うところに離れて暮らしているというような場合です。韓国などにみられる宗族などはこれにあたります。部族という用語は逆に、原則として同じ部族に属する人たちが一緒に暮らす場合に用いることとなります。

四つもの用語によって限定されていることからわかるように、アラブ系部族は社会集団として、人類学がこれまで研究してきた「部族」と呼ばれる集団の中ではきわめてめずらしいタイプに属します。どうもそんなにまれなタイプだとは見えないのが困りものですが、父系出自集団はわりとありふれていても、それが徹底して「分節的」で「領域的」とあるというのはなかなかありません。領域的分節的父系出自集団の研究を最初にやったので有名なのは、エヴァンス・プリチャードというイギリス人の人類学者で、スーダンを舞台にした民族誌『ヌエル族』はかつて、人類

学を学ぼうとする学生の必読書でした。しかし実は、エヴァンス・プリチャードが後にヌエルに適用されることになる領域的分節的父系出自集団の理論を思いついたのは、カイロ大学で彼が先生をしていたときのことで、そこでアラビア半島の諸部族の親族関係と婚姻に関してロバートソン・スミスが書いた本を読んだのがそのきっかけであると言われています。つまり、そもそもの出発からして、領域的分節的父系出自集団の理論はアラブに適合するものであったといえるわけです。

最後に、まだ決着のついていない生態人類学上の議論ですが、この特殊な社会組織は、寒冷地帯や乾燥地帯のような、人間にとって生存がかなり厳しい条件下で大距離の移動を伴う生活、単純に言えば遊牧のような生業に適合しているという説が有力であることを付言して、発表を終わらせていただきます。

【質疑応答】

西秋 ありがとうございます。われわれが「部族、部族」と言っていたものがどのようなものかというのを、丁寧に解説していただきました。

わたしから質問させて下さい。カビーラやアーイラなど、部族の単位、大きさというのですか。非常に大きい部族から小さい部族の単位までであるとおっしゃいましたけれども、それは、本人たちがそのような意識で決めたものということなののでしょうか。それとも、血統とか、血縁が非常に近いどこかで区切る。どのようなことで大きい、小さいが決まっていくのですか。

赤堀 部族的集団の大小は、地域ごとの自然環境や政治状況にかなり左右されます。どこへ行っても必ず見つかるのは、核家族を単位とした集団で、核家族が集まってできあがる、人類学だとコンパウンドなどと呼ぶ共住集団も一般的にみられます。そうした共住集団は、1人の男性と結婚した複数の女性とその子供からなっていたり、兄弟と彼らの妻子の集まりだったり、父子とその妻子だったりします。それからもう一つ、遊牧民に一般的にみられる単位としては、農民であれば村に相当するような、何らかの形で共同作業が生じるような集団があります。キャンプと呼ぶことが多いですが、たがいに顔と名前が一致するような関係にある集団と思ってください。これらの集団は人々にとって、日常生活の中で親しみのある集団であり、たいていはアーイラかアシーラの名前を与えられます。シリアの場合は、アシーラがけっこう大きい集団を指して使われるので、アーイラと呼ばれることが多いでしょう。

そこから先は、一時的にでもどれぐらい大きい集団を構想する必要があるかで、かなり集団の組み上げ方は異なってきます。アシーラやアーイラより大きな集団で、「部族」と訳されることの多いカビーラのサイズは様々で、せいぜい200世帯ぐらいで一つのカビーラと言っているところがあるかと思うと、2,000世帯ぐらいないとカビーラにならないと言っているところもあって、人数も千人単位から数十万人単位の間で揺れます。これはひとえにカビーラというのが日常的な活動を共同で行うような単位ではなく、その意味できわめて政治的な集団概念であるためです。

西秋 ありがとうございます。では、これで赤堀さんの発表を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

前2千年紀におけるアムル人、アラム人とアッシリア

山田 重郎

序

アッシリアとは、言うまでもなく北メソポタミアはティグリス川の西岸に位置する古代都市アッシュル市にその起源を持つ国であり、紀元前2千年紀初頭には、同市とその周辺の限定的な領域を支配する都市国家であった。このアッシリアは、前2千年紀半ば過ぎ、特に前14～13世紀に、衰退していくフリ系国家ミッタニ（あるいはミタンニ）と入れ替わるようにジャジラ地域に急速に覇権を確立し、ユーフラテス川大湾曲部をはさんでアナトリアの大国ヒッタイトと対峙する大国となった。そして、拡大した領土を多数の行政州に分割統治する広域支配の行政システムを確立した。しばしば中期アッシリア帝国の名で呼ばれるこの広域支配国家は、前12世紀以降、西方からのアラム系遊牧民の侵入（後述）の結果、その領土の一部を失って衰退するが、前10世紀から、アッシリアの諸王はその失われた歴史的固有領土「アッシュルの地（アッカド語で *māt Assur*、ギリシア語のアッシリア）」を頻繁な軍事遠征の結果回復し、その後前8-7世紀には、東はザグロス山脈から西はアナトリアとエジプトに及ぶ前例のない領土的広がりにより多民族多言語を内包する新アッシリア帝国を形成した。¹⁾

こうした、アッシリアの歴史のうち、特に紀元前2千年紀のそれを考える上で重要な2つのセム系遊牧民集団として「アムル人」と「アラム人」を取り上げて、半遊牧的生活様式と部族的組織を持ち、都市社会と対立・共生する諸集団を形成したこれらの人々とアッシリアとの関係についてまとめるのが本稿の目的である。同時に、国士舘大学発掘隊がシリア北東部ハブル川中流域のテル・タバンの遺跡で発見した楔形文字文書史料をアムル人とアラム人をめぐるテーマの中に位置づけてみたい。

1 アムル人とアッシリア

(1) 前2千年紀前半のアムル人のメソポタミア侵入とアムル系王権

アムル人（シュメル語で *Martu*、アッカド語で *Amurrû*）は、ビシュリ山付近のシリア砂漠外縁を故地とする西セム系言語を話す遊牧民諸集団の一般的名称として前3千年紀後半以降のメソポタミアの楔形文字文書史料に頻繁に言及されている。アムル人諸集団は、前3千年紀末には、一部はメソポタミアの都市社会に吸収されて都市文明の構成要素となる一方で、なおメソポタミアに

波状的に来襲する暴力的侵入者としてウル第3王朝滅亡の一因になったことは、周知のとおりである。²⁾

アムル人諸集団は、前2千年紀に入ってウル第3王朝滅亡後のメソポタミア各地で主要都市の支配を掌握し、バビロン、マリなどでアムル人王朝が誕生した。こうした都市支配者として成り上がったアムル人有力者に関するデータとともに、移動性の高い(半)遊牧的アムル系諸集団の動向に関して特に多くのデータを提供するのはユーフラテス中流域のマリから出土した大量の粘土板文書である。そこには、部族的紐帯で結ばれたアムル系遊牧民とマリのアムル系都市王権との共生関係に関して多くのデータが残されている。2005年と2006年に国士舘大学発掘隊がテル・タバノ(古代のタバトゥム/タベトゥ)において発見した前18世紀後半に由来する一群の粘土板文書は、特にマリ王国没落後のポスト・ハンムラビ時代のユーフラテス中流域のテルカ(テル・アシャラ)のアムル系都市王権とハブル川流域のタバトゥムのアムル系住民の関係について新しいデータをもたらすものである。³⁾

(2) アッシリア王名表に見るアムル系諸部族とアムル人

アッシリア国家とアムル系諸部族の関係に関して興味深いデータを提供するのは、「アッシリア王名表」と呼ばれるアッカド語で書かれた文書史料であり、現在まで前1千年紀に由来する5つの粘土板写本が知られている。⁴⁾ 比較的保存状態のよい3つの写本に保存されたこの王名表の冒頭部分には、アッシリア国家とアムル系部族集団との関係を示唆するデータが含まれている。

アッシリア王名表の主要部分は、前3千年紀末あるいは前2千年紀初頭からのアッシュル市の王の名を並べるリストであるが、これに先行するアッシリア王名表冒頭部分は3つの異なる性格のリスト(第1~3セクション)から構成されている。⁵⁾ 第1セクションは、部族名あるいは地名と見られる17の名からなり「17人のテントに住む王たち」と説明される。第1セクションに「王名」として言及される17の固有名詞は、「ハンムラビ王朝系譜(Genealogy of Hammurabi Dynasty)」と呼ばれるバビロン第1王朝の祖先のリストを含む儀礼文書をはじめ、バビロニア起源の諸史料に言及される多くのアムル系部族の名を含んでいる。⁶⁾ 特によく知られている部族名としては、西セム系の人名の構成要素として頻繁に現れるディダヌ(Didānu)やマリ文書中でユーフラテス中流域の「遊牧民」を指して頻出するハヌ/ハナ(Hanū)が含まれている点が注目される。

王名表の第2セクションは、イラ・カブカブ(Ila-kabkab)とアミヌ(Aminu)で終わる10の人名を含み「10人の父祖である王たち」と説明される。イラ・カブカブは、前18世紀に北メソポタミアのシュバト・エンリル市(テル・レイラン)を行政首都として北メソポタミアとマリを含むユーフラテス中流域の広域に王国を確立したアムル系部族出身のシャムシ・アダド(サムシ・アッドゥ)の父の名であり、アミヌはシャムシ・アダドの兄と見られる。したがって、この第2セクションはハンムラビに先だって北メソポタミアを拠点にティグリス・ユーフラテス流域を広く支配し、アッシュル市をも行政支配下に置くことで既存のアッシュル市の都市王朝に代わって同

市の王権を掌握したアムル人支配者シャムシ・アダドの系譜を記しているものと考えられる。

王名表の第3セクションは、6つの人名を含み「彼らの（治世の）リンム（紀年職名）は知られていない、レンガ〔の家に住んだ（？）〕6人の王たち」と説明される。ここには、ウル第3王朝滅亡後にアッシュル市を支配したフリ系・アッカド系の王の名が年代順に配列されていると考えられる。おそらくは、治世年数や系図情報が不完全であるために個別のグループとしてまとめられたものであろう。第3セクションに続く王名表主要部分には、その後アッシュルを治めた王の名、その父の名、統治年数が規則的に記録される。王名はおおむねアッカド系であり、7人目には前述のシャムシ・アダドがあらわれる。

こうした王名表の複層的構造は、北メソポタミアにおいて理想的王としての名声を後世に残したシャムシ・アダドのアムル系の部族的・家族的ルーツを反映するリスト（第1～2セクション）を、ウル第3王朝滅亡後にアッシュル市を支配した王たちのリスト（第3セクション以下）の前に配置することで、前者をアッシリアの王朝史において政治思想的に重要な場所に位置づけようとする編集者の意図を反映している。

アッシュル出土の断片的な史料から推察するに、シャムシ・アダドの家系は、比較的短期間（3-4代）アッシュル市を支配下においた後、アッシュルにおける支配を失ったとみられ、アムル系王朝によるアッシュル支配は、アッシュルの歴史において短いエピソードに終わった。⁷⁾ その後のアッシュル市とその周辺において、アムル人がどのような役割を果たしたのかに関しては、ほとんどデータがない。おそらく、アムル人は、人口構成要素の一つとして後のアッシュル市とその周辺に残ったと推測されるが、その後のアッシュル市の文書史料にアムル語の人名がほとんど見出されないことからみて、言語文化的にアッカド語文化に吸収されていったものと思われる。

2 アラム人とアッシリア

(1) アラム人の進出とアッシリアのアラム化

先述のように、アッシリアは、前14～13世紀にフリ系国家ミッタニと入れ替わるようにジャジラ地域に急速に覇権を確立し、後の新アッシリア帝国の基礎となる広域支配のシステムを確立した。それに続く前11世紀から、この確立されたアッシリア固有領土内に侵入し、都市や村落を略奪、支配して、アッシリアに一時的衰退期をもたらす主たる原因となった人々が、半遊牧的なライススタイルを持ち部族的・民族的紐帯で結ばれた集団を作って移動するアラム人諸集団であった。⁸⁾ その後アラム人は、北レバントからメソポタミア各地に至る広い地域に複数の小国家や部族領土を作って定着していった。北レバントとジャジラでは、アラム・ダマスコ、ビート・アグシ、ビート・アディニ、ビート・バヒヤン等の小国家を形成し、バビロニア各地では、より小さな部族的領土を支配する諸集団としてティグリス・ユーフラテスの周辺に定着した。前1千年紀の新アッシリア帝国は、頻繁な軍事遠征によってこれら多くのアラム人集団を服属させて帝国の構成要素として取り込むことで人口バランスと言語文化において急速にアラム化した。⁹⁾ 従

ってアラム人は新アッシリア帝国に対してきわめて重要な政治的・文化的影響を与えたわけだが、これは、主として前1千年紀の歴史現象であるので、この発表の範囲を超える。

(2) 前2千年紀後半におけるアラム人のメソポタミア進入

前2千年紀末のアラム人に話を戻す。アラム人の故地は、アッシリアの王碑文における言及から察するに、シリア砂漠の外縁地域、ビシュリ山の周辺を含めてユーフラテス大湾曲部からレバノン山脈にかけての地域とされ、地理的には、アムル人の故地とほぼ一致するのように見える。

アラム人についての最初の言及は、前12世紀末から前11世紀初頭の世紀の変わり目にアッシリア王ティグラト・ピレセル1世の王碑文に現れるアフラム・アラマーヤ (*Ahlamû-Aramāya*) という表現であり、後に触れるが、ティグラト・ピレセル1世は、ユーフラテス中流域からレバノン山のふもとに至るまでの各地で頻繁にアフラム・アラマーヤと戦ったことを記している。*Ahlamû*の正確な語義は未だ不明だが、おそらく固有の民族集団を意味する語というよりも都市住民からみた遊牧民略奪者を表す語であると推定される。これが正しければアフラム・アラマーヤとは「アラム(語)系略奪者」を意味したと考えてよからう。¹⁰⁾

アラム人のアッシリア領土内への侵入開始とその段階的拡大はティグラト・ピレセル1世(前1114-1076年)とアッシュル・ベル・カラ(前1073-1056年)の王碑文にたどることができる。前11世紀初めにアラム人と戦ったティグラト・ピレセル1世は、その複数の王碑文においてユーフラテス川沿いにバビロニアからカルケミシュに至るまでの各地、ならびにビシュリ山に近いシリア砂漠外縁地域でアラム人を退けたと主張する。¹¹⁾

ティグラト・ピレセル1世の王碑文には、アッシリア軍とアラム人諸集団の軍事衝突地点が列挙されており、アッシリア軍が成功裏にアラム人諸集団をユーフラテス川のラインで食い止めて、ジャジラへの侵入を阻止したことを示している。ところが、アッシュル出土の年代記断片に見られる記録¹²⁾や行政文書に現れるアッシリアの行政州名¹³⁾から推測するに、ティグラト・ピレセル1世の治世晩年には、アッシリアはアラム人のためにジャジラの各地でかなりの数の都市や村落を喪失していたと思われる。そして前11世紀前半のアッシュル・ベル・カラの治世(前1073-1056年)には、状況はアッシリアにとって一層悪化した。アッシュル・ベル・カラの Broken Obelisk と呼ばれる石碑の記述によれば、アッシリア人はカシヤリ山(トゥル・アブディン)、ナブラ(ハブル・トライアングル内)、「マリの地の」マグリス(ハッサケ?)、ドゥル・カトリナム(テル・シェイフ・ハマド)を含む多くの場所で「アラム人(*Arumû*)」と戦っている。¹⁴⁾ここから、アラム人諸集団の前線は、中期アッシリア時代にジャジラに確立されたアッシリア固有領土の内側に侵入してきたことが見て取れる。戦場としてマグリスとドゥル・カトリナムが挙げられていることは、ハブル川下流地域がアラム人によって脅かされたことを示している。マグリスは、「マリの地のマグリス」と呼ばれている。このときに「マリの地」の首都であったタベトゥ市(テル・タバノ)からは、中期アッシリア時代に由来する多様な楔形文字史料が出土している。¹⁵⁾そのうちの1点が、断片的ながら「アラム人」に言及する。そこで、この史料にふれて、

稿を結びたい。

(3) テル・タバンの新史料

問題の史料は、粘土製円筒碑文断片 (Tab T06-20) であり、後述するように、おそらく前 12 世紀末から前 11 世紀はじめにタベトゥ市の君主であったアッシュル・ケタ・レシル 2 世による建築記念埋蔵物とみられる。類似するアッシュル・ケタ・レシル 2 世の円筒碑文断片のテキストに照らして破損箇所をある程度補ったうえで、碑文断片は以下のように音訳、翻訳される。¹⁶⁾

1. [i+na KA-i K]Á.GAL ra-bi-te「šá」x [.....]
2. 「ma-am」-ma la DÙ-uš^{giš}IGI.ME[Š i+na KÁ-i KÁ.GAL ra-bi-te la iš-ku-nu(?) ù(?)]
3. ^{md}Aš-šur-ZI(!)-SI+IGI MAN KUR A A I[0-EN-gab-be šar māt Māri mār Adad-bēl-apli šar māt Mārīma(.....)]
4. it-te mi-lik tē-mi-šu ū[m-da-lik-ma]
5. ù KUR(.A-ri-mi.MEŠ BÂD [ù KÁ.GAL ša^{urru}DÙG.GA-be-te]
6. É.GAL-LIM MAN-ti-ia x [.....]
7. a-na ni-「šir-te」ù 「MI」x [.....]
8. ^dIŠ[KUR ^dAMAR.UTU (^d30 ^dUTU) lik-tar-ra-bu-ni-ma]

翻訳：

- 1'-2. [私の祖父たちのうちの (?)] 誰も [……] 大城門 [の入口に……] を建設し, [大城門の入口に]扉を [据え付けた者はなかった. しかし]
3. [マリの地の王アダド・ベール・アプリの子であるマリの地の王] ア [ダド・ベール・ガベ] の子, マリの地の王アッシュル・ケタ・レシルは, [(……)]
4. 彼自らの知性によって熟 [慮し……]
5. ならびにアラム人ども [の来襲にそなえて (?)] タベトゥ市の] 城壁と [城門を建設し……]
6. 私の王宮, [……を……]
7. 防備 [……のうち] に [置いた……]
8. アダ [ド神, マルドウク神, (シン神, シヤマシュ神) がその基礎を常に祝福してくださいますように……]

(以下破損)

文献学的な詳細についてここで論ずることはしないが、いくつかのポイントに触れたい。まず、テル・タバンの出土文書史料からは、2 人のアッシュル・ケタ・レシルなる王が知られている (本稿末尾の表を参照)。一人は、前 13 世紀後半の王アッシュル・ケタ・レシル 1 世であり、この王の王宮文書庫に属する大量の行政文書が 2005 年に出土したことでその存在が明らかになった。¹⁷⁾

もう1人は、テル・タバんとテル・ブデリから出土した多くの円筒碑文に言及される王アッシュル・ケタ・レシル2世であり、この君主のいくつかの円筒碑文の奥付は、彼がアッシリアのティグラト・ピレセル1世と同時代の前11世紀の人物であることを示している。¹⁸⁾ 3行目のアッシュル・ケタ・レシルは確実に後者である。

3-4行目に残る一節がアッシュル・ケタ・レシルを3人称で「彼自らの知性によって熟〔慮し〕 (*itte milik tēmišsu i[m-da-lik]*)」としているため、6行目で1人称で「私の王宮」とするこの碑文の著者である王とは区別すべきと考えれば、碑文の著者はアッシュル・ケタ・レシル2世よりも後の王であるとも考えたくなる。しかし、1人称と3人称が不規則に交換する不可解な現象は、アッシリアの王碑文にもしばしばみられるし、何らかの書記の誤記もあり得なくはない。そうであれば、この碑文の著者は、きわめて類似した碑文断片が多数出土していることからみて、アッシュル・ケタ・レシル2世自身である可能性が高いと判断される。

5行目に言及されている KUR(.i)A-ri-mi.MEŠ は、文脈に不明瞭なところはあるものの、明らかにアラム人集団を指している。ここでは、アラム人を表す *Arumû* が、アッシリア方言特有の母音同化によって所有格で *Arimî* として表れているものと考えられる。アラム人への言及は、テル・タバんと出土碑文においても、現在までのところこの1点だけであるが、この種のアラム人への言及がテル・タバんと出土碑文にあらわれるのは、歴史的に見て驚くに当たらない。

考古学的コンテクストも以上の結論と矛盾しない。問題の円筒碑文は2006年に発見された中期アッシリア時代の墓の主室内に堆積した土砂の中から発見された。¹⁹⁾ 埋土のより低い地点（ほぼ床直上）から出土し、本来、墓のアーチの一部を構成したと考えられる文字入りレンガ (Tab T06-26) には、「マリの地の王エテル・ピー・アダドがその息子エンリル・アブラ・ウツルのために（これを）建てさせた。」と記されていた。エテル・ピー・アダドはアッシュル・ケタ・レシル2世の曾祖父にあたる。このことは、墓は早世した息子のためにその父王エテル・ピー・アダドによっておそらく前12世紀中頃に建設されたことを示唆している。問題のアラム人が言及されている円筒碑文が発見された埋土は、前12世紀より後になって墓が何者かによって破壊された後に墓室を埋めたものであろう。

アラム人に言及する円筒碑文の著者がアッシュル・ケタ・レシル2世であるなら、このことは、テル・タバんとその近隣のテル・ブデリ出土の複数の円筒碑文に知られる王の建築事業と結びつけて評価されるべきであろう。テル・タバんと出土の6点の円筒碑文断片 (Maul 2005, nos. 5-8//Tab T 05B-47//Tab T 08-3) は、この王の城壁と城門の建設を記念しており、さらに前述の Tab T06-20 のほか Tab T07-5 と Tab T07-7 も同一か類似した碑文であると判断される。また、テル・タバんと出土の最大の円筒断片 (Tab T07-4)²⁰⁾ は、アッシュル・ケタ・レシル2世によるタベトウ「上市」の城壁の拡大・再建を詳しく記しており、Maul 2005, no. 4 は部分的にこれに似る。テル・ブデリ出土の多数の断片ならびにテル・タバんと出土の断片1点 (Maul 1995, Zylinderinschrift A//Tab T07-8)²¹⁾ は、アッシュル・ケタ・レシル2世のテル・ブデリ (古代名ドゥル・アッシュル・ケタ・レシル) の要塞化を記念している。別の出土地不明の個人所蔵の円筒

(Maul 1995, pp. 35-41) は、王がテル・タバンの北方に位置したと思われるアダリシュフ市を占拠し、そこに宮殿を建て、城壁をめぐらせたことを記している。その他、城壁の建設を記すもう1点の円筒碑文断片 Tab T06-19 は、円筒ならびに文字の形状、用語の類似性から見てこの王に帰される可能性がある。

こうした一群の円筒碑文は、アッシュル・ケタ・レシル2世が、タベトゥ市とその周辺の防備に極めて意欲的に取り組んだことを示している。これは、おそらくは、その治世において、周囲を取り巻く政治的・軍事的環境が特に緊張していたことを反映しているように思われ、その一因には、当該地域へのアラム人諸集団の侵入があったと推察される。

今後、テル・タバンを含むハブル流域の調査が、アッシリアの西方フロンティアにおけるアラム人集団の活動に関して、更なるデータをもたらすことが期待される。

表 テル・タバンの出土史料ならびにその他文書史料に知られるマリの地の王

王名	父の名	治世時期
アッシュル・ケタ・レシル1世	X	前13世紀半ば～末
アダド・ベール・ガベ1世	アッシュル・ケタ・レシル1世	前12世紀はじめ
エテル・ピー・アダド	アダド・ベール・ガベ1世	前12世紀前半／半ば
マヌル・ヤウ	Y	前12世紀後半（前1133年ころ）
アダド・ベール・アプリ	エテル・ピー・アダド	前12世紀末ころ（前1109年ころ）
アダド・ベール・ガベ2世	アダド・ベール・アプリ	前12世紀末／11世紀はじめ
アッシュル・ケタ・レシル2世	アダド・ベール・ガベ2世	前12世紀末／11世紀はじめ
エンリル・シャル・イラニ	アッシュル・ケタ・レシル2世	前11世紀前半
リーシュ・ネルガル	アダド・ベール・ガベ（1世？）	時期不明、アダド・ベール・ガベ1世の子？
アダド・アブラ・イディナ	Z	時期不明、マヌル・ヤウの子？

註

- 1) 領土国家としてのアッシリアの国家形成については、Postgate 1991, 柴田 2008 を参照。
- 2) 前3千年紀末から前2千年紀前半（ウル第3王朝時代、古バビロニア時代）のアムル人に関する基礎研究として、たとえば Kupper 1957; Buccellati 1966; Edzard 1989; Ambar 1991; Charpin 2004. 簡潔な概説として山田 2006. また、特にウル第3王朝時代のアムル人のバビロニアへの移動に関しては、中田 2006 を見よ。
- 3) Yamada 2008. これらの文書の発掘に関しては、Numoto 2008 を参照。
- 4) これらの5つの写本については、Grayson 1980-1983, pp. 101-115; Cf. Glassner 2004, pp. 136-145.
- 5) アッシリア王名表冒頭部分の分析については、Larsen 1976, pp. 34-40 ならびに拙論 Yamada 1994 をみよ。
- 6) Finkelstein 1966; cf. Charpin and Durand 1986, esp. pp. 159-170.
- 7) Yamada 1994, pp. 24f., Galter 2002-5 参照。

- 8) 部族的・民族的紐帯をその基礎とするアラム人諸集団が、政治的・社会的にどのように構成されていたのか、詳細はほとんど不明である。アラム系部族グループとアラム系国家については、基礎的研究として Zadok 1991; Dion 1997; Lipiński 2000 を参照。
- 9) 前1千年紀におけるアッシリアのアラム化については、Garelli 1987; Tadmor 1987.
- 10) Brinkman 1968, pp. 277-278, n. 1799.; Lipiński 2000, pp. 35-40.
- 11) Grayson 1991, A.0.87.1, v 44-63; A.0.87.2, ll. 28f.; A.0.87.4, ll. 34-36.
- 12) Grayson 1975, p. 189; Glassner 2004, pp. 188f.
- 13) Postgate 1985, pp. 95-101.
- 14) Grayson 1991, A.0.89.7, iii 8-20.
- 15) Shibata 2007; Shibata-Yamada 2009.
- 16) 破損個所の修復の参考としたテル・タバンの出土円筒碑文断片は、Maul 2005, Nr. 5; *ibid.*, Nr. 6; Tab T05 B-47 (未公刊); Tab T07-5 (未公刊), Tab T08-3 (未公刊)。碑文の修復ならびに解釈に関しては、柴田大輔氏から多くの貴重な示唆をいただいた。詳しい文献学的注をつけた Tab T06-20 の出版は、同氏とともに稿を改めて行ないたい。
- 17) Shibata 2007 を見よ。
- 18) テル・タバンの北方に位置するテル・ブデリからドイツ隊の発掘によって出土したアッシュル・ケタ・レシル 2 世の建築記念碑文の奥付 (Maul 1992, pp. 21, 28f., Zylinderinschrift A, ll. 19-21) は、ティグラト・ピレセル 1 世に直接言及し、「彼 (アッシュル・ケタ・レシル 2 世) の主であるアッシリア王ティグラト・ピレセル (1 世) の時代、ベール・リプールのエポニム年、タシュリートウ月 22 日」と日付を記録する。その他の円筒断片に言及されるエポニム名もことごとくティグラト・ピレセル 1 世の治世期間中に年代づけられる。これらの碑文とアッシュル・ケタ・レシル 2 世の時代に関する歴史的考察については、柴田大輔とともに稿を改めて行ないたい (注 16 もみよ)。
- 19) 墓の発掘については、Numoto 2008, pp. 5f., pl. 22a-b を見よ。
- 20) Shibata-Yamada 2009, pp. 91-97.
- 21) Shibata-Yamada 2009, pp. 97-99.

引用文献

- Ambar, M. (1991) *Les tribus amurrites de Mari*, Orbis Biblicus et Orientalis 108, Freiburg-Göttingen.
- Brinkman, J. A. (1968) *A Political History of Post-Kassite Babylonia 1158-722 BC*, Analecta Orientalia 43, Rome.
- Buccellati, G. (1966) *The Amorites of the Ur III Period*, Napoli.
- Charpin, D. (2004) "Histoire Politique du Proche-Orient Amorrite", in D. Charpin et al, *Mesopotamien: Die altbabylonische Zeit*, Orbis Biblicus et Orientalis 160/4, Freiburg-Göttingen, pp. 25-480.
- Charpin, D. and Durand, J.-M. (1986) "《Fils de Sim'al》: les origins tribales des rois de Mari", *Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientale* 80, pp. 141-183.
- Dion, P.-E. (1997) *Les Araméens à l'âge du Fer: Histoire politique et structures sociales*, Paris.
- Edzard, D. O. (1989) "Martu", *Reallexikon der Assyriologie*, Band 7, Berlin, pp. 433-440.
- Galter, H. D. (2002-5) "Textanalyse assyrischer Königsinschriften: Der Aufstand des Puzur-Sin", *State Archives of Assyria Bulletin* 14, pp. 1-21.

- Garelli, P. (1987) "Importance et rôle des Araméens dans l'administration de l'empire assyrien", in: H. Kühne et al. (eds.), *Mesopotamien und seine Nachbarn: Politische und kulturelle Wechselbeziehungen im alten Vorderasien vom 4. bis 1. Jahrtausend v. Chr.*, Berlin, pp. 437-448.
- Glassner, J.-J. (2004) *Mesopotamian Chronicles*, Writings from the Ancient World 19, Atlanta.
- Grayson, A. K. (1975) *Assyrian and Babylonian Chronicles*, New York.
- Grayson, A. K. (1991) *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC I (1114-859 BC)*, The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Assyrian Periods, Vol. 2, Toronto.
- Kupper, J.-R. (1957) *Les nomads en Mésopotamie au temps des rois de Mari*, Paris.
- Larsen, M. T. (1976) *The Old Assyrian City-State and Its Colonies*, Mesopotamia 4, Copenhagen.
- Lipiński, E. (2000) *The Aramaeans: Their Ancient History, Culture, Religion*, Orientalia Lovaniensia Analecta 100, Leuven.
- Numoto, H. (2008) "Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria(6): Preliminary Report of the 2006 Season of Work", *Al-Rāfidān* 29, pp. 47-62.
- Postgate, J. N. (1985) Review of K. Nashef, Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes, Band 5: Die Orts- und Gewässernamen der mittelbabylonischen und mittelassyrischen Zeit, Wiesbaden, 1982, *Archiv für Orientforschung* 32, pp. 95-101.
- Postgate, J. N. (1992) "The Land of Assur and the Yoke of Assur", *World Archaeology* 23, pp. 247-263.
- Shibata, D. (2007) "Middle Assyrian Administrative and Legal Texts from the 2005 Excavation at Tell Taban: A Preliminary Report", *Al-Rāfidān* 28, pp. 63-74.
- Shibata, D. and Yamada, S. (2009) "The Cuneiform Texts from the 2007 Excavations at Tell Taban: A Preliminary Report", in H. Numoto (ed.), *Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations, and the Study of Cuneiform Texts*, Tokyo, pp. 87-109.
- Tadmor, H. (1987) "Aramization of Assyria: Aspects of Western Impact", in: H. Kühne et al. (eds.), *Mesopotamien und Seine Nachbarn*, Berlin, pp. 449-470.
- Yamada, S. (1994) "The Editorial History of the Assyrian King List", *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 84, pp. 11-37.
- Yamada, S. (2008) "A Preliminary Report on the Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons: The Middle Euphrates and Habur Areas in the Post-Hammurabi Period", *Al-Rāfidān* 29, pp. 47-62.
- 柴田大輔 (2008) 「中期アッシリアーアッシリアの誕生」『セム系部族社会の形成 - Newsletter』10, pp. 10-16.
- 中田一郎 (2006) 「アムル (アモリ) 人のバビロニア移住」『ORIENTE』33, pp. 4-13.
- 山田重郎 (2006) 「文書史料におけるセムの系譜, アムル人, ビシュリ山系」『セム系部族社会の形成 - Newsletter』2, pp. 8-13.

紀元前 3 千年紀粘土版文書にみえる家族と血縁集団

前川 和也

はじめに

スライド、パワーポイントはありません。そのことをご迷惑をおかけすることはないと思います。ただその代わりに、みなさんにはプリントをたくさん配布いたしました。最初の4枚に、今日の発表の要約を書いておきました。それから第5枚から12枚までが、史料であります（本書では省略）。

先ほど司会の西秋さんが、ここから後の報告ではすべて、演題に「部族」の語がはいっているとおっしゃったのだけれども、私の報告題目には、「部族」は用いられておりません。じつは、当初の仮タイトルにはちゃんと「部族」の語がはいっていたのだけれども、私がお願いして、それを「血縁集団」という言葉に変えていただいたのです。それは理由がございます。先ほどの山田重郎さんの報告をお聞きいただいた皆さんは、すでにお分かりのことと思いますけれども、前2千年紀のメソポタミアをあつかう研究者は、この共同プロジェクトにたいして、じつに幸福な貢献ができています。現地で粘土板を発掘したという大成果があり、しかもそれらの解読成果を報告できるということも、もちろんあるのだけれども、それよりも、前2千年紀のテキストにもとづいて、「部族」そのものを正面から取り上げて議論することができるからなのです。たとえばアッシリアの王名表（キング・リスト）では、典型的な父系のつながりにもとづく諸王の系譜が記述されているのです。これにたいして、同じく王名表といいますが、シュメールの王名表（あるいは王朝表）では、父方の系譜というのは、記述はまったくのゼロとはいえないけれども、ほとんど問題にならないわけです。

王碑文というテキスト・ジャンルでも同じことがいえます。メソポタミア南部地方シュメールの世界で前3千年紀に書かれた王碑文では、前2千年紀にはいってアムル系の人々が支配者として入ってきた段階でも、つまりイシン・ラルサ時代、バビロン第一王朝時代になりましても、父系の血統について記述するということは、ほとんどありえないのです。そのようなことは、バビロン第一王朝時代でも、6代王ハンムラビのときになってやっと表面化するのです。それほど南部メソポタミアというのは、文書のなかに部族の問題あるいは血縁集団を記述するということが大変に少なかった世界なのです。

それは、まず文書が都市的な世界をあつかっていることにも関係しています。それからもうひとつ、文書は基本的には公的な組織の行政を記録しているのですから、私的な血縁関係、血のつ

ながりというのは、文書はほとんど関心外なのですね。公的な組織で働く人物については、彼/彼女の親ないし子供がときに言及されるにすぎない。例外はいわゆる裁判記録です。理由ははっきりしている。私的な世界でのめごと、たとえば財産継承、が公的な裁判の場にもちだされるのだから、この種のテキストでは、親子、兄弟関係についての記述がおおくみられる。けれどもすくなくとも私は、3世代の血のつながりについて叙述した例をほとんど知りません。そもそも、シュメールの人々というのは、血縁の深度ということに、ほとんど無関心であったといっている。

前3千年紀の「部族」については、なかなか本格的な議論はできないという話に終わってしまいうすけれども、ただ南部のメソポタミアでは、アムル人の到来以前に、早くから同じくセム系のアッカド人が住みつておりまして、彼らにかんしては、血縁の深さ、広がりを示す材料が存在しないわけではない。けれども、その数はけっして多くありません。有力な文字史料が一つだけ存在するのだと言ってもいいかもしれません。

1 アッカドの場合

それでは、お配りしたプリント9ページから12ページまでをご覧ください(省略)。ここで紹介するのは、前23世紀アッカド王朝、おそらく第3代王のマニシュトゥシュが、首都アガデの近く、つまり現在のバグダード南方、あるいはディヤラ河流域に位置する計4区画の広大な土地を買い上げた購買記録なのです。購買(現実には王権による強制収用に近かったかもしれません)の結果がオベリスクに刻まれて、おそらく戸外に建てられて、広く公示されていたものだと思います。このオベリスクには、土地を売った人びとと彼らの血縁者の名前、それから証人たちの名前が延々と列記されているのです。(土地にかぎらず売買の契約が成立するためには、証人たちによる承認が必要でした。)これが、南部メソポタミアに住みつたセム系の人々の血縁の集団を詳細に記述している唯一の3千年紀史料だと思います。なお西から到来したセム系アッカド人は、早くからメソポタミア、シュメールに北接する地方に住み着きました。(彼らがいづ頃到来したのかは、まるでわかっていません。)このオベリスクで言及されている土地は、アッカド王朝の中核地域です。だからここで言及されている人名は、とうぜんのことながら、ほとんどがセム系であって、シュメール人名は、きわめて数がすくない。アッカド人のなかには、早くから都市生活をはじめた人々もいます。けれどもこのオベリスクにみえるアッカド人たちには、ほとんど職業への言及がないけれども、売却されている土地の広さからみて、彼らを都市住民とは考えないほうがよいとおもわれます。

史料9ページ(省略)に記述されているのは、4つの土地のうちの第1の土地の売買についてです。この第1の土地は3つに分割されております。ここでは、3つの土地のうち最初の土地をA1とよんでおきます。テキストではこのA1の土地の所有者たち、あるいはその所有者の「兄弟」とされておりますが、彼らの人名をあげております。じつはこの記述をもとにして、シカゴ大学にいたゲルブ(I. J. Gelb)さんが、人々の系譜を復元されたのです。その結果がプリント12

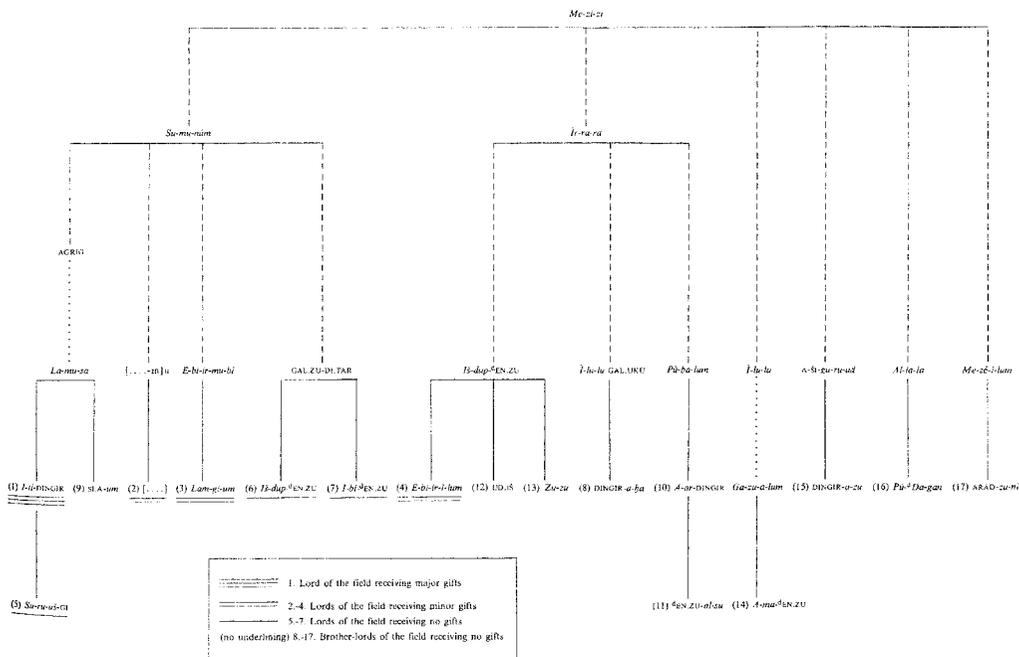


図1 マニシュトゥシュ王（前23世紀）の「オベリスク」A1にみえる土地売却者、証人たちのリーニエジ復元。

出典：Gelb, I. J., Household and family in early Mesopotamia, in: Lipinski, L. (ed.), *State and Temple Economy in the Ancient Near East*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 5 (Leuven, 1979), Chart IV.

で示されています（図1）。私のテキスト翻字にでも、人名に1番から17番まで番号を添えておきましたけれども、これとゲルブさんが作ってくれた図とを照合してください。ゲルブさんの復元にまちがいはありません。深度を見てみますと、計6代であり、17人のグループを形成しています。彼らが、土地を売ったということになっております。全員が土地の所有者であったかどうかはまだ問題なのだけれども、ともかく土地の売却者側にいることはまちがいない。彼らがアッカド王に土地を売ったときに（あるいは売却を強制されたときに）、いろいろな代価をもらったりするのですが、彼らは、最終的にメジジ Me-zi-zi という人のディーセントであるとテキストでは明記されるのです。もう一度史料9ページ（省略）を参照してください。A1 土地売却グループの総括として、彼らは合計17人の人々であって、メジジさんの DUMU.DUMU であると記述されています。シュメール文字で表現されている DUMU.DUMU（「子供・子供」）は、ふつうディーセント、あるいはディセダントと訳されています。シュメール語で DUMU というのは子供という意味ですから、そのようなことになるのでしょう。ただ、シュメール語で書かれた記録のなかで、このオベリスクとおなじように、DUMU.DUMU が血縁グループの意味で用いられている例を私は記憶しておりません。

今度は土地 A1 とどれだけ地理的に近いかどうかはよく分からないけれども、A2 という土地購買についてみてみましょう。史料で次のページを見ていただくと分かりますが、合計9人の

人々が売り手、彼らは DUMU.DUMU Ši-u₃-ni とされています。シウニさんの血縁グループださされている。それから、今度は A3。ここでは売り手としてたった2人の名前しか言及されていませんけれども、この2人が、ラムウム La-mu-um さんのディセendantだとして、やはりまとめられています。

このように、おそらく都市の近くでながく農業に従事しているセム系アッカドの人々にかんしては、土地売却にさいして、かなりの深さ、広がりをもつ血縁関係の人々が、グループとして、マニシュトゥシュ王のオベリスクに表出するのです。ただ何度も繰り返しますように、このテキストは稀有な例なのです。いいかえれば、われわれは、前3千年紀の血縁集団をあつかうとき、この史料を使う以外には方法がないのです。そして、オベリスクにみえる血縁関係の深さ、濃さ、というのは、おそらく前3千年紀セム系アッカドの世界では例外的としてしまうわけにはいかない。

2 シュメールの場合

では、このような血縁集団の例が、アッカド人ではなくてシュメール人についても確認できるかどうか。これはよく分かりません。図2を参照してください。これはシュメール都市国家時代末のラガシュで作成された文書です。年代的には、マニシュトゥシュのオベリスクよりもわずかに50年前に書かれています。これは当時のラガシュの人々の家族構成を知ることができる唯一の材料なのです。これを見ていただくと、全部で12家族。この12家族が、ある地区からべつの地区へ、強制的かどうか分からないけれども、移住したことが記録されているのです。家族構成が公的な文書に記述された珍しい例ですけれども、これを見ますと、すべて小家族、核家族であるということが分かります。ただ、かなりの割合で父親が欠けています。当時、ラガシュは隣都市ウンマと戦争を繰り返しておりましたから、家長が戦死し、寡婦だけになっているのでしょう。そもそも、この文書にみえる男たちは、戦闘において中核的な役割を果たす人々でした。だから彼らの移住がとくに文書にとりあげられたのでしょう。

では、これを包みこむ大きな血縁の集団がどうなっているかというのは、よく分かりません。ここで、配布したプリント1ページから2ページにかけて書いておいた要約(省略)をご覧ください。先ほど赤堀さんが、chiefdom 首長制から state 国家への移行をおっしゃられたのだけでも、メソポタミア、シュメールの国家の成立について、ユニークな議論が2つあります。それは、われわれの師匠でありました中原与茂九郎と、ヤコブセン(Th. Jacobsen)というかたが主張された議論であります。

この2人とも、メソポタミアの王権の起源に部族的なものを見ようという立場です。ただし、これらはまったくの少数意見であります。(南部メソポタミアの王の起源を宗教指導者にもとめる考えが、伝統的に有力視されています。私は賛成ではありませんが。)両者とも大きな人的組織の長が王に成長したという考え方なのですけれども、中原先生は水の統御にたけた氏族長が王となったと説

	husband	wife/widow/mother	children		slaves		total
			male	female	male	female	
Family 1		1 widow	3	2			6
Family 2		1 widow	2	2			7
			+1 houseborn slave boy	+1 houseborn slave girl			
Family 3	1	1 wife	1	2			5
Family 4		1 widow	1	4			6
Family 5	1				1	1	4
					+1 slave of another man		
Family 6	1	1 wife		1		2 from else- where	6
				+1 daughter of another man			
Family 7	1	1 wife		1			3
Family 8	1				2	1	4
Family 9	1			1	1		3
Family 10		1 mother of PN		1			2
Family 11		1 widow +1 her mother	3	1		1	7
Family 12	1				1		2
Totals	7 fathers	9 mothers	11 sons	17 daughters	6 slaves	5 slave girls	55 persons

図2 初期王朝期 III 期最末期 (前 2350 年頃) のラガシュ行政記録 Nik 1 19 にみえる家族。

出典：既出 Gelb, I. J., 1979, p. 52, Chart III.

明され、いっぽうヤコブセンのほうは、これも先ほどお話があったアラブの問題とも絡んでくることですが、軍事的能力に秀でた人が王となっていったのだという説明をしたのです。ヤコブセンが考えたのは (1957 年論文)、以下のようなプロセスです。かつて南部メソポタミア都市には「原始民主政」が機能していたといいます。ふだんは、都市は長老たちの指導のもとにあるのだけれども、危機にさいしては一時的指導者が集会で選ばれるというのです。内政上の危機のさいにはエン en とよばれる指導者が、対外的危機のさいには軍事指導者ルガル lugal が選ばれるという。そして、シュメール社会で戦争がしだいに恒常化していくとともに、一時的軍事指導者 lugal の役職もしだいに延長され、ついに彼は王に成長するというのです。ヤコブセンは、族長の若い息子が lugal とされることがおこったろうと述べていますから、あきらかに彼は古ゲルマンやアラブ世界の慣習を頭にいれている。いっぽうでよく分からないのは、彼によれば、この「原始民主政」が展開するのは、シュメール都市においてであります。初期王朝期 I 期までが「原始民主政」が機能した時期なのです。II 期が過渡期、III 期は「原始王政」の時期。つまりヤコブセンは、シュメール人の政治組織がまだ部族レベルにとどまっているときの議論をしたのではないのです。ただ現在は、「原始民主政」説を採る人は、ほとんどいません。なによりも史料から、主権をもつ集会の存在、一時的軍事指導者としての lugal を検出することはとうてい不可能です。

プリント 2 ページを見てください (省略)。同じく血縁組織の役割を強調した研究者に、ディアコノフ (I. M. Diakonoff) さんがいる。彼はソ連時代の学者ですが、正統派には属していません

でした。この方は、前3千年紀の中頃のメソポタミアの社会・経済体制を、state sector と communal-and-private sector の共存として説明されました。後者の核となっているのは、拡大家族であります。さきほどのアッカド王オベリスクを想起してください。ディアコノフ流にいえば、ここで名前を言及されているのは、基本的には拡大家族のメンバーだということになる。耕地売買の権利をもっているのは拡大家族の長であり、共同体のなかで他家族の土地売買を承認するのは、やはり家族長たちなのです。彼らは民会の構成員だというのだから、ここでディアコノフとヤコブセン「原始民主政」論の議論がふれあうこととなります。それはともかくとして、ディアコノフさんの考えでは、メソポタミア社会は拡大家族の連合体と定義されます。いいかえれば state sector に属している人々（おおくの粘土板はこのセクターについて記述している）は、メソポタミア社会のなかでは、特殊な、少数の人々にすぎないことになる。さきほど、単婚小家族の成員の集団移住を記録したラガシュ文書を紹介しました。ディアコノフの術語を使うとすれば、彼らは state sector の人々です。あるいはディアコノフは、state sector では小家族、いっぽう communal-and-private sector では拡大家族が基本であったと説明するのもかもしれない。

だからディアコノフは、古代メソポタミアを都市的な世界と理解してはおりません。けれども、この考え方はたいへんに疑問です。北部メソポタミアを説明するときには妥当するかもしれないけれども、私には、南についてはこれが当てはまっているとはどうも思いません。このような考え方（じつはディアコノフひとりではありません）の背後にある史料は主として土地売買文書、とりわけアッカド王のオベリスクなのです。あのような文書に記述されている人々が、拡大家族の長であると。

さて、前3千年紀の中頃から後半になりますと、南部メソポタミアでは王碑文や行政経済文書がたくさん書かれるようになるのだけれども、そのなかに、ときに im-ru-a, im-ri-a というシュメール語があらわれることがある。そして、しばしばこの語はクラン、あるいはジッペなどという言葉で現代語訳されるのです。この語は、後代のシュメール文学テキスト、つまりシュメール人がもう現実に存在しない前2千年紀の文学テキストのなかでは、たしかにそのような大きな血縁集団を表しているばあいがあるのだけれども、前3千年紀後半の行政文書では、そのことが確認できなくなります。むしろそれについて、ネガティブな議論しかできないのです。

前2100年頃のラガシュにグデアという支配者があらわれました。そしてグデアがラガシュの主神ニンギルスのために神殿を建てるにあたって、3つの im-ru-a を動員したのだという記述があります。問題の文章をテキスト4として引用しておきました。われわれ研究者は、グデアが3つの im-ru-a を動員したというときの im-ru-a は、地縁的なグループを表わしていると考えています。血縁的なものがそこで表現されているとはけっして思っていない。

それから、前2400年あるいは2500年頃（一般的には前2500年頃という人が多いのだけれども、もう少し下がるかもしれません）のファラ遺跡から出土している文書に、im-ru-a とよばれる人間集団がいくつも現れてくることはよく知られております。ただ、この im-ru-a も、ふるい研究文献では「部族」といったクラシカルな訳が与えられているけれども、現在の研究者は、これを血

縁的な集団であるとは考えていない。ここでシュタインケラーさん (P. Steinkeller) の文章を引用しておきましたけれども、彼は im-ru-a に territorial clans or groupings という説明を与えています。ただ territorial clans という語法じたい、妥当であるのかどうか、私にはよく分かりません。grouping ということになれば、ほとんど何も定義していないのに近いことになりすけれども、3ページ(省略)にこのファラの文書に出てくる im-ru-a についてビシカートさん (G. Visicato) の説明を引用しておきました。ビシカートさんは、ファラ文書には合計 30 をこえる im-ru-a が出てきて、それぞれの im-ru-a がかかわっている生業がちがうのだというように書いています。私は、ファラ文書を全部きちんと確認していないので、彼の説明が 100 パーセント確実かどうかは断定はできないのですけれど、けっしてこれは血縁集団とは言えないことになります。ただ、プリント3ページにも述べておきましたように、im-ru-a という語はのちのウル第3王朝時代の文書に「誰某の im-ru-a」という表現であらわれることがあります。このときの im-ru-a とはいったい何だということは、相変わらず解けていません。やはり社会集団であるのかもしれない。

同じような問題は、ildu(m) という言葉にも存在いたします。この語は、シュメール語人名の構成要素としてしばしば出てくるタームです。そしてシュメール・アッカド語辞書テキストでは、血縁集団を表す言葉だとして、アッカド語で翻訳をされるのです。もちろん、ildu(m) じたいアッカド語から来ている言葉ですけれども、これが本当にシュメールで血縁集団を指す語として機能していたかどうか。

逆に今度は usur, ušur という語を挙げておきました。しばしばこれは、女性の、妻方の neighborhoods を表わす言葉だというように現代語訳されるのだけれども、もともとは妻方の、妻の実家をつつむ血縁集団を指す言葉であったのかもしれない。けれどもこの問題は、これまできちんと議論されたことはありません。

シュメール都市国家時代のラガシュに関して言うと、少なくとも女性は、財産にかんして完全に自立しております。夫とは別財産なのです。しかも、これは支配者クラスだけのことかもしれないけれども、女性は夫とは別れて住み、しかも妻の屋敷で子供たちが生活しているということを知ることができます。これは、セム系社会とはまるでちがう世界です。このようななかで「部族」の議論をすることが、本当に可能かどうか。したがって、この秋の国際シンポジウムのときに何をしゃべったらいいのか、今から戦々恐々としているのです。今日は、前3千年紀のシュメール語、アッカド語文書から、血縁集団にかんして、なにを読み取ることできるかを、ごく急いでお話しいたしました。とりあえずこれでおしまいにいたしましょう。

ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関

藤井 純夫・足立 拓朗

はじめに

藤井です。よろしくお願いいたします。「ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関」というタイトルを付けましたが、最初に、ビシュリ山系における青銅器時代ケルン墓群の第一次～三次調査についてお話しします。その成果を基にこのような問題へのアプローチを考えてみたい、というのが本日の発表の趣旨です。なお、第一次・第二次調査については、別の機会に発表しております（藤井・足立 2008, 2009；藤井 2008a；Fujii 2008；Fujii et al. 2008a）。本日はその成果を簡単に振り返りつつ、本年 11 月に実施した第三次調査（Fujii et al. 2008b）のデータも加味して、表記の問題にアプローチしてみたいと思います。

1 ヘダージェ 1 遺跡

最初に、写真を見ていただきましょう（図 1）。左側がパルミラへと続く平原部分、右側がビシュリ山系の北西麓（標高 700-800 m）です。現在わたしたちが調査しておりますのが、この部分です。その中でもワディ・ヘダージェの流域にあります 4 件のケルン墓群、これを第一次～第三次調査で連続的に発掘いたしました（図 2）。

まず、ヘダージェ 1 遺跡から。この遺跡では、テーブル状台地の南縁に沿って 10 基、北縁に沿って 4 基、計 14 基のケルン墓が確認されています（図 3）。第一次調査では 10 号ケルン墓を、第二次調査では 9～1 号ケルン墓を、第三次調査では北縁にある 4 基を、それぞれ発掘いたしました。これらケルン墓の年代については、出土遺物の比較型式学的な検討によって、EB 末から MB 初頭という年代観が示唆されています（足立 2008）。

ここで重要なのは、ケルン墓の型式変遷です。台地先端に位置する 10 号墓は、十字形の墓室に加えて、二重の周壁を伴うことが特徴です。一方、9 号墓では、墓室が半地下になり、プランも楕円形に変化しています。墓室周囲の詰め石部分は依然として残っているのですが、その外側の周壁がなくなってくる。この点の特徴です。この 9 号墓の形態が基本となり、1 号墓に至る過程で徐々に小型化していくわけです。ただし、5 号墓の時点で墓室外側の詰め石部分が狭くなり、4 号墓ではついに一重の壁面だけになってしまう。と同時に、ケルン墓全体が著しく小型化する、という経緯が観察されています。これらのことから、ヘダージェ 1 遺跡のケルン墓群は台地西端



図1 ビシュリ山系西側の稜線（東から）

から東に向かって徐々に展開し、少なくとも3時期に分けられる、そのうち2期はさらに3段階に細分できそうだ、ということが分かってまいりました。では、この編年は他のケルン墓群にも適用できるのか、そのことを検討したのが、第三次調査です。

第三次調査では、まず、ヘダージェ1遺跡の北縁に並ぶ4基のケルン墓を発掘いたしました(図4)。北端にある14号墓から徐々に手前に戻りながら紹介します。14号墓の中心部分は盗掘されておりましたが、半地下式の墓室内では石灰岩の岩盤を1メートル以上掘り抜いていることが分かりました。ケルン墓の型式で言いますと、二重の周壁を伴っている点では10号墓的、ただし主体部が半地下式の楕円形墓室になっているという点では9号的、と言えます。その意味で、両者の折衷様式・移行形態と定義できるでしょう。

その手前の13号墓は、T字型の地上式墓室を持ちながらも、周壁を伴わず、全体に小型化しているのが特徴です(図5)。これも、10号墓と9号墓の折衷様式のように見受けられます。このケルン墓の周囲でも、付帯遺構が幾つか確認されました。土器片も少量出土しました。詳しいことはまだ言えませんが、どうやらMB的な様相を示す土器片のように思えます。さらにその手前の12号墓は、9号墓とほぼ同型式であることが分かりました。一方、11号墓は少し離れたところにありますが、岩盤のくぼみを利用して墓室を造り、その周囲を囲っただけの簡略な墓でした。これは、4号墓などと同じ型式です。

まとめです。ヘダージェ1遺跡には、ほぼ同時代のケルン墓列と申しますが、ケルン墓群が二つあって、それぞれが展開の方位をたがえながら、並行して営まれていたと考えられます。一つの台地を二つの近縁集団が墓域として分有し、北縁と南縁を使い分けていたことになるでしょう。

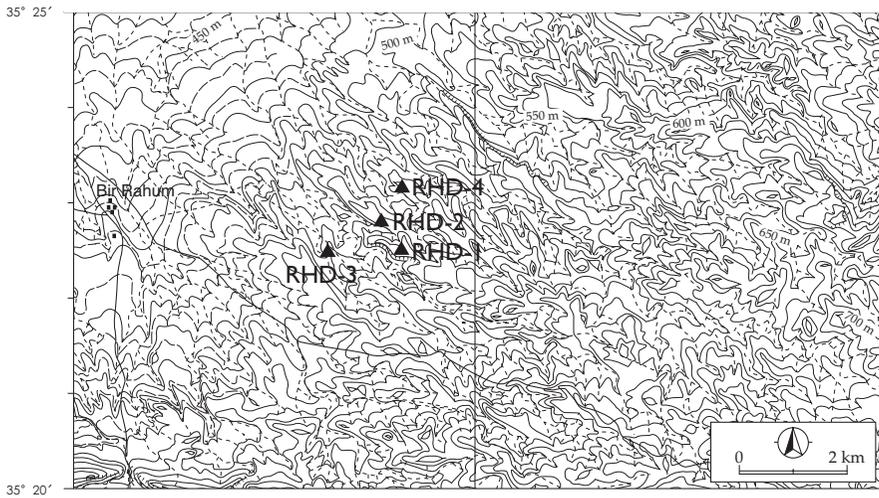
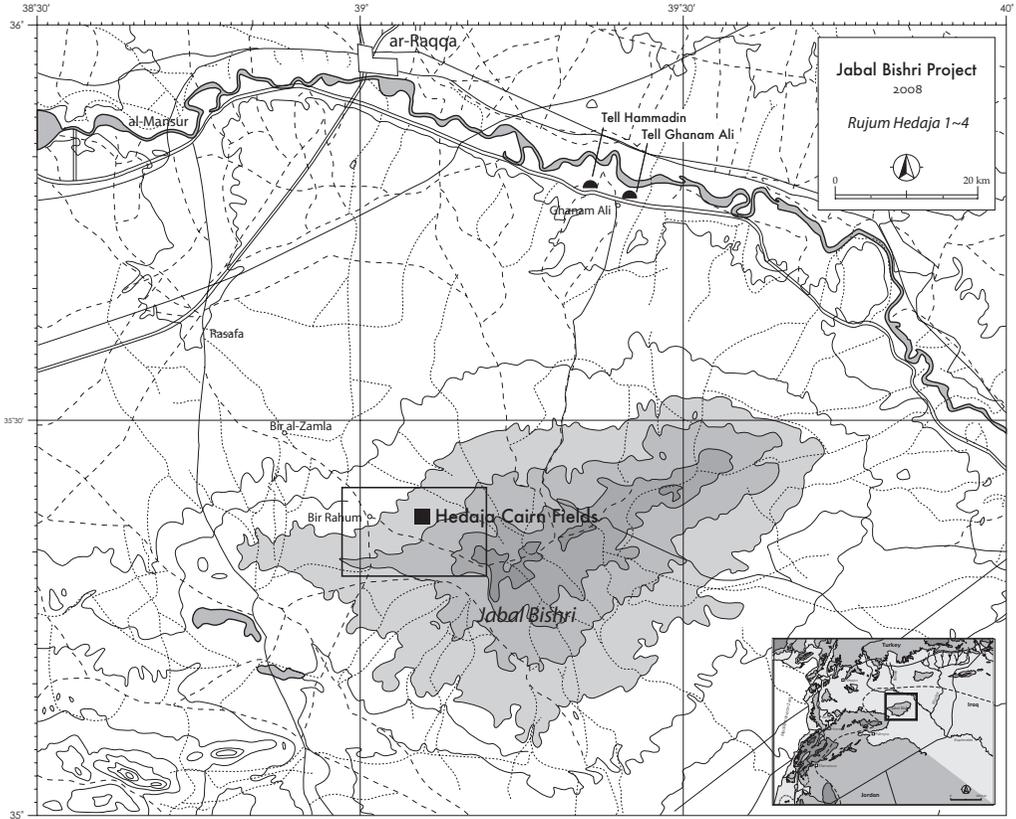


図2 ヘダージェ地域の位置 (上), ヘダージェ1~4遺跡の分布 (下)

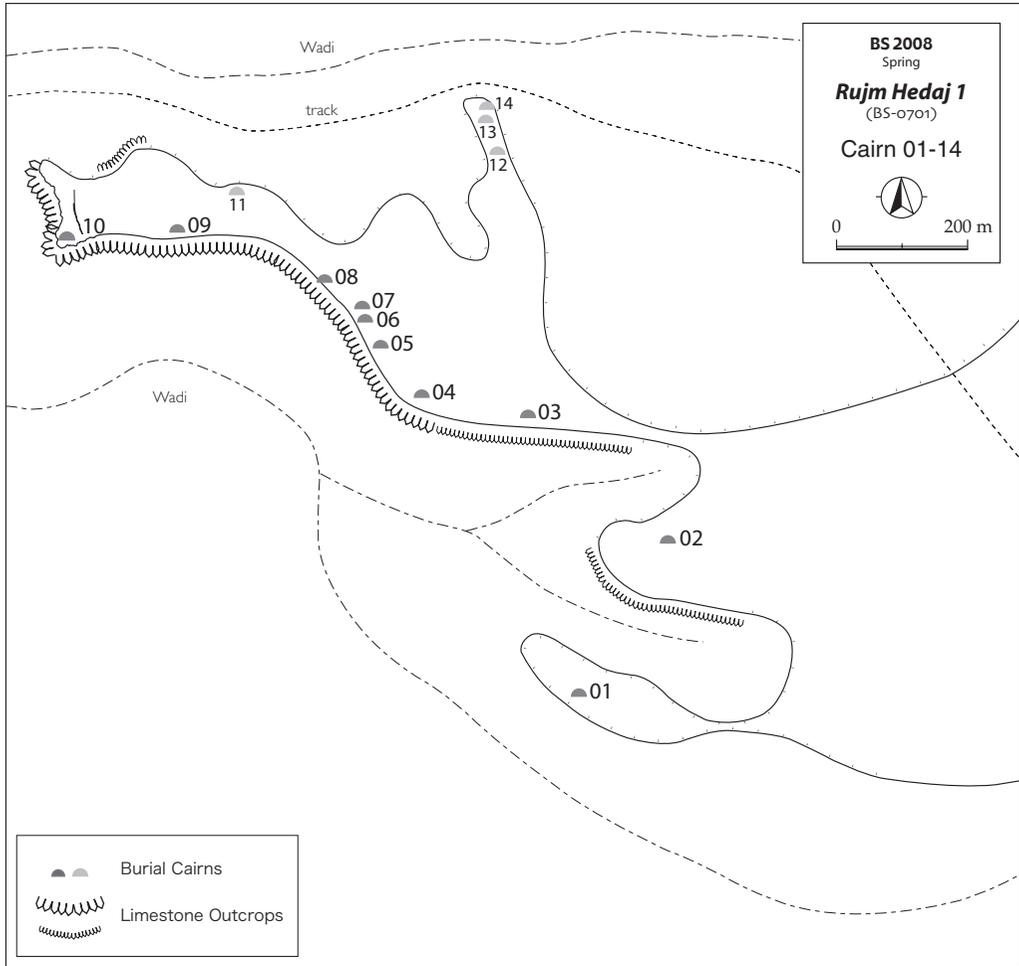


図3 ヘダージェ1遺跡の平面図

2 ヘダージェ2遺跡

ヘダージェ2遺跡は、ヘダージェ1遺跡の北西約500メートルに位置しています。ここでもやはりテーブル状台地の南縁に沿って10数基、北側の舌状台地に2基、のケルン墓がありました。日程の都合で、この遺跡はまだ実際に調査しておりません。ただし、ケルン墓の認定と写真撮影、予備的な観察だけは終えています。観察では、ヘダージェ1遺跡とよく似た内容・構成であることが確認されています。时期的にも、1~3期のケルン墓群を含むと考えられます。

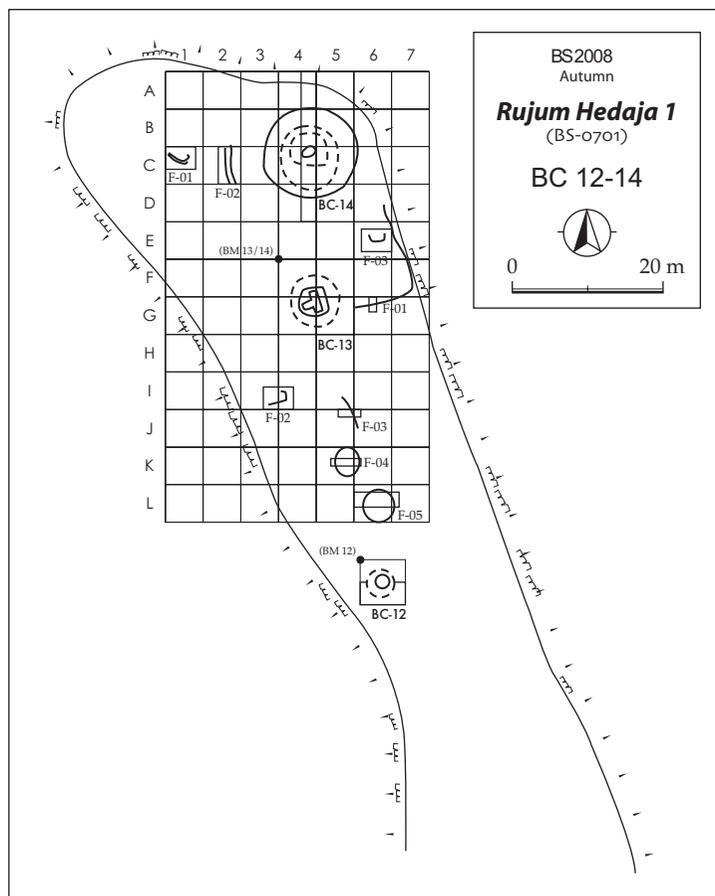


図4 ヘダージェ1遺跡：12～14号墓

3 ヘダージェ3遺跡

ヘダージェ3遺跡は、ヘダージェ1遺跡の南西約1kmにある緩丘陵の先端斜面に位置しています。このケルン墓群は規模が小さく、小型ケルン墓2基とそれに付帯する小遺構数件とで構成されていました。1号墓は、詰め石部分を伴う半地下式の墓室を持つものの、周壁は伴っていませんでした。従って、ヘダージェ編年の2期、規模が小さいことを考慮すれば2b期（ヘダージェ1遺跡8～6号墓の並行期）に相当するものと思われます（図6）。一方、2号墓は、詰め石部分が狭くなっているという点で、2c期（ヘダージェ1遺跡の5号墓並行期）に比定できます。なお、この二つの墓はイスラーム期に再利用されており、墓室はぐずぐずの土で埋まっていた。その中からイスラーム時代の施釉陶器やガラスなどが出たのですが、2号墓底部の10センチぐらいはぎりぎり生きており、そこからタビュラ・スクレイパーが出土しました。

ヘダージェ3遺跡は、ヘダージェ編年で言う2期の中頃から後半にかけて、短期間営まれたと



図5 ヘダージェ1遺跡：13号墓全景（南東から）

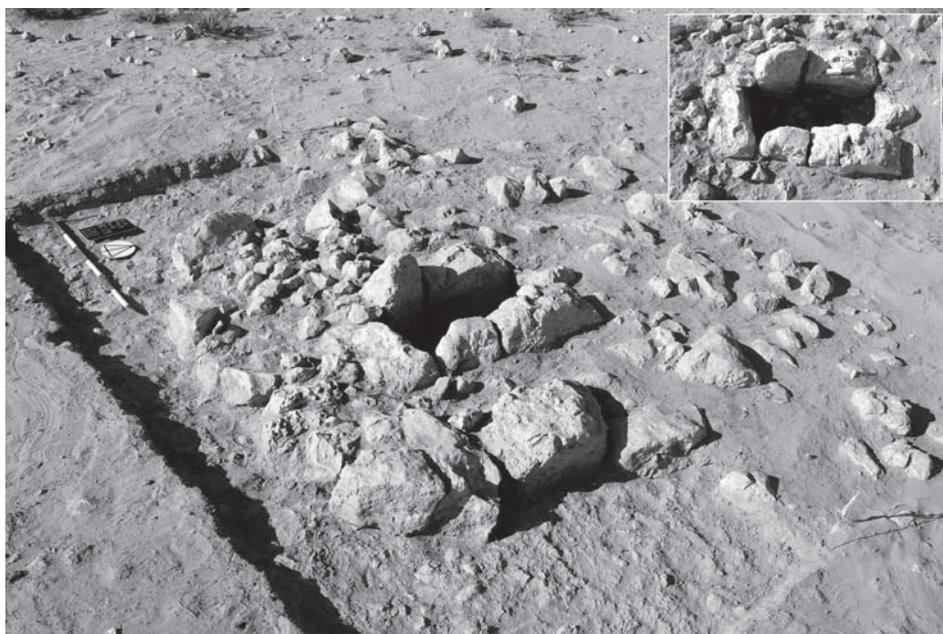


図6 ガヘダージェ3遺跡：1号墓全景（南東から）

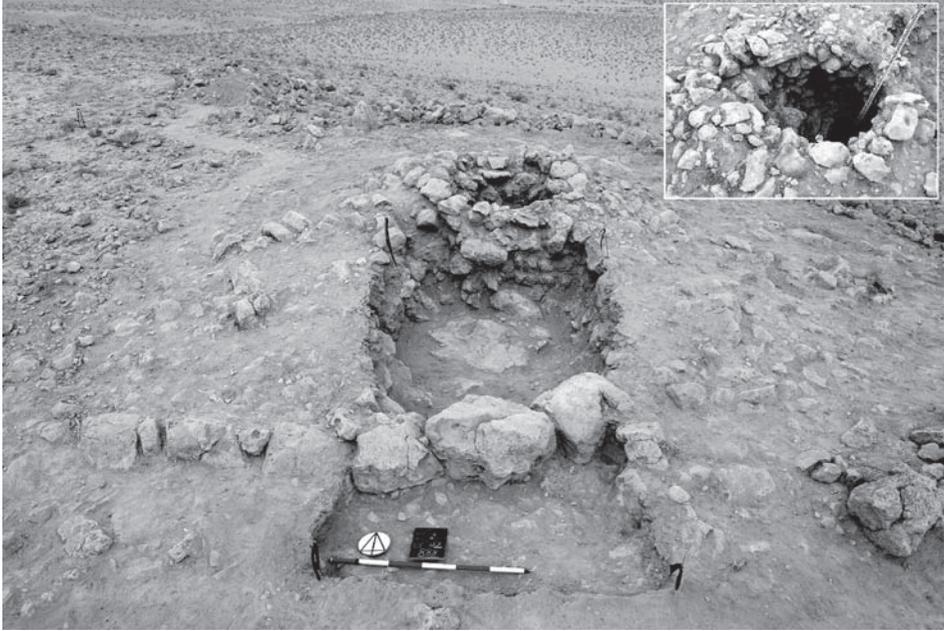


図7 ヘダージェ4遺跡：2号ケルン墓全景（南西から）

考えられます。ヘダージェ1と同じように、丘陵突端部分にあるケルン墓が最も古く、手前に向かって徐々に新しくなるという水平層位の傾向が、この遺跡でも確認されました。

4 ヘダージェ4遺跡

ヘダージェ4遺跡は、ヘダージェ1遺跡の北約1kmにある独立丘の頂上部に位置しています。この遺跡も規模が小さく、小型のケルン墓2基とそれらに付帯する小遺構という構成でした。時間の都合で、2号墓だけを調査しました。その結果、周壁の存在が確認され、ヘダージェ編年の1期に相当することが分かりました（図7）。このケルン墓からは、土器片やビーズなど、盗掘者の残していった遺物が散発的に出土しました。人骨も一定量出土しました。

5 考察

ただいまお話しました四つのケルン墓群とヘダージェ1南列の編年とを突き合わせてみますと、以下ようになります（図8）。まず、ヘダージェ1遺跡の北列ですが、14号・13号が1期と2期の中間、12号が2a期、11号が少し飛んで3期に、それぞれ位置づけられます。ヘダージェ2遺跡は、表面での観察によると、1～3期を含んでいると考えられます。一方、ヘダージェ3遺跡は、2b期から2c期まで。ヘダージェ4遺跡は1期からおそらく2期にかけて短期間造営されたものと思われます。このようなことが、おおよそ分かってまいりました。

では、こうした調査データから何が言えるのか、その点に話を移します。まず編年についてですが、以前は、ワディ・ヘダージェの流域に固まっております四つのケルン墓群は、ある程度重複しながらも全体としては新旧の関係にあるものと想定しておりました。つまり、ヘダージェ編年で言う1~3期のケルン墓よりもさらに古い、あるいはさらに新しいものがある、そのようなものが群を成していると漠然と予想していたわけです。

しかし今回の調査によって、ヘダージェ遺跡群は縦ではなくむしろ横に並ぶということが分かってきました。ヘダージェ1・2遺跡のような大規模なケルン墓群は、互いに並行して長期間造営されたようです。とは言っても、全体で2~3百年程度でしょうが。一方、ヘダージェ3・4のような小型のケルン墓群は、大型ケルン墓群の造営期間中にそれとほぼ並行して短期的に造営されたと考えられます。問題はこれらケルン墓群の造営期間ですが、ヘダージェ1遺跡の9号ケルン墓(2期初頭)がMB I(中期青銅器時代I期)に比定されていますので、これを挟む数百年間に集中的に造営され、一様に姿を消した、というのが現在の見通しです。

ここで、本題に入りましょう。ただし、集団の社会構造という問題は、どんな場合でも難問です。ケルン墓からそれを読み取ろうというのですから、なおさらです。ですから、これから述べることは当面の作業仮説ということでお聞きください。

さて、この問題にアプローチするには、三つのヒントがあろうかと思えます。一つは、ビシュリ山系北西麓におけるケルン墓造営集団の数が、われわれが当初想像していたよりもずっと多い、ということです。ワディ・ヘダージェの下流域だけでも、ヘダージェ1遺跡の南列、同北列、ヘダージェ2遺跡の、少なくとも三つの集団を想定しなければなりません。編年的な並行関係から見ると、これらの集団はケルン墓の造営単位として少なくとも部分的には併存していたと考えられるからです。加えて、小規模のケルン群が二つありました。これを加えれば、五つの集団です。ワディ・ヘダージェの下流域だけでもそうなのですから、ビシュリ全域では数百の同時代集団になるでしょう。そうしますと、部族やその下位集団である氏族を単位にケルン墓が運営されていたとは考えにくい。それだけの数の部族・氏族がこの領域に割拠していたとは思えないからです。従って、それらよりも下のレベル、系族や拡大家族などが単位となってケルン墓群が運営されていたのではないかと、この点が、第一のヒントです。

第二のヒントは、ケルン墓出土人骨の構成です。現在出土しているのは盗掘で断片化した人骨ばかりですので、まだ明確な結論は得られておりませんが、今回資料を見ていただいた中野良彦さん(大阪大学)のお話によると、性・年齢ともにバラバラで、成人男性もいれば、女性や子供もいるとのこと(Nakano 2008)。だとすれば、家族墓の可能性がります。少なくとも部族長や氏族長の個人墓ではなく、もう少し広い範囲で埋葬していると考えた方がよさそうです。ところで、前回のシンポジウムのときに、私が以前調査したヨルダンの前期青銅器時代ケルン墓群の話をしました(藤井2008b)。その際、ケルン墓の被葬者層が集団の長一人からやや下位の構成員へと徐々に拡大していく過程について述べました。この流れの延長上にあるのが、ビシュリ山系北西麓の中期青銅器時代ケルン墓群なのかも知れません。

第三のヒントは、ケルン墓の築造間隔です。ヘダージェ 1 遺跡の南列は、計 10 基で構成されていました。ヘダージェ 2 遺跡も、ほぼ同数です。分布調査で観察しているこれ以外のケルン墓群でも、やはり十基前後が主流でした。従って、長期造営型ケルン墓群の多くは 10 数基で構成されていると考えてよいでしょう。一方、1 期から 3 期までが 100 年～200 年、最大でも 300 年ぐらいと予想されますから、これを 10 基で割ると、1 基で平均 10～20 年、最大でも約 30 年程度ということになります。この数値は、1 世代に 1 基のケルン墓が造営されたことを示唆しているのではないか。長期造営型ケルン墓群のケルン墓数が揃っているのは、おそらくそのためと考えられます。

これらのことから、当面の作業仮説として、以下のことが言えるでしょう。系族なり、拡大家族なりが一つの造営単位となって、そのような集団の家族墓として、家長の交代ごとに、新たなケルン墓を構築した。これが第一点。第二点はその逆です。そのような造営単位が墓域を分有し合って併存している点に、上位集団としての氏族・部族の存在を垣間見ることができる。そのような作業仮説を立てております。

おわりに

あいにく盗掘墓ばかり掘っておりますし、掘ったのも数百基・数千基とある中のごく一部に過ぎません。従って、結論めいたことはもちろん言えません。現在はすべて作業仮説でありますけれども、それなりに方向が定まってきました。3 月の調査では未盗掘墓を発掘して、上記の仮説を再検討してみようと思っております。ご静聴ありがとうございました。

参考文献

- 足立拓朗 (2008) 「ヘダージェ 1=ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』11 : 7-13.
- 藤井純夫 (2008a) 「ルジュム・ヘダージェ：ビシュリ山系北麓ケルン墓群の調査」大沼克彦編『セム系部族社会の形成 平成 19 年度活動報告』30-35.
- 藤井純夫 (2008b) 「遊牧部族の形成過程：カア・アブ・トレイハ西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化」大沼克彦編『セム系部族社会の形成 平成 19 年度研究成果報告』: 91-92.
- 藤井純夫・足立拓朗 (2008) 「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14 : 6-10.
- 藤井純夫・足立拓朗 (2009) 「ルジュム・ヘダージェ 1 遺跡：ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の調査」『第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』: 70-75.
- Fujii, S. (2008) A brief sounding at Rujum Hedaja 1. In: *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Fifth Working Season*, edited by K. Ohnuma and A. al-Khabur. Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria.
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2008a) The second field season at Rujum Hedaja 1. In: *Archaeological*

- Research in the Bishri Region: Report of the Sixth Working Season*, edited by K. Ohnuma and A. al-Khabur. Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria.
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2008b) The soundings of the Hedaja Cairn Fields, the northwestern flank of Jabal Bishri. In: *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Seventh Working Season*, edited by K. Ohnuma and A. Sultan. Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria.
- Nakano, Y. (2008) A morphological study of the human bones from Rujum Hedaja. In: *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Seventh Working Season*, edited by K. Ohnuma and A. Sultan. Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria.

IV 部

総合討論

紀元前 3 千年紀のユーフラテス河中流域と部族社会

藤井 そろそろ時間になりましたので、最後の総合討論を始めさせていただきます。お疲れとは思いますが、もう 1 時間少々おつきあい願います。

さて、このシンポジウムの目的というのは二つありまして、一つは、これまでの調査・研究成果を報告し合って、互いに情報を共有しようということです。もう一つは、それに対するいろいろなコメントや質問を通して、最終年度の研究の方向性というのをもう一度定め直しておこうということです。1 番目の目的については、発表をもって終わりましたので、ここでは取り上げません。もちろん質問等はまた後で時間を取りたいと思いますけれども、一応終わったものとして、2 番目の目的、つまり最終年度に向けての各班の研究の方向性の再確認・再構築ということ、ディスカッションの前半に行いたいと思います。では、研究代表者の大沼さんから、ご意見をお聞かせ願えますか。

大沼 まず最初に最終年度の全体計画をお話しします。来年度は英文の最終報告書作りがあります。今年の 12 月いっぱいまで原稿をいただくということになっています。もう一つの邦文報告書に関しては、今回のシンポジウムをテープで記録してありますので、それを業者に依頼して立ち上げて、校正段階で皆さんにお送りして、写真や図版等を追加してもらうという形にいたします。この二つを総括班の最終報告書ということにいたします。

もう一つの大きい問題は、今年の 11 月に 3 日間の国際シンポジウムをおこないます。現在、招聘者と連絡を取っているのですが、招聘者は 12 人ほどです。われわれ代表者も発表をおこないます。3 日間開催するこのシンポジウムの内容を単行本として出版いたします。

次に、この 2 月から 4 月までの第 8 次現地調査についてですが、そこでは、ガーネム・アル＝アリ遺跡の今回の調査の整理ですね。それから藤井さんは継続調査。また、赤堀先生は、昨日高尾さんが発表されたような内容で総括的調査をされることになると思います。それから地形・地質班の星野先生達も地質調査をされます。

今述べましたのが、最終年度の大きな計画と第 8 次現地調査です。詳細は研究代表者の方々にメールでお送りいたしますので、ご了解いただきたいと思います。

藤井 総合討論と銘打っておきながら、連絡っばい話になって恐縮なのですが、今日の発表、あるいはこれまでのいろいろな出版の成果等々を踏まえて、総括班として理解している各班の最終年度の動向というのを、班ごとにお聞きしたいと思います。あるいは総括班からのお願いもあるかもしれません。別の班の方からも、その班でこのようなこともやっていただけると、比較データが得られて非常にありがたいというようなサゼッションもいただければと思います。

まず、いわゆる考古学的な調査をしている班が、四つあります。月本先生のところは現場がイ

スラエルで少し離れておりますけれども、それを入れれば五つになります。まずテル・ガーネム・アル＝アリの調査から始めましょう。これは総括班を代表して大沼さんが行っておられますし、常木さんもこれにかかわっておられるということなので、お二人に発言をお願いします。実務を頑張ってくれている長谷川さんにも加わっていただければ幸いです。さて、こちらとして理解しているのは、今まで二つのことをメインに進めてこられた。つまり、トレンチ発掘で層位的な把握をすると同時に、スクエアの発掘で面的な広がりを押さえ、可能なら都市の、あるいは集落の構造というものを把握していこうと。この二つをメインでやってこられたというように理解しております。加えて、最終年度はぜひ墓を掘りたいというお話がありましたね。これは、そのような計画でよろしいのでしょうか。

大沼 ガーネム・アル＝アリ遺跡の調査は、計画研究の常木さん、沼本さん。それから藤井さんはケルン墓ですが、その二つが中心になっていくという方針です。といいますのは、総括班は本来調整班なので発掘調査ができず、あくまでも調整的・統括的に参加しているわけです。わたしはほぼ全回参加しましたので、これまでの経緯をご紹介しましたし、今後は遺跡層序と全体プラン、すなわち、村落構造の確認ということをやったのですが、これからあと1年ありますが、沼本さんの班は遺跡直近の墓群の調査になりますね。それから、筑波大の長谷川さんがわたしと一緒に担ってきてくれたのですが、常木さんの班が長谷川さんを協力者として派遣されてきたということもありますので、わたしの昨日の話以外に「今後こうしたい」ということがあれば、常木さんからお話し願えますか。

常木 基本的には今回の3月の3週間、実際に現場で表面から観察できる遺構プランの実測を予定しているのですが、その間にすべて、11月に大沼先生がやられたプランニングのスケッチを含めて全部実測化するということですね。北東部スクエア1の周りがまだ実測できていないので、その周りを全部クリーニングして、それも付け加えて全体の表採を行いながら、最終的にEBのⅢ～Ⅳ期だと思うのですが、その時代の集落構造全体を分かる限り明確にして全部プランニングを再現したいと思っています。また、大沼先生が拾われたもの、それから今回3月の調査で表採する土器をできるだけ多く観察して、細かい時期などに地区ごとに何らかの特徴が出るかどうか等々、やれる限りのことを実施したいと思っております。それが一つです。

もう一つ、スクエア2では最終的に地山を目指して、いつからいつまでこの遺跡で集落が営まれたかということをはっきりさせると。私はこの2点をとりあえず3月調査の目標にしております。

藤井 はい、ありがとうございます。この2点というのは従来の方針どおりで、トレンチで層位的変遷を見る、テル地表面のクリーニングで集落の構造を明らかにするというのを継続してやっていただいたく。そのうえで、遺物の整理というのは当然入ってきますね。さらに、もしできれば墓も掘っていただけると、大変ありがたい。これは沼本チームあるいはわたしのチームもそうですが、お墓中心のチームが二つありますので、ガーネム・アリのお墓のデータが参照できれば有益ですので。

次に沼本さんのチームですが、これは直近の墳墓群、ただしシャフト墓もありますけれども、昨日の久米さんの発表ですと、サーベイ・発掘等々によってグルーピングが可能になったと、それぞれの内容あるいは立地等々、いろいろな面白い特性が分かってきたということで、期待をしております。今年の目標は、これは久米さんの発表で最後に少し言及されましたが、未盗掘墓を調査しようというのが第1点ですね。最終年度の作業目標として、年代等々分からないことが多いので、未盗掘墓をまず探して掘りたいというのが第1点。さらに言えば、グルーピング等々のデータの精度を上げていく、範囲を広げていく。これは多分、わたしの今日の発表にあったようなことと対比させていけば、ある程度面白いことが言えるのではないかと思います。久米さんなのか、沼本さんなのか、どちらでもけっこうですが……。

沼本 久米さんのほうから。

藤井 お願いします。最終年度の調査目標を、今、少しわたしのほうで理解している範囲で要約したのですが、もう一度、当事者の立場でおさらいしていただけますか。

久米 はい。まず一番の目標というのは、テル・シャップートという墳丘墓群の発掘をやるということですね。

藤井 それは、グルーピングの面で、タイプ1に具体的なデータがないからですね。

久米 ええ。それからワディ・ダバという村の中にある崖下型と言っていたものも、あれも全く未着手で、場所も違いますし。ですので、少しデータが欲しいというのがあるので、まずその二つが最優先事項というように5月には考えております。

藤井 分かりました。タイプ1, 2, 3, 4のすべてが具体的なデータがまだ十分そろっていない。とりわけシャップートで、タイプ1ですか。マウンド型墓のデータをきちんと取りたいと、そういうことですね。崖下の何と何かというのは、タイプ何になるのですかね。3や4のタイプなのでしょう。その二つを優先してまずやっただうえで、こちらとしてはもう一つお願いがあります。未盗掘墓があればしっかりした遺物を出していただき、年代等を確定していただくようお願いいたします。それは、もう1回後の調査で可能ならば実施、ということですね。この3月の調査では、今おっしゃった二つの点に力点を置いてやると。

大沼 シャップート。

藤井 シャップートね、そうですね。シャップートを掘っていいのかという問題もあるのですが。

大沼 いえ、それは契約書に入っています。

沼本 予定としては、連休中におこないます。

藤井 5月にそのことをやられて、もう1回ぐらいは。

沼本 夏ですね。

藤井 はい。では、5月に、今おっしゃった当面の目標をやられて、もう1回ぐらい補足調査を計画しているということですね。

ビシュリのケルン墓と比較するといろいろな面白いことが分かってくるのではないかと期待しています。われわれのところは、丘陵の先端部分にいちばん古いケルン墓があって、そこからずっ

と直線的に並んで徐々に新しくなるというような傾向が見られますけれども、そちらのほうですと必ずしもそうではない。周構型のシャフト墓が真ん中であって、その周囲にシャフト部が円周のように取り巻く。そういった傾向が見られようですが、こうしたデータがお互いにかみ合ってくれば、面白いことが言えるのではないかと思います。よろしくお願いします。

私のところは今言ったとおりで、なにせ盗掘墓が多い。现阶段で、19件掘りましたけれども、すべて盗掘墓でした。未盗掘墓を掘らないといつまでたっても隔靴搔痒の状態ですので、この3月に、未盗掘墓の発掘ということを目標に調査したいと思っています。そうしたデータに基づいて、もう一度サーベいをし直して、全体の構成を考え直してみたいと思っています。久米さんの昨日の発表にあったようなグループに関して、比較データが取ればということ、もう一度サーベいをやりたいと考えております。

常木 そのために、例えば藤井さんの調査されているケルン墓や、それから沼本さんの調査されているガーネム・アリ近くのシャフト墓・構造墓などで、例えば人骨や炭化物など、ズバリ年代測定ができそうなものを、ぜひ今回採取したいわけです。また、中村先生にガーネム・アリにぜひおいでいただいて、スクエア2のトレンチで連続的なサンプルを採取して14C年代を測定していただきたいと希望しています。

藤井 わたしのところも、それから沼本さんのところもそうでしょうが、別に人骨を飛ばしているわけではない。探しているのですけれども、ないのですね。

常木 コラーゲンが残っていきそうな人骨をぜひ見つけてください。

藤井 そうですね。我々としても、コラーゲンの残っていきそうな人骨が出ることを期待しています。年代は確かに重要で、年代が定まらないと、しかも100年単位で定まらないと、現象を逆転して読んでしまいそうな気がします。現状の理解では、ガーネム・アリがEBのⅢ、Ⅳ。直近の墓は、ガーネム・アリの墓だと思うので、これとほぼ同じ時期。そしてビシュリの墓が、思っていたより少しだけ下がって、MBⅠになってしまいそうだと。こういう図式です。だとすれば、ユーフラテス沿いに定住集落があったあと、その定住集落がEBのⅣ前後にばたばたと廃絶される。その直後にビシュリの山の中に大規模ケルン墓群が数千基できて、200年ぐらいでバタッとそれもなくなるという。もう一ぺん都市化するのですけれども、MBになって。そのような、レヴァント南部でいうとEBのⅢからⅣにかけて起こった現象が、200年遅れてこちらでも起こったというようなことなのかも知れません。でも、それは100年、200年単位の問題なので、常木さんの指摘にあったように、ケルン墓のほうの年代をもう少ししっかりしないと自信を持って言えないことです。ですから、おっしゃるとおり年代問題にもう少し力点を置いてやりたいと思っています。

それから、もう一つ。西秋さんのチームが、丘陵端部を東西に広くサーベいをしてくださっています。発表をお聴きした範囲ですと、わたしの理解では二つの研究目的があって、一つはユーフラテス中流域、特にガーネム・アリ周辺の一一般的な居住史。銅石器時代になぜか居住の痕跡がなくて、ガーネム・アリの人たち、つまりEBの人たちは、新しい集団として来ている可能性が

あるとのことでした。これは、ガーネム・アリ、あるいはわれわれのプロジェクト全体にとって非常に重要なことですが、西秋さんのサーベイは崖際をメインでやってらして、常木さんは、前に低地のほうのテルのサーベイをされていますね。ですから、それをぜひ突き合わせていただいて、トータルな居住史が分かれば、われわれのプロジェクトにとってすごく有益ですので、その辺をお願いしたいというのが1点です。

あともう1点は、そうした居住史の把握の中で、シャブーティアンという非常に面白い発見がありました。これは年代的に見て、テル・ガーネム・アリの放牧の人たちの集落外活動の一環であったとのご指摘でした。多分、あの石器をわざわざ作りに行っているわけではないので、羊放牧に伴ってあのような活動がある。だとすれば、ヒツジ放牧をトレースできる非常にいい材料ができたことになります。これはわたしの希望ですが、シャブーティアンの南への分布限界というのをぜひ知りたい。それは、ビシュリのケルン墓、年代が違って100年、200年ずれているかもしれないですけれども、ビシュリの遊牧民たちの活動範囲とやはりずれているのかも知れない。定住の人たちの放牧範囲はこの程度までで、やはりビシュリの人たちとは少し違うのだということが分かれば面白いなということです。

ところで、シャブーティアンの分布南限問題に絡んでアスファルトの話が少し出ましたけれどもガーネム・アリからも出土していますよね。そのアスファルトが、ガーネム・アリとビシュリの僕らがやっているところとのちょうど真ん中、ややビシュリ寄りぐらいのところに産出地があるという点が重要かと思います。実は、ケルン墓はあの辺から始まるのです。ということで、あのアスファルトをだれが運んで、どのようなコンテキストでガーネム・アリへ持ち込まれたのかというのは、これはなかなか面白い問題で、しかも考古学的に十分アプローチできる問題です。少なくともガーネム・アリで出たアスファルトと現地のアスファルトを成分分析などして、このものであるということはある程度推測することは可能ですね。それとシャブーティアンの話などが絡み合えば、定住者の活動・放牧圏と、遊牧者の側の活動・放牧圏が、ようやく接点を見いだすことができる。その点を期待しているのですが、西秋さん、どうですか。

西秋 おっしゃるとおり、われわれのサーベイは二つ、多分重要なミッションがあると思います。一つは、10キロ圏と限定したところでの居住史の再構築。われわれはマイクロ・サーベイと言っていますけれども、綿密な遺跡探しであって、旧石器以降、青銅器時代までの居住史を一本、縦軸として確定したいと思います。台地のほうが終わったら台地の下のほうも、テルが中心になりますけれども、それも調べて、時間の軸を作るということです。もう一つは、今、藤井さんから内陸のほうも調べたらどうかとの話がありましたが、それは、もちろんサーベイすればできることなので、やりたいと思います。シャブーティアンの石器でわかるガーネム・アリの人たちの活動の痕跡がどれぐらい内陸まで広がっていたか、あるいは内陸にいた遊牧民の痕跡がどこまでユーフラテス河よりに及んでいたか、十分、調べられるはずです。

ようするに、今、テル、直近のお墓、ビシュリのケルン墓という三つの発掘プロジェクトが動いているわけですが、私たちのサーベイはその三つをつなぐような役割だと思いのですね。つな

ぐというのは、川べりの人がどれぐらい内陸へ行ったかとか、内陸の人たちがどれぐらい川べりに来ていたかという証拠を探して、空間的なつながり、そして時間的にもその三つを結ぶ。藤井さんがおっしゃったように、ケルン墓は中期青銅器で、ガーネム・アリは前期青銅器。突然、中期青銅器になると内陸でケルン墓が増えるということです。今回のわれわれのサーベイでは、内陸のほうにも前期青銅器の石器、シャブーティアンがあるということは分かりましたけれども、まだ中期青銅器の石器というのはきちんと同定していない。それがうまく同定できれば、ビシュリの証拠とユーフラテス河畔の証拠が、時間的にもつなげうと思っています。

藤井 中期青銅器時代の石器がまた問題になってくるというご提案はごもっともなのですが、これはビシュリのほうで少しだけヒントがあります。具体的にはヘダージェ3＝ケルン墓群の2号墓です。生きている層からタビュラー・スクレイパーが出ている。ヘダージェ1＝ケルン墓群の10号墓でも出ている。南レヴァントではEBのⅢでしたね。この種の石器の最終段階は、シリア方面ではもっと早く終わるだろうといわれているのが、実際にはMBのⅠまで、少なくとも副葬品の形で用いられていることとなります。時代的には少し遡りますが、ガーネム・アリではタビュラー・スクレイパーは出ていないですね。

大沼 ないですね。

藤井 ええ。だから、タビュラー・スクレイパーがどこまで来ているかですね。

西秋 タビュラー・スクレイパーはシリアでも出ています。テル・カシュカシヨクとかハブーバカビーラ。

藤井 それはいつごろ？

大沼 ウルク後期でしょう。

藤井 EBⅢとか、Ⅳでは、どうでしょう。

大沼 ガーネム・アリは掘っている面積は少ないけれども、今のところは皆無です。シャブーティアンと、あとは初期王朝期のカナン・ブレードです。

藤井 皆無だったというのは二つ解釈があって、ビシュリの遊牧民と200～300年ほど時期がずれていて、ビシュリの遊牧民が成立していないから皆無なのか。それとも、ビシュリの遊牧民はいたけれども北まで来ていないからなのか。

大沼 タビュラー・スクレイパーはイラクでも出ていますけれどもね。ウルク後期に、だから、遊牧民イコール、タビュラー・スクレイパーと言えるかどうか分かりませんが、ガーネム・アリに関しては今のところみじんも見られないですね。

藤井 そのテーマでドクター論文を書いた安倍さんもいらっしゃるんで、その辺を頭に入れて西秋さんもぜひ、得意なことだと思いますので、よろしく願いいたします。

それで、先ほど出ましたアスファルトの話ですが、これは星野先生のチームで、もしやっていたらとすればどのようなことができそうか、お聞かせ願えますか。

星野 前に西秋さんがそれについて発表されましたね。かなり識別できるというようなお話。あれをもう一度確認して。

大沼 産地同定です。

星野 どの程度まで、どの成分まで分析すればいいかということを検討して、できるところまでやります。それからついでに、山奥に大きなアスファルトの鉱床があるのですが、それ以外に、道路沿いにも小規模なアスファルトの礫層が1か所あるのです。それはまだ報告していなかったかも知れないですけども、ひょっとするとそこが産地かも知れないという感じがございます。

藤井 それは、この3月、星野先生の班も行かれるのですけれども、そのときに調査の目的として組み込んでいただけるのでしょうか。そのアスファルトの採取。

星野 アスファルトはもう採取してあります。

藤井 持ってきてある？

星野 ええ、両方とも採取してあります。だから、手元にあります。

藤井 これは確認ですけども、シリアをフィールドとされている常木さん、西秋さん、沼本さんがいらっしゃいますけれども、シリアというのは、天然アスファルトの産地はあの辺りだけと考えていいのですか。基本的にはあの辺はずっと石油の掘削地帯なので、アスファルト産出地はずっと広がっているわけですか。

西秋 以前、アスファルトの分析をしたことがあります。中東は石油の産地ですから相当いろんなところにアスファルトの産地があるはず。シリアだけでなく、イラクやトルコも含めて各地の産地のデータをそろえて比較しないといけない。そうしないと、分析してもただアスファルトでしたということになる。我々が分析できたのは、フランスの石油会社のデータを使っただけです。彼らは、トルコやイラクなど、全部持っているのです。産地ごとのデータを、それと遺跡から出てきたものを対比したということです。ビシュリだけを分析しても、ほかの産地のデータがないと解釈は難しいと思います。

藤井 現在星野班で確認している道路2か所。その差は、ほとんど出ないかもしれませんね。まあ、やってみないと分からないですね。

大沼 採取したものの産地同定をやってくださいということですね。

藤井 西秋さんが今言った、フランスが持っているほかの場所のデータというのは、それはアクセスできるのですか、われわれは。

西秋 プロの研究者ですから自分でやるというかも知れません。

藤井 分かりました。その辺の細かい詰めは別として、一つ、突破口としてこのアスファルトの問題が出てきたわけです。これを分析して見ていくことはできるし、そうすれば、恐らくガーンム・アリ出土の資料がどこからもたらされたのかも見当だけはつくでしょう。それにシャブーティアンや、タビュラー・スクレイパーといった問題が絡んでくれば、どちらの人たちが持ってきたかというようなことも多少言えるかもしれないので、希望として出させていただきました。

次に、石田先生の人類学班についてですが、ここにはイラクの既存の人骨資料の分析というのが一つの柱としてあります。これはすでにデータもそろっていて、ニュース・レターにも成果の

報告がありました。これと並行して、このプロジェクト、プロパーの人骨資料があります。これは今、ガーネム・アリから少し、墓を掘ればある程度集まって出ただろうと。

われわれのところはもう少し出ていますけれども、しょせん大した量ではない。これは沼本さんのところもわたしのところも同じですが、あるいはテルも一緒ですが、墓を掘って、うまく当たれば、最後の年になって人骨資料が急に増えるという事態が予測されます。そうした事態に備えて、石田班が迅速に対応できる体制を整えていただくようお願いしたいと思います。

大沼 昨日お話しして、最終年度は行けるということでした。

藤井 はい。次に、本郷さんの動物・植物班は、ベースとしてはテル・ガーネム・アル＝アリの発掘調査で出た動植物のデータがあり、その面から定住アモリの人たちの生活というものにアプローチしてもらっているわけですね。一方で遊牧アモリというのがいたわけでしょうから、この辺が今、データとしてあまりない。唯一、赤司さんが、現在のベドウィンの人たちの植物データを、サーベイで揃えつつあるという状況ですね。

なお、遊牧アモリの動植物データについて言うと、これはあまり期待できないように思います。唯一の頼みがケルン墓ですが、その墓に意図的に動植物を入れていない限りは、データの拾いようがない。ただし、乾燥域にのみある葉草・香草の類ですね。このようなものが、どの程度定住アモリの側に運ばれているか、利用されているかというアプローチはあるのかもしれませんが、これはあくまで希望的観測です。メインとしてはガーネム・アリの動植物。ただし、ガーネム・アリの動植物といっても、トレンチとスクエアがありますが、その辺りの今後の予定はどうなっているのでしょうか。

長谷川 スケジュールはけっこうあるという話ですので。

大沼 スクエア1のクリーニングですね。

藤井 クリーニングですから、コンテキストはよくないので、あまり期待はできない。

大沼 いや、クリーニングと発掘は微妙に重なります。

藤井 あとはお墓のほうから、ひょっとすればということですね。

次に松本先生の班に話を移しますが、2年前の発表で、ユーフラテス流域のサテライト画像の分析・解析というのを発表されたと思うのですが、今日のご出席でしょうか。

大沼 欠席のようです。

藤井 そうですか。これは、定住アモリの側の自然環境分析ですね。その一方には、遊牧アモリの自然環境問題もあるので、ビシュリのほうのサテライト画像の分析もお願いしたいと。

次に、岡田先生の班、宮下班もそうでしょうが、本来持ってらっしゃるベースの部分が、三千年紀、二千年紀のビシュリということとはなかなかフィットしない面もあって、いろいろと苦労されていらっしゃると思います。宮下さんの班では、今日、津村さんが「コインと部族性」というとんでもないことをおっしゃいまして、びっくりしてしまったのですが、でもあれは、やったらできるかもしれないですね。確かに、念のため、もう1度お聞きしますが、コインが部族の領域内で、限定的な経済内の交換貨幣として使われているから、それをトレースによって部

族性の枠組みをあぶり出せるかも知れない、ということをおっしゃったわけですね。

津村 コインそのものが持つ美術表現だけでなく、コイン発行などに関与する位置にいる人たち、また隊商として外に出ていく人たちなどのグループが見えてくれればと思っていたのですが、パルミラには正確に「部族」と呼んでいいかはわかりませんが、それぞれの文化を持つ一族、人間の集まりの存在が碑文などに残っている。どのような神を祀っているか、どのような名を持つ一族なのか、彼らの職種など、碑文などから得られる情報は確かにある。それがコインの表現や実際の出土状況などとうまくかかわってほしいのですが、なかなかそこまでうまくいかない。

大沼 出入りということですね。いろいろなグループの出入りをコインから追跡できるという。

津村 出入りという点では、パルミラに限定している小さなコインがドゥラ・ユーロボスからは少なからず出てくる。そういう行き来、動きの仮定は少なくとも押さえられると思います。

藤井 わたしのところも沼本さんのところもそうですけれども、お墓ならお墓のいろいろな特性をグルーピングして、そのうえで、その一つのグループが部族なり、氏族なりに、対応するかもしれない。その可能性を探っているわけです。コインのほうもですね、部族に対応するかどうか最初から分からないのは当然なので、ぜひ強力で押し進めていただければと思います。パルミラという素晴らしい資料群があって、しかも文書があるから、グループの固有名詞まで分かるわけですね。その意味では、パルミラの人たちはすごく有利な立場にもあるわけです。美術史の領域でこのようなテーマを追求するのはなかなか難しいことは十分承知しておりますが、ぜひわれわれ考古学班を引っ張っていただきたいというように思います。

ところで、岡田先生の班にはハマディーンの測量をやっていただいておりますが、今年はどのような展開を考えておられるのでしょうか。

岡田 報告をさせてもらいましたけれども、特にこれを分析しようというのはありません。むしろこちらからお聞きしたいのは、あれだけのテルで、なぜあれほど遺物がブアなのかということが気になってはいます。

大沼 遺物がブア？

藤井 発表で、遺構の痕跡も薄い、遺物が非常に少ないというご指摘をされておられましたね。

岡田 はい。若干の土器の破片を拾って、スケッチしたりはしましたけれども。

大沼 ああ、ハマディーンね。遺構のラインが見えないとおっしゃったけれども、あれは真夏で乾燥していて、1年半前の3月にははっきりと見えました。遺構がないということではなくて、乾燥して見えなかったということです。それから遺物は、ガーネム・アリでも表面ではあまり落ちていなかったのですけれども、掘りだすと出だしましたね。

岡田 相当たくさん盗掘墓がありましてね。直径2メートルくらいのピットがたくさんあって、そこから土がたくさん上がっているのだけれども、それでも遺物が見あたらぬ。

大沼 全部持っていったのではないですか。

岡田 最初の段階で、表面採集などで遺物を取り上げたりはしているのですか。

大沼 やっています。ニュース・レターで木内さんの写真が掲載されています。

岡田 そのときにだいぶ集めたと言っていましたね。

大沼 2日間おこないました。そのときに採集し尽くしたということではなくて、たまたまなかつたのだと思います。

岡田 そうか。でも、大沼さんがおっしゃったように、遺構の線は……。

大沼 はっきり見えた。

岡田 南側でしたね。

大沼 ガーネム・アリとほとんど同じです。

藤井 多分、季節が違うからでしょうが、南側を中心にかなり見えたというのは確かです。

岡田 南側に一つ、二つ、「あ、これ、ちょっと壁かな」というのはあるのはあったのですけれども、ガーネム・アリと比べるとやはりはっきりしない。

大沼 わたしもこの前行きましたけれども、1年半前と全然違ったです。見えませんでした。それで、わたしのほうから岡田さんをお願いしたいのは、昨日、レンガの積み方でグループの違いが分かるのではないかということでしたが、そのあたりはどう進めていっていただけるのかということです。

岡田 僕は、申し訳ないのだけれども、やはりもう少し他の遺跡のデータを合わせたいと思うのです。地理的なことです。ガーネム・アリがもう少し他の地域とつながるようなデータがあれば。

大沼 例えば、スエイハットという遺跡。そこでは壁がはっきり出ているし、似たような積み重ねになっています。

岡田 それで、最初にレンガのサンプリングなどをして分析すべきですね。

大沼 それもしてあるし、ラッカ周辺の前期青銅器時代のスエイハットやモンバカというのはいっぱい発掘されています。

岡田 その辺をやらなければいけないと思いながら、申し訳ありません。

大沼 土の分析も結構ですけれども、近くの同じような時代のものを見てほしいと思います。

岡田 まず最初はモンバカで。

藤井 テル・ガーネム・アリは発掘許可ではなくて、あくまで試掘ということで、限界があります。動物・植物班、人骨班、岡田先生のところなど、皆さんにご迷惑をかけていますが、これはしかたのないことなので、どうかお許し願いたいと思います。今、大沼さんからサゼスチョンがありましたけれども、テル・ガーネム・アリ周辺の同時代遺跡をぜひ見ていただいて、そのうえで、ガーネム・アリ遺跡の遺構について、とりわけ組積構造について何か言えることがあれば、われわれに教えていただきたいと思います。

大沼 報告書にはぜひそれを盛り込んでいただきたいと思います。

藤井 はい。次に星野先生の班は、ガーネム・アリ、あるいはその周辺の環境史ということを中心に大きなテーマとしてやっています。新しい視点としてアスファルトの問題を、ということですね。ただしこの二つは、両方とも、ガーネム・アリ周辺の定住アモリの自然環境、環境

史になりますので、ぜひ一度ビシュリ山系の方にも来ていただいて、砂嵐にも遭っていただいて、遊牧アモリの環境史にも言及していただければ幸いです。今から調査をしてデータを集めても間に合いませんけれども、一度見ていただくことをお願いしたいと思います。ほかに何か考えておられることがあれば、はい。

星野 先ほども出ましたけれども、ガーネム・アリのスクエア2のほうはもっと掘り下げていただけるということで。

藤井 トレンチですね。

星野 トレンチです。3月の。それで、何が出るまで掘り下げるかということなのですが。

藤井 地山が出るまで。

星野 地山が何かということ。

大沼 だけれども、トレンチを広げない限り、あと1メートル掘ったら限界だから、その時点では別にやめてもいいと思いますけれどもね。地山に到達しなくても。

星野 当初われわれは、あの小高い段丘の上に構築したのだらうと思っていたのだけれども、それらしい礫層が出ないのです。

大沼 ないですね。

星野 それが問題で。

藤井 意外に深いですね。

常木 沖積土がかぶってしまっているということですね。

星野 そこが地質学的にも面白いなと思っています。それから、その段丘ですけれども、いまいちはっきりしない点がありますから、それから、なかなか適当な炭質物が挟まれていないということで、面白い結果が出ないのですが、あと可能性としては、西秋班の石器の調査ですね。そちらの知見から、もう少し高位段丘について研究が可能かも。

それから、環境変遷と言いながら、花粉がほとんど出ないのですね。ガーネム・アリの本当に表層部分、すなわち現世の花粉しか出ていない。下のほうは全然出ないというように思いますので、環境変遷、その花粉から何か言えるというように最初は期待していたのですが、それができないということで、では、どのように環境変遷を見るようにしようかというのが少し問題です。それも、本郷班のほうのいろいろな知見も少し加味して、やっていただくとか。

大沼 放射線量を測られたのでしたね。

星野 はい。

大沼 あの結果はいつごろわかりますか？ 環境の変遷に関して何か面白い結果が出たのですか？

星野 現象論的なところだけで、まだそのデータは関連させていないのですが、ひょっとすると、人間がどのように利用をしたかというような点、土壌をこちらからこちらへ運んだなど、明らかにテルの土壌と周辺の土壌とは違います。

大沼 違うのですか。

星野 そこまでは分かっているのですけれども。

藤井 環境変遷がいちばんメインですから、トレンチで地山が出ないというのは、出ない以上しかたがないのですけれども、最後の年になるので何とかしたい感じですね。

常木 どこかでコア・ボーリングできるような所はないですか。

藤井 そうそう、ボーリングのことはいかがですか。トレンチのデータでおおよその層位はつかめていますから、周辺で何本かボーリングを入れられたら、かりに炭化物が出なくても、一応年代は分かります。ボーリングはできますよね。

宮下 許可を取らないとだめです。

大沼 申請されたのですね。

星野 アイハムと一緒に、ラッカの地質調査所の支局といますか、行ったのですけれども。

藤井 いや、テルの中ですよ。

星野 だから、既存のボーリングがああ辺でたくさんやってあると、やってあるから、ダマスカスの地質調査所の本局に行って探してこいと。

大沼 ボーリングの機械も借りられるでしょう。

星野 それは分かりません。

藤井 事情はわたしも詳しくないのですけれども、ゲーネム・アリの環境史はすべての領域にかかわってくることなので、何とか工夫を考えなければいけないと。

星野 ボーリングは、いずれにしてもラッカではらちが明かないと思います。

大沼 許可ですね。

星野 ダマスカスで交渉しないと。

大沼 いわゆる情報漏れに関係すると考えられているのだと思います。

藤井 ここ1万年ぐらいのことでいいのだし。

大沼 それ自体が、情報省が気にする情報漏れにかかわっているというようなことでしょう。

星野 その辺が分からないのですけれども。

大沼 地図の場合と似ている。トライはできるのですね。機械もある。

藤井 では、その辺のことは、総括班とまた相談させていただくということで。

藤井 次に前川先生の班。今日は山田さんに発表していただきましたが、この環境史問題に関して何かコメントがありますでしょうか。

前川 環境のことについてお尋ねといますか、昨日からのお話を聴いていて、半農半牧と申し上げましたし、それからいくつかお話もあったのだけれども、改めて気になったのは、耕地があるのだったらどこにあるのだということ。畑があるのであれば、どこで麦を作るのだという問題。

藤井 昨日、少しディスカッションがありましたね。

前川 それは農法との関係にもよるのだらうけれども、ユーフラテスとは全く関係がない話のことなのか。もしそうであるとしたら、どこへどのようなポッシビリティを考えた方がいいのか。そのようなことについて、もう少し何か追いかける手掛かりというもの、それは不可能なのだと

うかという、質問でもあるのですけれども。

藤井 これはわたしが答えることではないのですけれども、耕作地は集落周辺と一応考えて、大体当たります。テル・ガーネム・アリの周辺ということであれば、灌漑をやっていたと私も思います。ただし、河川水面と比高差がありすぎて、ものすごく上流から今のところに引っ張ってこない限りは、ユーフラテス本流からの灌漑はできない。しかし、周辺三日月湖やワディなどを利用した小規模灌漑は十分可能だったと想像しています。

先ほど話に出ましたけれども、ガーネム・アリ、ハマディーンがEBのⅢないしはⅣで廃絶されて、その直後にビシュリの中にケルン墓が出たとすれば、当然自然環境のことがクローズアップされるわけで、そのデータが全くないというのはいかにもさみしい。最後の年の重点目標の一つとして、ボーリングを実現するようにみんなで努力・協力しましょう。

常木 文化財博物館総局の許可を取らないとなりませんか？

宮下 問題になるときはすごく問題になると思います。ボーリングをやると。

大沼 しかし、トライはしたほうがいいと思いますね。

西秋 石油地帯だから警戒がきついのではないですか。

大沼 ああ、石油ですか。

藤井 掘削の深度の問題もあるから、「2メートルぐらいです」ということでちゃちゃっとやってしまう。

大沼 まあ、トライしましょう。

藤井 そうしましょう。では、本題に戻ります。前川先生の班では、文献によるいろいろな面白いことが出てきて、われわれとして非常に勉強になるのですけれども、アモリというのは結局総称といますか、今で言う「ベドウィン」のようなものなのでしょうか。それとも部族名なのか、フェデレーション名なのか。これは赤堀先生にもお聞きしたいのですけれども、ベドウィン側の部族のフェデレーション。フェデレーションそのものに固有名詞がついている例はあるのですか。

赤堀 あります。イラン系などはけっこう多いです。

藤井 それは、部族名とは別のフェデレーション名があるのですね。

赤堀 五つの部族が合わさっているもので、ハムスイナートと呼ぶ例などいろいろあります。

藤井 ああ。でも、それは少し固有名詞っぽくないですね。

赤堀 由来がわかってしまうのでそう感じられますが、機能的には固有名詞ですね。

藤井 われわれの中心課題は「セム系部族社会の形成」ですけれども、実際には三千年紀、二千年紀のところをメインにやっていて、当然アモリの問題が中心になるわけです。アモリ人と言っていますけれども、アモリ人、アモリというのは一体どのような集団階層名なのでしょう。山田さん、ちょっと教えて。

山田 三千年紀の終わりまでは、メソポタミアの中心からマルトゥ、つまりアムル人という言い方が出てくるわけですが、それがさらに時代が下ってくると、もっと小さなサブ・グループにはっきりと分かれてきます。特定の地理的背景と、恐らくは史料的にはさかのぼれません。

れども血縁集団としての背景がある幾つかのサブ・グループがより細分化されたかたちで認識されるようになるということです。

それが先ほどのアッシリア王名表冒頭部分やバビロン第1王朝の祖先の人名あるいは部族名を並べたリストにあらわれているのですが、そうしたグループ名・部族名は縦にクロノロジカルに並べられているのではなくて、一つのセグメントとして、同時代に地理的にいろいろなところに並存していたであろう諸部族の名前がかためてまとめられています。そうしたリストがメソポタミアの南部からも北部からも出てきているということになります。それらの諸部族が、前3千年紀においては、南メソポタミアの中心から西のほうをざっと眺めてみたときに、アムル人という総称でくくられて表現されていたというのが印象です。その証拠に、西を指す用語としてメソポタミアでは、アムルという言い方がでてきているので……。

前川 前三千年紀のシュメール・アッカド文書にマルトゥというように書かれて出てきますけれども、今、山田さんがおっしゃったことと関連をして申し上げます。まず人名があらわれ、そのあとに彼/彼女はマルトゥである、と書かれる書き方。それ以上の限定がない。それからもう一つは、方角としての言い方です。

ただし、方角としての言い方ですけれども、前3千年期中葉のエブラ出土の文学テキストでは、シュメール、それからシュブル、ディルムンという表現があらわれる。つまりシュメールを中心に北にシュブルと、それから南のディルムンと書いて、西は言及はないのです。前3千年紀中葉には既にマルトゥ人がメソポタミア中枢に入り込んでいることは確かだけれども、その実態がよくわからない。また、シュメール人が西方についてどこまでわかっていたのかもあやしい。

藤井 それは、メソポタミア文明世界の、総じて西のほうにいる半遊牧民たちを総称して言っているのですか。

前川 地中海までは行かないでしょうけれども、西の乾燥域の「牧民」のことをいっているわけです。だから、注意しなければならないのは、ウル第3王朝時代まで下りますと、むしろシュメールではディヤラ地域の人々をマルトゥとして意識をする。シュメールの北方に対マルトゥの城壁を作るということが、このことを象徴しています。

大沼 北を向いているのですね。

前川 北を向いているわけです。西を向いて城壁を作ったわけではないので、だから、今のディアラ辺りのことを考えていることのほうが多いのではないのでしょうか。ただしこれは、ウル第3王朝時代のことですけれども。

藤井 私の質問の意図というのは、こういうことです。西の人を総称していて、なおかつ西にさえいけば、定住者も遊牧民も含めて「アモリ」と、メソポタミア世界の人は認識していたのかどうか、その点です。

大沼 その点ですけれども、わたしはダマスカスでデュラン先生に聞いたのです。ガーネム・アリにはアモリが住んでいたのかと。そうしたら、この地域はすべてがアモリだとおっしゃっていました。

山田 いちばんアムルについて学識のある人たちですので……正確にデュランが何を意図したのかよく分かりませんが……. 西方からメソポタミアに入ってくる時点で、メソポタミアのディアラ近辺やシュメールから見て北のほうに位置する人たちも、西セム系言語であるアムル語という同じ言葉を話す、同じ半遊牧的ライフスタイルをある程度持った人たちであればアムル、アモリというように認識されるのです。そのときに、メソポタミアからある程度外部に行くと、厳密に西という方向に限定されず、あちこちにアムルが出てくるということで、そのような意味では、前川さんの言っていることとデュランさんの言っていることと私の話したことというのは、たぶん一つの認識で一致している。

大沼 ここで、中田先生は、アモリは原郷からいったん北に移動して、東回り、ハムリン経由で行ったのだというご説だと思うのですが、中田先生はアモリという存在をどのように考えられておられるかをお聞きしたいのですが、個別の固有名詞、あるいは総称だという問題ですが。

藤井 その前にもう一つだけ重要なことは、アムルは他称なわけですね、メソポタミア世界の人がそう呼んだにすぎないので、彼らが実際にそう自称していたかどうかのエビデンスはどこにもない。自称ではないとも言えないのですか。それとも、他称でしかありえないということなのでしょうか。どちらでしょうか。

前川 それは、三千年紀の中頃、バビロニア南部地方で書かれたテキストにマルトゥウと出るのですけれども、一方で同時代のセムの人の書いたテキストが出てこない限り、何ともそれは言えない。今のところ、それが出てくるときに、いちばん古いのは他称だとしか言えない。ただ、3千年紀中頃のエブラ文書にはマルトゥウがあらわれる。これも他称だと考えてよい。

藤井 今、教えていただいたことからすると、三千年紀、二千年紀のメソポタミア世界の人が、西、ないしは時々軸がずれるということがあるようですが、西ないし北にいた遊牧系の人たちを他称として、メソポタミア世界のほうからつけた一般名称として、アムルと呼んでいたという理解でよろしいですね。

前川 はい。

藤井 その時代のその地域の遺跡をわれわれはやっていて、一方でビシュリ山でケルン墓を掘っているし、一方では流域で定住集落も掘っていますけれども、その時代のその地域の集団である以上、他称としてのマルトゥウやアムルであるわけですね。

前川 もちろん藤井先生の年代も動かない。ケルン墓の年代、絶対年代は。

藤井 動いても100年、200年で。

前川 でも、藤井さんがまさにおっしゃったとおりなのだけれども、微妙なことがあって、100年、200年動くとすごく話が変わってしまう。歴史のストーリーとしては、シナリオとしては変わってしまいますので、そのことと、それからもう一つは、昨日お聴きした中村先生の年代のあの古さ。わたしは少しびっくりして、二つの話がもう少し、あまりにも開きすぎている。

藤井 年代問題については、各班の方向性確認が終わったあとで、議論しましょう。前川班について、今、今年の方針の確認というより、わたしの個人的な質問をしてしまいましたけれども、

マルトゥないしはアムルにかかわる、アンソロジーをぜひ作っていただければありがたいと思います。

前川 マルトゥについては、早稲田大学の前田徹さんがすでにおやりのお仕事なのですね。ただ、今度彼が書いてくれて、今、印刷中のものは、ある意味では皆様がたの考えと少しずれが起こるかもしれません。なぜかという、タイトルが「マルトゥ、族長制度の成立」なのです。つまり前田さんが書かれていらっしゃるの、まだきちんとした政治的な統一体という意識がなかったものが、二千年紀の初めに向かってそのようなことがはっきりしてくるのだと、南に入ってくるといふ。確かに山田さん、そうですね。彼の考え方は。

その考えがいいのかどうかという大問題もあるのだけれども、いずれにしても前田さんの大きな、ありがたい仕事があって、どのように読むかは別だけれども、イデオロギーとしての彼らの意識のありようということがはっきりしてきたということ自体は動かない。前田さんが書いてくださったとおりでと思うのですけれども、本当に部族制度の、彼の論文では「族長」と書いていた、正確には、族長制度の成立なのだけれども、部族制度の成立とは書いていないのだけれども、そこをどのように読むのか、まだもう一つ分かりません。でも、あらゆる限りのマルトゥに関する情報は集めます。

藤井 はい。われわれのほうのデータはスライドを見ていただいたらお分かりいただけると思うのですが、先生がたのデータはこちらのほうに全然頭に入らないので、共有できる材料をぜひ。これは論文という形では難しいでしょうけれども、リスト化して、短い解説を入れてくださればと思います。

ところで、計画研究班としてはもう一つ、月本先生の班があります。月本班はテル・レヘシュの発掘調査をメインに活動しておられますね。前期青銅器時代の層はまだ出ていないということですが、前期ではなくても、中期でも何でもいいのですけれども、レヘシュの資料をもっと詳細に紹介していただければと思います。マルトゥ・アムル問題で言えば、前期も中期も両方かわるわけですから、イスラエルでやっていらっしゃるの、シリアメインのこちらとなかなか行き来はできないのですけれども、もう少しジョイントしていただくように、代表者の大沼先生から強く要請をさせていただくことにしましょう。よろしいでしょうか。

大沼 イスラエルに関係することでも何でもいいのですけれども、プロジェクトに関係ある部分をピックアップして何かやってくればいいと思います。

藤井 いや、むしろ月本先生の班は、MBシリアの史料は一番の得意分野と言っていいぐらいですよ。レヘシュの資料も含めてですけれども、われわれとしては、非常に優秀なメンバーがそろっている班のデータがこちらにあまり共有できない形になっているというのは非常に残念であるということ。

最後に、公募研究が二つありまして、まず高濱先生の班。高濱先生がここまで調査されて、あるいは研究されて、ユーラシアのケルン墓のいろいろなデータが出てきていますね。今度は逆にですね、ビシュリのほうのケルン墓のデータを見ていただいて、その比較になりそうな形で、

そのようなデータをこちらに出していただくとありがたい。つまり高濱先生のほうでわれわれのほうのチームの仕事を見ていただいて、「モンゴルにもこういうのがあるよ」ということをぜひ、お願いできればと思います。

大沼 高濱先生は2年間の公募研究を終了しておられますが、昨年のことですが、公募研究が終わったあとの最終年度の報告書作りに協力していただけるとおっしゃいました。それでまた今日もおいでくださったと思うのです。

藤井 最後になりました。申し訳ありません。赤堀先生の班に話題を移しましょう。高尾さんが今、調査をしてくださって、今日赤堀先生ご自身から部族についていろいろお聴きして、非常に面白いと思ったのですが、すべてのデータがどうしても定住アモリに偏ってしまうので、遊牧アモリのほうの文化人類学的なアプローチというのをお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

ビシュリにはかなり純粋な遊牧民が残っています。その人たちの行動圏と、どこにお墓を構えているのかをぜひ調べていただければありがたいと思います。いろいろなところに行ったり来たりするけれども、どこで死のうと、最終的な墓は部族の聖地のこの場所にいつも造る、ということのアモリの人たちはやっているようなのです。それで現在の遊牧民たちはどうなのか。その点をぜひ調査していただきたい。それが、総括班の希望です。

それから、レヴァント南部やアラビア半島でよくやられていることですが、部族マーク、ワスム。羊につけたり、あちこち行った先で、泉のそばの石などに刻んだりしますね。部族の領域、テリトリーの表示なのでしょうけれども、これは、歴史学、文化人類学、考古学がジョイントしてやらなければいけない仕事なのでしょうけれども、部族にアプローチする非常にいい材料です。ですから、今ごろになってこのようなことを言ってはあれですけども、頭の片隅にでも置いていただいて、何か発見があれば幸いです。

結局、15の班をぐるっと回っていたら時間になってしまいましたけれども、もう少し10分、15分だけ延長して、先ほどの年代問題だけでも話し合いますか。

大沼 各研究班の今後の方向性ということで討議してきましたが、領域メンバーでないかたもここにいられていますので、ここで、昨日と本日の発表に関して最終的な総合討論をおこないたいと思います。まず最初に、ガーネム・アリ遺跡の発掘にかかわってきた者の一人として非常に問題視している点がありますので、それを提起して皆さんのお考えを聴きたいと思います。

ガーネム・アリ遺跡は、土器から観る限り、EB IIIとEB IVの年代であるといわれてきています。また、ガーネム・アリ遺跡やハマディーン遺跡などの、ユーフラテス河氾濫原の中規模テル型遺跡は中期青銅器時代の年代にはないといわれています。ビシュリ砂漠のケルン墓はMBです。

そうすると、中期青銅器時代の遺跡が氾濫原の遺跡にない、そして、砂漠台地のケルン墓が氾濫原の遺跡よりも若干新しい時代だという推察がもし証明されたときに、この地域のユーフラテス河氾濫原の中規模村落がなくなった時期がMBの初頭ごろとしまして、このような現象を、

例えばアモリ人の移動、移住といいますか、動きに関係させることも一つ興味のあることだと思いますので、この点につきまして、あくまでも氾濫原の遺跡はMB以後のものが少なくなるということをお前提として、アモリ人の移動の研究をなさっておられる中田先生から何かお考えをいただけたらと考えております。

発掘にかかわってきた者の一人としてこの辺が非常に大きな問題ですので、中田先生が、アモリ人の移動ルートで、どこからかは別としていったん北に向かって、東に向かったあとに南に下りて、ハムリン経由で南メソポタミアへ移住したとおっしゃったと思うのですが、その時期がEBの終了期からMBの間だとすれば、ユーフラテス河流域に中規模村落が少なくなっているらしいということ、移住の問題を絡めて考えられるのではないかと考えて質問したいのですが。

それで常木さんが今朝、山藤さんの編年観がポイントになるとおっしゃったのですが、ガーネム・アリ遺跡は前期青銅器時代のⅢ以後なのですね。

常木 土器でいくと今のところ、長谷川さんはⅢとⅣAの時期がガーネム・アリにあるということではいいですね。

長谷川 Ⅲに関してはまだ詳細な分析をしていますが、ⅣAの存在はすでに、木内君の方から報告されているように、トレンチ2の上層のほうで確認しています。さらに、トレンチ2においてⅢ期との連続した層位を確認しているので、Ⅲ期も確かにあると思うのですが……。

今、トレンチで掘っているスクエア2のほうの最下層では、EBのⅢの範疇に入るものが検出されているという認識でおります。

藤井 土器の型式で見るとⅢ、ⅣAが確認されていて、その上下の年代で言うと、2500から2200ぐらいのところに入るはずだと。

長谷川 そうですね。ただスクエア1のほうに関しては、明らかにⅣAだと思われるものは多分ないと思います。スクエア2では、いちばん高いところで若干出ているという報告がされていますが、基本的にはⅢ期が、主体になってくると考えていいと思います。

藤井 問題はむしろ、カーボンで言うとⅢ期初頭がなければおかしいということですね。むしろⅢ期初頭のほうがメインで出ているのですね、カーボンの値としては。

中村 そうですね。

常木 もっと前にさかのぼるかもしれない。Ⅱ期～Ⅲ期初頭になりますね。

藤井 Ⅲ期をさらに超えた時期で、Ⅱと言っているのですかね。カーボンではさらに古い時代の年代がメインになっていってしまっているのですね。

長谷川 2850という年代はスクエア1で出ているので、そうするとⅢ期の範疇を超えてくるということなのですが。

藤井 土器のほうはどうですか。それは非常に希薄だと。

長谷川 そうですね、どうなのでしょう。この3月に詳細の分析をするつもりなのですが、どうなのでしょう。EBのⅢ期の中でとらえたほうがいいのではないかと、土器から見ると今のところは考えておりますが。

藤井 III期にあっているのですけれども、後半だけなのか、前半はないのか。

長谷川 それは、ちょっと今、はっきりとお話しすることができないのが心苦しいのですけれども。

藤井 現状でつかんでいる範囲では、土器のデータからするとIII期の後半がメインで、IV Aがある場所もある。しかし、III期の前半やIIというデータはほとんどない。

長谷川 ないと思います。IIに関しては特になんとも思います。

藤井 カーボンは、どちらかというIII期の前半ないしIIに偏ったデータがあると。カーボンのコンテキストは、どうですか。測定用の炭化物は、トレンチの側面から取られているわけですか。スクエア1のほうのいろいろな箇所から取られている。

中村 はい。

藤井 縦から、スクエア1のほうからですと、もっと新しく出ないといけない。

大沼 レベルからいくとスクエア1のほうが低いです。

藤井 そうなのですか。

長谷川 スクエア1では、IV Aは多分ないと思うので、その意味で古い時期が主体であると言えると思います。

藤井 でも、ちょっとやはり……。

長谷川 ちょっと古いという気はします。

大沼 ガーネム・アリヤハマディーンなどの河原の遺跡はこの時期以後規模が縮小したということになると思います。

常木 IV Bはないのですか、現在。

大沼 今のところIV Aまでですね。

藤井 ただ西のほうでは、けっこう新しいものが出ている。

大沼 細かい年代ではなくて、例えばMBがガーネム・アリヤハマディーンに見られないことが証明されたときに、ここの時代とケルンのMBまで間隔があるのですね。それをどうとらえるかというのが、非常にわたしは面白いと思っています。

常木 一つの問題は、アッカドの進入とその経路の問題があります。IV B期の遺跡がユーフラテス河沿岸ではそれほど見られない。

大沼 アッカドの崩壊ですね。混乱したということでしょう。

常木 はい。

大沼 アッカドの崩壊は何年ぐらいになるのだろう。この時代ですか。

常木 いや、もう少し前です。紀元前2300~2250年ぐらいだと思うのですけれども。

藤井 崩壊ではなくて、遠征の話ですね。

常木 遠征。

藤井 アッカドの遠征は、しかし、戦火のようなエビデンスは特には、この遠征期では見つかっていないのだね。証拠があるというわけではない。

常木 北西シリアですと、エブラではⅣ A 期とⅣ B 期の境というのがけっこうはっきりしています。パレス G が燃えてしまったところがその辺りなので、土器もはっきり分かります。

藤井 ケルン墓は、ヘダージェ 1 の 9 号出土遺物に関する足立さんの MB I 説が正しいとすれば、10 号は明らかに一時期古いので、もしかすると EB Ⅳ の B ぐらいになるかも知れない。だとすれば、アッカド遠征の直後にぱっと出現したことになる。話がうますぎますけどね。

大沼 要するに、ある時期に遺跡が減るというのは今まで知られていたことでしょう。それは、アッカドの崩壊後の乱立状況、そして、急激な乾燥化によったということと言われてきたのだけれども、ガーネム・アリを実際に掘っていて、ある時点以後に居住の規模が小さくなった。そして、それ以後に砂漠のケルンが非常に多くなっているような状況がみられるようですので、河原の人間が全部移住してしまって、砂漠のいわゆるベドウィンだけが残ったというような単純なことではないと思うのですけれども、アッカドの崩壊以後に河原の中規模村落は弱体化したけれども、遊牧と農業をとまにおこなっていたアモリ人は存続したのだとエリザベス・クーパーは書いているのですね。

このあたりの問題が、ガーネム・アリ遺跡と墓、それからケルンの問題と絡めて考えると興味深いのではないかという問題提起です。

前川 木内君が編年の問題にこだわっていたのも、多分関係あるのだと思います。

大沼 いや、木内さんは連続性を見たかったのだと思います。しかし、むしろ木内君の期待に反するようなことになるかもしれません。

前川 そうですか。もしこれがそうだとしたら、問題になるのは EB のⅢですね。場所としては、やはりすぐ歴史文献屋としてはマリのことを意識しますから、それはやはり中田先生に、この時期のマリ、あるいはマリの出店のようなことがありうるのかということはお伺いしたいところです。

大沼 そうですね。

中田 わたしがやっているのは紀元前 18 世紀ですから、EB のⅡなど、そのようなところではないのですね。マリで文献が数々出てくるのは、今言った 18 世紀。ですから、もちろんもっと古い時代から遺跡はあるのですけれども、ちょっと今、申し上げられないです。申し訳ないですけれども。

それから、先ほど少し話が出ました、大沼先生から言ってらっしゃったのも、どうもわたしの関心外と言ったらおかしいのですけれども、マルトゥウという言い方が文献に出てくるのは要するにシュメール語文献。ウル第 3 王朝時代の文献に出てくるというのが、先ほど前川先生がおっしゃったように最初なのですね。それは、時代的に言えば EB のⅣ B のところに相当するかなと思うのですけれども。

ですから、前川先生や前田徹先生のほうがご専門なのですけれども、有名なのは、皆さんご存じのウル第三王朝 4 代王シュ・シンがマルトゥウを遠ざけるための城壁を作ったという話が出てきますが、最近では、その城壁がシュルギのときにすでに建築が始まったというように言っている人

もいまして。先ほど言いましたように、アモリ人がマルトゥと呼ばれる固有名詞があって、マルトゥと書かれている人たちはウル第3王朝時代の、シュルギの時代の文献で出てき始めますから、そのころには、メソポタミア南部にマルトゥと呼ばれる人たちが入ってきていたということが言えるわけですね。それだけの話で、それがEBのIV Bのあと、居住遺跡といいますが、遺跡がぐっと減るというお話ですね。

大沼 それで証明できればということを前提とするのですが、今のところ証明されてはいません。

中田 たまたま時間的には、時代的には同じころということですけども、原因が、マルトゥが大挙してビシュリ辺りから出ていったからかどうかは、ちょっと何とも言えない。

大沼 何かそれを反映しているのではないかという感じで。

中田 ええ。可能性はあるかもしれない。

大沼 デュランさんはその辺に非常に興味を持っています。

中田 なるほど。デュランさんがいらっしゃれば、もっときちんとした話が聴けるのではないかと思うのですけれども。

大沼 ガーネム・アリ遺跡は時代が古くなるので、いわゆる移動の前哨ですね。ガーネム・アリなど河原の村落民もまたある時点以後は人口も少なくなったのだと思います。ただ、遺跡の年代はアモリ人がマリ文書に出てくる時代よりも古いと思います。

藤井 テル・ガーネム・アリ、あるいはハマディーン遺跡がⅢ、Ⅳ A ぐらいで廃絶されて、そのようなデータが今、つかめているのですが、それが正しいとする。もう一方でビシュリ山系のケルン墓は、意外や意外、同時期ではなくて、少しずつMB Iになって、比較的短い間に数千基造られている。この両方とも正しいとしたら、なおかつ両方ともがアモリだとしたら、メソポタミアに移動してきているアモリというのは、ユーフラテス中流域の定住民が一旦遊牧化していて、その流れとして来ている可能性が出てくる。つまり、都市生活、定住生活のベースをすでに持っていた人が遊牧化してきているということになるかもしれないということで、その100年、200年の廃絶、ずれ、あるいは重複というのが、非常に今、重要になりつつあるということだと思うのですね。

大沼 そうですね。

藤井 そのことをわれわれが確実に言えるかということ、例えばガーネム・アリの年代ですら、土器型式とカーボンで少しずつずれがある。ケルン墓はケルン墓で盗掘が多いので、まだ本当に確定的な年代は得られていない。最後の年になるべく早くその課題を詰めて、もう1歩、2歩先へ行くようにできればと。

大沼 そうですね。

前川 テキストのほうではラピアン・マルトゥというアッカド語表現があります。前田さんたちは「マルトゥの頭領」と訳していますけれども、そのような人たちが姿を見せているわけですね。このような人たちのいちばん大きいケルン墓がその一つというように言うのは、大変刺激的で、すごいことが見えてきたという気がいたします。

藤井 ケルン墓から、「アッカドのシュルギより」などという銘文の入った印章か何かが出ればいいのですけれども、そうは問屋が卸さない。

前川 それから、もう一つ付け加えますと、ウル第3王朝時代のテキスト。年代もはっきりしていますけれども、マガン（オマーン）の首長の人名は典型的なマルトゥダという話があります。この地域の首長からの貢納としての家畜が送られてきた記録があり、その首長の人名はアムル系と確認できるのです。マガン（オマーン）は、同時にあとはイランも含むという話がずっとありますので、それを意識したのでしょうか。むしろオマーン側だということを議論するために出したのだけれども、そこまで、もう三千年紀のいちばん最後にはマルトゥが行っているということになってくるかと思います。

藤井 ほかにも討議したいテーマはいろいろあったのですが、時間も超過しています。遠方からお越しの方々もいらっしゃるなので、このあたりで閉じたいと思います。最後に領域全体を代表して、大沼さんから一言お願いします。

大沼 本日は長い時間お疲れさまでした。有り難うございました。先ほども申しましたように、この2日間の発表と討論の内容はテープ起こしをして単行本として出版しますので、校正の際に写真や図面をつけて返送していただくということでもよろしくお願いします。どうもお疲れさまでした。

あとがき

西秋 良宏

今回のシンポジウムは、『セム系部族社会の形成—ユーフラテス河中流域における総合的研究』という研究プロジェクト（代表：大沼克彦）による成果発表の一部として開催された。部族社会というのは先産業時代の世界各地で見られた社会形態であるが、中東（西アジア）では都市が居並ぶ現代にあってもなお独特かつ強固なカタチでその性質が残されている。そうしたユニークな社会が形成された経緯を過去にまでさかのぼって学際的に調べようというのがプロジェクトの目的である。平成17年度に開始して以来、考古学はもちろん楔形文献、動植物、古環境、年代、形質人類、文化人類など諸分野の研究者が集まり、成果検討をかねた研究集会を毎年1~2回、重ねてきた。今回のシンポジウムはその5回目になる。

そもそもセム系部族社会とはどんな社会なのか。セム系言語を用いる代表的集団であるアラブ諸部族の特徴が本文中で文化人類学的に整理されている（赤堀、本書、以下同様）。領域をなして居住していること（領域的）、サイズは多様だが集団の構造は等質であること（分節的）、血統を父系のみで規定していること（父系）、父祖との関係で規定されていること（出自）、の4つに特徴があるとし、世界広しと言えどもこれほどまでに限定的な部族社会が現存しているのはアラブ独特のことだという。そして、それは乾燥地という中東の過酷な資源環境に適応する遊牧社会において固有の発達を遂げた可能性があることが指摘されている。

インフォーマントがいる現代で得られた社会像を過去においてどこまで投射できるかは限界もあろうが、本研究では、そのルーツを少なくとも紀元前3千年紀にまでさかのぼろうとしている。舞台はシリア領ユーフラテス河中流域、ビシュリ山系である。ビシュリ山系は、メソポタミアの西、シリア沙漠の北縁部に位置する。前3千年紀末にメソポタミアに侵入し、前2千年紀初めにはアッシリアやバビロンなどの王朝を打ち立てたアムル（アモリ）人の原郷とされている地域である。アムル人は部族的紐帯で結ばれたセム系の遊牧集団であり（山田）、血統や出自など部族性の記録に淡泊であった非セム系先住民たるシュメール人たち（前川）とは異なった社会形態をメソポタミアに持ち込んだらしい。そして、一部が都市化した後も一部は遊牧民にとどまり、互いに併存、干渉しながら現代につづく中東的社会構造の原型を形作ったと目されている。楔形文書学が提示するそのようなシナリオを物的証拠をもって論証し、また、文書では明らかにしえない当時の社会の内実を考古学その他の手法を用いて解明することがこのプロジェクトの主眼となっている（ホームページ <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html>）。今回のシンポジウムでは、これまで進めてきた野外調査や関連研究の成果をひとまず整理し、アムル人たちの故地で得られる当時の考古学的証拠を点検してみることを目論んだ。

第一部ではユーフラテス河中流域の前3千年紀に直接かかわる研究が報じられた。河畔低地に

いたセム系集団の拠点集落の一つとみられるガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘概要（大沼）、生業（丹野）、建築（岡田）、年代（中村）等の研究成果が述べられたほか、その直近の台地にある同時期の墓地の調査（久米・沼本）、周囲の遺跡踏査（西秋）、遺跡分布の調査法（松本）に関する成果発表がなされた。また、ユーフラテス河上流域でかつて日本隊が実施した墓地遺跡の調査成果も検討材料として提示された（石田）。一方、第二部では、さらに視野を広げて地中海沿岸部における前3千年紀の社会変化（山藤）、墓群調査からみたモンゴル地域における遊牧民の社会（高浜）など他地域で得られた比較所見が報告された。そして、第三部では既に言及した文化人類学（赤堀）、前2（山田）、3千年紀（前川）の文献学的所見、およびビシュリ山中で実施された前2千年紀の遊牧民墓群調査の成果（藤井・足立）が発表された。

いまだ最終年度前の中間報告であることを鑑み、ディスカッションでは、総括に向けた研究の方向性が議論された。その記録をふりかえってみると、実際、このプロジェクトの着地点は定まりつつあるように思われる。それは、野外調査によって原郷地域におけるアムル人たちの社会構造を前3千年紀と2千年紀に分けて明らかにし、その仔細、変化を文献学を始めとする関連分野の諸研究で肉付けしていくことである。社会構造に関する考古学的研究には墓の分析が有効とはよく言われることではあるが、本プロジェクトにおいても前3千年紀と2千年紀、双方において墓群の調査が最も肝要な知見をもたらしている。

前3千年紀の墓群は低地近郊の台地で見つかっている。台地と言っても沙漠的なステップであり、集落が位置する緑豊かなユーフラテス低地とは好対照をなす環境にある。墓は当プロジェクトで発掘したガーネム・アル＝アリ集落と同じく前3千年紀後半のものである。墓の形式は多様であるがその組み合わせにはいくつかのパターンが認められ、かつ分布を異にしていることが明らかにされている（久米・沼本）。それが集団の社会構造を反映しているであろうことは容易に推定できる。また、墓群は台地上に位置するもののユーフラテス河沿いの低地集落と対になっており、そのセットがほぼ等間隔に設けられていることも明らかになっている（西秋）。墓群を残したのが定住民であったのか遊牧民であったのかの解明は重要である。定住民のものであるとしたら彼らが低地を本拠としながら相当な内陸開発をおこなっていたことを示唆するし、遊牧民のものであるとしたら現代の遊牧民が同じ部族集団との間で結んでいるような定住民との牧草地契約を設けていたことが示唆される。また、それらの墓群が近隣で見つかっている低地集落の墓と同工の構造をもつものに加え、遊牧民の所産と考えられているケルン（墳丘）墓をも含んでいることからすると（久米・沼本）、低地集落と台地墓群は同一の半定住、半農半遊牧（討論参照）集団が残したものだという可能性も生じる。いずれにしても、社会の様態をとらえうる格好の手がかりが得られているのである。

また、前2千年紀については、ユーフラテス河から約40-50 km内陸、ビシュリ山で実施された墓群調査が貴重な成果をあげている（藤井・足立）。墓がケルン墓のみであること、周囲に集落が見あたらないことなどから遊牧集団の所産であることは確実な墓群である。大小の墓が列をなして分布し、かつその単位が大量に見つかっており、個々が血縁集団を示す可能性が指摘されて

いる。それが系族ないし拡大家族等を単位とする集団の家族墓であったとすると、家長の交代ごとに新たな墓を構築したのではないかと推察されるという。しかも、そのような単位が多数併存していることから、それらを統合する上位集団（部族）の存在を垣間見ることができるのではないかと述べられている（藤井・足立）。見つかっているケルン墓は前2千年紀初めのものである。したがって同時期のアムル系都市、マリの文書が言及するビシュリ山系遊牧集団（山田）の墓そのものであると考えられる。文書が活き活きと描き出す遊牧部族の社会を考古学的証拠によって逐一検証しようという状況がうまれた。そこで得られた知見は、文書に限られる前3千年紀の考古学的証拠を解釈するための参照資料にもなるに違いない。

前3千年紀後半と前2千年紀初めと言えば、アムル人たちがメソポタミアへ侵入した前と後に相当する。前3千年紀末にはガーネム・アル＝アリを含むユーフラテス河中流域低地集落の多くが放棄されたことが知られているから、それらの集団と前2千年紀初めのビシュリ山系ケルン墓造営集団との歴史的関連性もつきとめねばならない。また、マリに居住していた同じアムル系都市市民の社会構造との違いも気になるところである。いずれにしても、上述二期にわたる証拠の解析、比較が進行すれば、マリ文書でいう遊牧部族社会が形成された過程につきオリジナルなモデルを発信できると考えられる。そのような研究はかつてなかった。

今回のシンポジウムでは報告されなかったが、動物利用や古環境、墓から出土した人骨、あるいは部族社会進化に関する理論、現代アラブ集団にみる墓地設営と部族の関係など、多様な関連研究も進行中である（ホームページ）。核になる上記の野外データを各種の観点、研究戦略をもって歴史的に位置づけていくことで、本プロジェクトは冒頭にかかげた課題に大きな寄与をなすものと期待される。実は、本書が刊行される段階では、既に数次の追加的野外調査がおこなわれており、加えて平成21年11月には国際シンポジウムが開催されるなど、研究はかなりの進展をみている。この一年間で本プロジェクトがいかに展開したのか、それについては今後、発行される書籍、論文等をご参照いただきたい。

なお、本書の編集は領域代表者の大沼とシンポジウム担当であった西秋がその任にあたったが、シンポジウムの開催は本特定領域総括班（両名のほか、藤井純夫、常木晃、宮下佐江子、佐藤宏之）および多くの研究者各位、学生諸君の協力があって可能になったものである。会場を提供くださった国士舘大学関係者とあわせて記し、御礼申し上げる。

編者略歴

大沼克彦（おおぬま かつひこ）

1944年中国長春市生まれ。ロンドン大学考古学研究所先史考古学専攻博士課程修了（Ph. D）。現在、国士館大学イラク古代文化研究所教授。主な著作に『Ksar Akil, Lebanon: A Technological Study of the Earlier Upper Palaeolithic Levels of Ksar Akil』（Oxford, 1988）、『石器研究入門』（共訳、クバプロ、1998）、『文化としての石器づくり』（学生社、2002）、『石器づくりの実験考古学』（共著、学生社、2004）など。

西秋良宏（にしあき よしひろ）

1961年滋賀県生まれ。ロンドン大学大学院先史考古学専攻博士課程修了（Ph. D）。現在、東京大学総合研究博物館教授。主な著作に『Lithic Technology of Neolithic Syria』（Oxford, 2000）、『Tell Kosak Shamali — Archaeological Investigations on the Upper Euphrates, Syria, Vols. 1/2』（共編著、Oxford, 2001/ 2003）、『遺丘と女神 メソポタミア原始農村の黎明』（編著、東京大学出版会、2008）、『農耕と都市の誕生 西アジア考古学最前線』（共編著、同成社、2009）など。

執筆者・討論発言者一覧（五十音順）

赤堀雅幸（あかほり まさゆき）	上智大学外国語学部教授
足立拓朗（あだち たくろう）	中近東文化センター附属博物館研究員
石田恵子（いしだ けいこ）	古代オリエント博物館研究部長
大沼克彦（おおぬま かつひこ）	（編者略歴参照）
岡田保良（おかだ やすよし）	国士館大学イラク古代文化研究所教授
久米正吾（くめ しょうご）	国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員
齋藤 毅（さいとう たけし）	名城大学理工学部准教授
高尾賢一郎（たかお けんいちろう）	同志社大学大学院神学研究科博士課程
高濱 秀（たかはま しゅう）	金沢大学人間社会研究域教授
丹野研一（たんの けんいち）	山口大学農学部助教
常木 晃（つねき あきら）	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
津村真輝子（つむら まきこ）	古代オリエント博物館研究係長
中田一郎（なかた いちろう）	中央大学文学部名誉教授
中村俊夫（なかむら としお）	名古屋大学年代測定総合研究センター教授
西秋良宏（にしあき よしひろ）	（編者略歴参照）
沼本宏俊（ぬもと ひろとし）	国士館大学体育学部教授
長谷川敦章（はせがわ あつり）	筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程
藤井純夫（ふじい すみお）	金沢大学人間社会研究域教授
星野光雄（ほしの みつお）	名古屋大学大学院環境学研究科名誉教授
前川和也（まえかわ かずや）	国士館大学 21 世紀アジア学部教授
松本 健（まつもと けん）	国士館大学イラク古代文化研究所教授
宮下佐江子（みやした さえこ）	古代オリエント博物館学芸課長
山田重郎（やまだ しげお）	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
山藤正敏（やまふじ まさとし）	早稲田大学大学院文学研究科博士課程

紀元前3千年紀の西アジア
——ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る

2010年3月20日 初版発行

編者 大沼克彦 西秋良宏

発行者 八木環一

発行所 株式会社 六一書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-2-22

TEL 03-5213-6161 FAX 03-5213-6160

<http://www.book61.co.jp> E-mail info@book61.co.jp

振替 00160-7-35346

印刷 株式会社 三陽社



六一書房